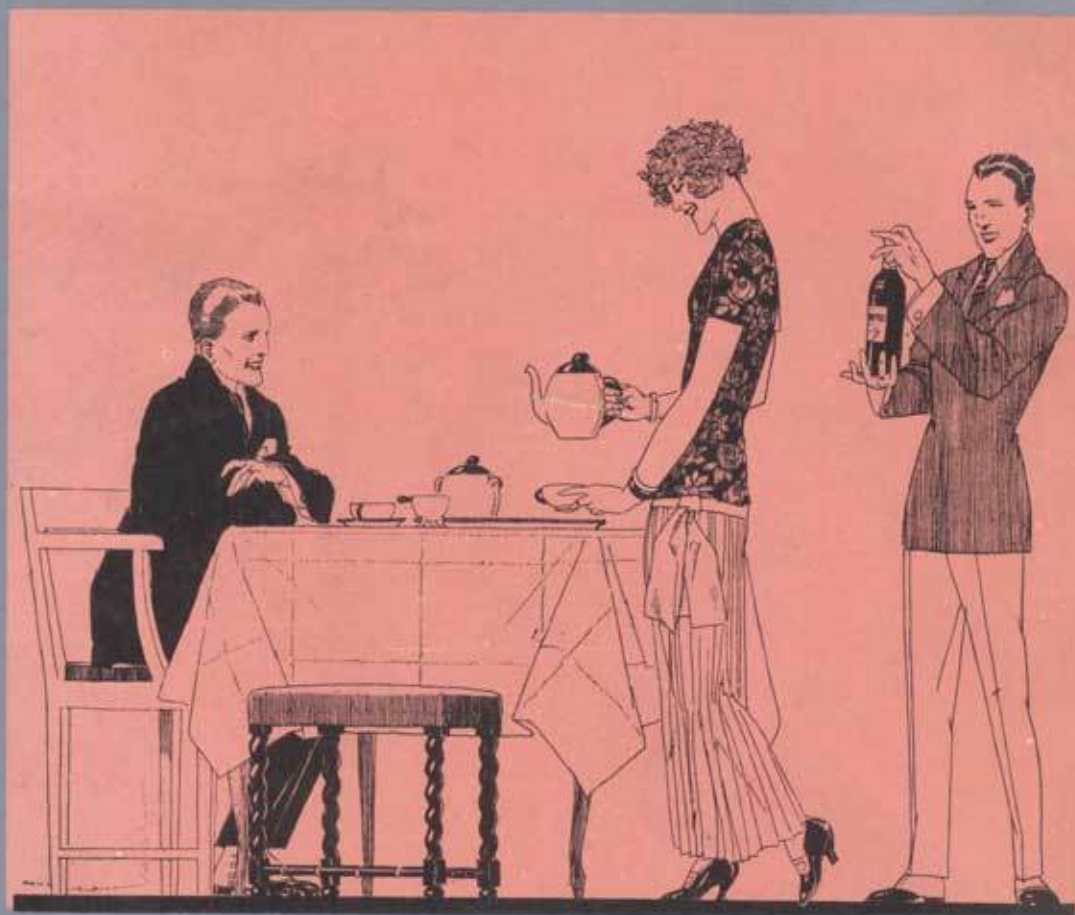


奇譚クラス

新しい風俗文献誌

1月号



1964・1

昭和三十一年七月二十日印刷 昭和三十一年一月一日発行 頁目（第1次巻第一号毎月一回一日発行）

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日国鉄大崎特別郵便物第二二二号

奇譚クラス

1月号

定価二五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



代理部分讓品案内

今回、特に遠藤百合子さんの御希望により次の通り、分譲品として発表しました。グラビアにない追真的で身近な彼女の数々のポーズを手にとってごらん下さい。

路(45)

大手杉印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円
汚れを知らぬ美しい百合子の全裸の姿態が
乳房もゆがむ、きびしい縄目に、くねくねと
しなをつくって、曲りくねる。グラビヤに出
せなかった百合子さんの良さを、マニヤの方
だけに見て頂きたいと願うばかり。

略号(ゆは)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
この写真は、いじめられる鼻を中心として
余りにも刻明に、はっきりと顔が出てしま
うので、口絵には出さないでという百合子
さんの願いで、特に分譲品としました。

略号(しは)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円
真白い六尺襦を膾まるだしに、きりりと、
いなせに締めた姿。可愛いお臍、くびれたウ

白晒六尺禪

〔背面〕

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

〔正面〕

大手机印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
前袋も前を僅かに覆うばかりのぎりぎりに
きゅっと締め上げた黒フンドシの魅力。女の
フンドシは黒に限るといわれる方へのプレゼ
ント。百合子の美しいポーズでどうぞ。

〔背面〕
略号(く)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
 黒シユスのフンドシが尻の割目に捻じるように喰込んで、むっくりと二つの双丘が右に左に盛り上り、くねる。肌が白いだけに細い黒フンとの間にかもし出す奇妙なコントラストが、黒フンマニヤの目を奪う。

略号(すい)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円
雲斎の白の相撲フンドシを、正式に締め込

浣腸をする女

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
百合子さんに浣腸器を持たしたら、彼女は
ぱっと顔を真赤に染めて、「あら、こんな大
きなで浣腸しますの」と、あとは声もなか
った。若い女の人の口から、直接、浣腸とか
猿ぐつわという言葉を聞くと、妙になまめか
しい。結局、彼女は初めから終りまで、浣腸
については恥しがり通しだった。

略号(ゆお)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
月経帯の替ゴムの生ゴムのむちむちした感
触を楽しむながら、ゴムもあらわにバンドを
説いでゆく百合子さん。その中で、ゴムの上
く見たのばかり三葉選びました。

（ゆす）

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
後手の高小手に縛られて、今は両手の自由のきかない百合子さんは、黒の月経帯をはかされて、蒲団の上にくるがされる。起き上ろうとして身体を起せば、思わず両足が開いて、月経帯がすっかり見えてしまう。

【新版】
女体緊縛コレクト・フォト集

大手札印画紙(9×13 握) 焼付

各組一枚一組（送料共）

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E12	E11	E10	E9	E8	E7	E6	E5	E4	E3	E2	E1
逆エビにもだえる (大塚)	實め抜かれた疲勞 (梨花)	強烈後手高小手 (愛川)	ハリツケられた娘 (大塚)	全裸エビ責尻強調 (関谷)	足から眺めた裸身 (水本)	捨身の後手観念像 (大塚)	豐臀と豊胸しぱり (愛川)	ムチに耐える美肌 (関谷)	荒漣に苦悶する肌 (愛川)	仕置を受ける裸身 (大塚)	全裸の悦虐ブレイ (愛川)

E 13	拘禁された美囚女	(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛	(愛川)
E 15	海老責に泣く足首	(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ	(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘	(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛	(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ	(関谷)
E 20	ベッドにもだえる	(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄	(愛川)
E 22	放置された海老責	(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる	(東浦)
E 24	ローソクで責める	(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ	(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態	(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像	(関谷)
E 28	嚴重な高小手縛	(東浦)
E 29	女体の全部を晒す	(愛川)
E 30	激しいムチ打の果	(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ	(東浦)
E 32	投げ出した脚線美	(絹川)
E 33	膣中心の腹部緊縛	(梨花)
E 34	セーラー服の哀歎	(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部	(関谷)
E 36	仰向け囚人の女	(梨花)
E 37	制服の女学生縛り	(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻	(関谷)

E 39	E 40	E 42	E 43	E 44	E 45	E 46	E 47	E 48	E 49	E 50	E 51	E 52	E 53	E 54	E 55	E 56	E 57	E 58	E 59	E 60	E 61	E 62	E 63	E 64	E 65	E 66	E 67	E 68	E 69	
痛打にくねる裸身	乳房に加える金具	鼻責めにあえぐ顔	あぐら縛りを拒む	浣腸ポーズの裸身	意烈なエビ責苦悶	敷布の上にのびて	鼻いじめのアツプ	柔肌に喰込む麻縄	縄にくびれる裸身	椅子に晒された女	臍そうじをされる	荒縄のトゲに狂う	火のついた煙草責	踏みつけたれた胸	裸身をゆだねた娘	手足猪吊りの美態	囚女の美しき緊縛	諦めた観念全裸像	縄にもだえぬく姿	黒髪を吊られた女	女奴隷美しく悶ゆ	袋の中の緊縛裸身	ビニール袋に蒸す	亀甲型の雁字搦目	緊縛裸像の舞踏会	野外の後手宙吊り	足首に鎖錠実施中	室内の後手宙吊り	雨装束の悦慮姿態	乳房いじめ踏つけ
(関谷)	(大塚)	(大塚)	(大塚)	(梨花)	(大塚)	(絹川)	(梨花)	(東浦)	(東浦)	(大塚)	(絹川)	(四方)	(梨花)	(大塚)	(絹川)	(絹川)	(水本)	(絹川)	(大塚)	(絹川)	(絹川)	(竹本)	(竹本)	(大塚)	(絹川)	(梨花)	(梨花)	(梨花)	(大塚)	

E 70	足の裏ハネ操り責(梨花)	E 71	乳首ブライヤ挟み(竹本)	E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)	E 73	梯子責にあう美女(梨花)	E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)	E 75	娘十六縛り加減(花坂)	E 76	踏みにじられた顔(大塚)	E 77	逆エビに反る足先(大塚)	E 78	両手吊りのお仕置(絹川)	E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)	E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)	E 81	食卓上の縛り人形(大塚)	E 82	むしられる下着(大塚)	E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)	E 84	寝台上的の若妻狂態(関谷)	E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)	E 86	縦姿後手縛り吊り(東浦)	E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)	E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)	E 89	令嬢後手高小手(絹川)	E 90	膣部乳房強調緊縛(東浦)	E 91	責衣にくるまれて(東浦)	E 92	全裸逆エビ責め(水本)	E 93	ロソク乳首ゼメ(梨花)	E 94	全裸後手縛り闇晒(関谷)	E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)	E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)	E 97	バンドニツ折縛り(梨花)	E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)	E 99	豆しばりの猿轡(絹川)	E 100	強烈縛り脰いじめ(東浦)
------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	-------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	-------------	------	--------------	------	---------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	-------------	------	--------------	------	--------------	------	-------------	------	-------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	--------------	------	-------------	-------	--------------

E12	E11	E10	E9	E8	E7	E6	E5	E4	E3	E2	E1
逆エビにもだえる (大塚)	實め抜かれた疲勞 (梨花)	強烈後手高小手 (愛川)	ハリツケられた娘 (大塚)	全裸エビ責尻強調 (関谷)	足から眺めた裸身 (水本)	捨身の後手観念像 (大塚)	豐臀と豊胸しぱり (愛川)	ムチに耐える美肌 (関谷)	荒漣に苦悶する肌 (愛川)	仕置を受ける裸身 (大塚)	全裸の悦虐ブレイ (愛川)

代理部分讓品一覽

○ 妊婦女体資料の部

臨月腹ヌード

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「りく」

臨月腹アップ

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「りと」

臨月妊婦の全身

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「りせ」

臨月腹の側面

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号「りそ」

臨月腹の背面

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「りも」

臨月垂れ腹

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号「りみ」

妊婦ヌード

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「やま」

妊婦しばり

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「やむ」

臨月妊婦三態

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「よむ」

産み月のお腹

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「よま」

動物的な腹部

大手札三枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号「よみ」

妊婦の股間縛

大手札三枚一組 四〇〇円
児玉 昌子 略号「には」

妊娠八月の緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
児玉 昌子 略号「にあ」

妊娠五月の緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「にこ」

妊娠前裸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「まさ」

妊娠初期の緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「めろ」

妊婦の股間縛 (九カ月)

大手札三枚一組 四〇〇円
児玉 昌子 略号「にふ」

妊婦の股間縛 (六カ月)

大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「にと」

分娩後縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「につ」

分娩後股間縛

大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「にて」

○ 女体緊縛資料の部

全裸緊縛姿態

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号「ゆり」

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号「ゆは」

鼻の穴責め

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「なく」

鼻なぶり

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ない」

鼻責の陶醉

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「なは」

苦悶の裸身

大手札四枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「くせ」

裸身の晒し

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「わあ」

全裸股間縛

大手札四枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「せら」

強烈エビ責

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「えり」

蒲団に悶ゆ

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「なき」

悦虐の果て

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「なみ」

椅子エビ責

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「おき」

六尺禪縛

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ろは」

弓吊り責め

大手札二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号「つき」

女体緊縛フォトのアルバム

カメラに晒す縛られ女体
絶妙白マスクの女
弄顔——瞳孔検査——
耽美なぶられる鼻
嵌口：口中の読めもの
絹川文代
大塚啓子
大塚啓子
大塚啓子

イルリガートルの有る部屋
四馬孝・画

責画——甘味を慕う蟻の群
四馬孝・画

M画——奴隷に君臨する女王様
四馬孝・画

女体切腹 馬上に切腹する乙女
四馬孝・画

高校女子相撲選手権大会
雪崎京人提供

アイデア画 猛レッスンのバレエ
四馬孝・画

巻頭口絵

木下闇（救いを求める令嬢）
五月亜紀子

危ぶまれるもの
遠藤百合子

沈黙の抵抗
大塚啓子

ニヤグラビヤ 光沢と拘束へサテンの責衣
長野良子

膨満、胸部のワンカット
絹川文代

麻縄にくびれる太股
大塚啓子

鼻孔清掃（いたぶり）
梨花悠紀子

爪先に現れた因女の憂愁
梨花悠紀子

読者通信によるファンタジー
芳野 盾美

浣腸の種々相（続看護婦さん）
山岸 操

告白と体験 ゴムマニヤのブレイから
森中雨奇男

十三人の女死刑囚（抵抗篇）
佐出 須登

夢のひと悦虐絵灯籠⑧
万田 不仁

きものきもの物語
牧 高志



商敵（しようてき）
栗瀬 長

サジスチック・ストーリー・シリーズ
大中 忠

村の祭礼
田村 清章

△テレビ△に現れた緊縛場面
辻村 隆

「奇譚三十九夜一物語（第三十一夜）
水上 健三

「懸賞告白」鼻の狂想
栗瀬 長

随想 美容と浣腸
伊藤 二郎

（告白）雨合羽とおし置
川崎 進一

ユニホーム物語（美しき乙女の制服）
高木紀久枝

女子寮の雪合戦
瀬沼 四郎

ふたたび妊婦マニヤへアピール
瀬沼 四郎

「臨月腹」に寄せて
瀬沼 四郎

△私のイメージ△夢の中の妊婦
佐治 麻造

長篇SM小説 宇宙どこかで
山口 明

フェチ通信 パンティと私
佐野 光子

「読者告白」畜生責二題
T・Y生

フェチ通信 ゴムとブルマー
森田 敬三

読者体験 斬られる女と腰巻
おもだか・しの

中村竹弥奮斗公演
新井マリ子

愛情は縄に結ばれて
山田久仁子

グルーブ切腹プレイのレポート
山田久仁子

本誌在庫旧号総目次（35・9）（35・6）
黒田 寿

本誌最近号総目次（38・12）（38・11）（38・10）（38・9）
多山 皓

（私のイメージ）水責め
川崎 進一

お臍十年
芳野 盾美

ファンドシは果して下品か
芳野 盾美

ガン作・マニヤのノート
芳野 盾美

濡れたぞ濡れし
芳野 盾美

読者通信
芳野 盾美

手足宙吊り

大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号「つた」

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号「むく」

強烈責被虐の果

大手札五枚一組 五〇〇円
梨花悠紀子 略号「りお」

乳房いじめ

大手札二枚一組 二五〇円
大塚 啓子 略号「とお」

激痛逆エビ責め

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号「きえ」

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号「きん」

腰元吊り責め

大手札二枚一組 二五〇円
村井知可子 略号「こり」

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 四〇〇円
村井知可子 略号「こく」

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「もい」

乳房責の苦悶

大手札二枚一組 二〇〇円
関谷富佐子 略号「もろ」

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「もた」

強打に泣く裸身

大手札四枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「むち」

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
愛川 悦子 略号「ねい」

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
水本 茂美 略号「えひ」

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
水本 茂美 略号「みす」

バンド開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「はこ」

バンド責め

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号「はん」

夫人の表情

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「せや」

後手吊足挙縛り

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号「うら」

二つ折エビ責め

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号「うり」

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号「うる」

吊り打ち

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「やり」

股間縛法悦境

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号「ぬこ」

踊り子緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号「りこ」

責め衣

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「せめ」

猪吊り

大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号「いの」

足挙開股責

大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号「あけ」

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号「むら」

○フェチ資料の部

白晒六尺褌〔正面〕

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号「しは」

白晒六尺褌〔背面〕

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号「しろ」

黒褌の女〔正面〕

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号「くま」

黒褌の女〔背面〕

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号「くう」

相撲褌締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号「すい」

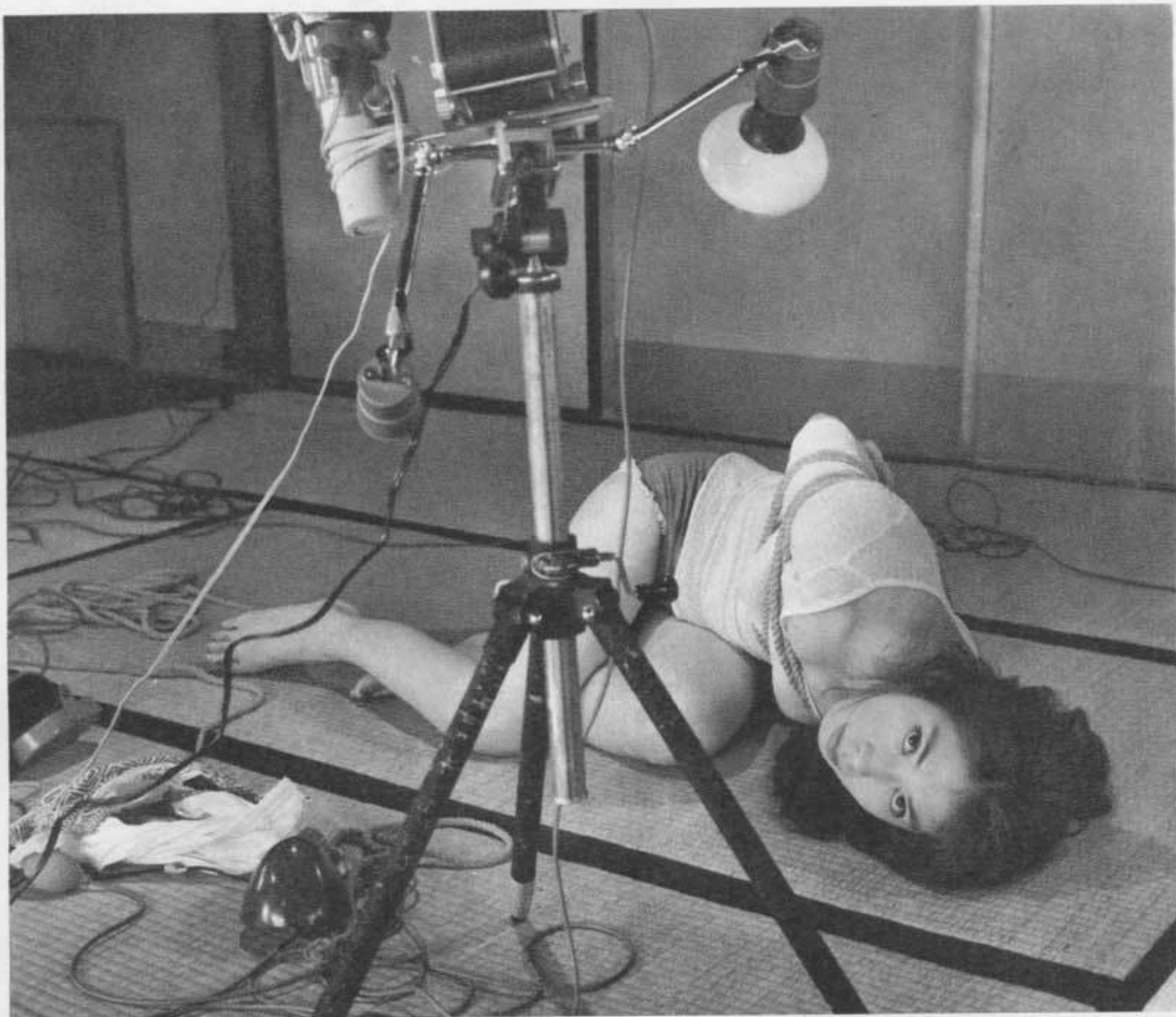
変形六尺褌

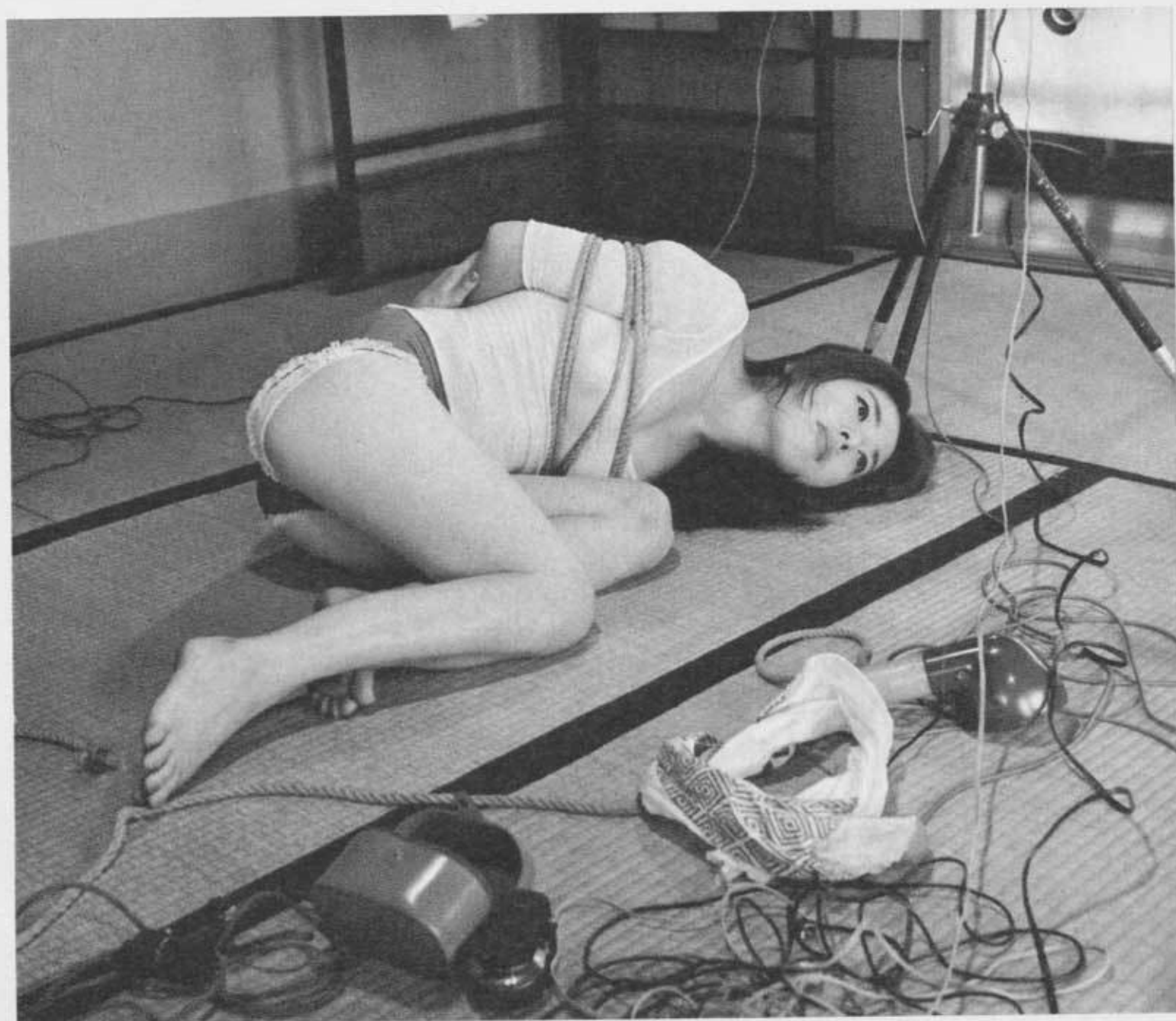
大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号「ふい」

六尺褌開股

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号「ふは」

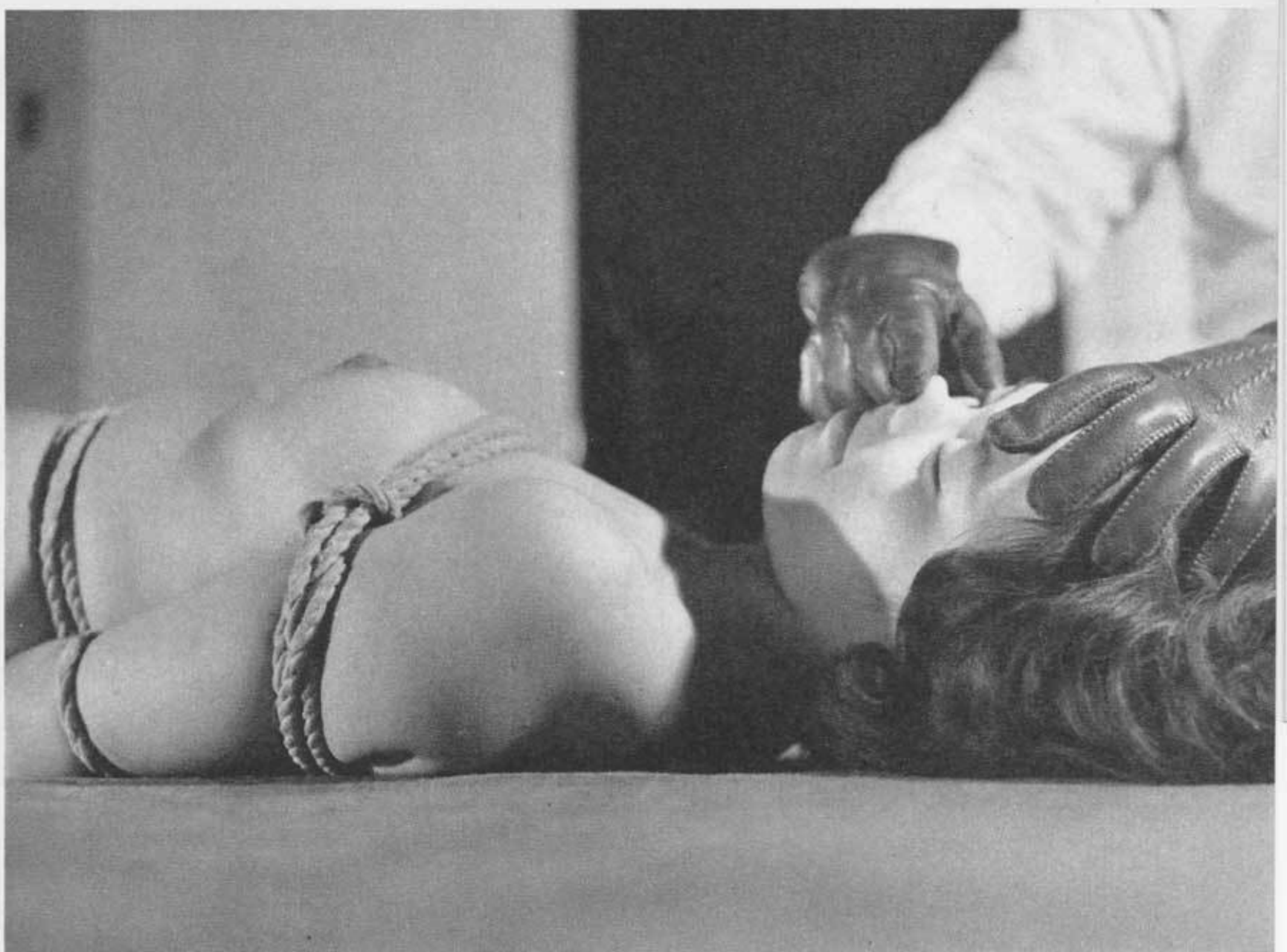




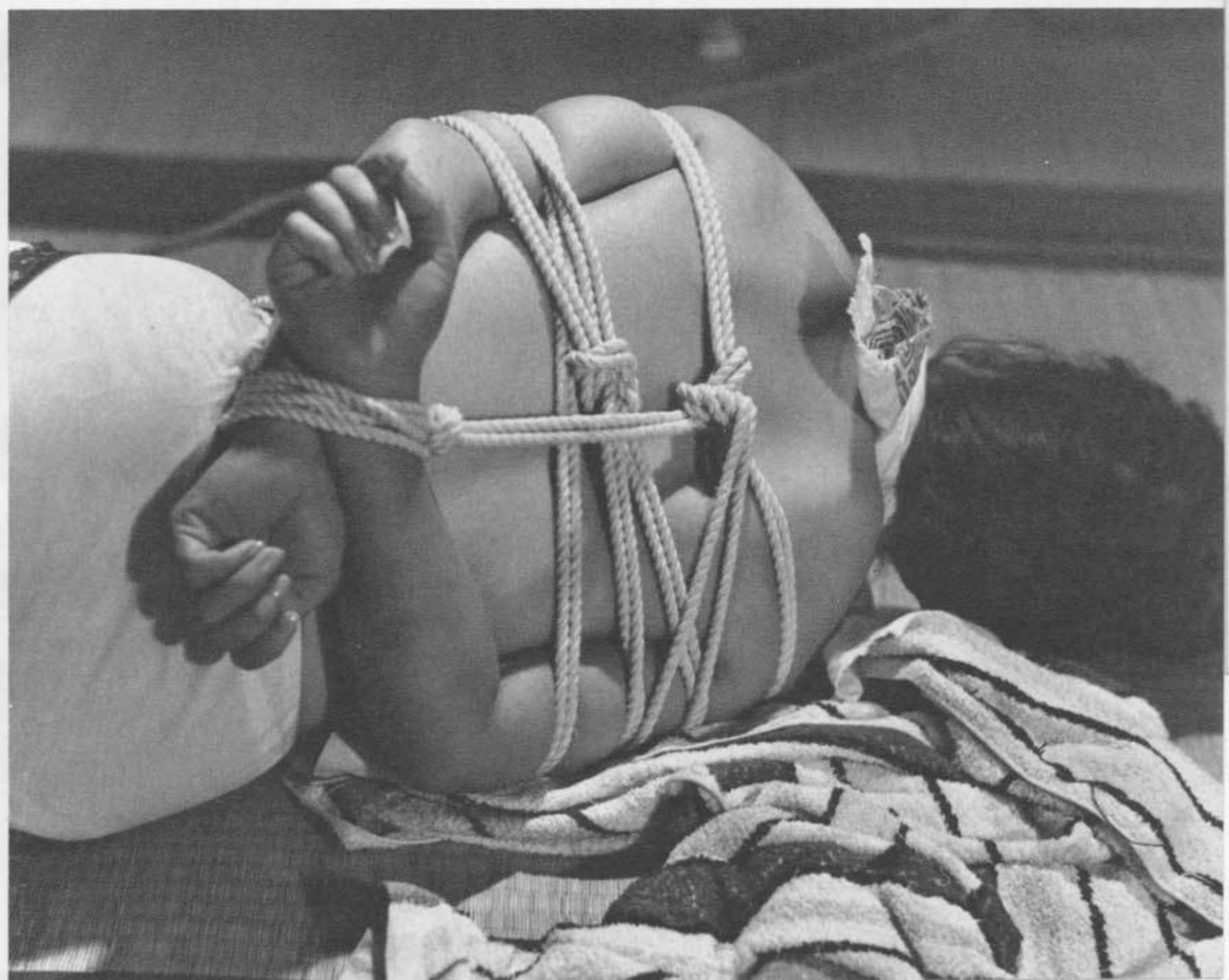
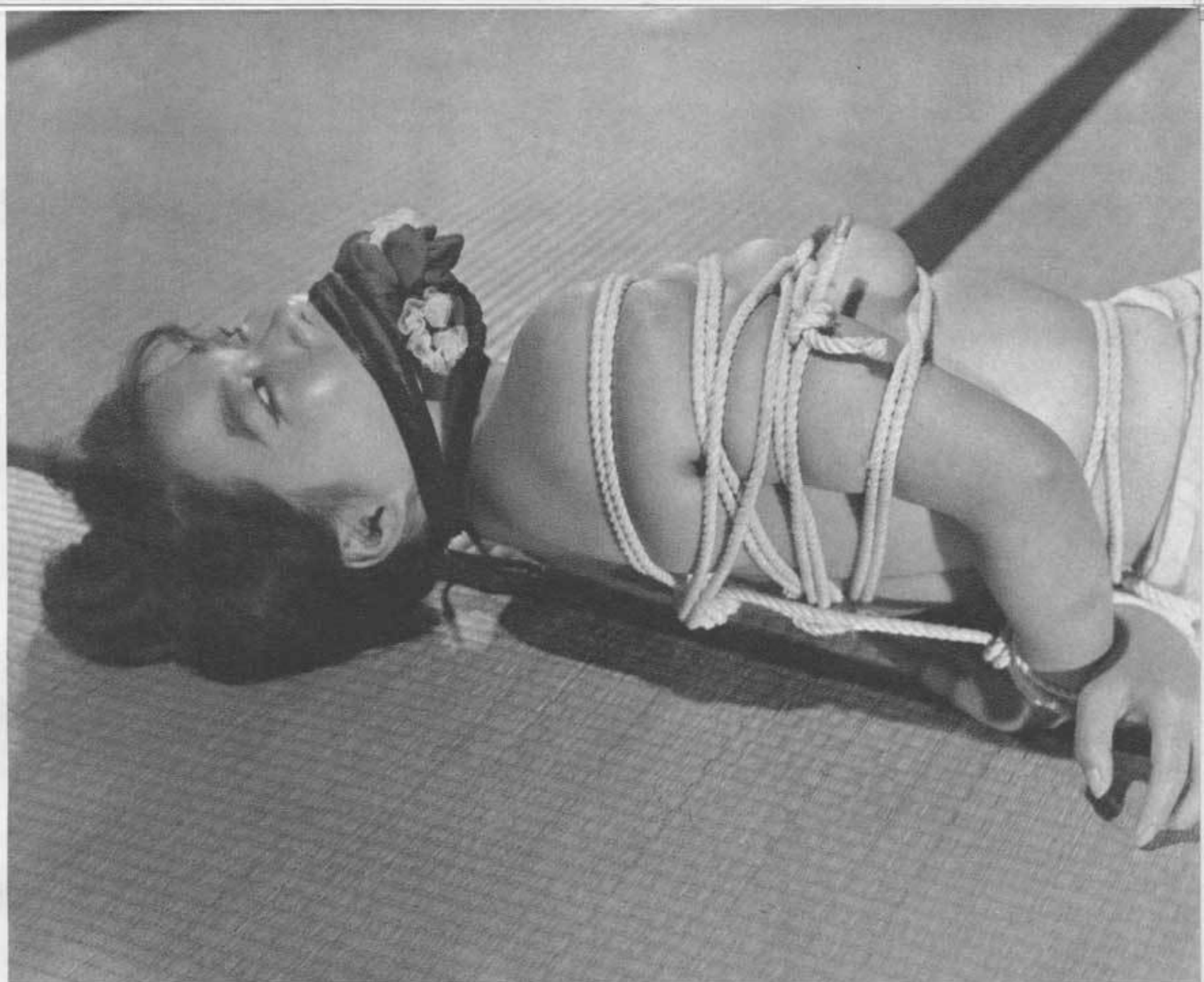












イルリガートルのある部屋

四馬孝画



群の蟻を慕う甘味

画孝馬四



鼻孔で吸わす煙草

四馬孝画

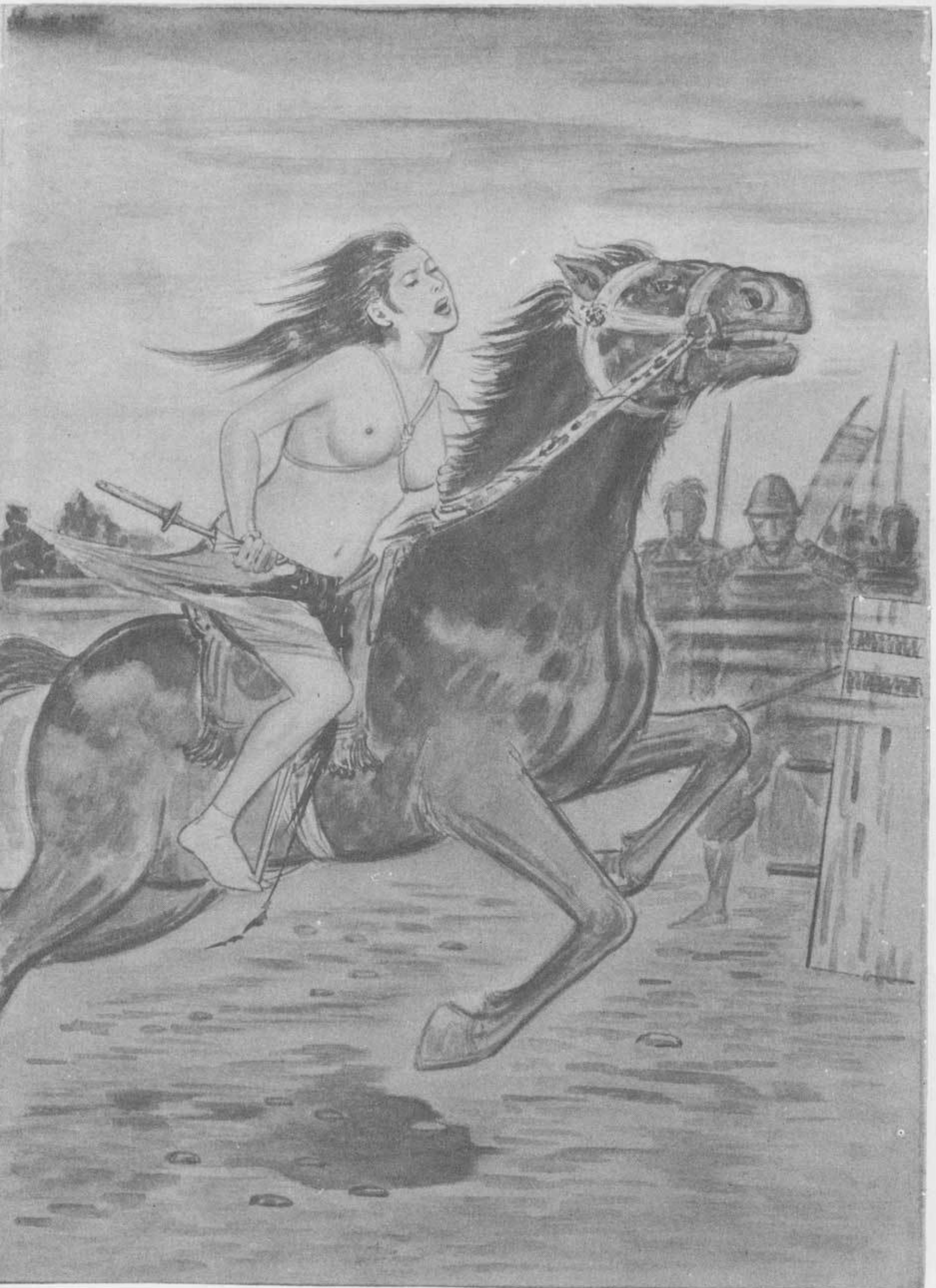


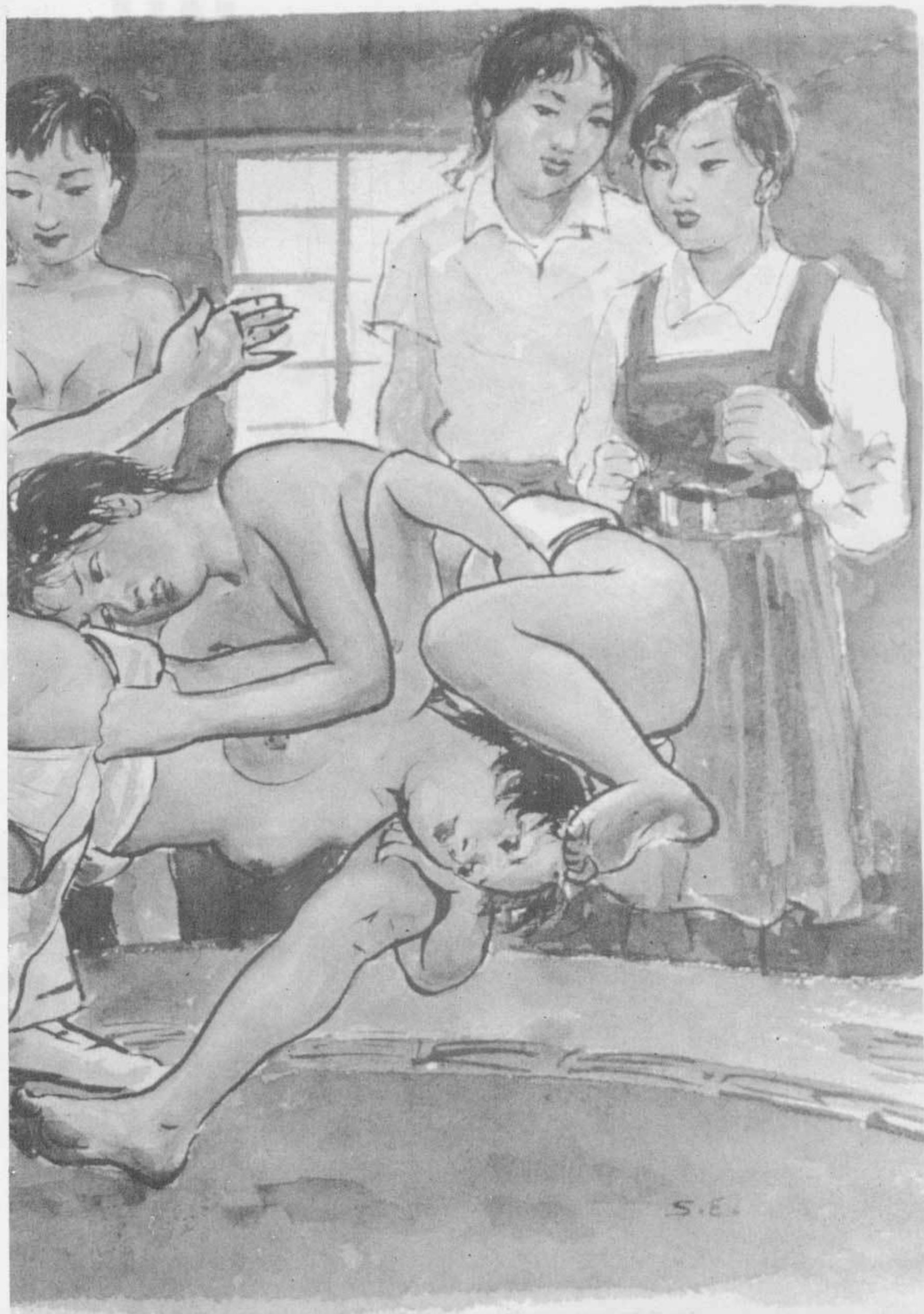


奴隸に君臨する女王様

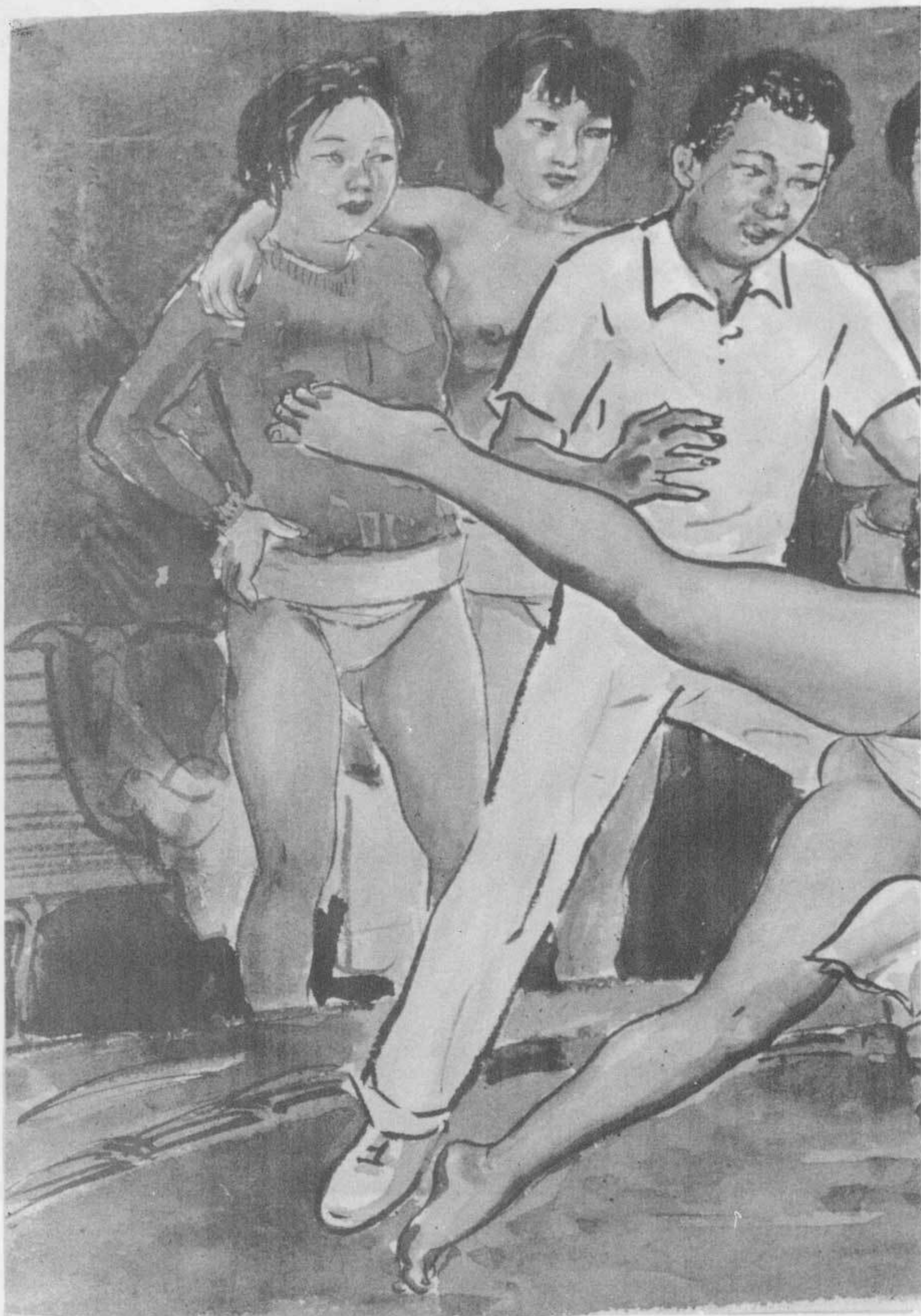
馬上に切腹する乙女

四馬孝画





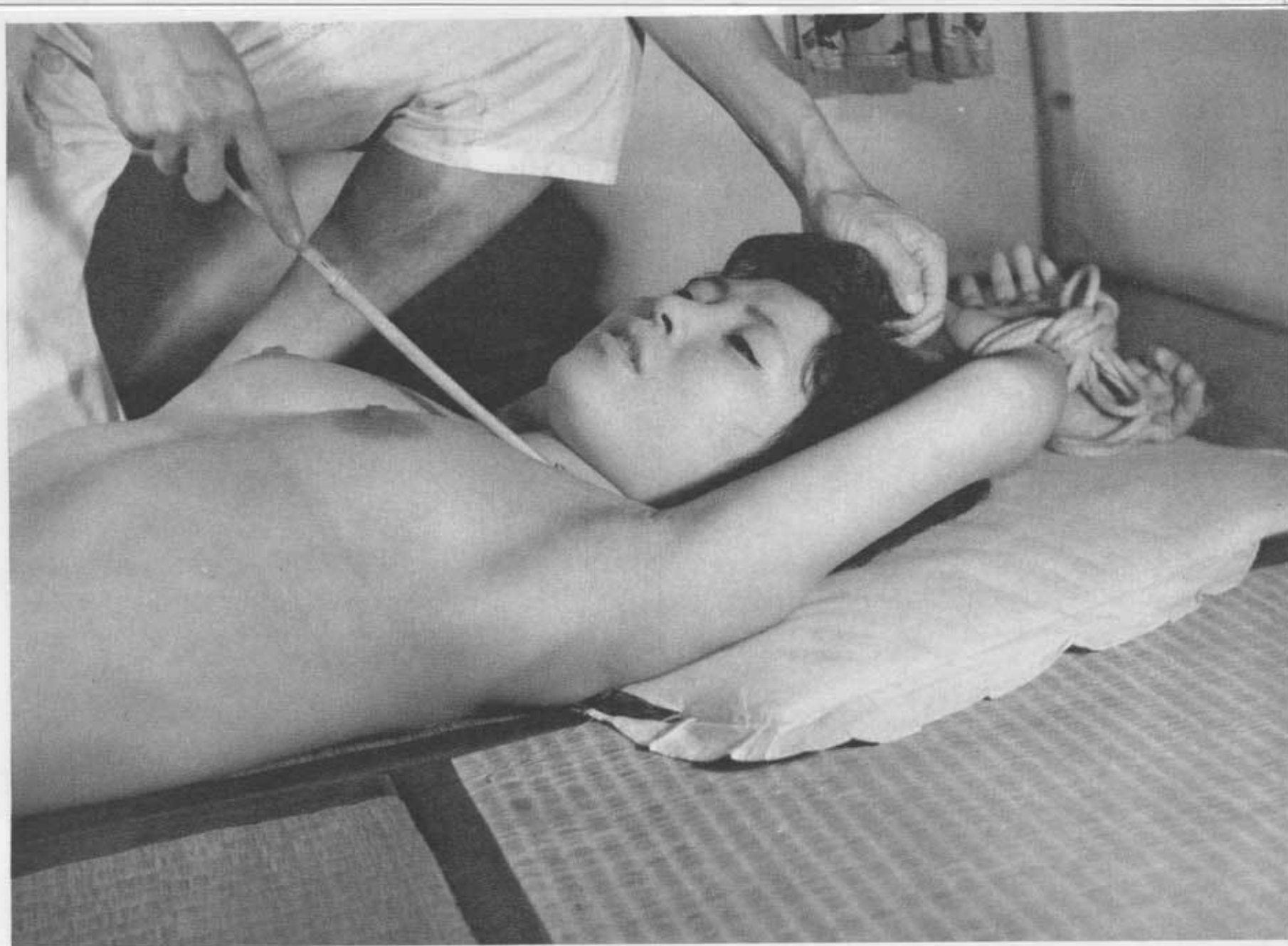
高校女子相撲選手権大会

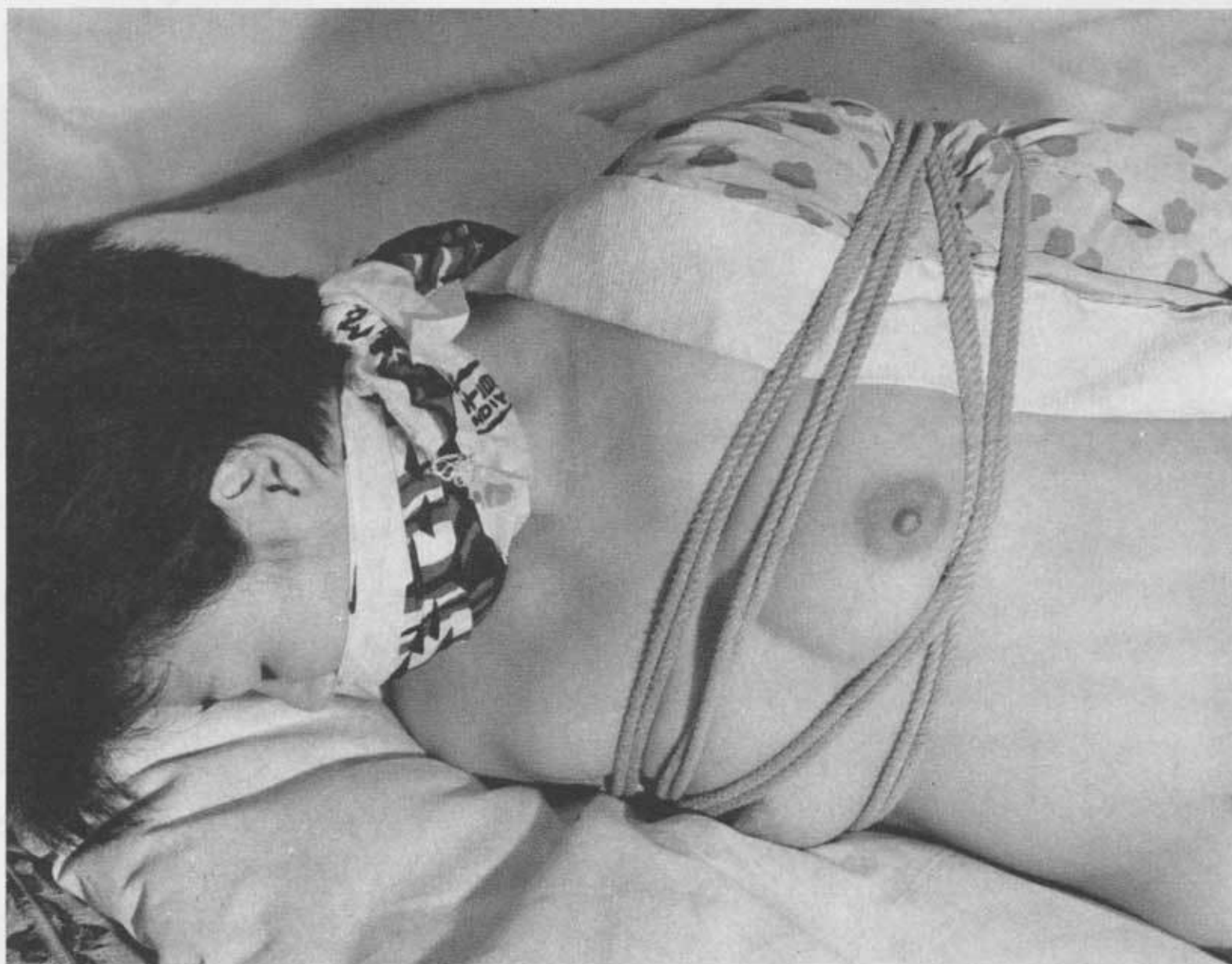




猛レッスンのバレエ

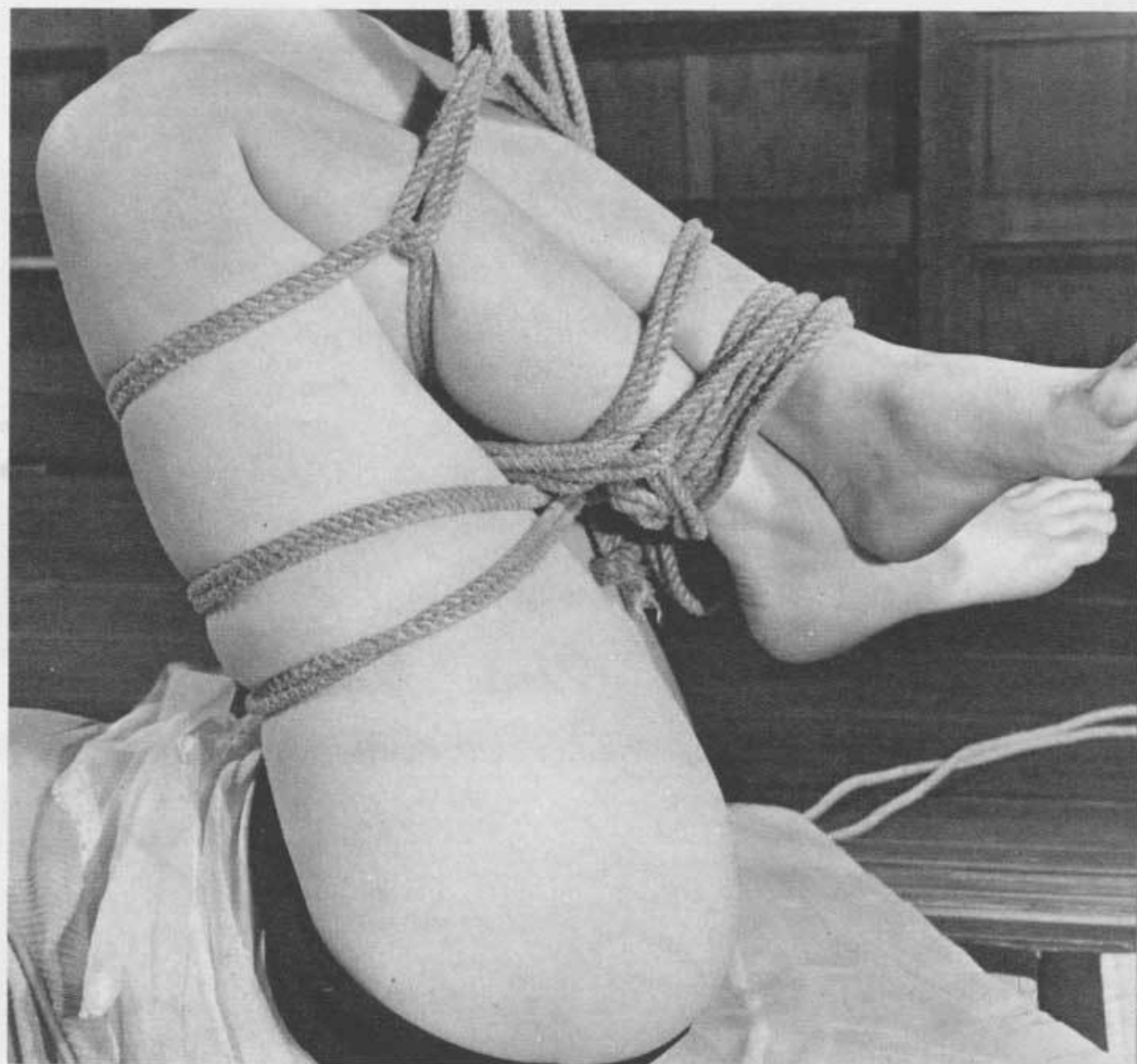






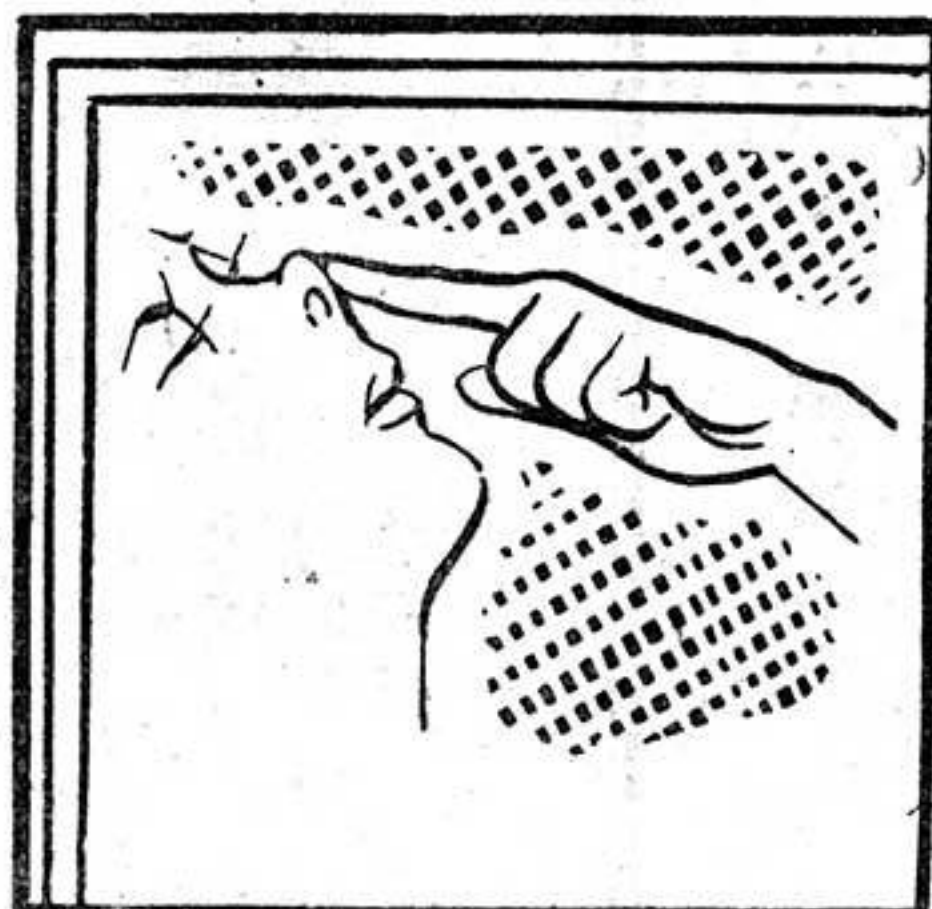












〔新しい風俗文献研究誌〕

奇 譚 ク ラ ブ

1964年 新年号

(第18巻 第1号 通刊 第185号)



【巻頭論稿】

読者通信による

ファンタジー

芳野眉美

A 奴隷募集

(1) 西村良子（東京）

三十七年一月号読者通信、守口市の佐伯氏
あて

「一生飼ひ殺しされても良いというのなら次の連絡場所へ連絡しなさい」

とあって、住所が指定してあった。

「私の足許にひれ伏した男の顔を私の足で踏

みつける。そして足の裏をなめさせたりする

感触は何ともいえない快感です」

というのである。

五尺二寸五分、十四貫五百、三十六才の女

王は、現在『ペロ』と呼ぶ奉仕者を絶えず傍に侍らせて召使っている。即ち、

「ペロという名前をつけた理由は、彼は舌（ペロ）の使い方がとても上手だからです。もっとも、そのペロはお清めの時にだけ使うのですが」

とあり、

「私にはもう一人位ドレイがいても良いと思います。ペロ以上の奉仕を要求するかも知れませんけれど」

この手紙の結果は、五月号の読者通信にあった。

「全国的な広い範囲に亘り申込みが殺到致しました。その数、実に数百名におよび本当に驚きました」

実に数百名の男が奴隷募集に応じているの

である。読者通信であるだけに私には実感があつた。

これは何を意味しているのか。

「私はその中から特定の男共を選び、その者共だけに返事を与え、大多数の男共はそのまま放置しております。私が選んだ者達はいずれも心から私を崇拝しているようです。その者共には今テスト期間を定めてテストを申付けております。いずれその中、私の意になう者二、三人を足下に侍らせて召使う心算です」

そして、

「私は男共の一生の実権を握り、私の意のままにしてみたいと思います」

とある。

その後、女王の通信は見られない。

どのような奴隷のテストが行なわれたのだろうか。合格者はいたのだろうか。

佐伯氏が女王の奴隷になったかどうか私は知らない。通信の結びに、

「この外にまだ志願者がおれば（但し絶対的なもの）別の方法で考えてやっても良いと思います」

とあるから、奴隷志願者にまだ奉仕への道は開けているのかもしれない。

(2) 北緋紗子（名古屋）

三十七年八、九月号の読者通信

「私の奴隷となってくれる男性と一度会いたいと思います。完全プレイにて（縄、さるぐつわは勿論）女王になって（私のパンティ）よろこばしてやりたい」

この二十五才の女王に応募したのが、十月号に五件あつた。その一例、

「緋紗子様のブラジャーで猿轡を、パンティで目かくしをして頂き、そのむんむんする移り香に酔いしれて、緋紗子様の奴隷として奉仕致したいと存じます」

名古屋の服部氏は、日時場所を指定しているのだが、十二月号の通信に、

「私の奴隷と共に服部さんにお会いするつもりでございましたが、あいにく出来なくて残念でした」

とあり、奴隷の飼育方法の一端を紹介している。即ち、

「さるぐつわをといてやり、口の中から私のきう身体につけていた真赤なパンティを取り出してやる。私はね、まだ物足りないのだよ。お前をいじめるのは、これからさ」

ところが、

「私は奴隷がにくくてやっているのではあり

ません。こんなにはずかしめられることが、明日への活力となるからなのです。こんな理解のある奴隷奉仕をしてくれる奴隷を持った私は、おそらく世間で一番幸せです」

と、愛情に満ちたやさしい言葉が並んでいる。理想的なSMプレイといえよう。

三十八年一月号で、服部氏は再度日時場所を指定している。

「私も出来れば飼育されてみたいと考えています」

(3) 佐川奈津子（大阪）

（三十七年十月号の読者通信）

「実益の方からも、もし奴隷として或は下僕として献身的に仕えてくれる男があつたら、二人でも三人でもほしい」

とあって、女中のかわりに仕事をする下男を求めている。下男募集なのだが、

「私は三十二才、ちよっとしたグラマーですから、お尻の敷かれ甲斐もありますよ。酒に酔って帰った晩などは、うんといじめてあげてもよろしい」

と色を添え、

「ご希望なら、首輪をつけて犬のように庭木につないでおいても、泉水につけておいてもよろしい。古くなった犬小屋を住居として提供してもよろしい」

といている。

バーを経営する女王も、三百坪の庭のある住宅の掃除には困っているらしい。

「住込みで月一万円ぐらいなら、三人ぐらいほしいものだと思います」

こんなうれしくなるような奴隷募集があるだろうか。奴隷募集も夢でなくなった。

「私を女主人としてあがめ、下僕として仕える気持のある男だったら、志願してみて下さい。お気のすむようにお相手してあげます」

さっそく十一月号に大阪と東京に志願者が現れている。両者共連絡は局止を指定した。

「犬小屋で鎖に繋がれて起居し、踏みにじられたり、投げ与えられる浅ましい家畜用の餌を喜々として頂戴致します」

とか、

「足拭き雑巾、踏台、痰コップ、トイレ代用等あらゆるご用命をいっつけられましても結構でございます」

と奴隷の手紙にはある。

両氏が女王の奴隷に採用されたかどうか、

私は知らない。続いて十二月号には、

「編集部からのお便りでは、その後大分下僕希望者が集ったそうですが、ちょっと意外なくらいです」

と女王は驚き、且つ喜んで、

「まだ申込まれない方がありましたら、どしどし応募して下さい」

さらに、翌一月号に希望者の通信が二件載っている。その中の石本氏（大阪）の誓約書を紹介すると、

「一、私は女王様の気儘を満足させるために生きている奴隷に過ぎません。私の精神も感情も意志もすべて女王様の所有物です。」

一、私は女王様の気紛れな、そして残酷な拷問用の奴隷に過ぎません。

一、私は女王様のご命令には絶対に服従致します。まして反抗など思いもありません。ただ命ぜられた事を忠実に守る奴隷に過ぎません。

一、私は虐待のあまり不具者になっても決して恨んだり致しません。あかれたら残酷きまわる拷問と責苦の末殺して下さい」

四通の奴隷応募者の通信を読んだところでは、女王様のやさしい手紙に反して、いささか観念的すぎるきらいがある。

(4) 中川フミ子（神奈川）

（三十八年二月号読者通信）

「男の人に馬乗りになり、むち打ちながら乗り廻す事が出来たら、どんなにすばらしい事か、また男の人に私の汚れたショーツ等をかぶせたら、どんなに楽しい事かと夢みています」

とショッキングな手紙であり、

「私はMの方に私の下着類を使用して戴きたいのです。見知らぬ男の方が私の汚れた衣類を弄んでいるのを考えるだけで、ぞくぞくしてスリルが湧きます。是非Mの方お申し出下さい」

グラマーで汗かきのため木綿の白ものを愛用しているという女王に申し出たのが、三月号に三件、四月号是一件、五月号に二件、六月号に一件、計七件あった。

「犬の首輪をおはめになり馬乗りになられ、貴女様のお使い古しの月経帯を私の口にいただかせてもらい、汚れたパンティをすっぱり私の首にかぶせていただけたら、どんなに素晴らしい事でしょう。せめて貴女様の汚れたままのご不用の月経帯を送って下さい」（三月号）

「ご使用せられたショーツを私にも是非一枚

戴かせて頂きたいものです。私なら中央部の一番汚れた部分を切りとって、マスクの内側に縫いつけて肌身はなさず使用します」(四月号)

現実的でこの手紙は面白い。

女王は二十五才のBG。

女王のプレゼントを受けた幸せ者は、読者通信に報告すべきである。(私にも送って下さい)

(5) 川田幸子(東京)

(三十八年二月号読者通信)

「Mの男性に私の体験を話し、また次第によつては、プレイの実行を致したく思っております。これは私の夢ですが、単なる夢とせず誰方が思い切つて実現させて下さい」

とやんわりと、

「プレイの場所もムチもナワもすべて持っております」

とサジスティックに、

「私の切ない想いを叶えて下さい。力のかぎりいじめてさしあげます」

とやさしく結んでいる。

過去二人の男性によってSになり、いかに過去の男性が理想のマゾヒストであったかと

思い、残念に思っていると告白する女王は二十六才、お互いに大人であればプレイもよろしいではありませんか、といっている。これに対して、三月号に三件、四月号に二件、五月号に各一件、計七件の反応があった。その一例

「全裸にされ床の上どころがされ、顔の上に女王様の大きなお尻を乗せられたり、股の間に首をはさまれしめつけられたり、口の中にパンティを押し込まれたり、そんなことを空想してきました。貴女様のような女王様を見出した今では、一日も早く貴女の足下にひれ伏して奉公いたしたく思います」(四月号)

とか、

「奴隷として細引で身体を緊縛された上、なるべく汚された下穿きで猿轡をかまされ、息絶えるまでヒップにて顔乗り、足蹴り、踏みつけ、ハイヒールで蹂躪して下さい。ときには足で踏みにじったり、口中でぐちゃぐちゃに噛み砕かれた糧を投げ与えて下さい。おしものものの始末を舌と胃袋にてご奉仕するよう命じて下さい」(六月号)

とある。なかでも、東京の岡田氏は、日時場所を指定している。(三月号)

女王の夢がかなえられたかどうか、私は知

らない。

(6) 関美代子(東京)

五尺三寸、十六貫五百匁の女王は、二十五才のBG、絶対服従を誓っている四十男がいる。女王のプレイを紹介すると、

「昨夜も乗馬のおけいこをしました。だんだん熱が入って彼がつぶれるまで乗りまわしてしまいました。しまいには彼の首に両足を巻いたままでゆさぶったので、流石の彼も参ってしまったようです」

はまだいいのだが、

「足で頭を蹴ったり、顔を踏んづけたりもよくやります」

と乱暴になり、

「神酒奉戴式なんかも特別にかりてある彼のアパートを利用します」

いたずらもここまでくれば『彼』も呆れているらしいのだが、

「私がいじめるのを、とてもとても喜んでおられます」

とあるから、『彼』は女王の神酒を浴びせられる日常を送っているらしい。うらやましい。(私にも神酒をおめぐみ下さい)

女王の女王らしい言葉を終りに書くと、

「私たちBGの相手としては、マゾ男性が一番適しています。だって彼、私のいう通りお金出すんですもの。それでいて貞操には、絶対に手を触れさせませんからね。バカみたい」

バカみたいーうれしくなるではありませんか、この言葉。

(三十八年三月号読者通信)

(7) 沢田かおる (伊豆下田)

五尺三寸、十四貫、二十五才の女王、現在一匹四十男を飼育している。

「女王は常に驕慢であるはずです。すべてのものを投げすてて女王の足下にひれ伏してこそM男といえるのではないでしょうか」

と愚かなM男どもを笑い、

「奇ク読者の中で、心の底から忠誠を誓い、絶対的に私の命令一切に服従し、鞭打ち、足蹴、海老責めなどの刑罰に堪えられる男奴隷志願者がいたらお手紙を下さい。私は私の若さと美貌を誇り守るために、思う存分に犬どもを酷使しタツプリ可愛がって上げます」

と、犬を募集している。

「私の豊かな尻に敷かれ、顔を足で踏みにじって貰いたい人は志願しなさい。申込みが多い時は次々と呼びつけるなり出張してテスト

した上で、二、三人採用してあげます」

(三十七年十一月号読者通信)

十二月号に女王の犬になるために下田に行った人の通信があるが、女王に飼育されたかどうか私は知らない。

さて、飼育されている四十男だが、女王の手紙によると、

「毎月ヒイヒイいいながらも、私の許から逃げ出せず、あらゆるプレイをさせられているけれど、本人はとても幸福そうです」とある。

(8) 戸田政子 (大阪)

十七貫五百、五尺四寸五分、四十七才の奴隷を譲るという通信である。

これはめずらしい。即ち、

「この五年間一人の男を私の下僕として、犬として飼育して参りました。よく飼い馴してありますのでまたと得難い珍品と存じます」とあって、

「妾この度都合がありまして、この下僕をどなた様か同好の方にお譲り致したく存じます。ご希望のお方様は妾までお便り下さいませ」

(三十六年八月号読者通信)

その後、女王の通信は見られない。女王の犬は、新しい飼主に渡されたのだろうか。

経済的にも社会的にも、また刺激を求める肉体的にも、四十代の男性が奴隷に最も適しているらしい。

Sの女性の通信は外に三件あった。

B 夫婦生活としてのプレイ

(1) 山崎美代子 (香川)

「私たちの場合SMプレイをお互いに楽しんでおります。毎号のグラビヤから選び出したポーズを夜間ひそかにお互いに試し合い、時としては撮影も致したりして人知れず刺激の生活にひたっております」

という、三十二才と二十五才の夫婦、夫人は主人から進められて奇クを知ったらしい。「チョッピリ、スリルとこうふんがほしい私たち」

は、

「出来れば夫婦の方々とお互いの作品を交換したりプレイも楽しみ合いたい」

但し、

「主人の意見で男性の方のみとは交際出来ま

せんの」

夫人のささやかな願いは、

「奇クを通じて語り合い、小さな幸福を守っていききたいものでございます」

(三十七年五月号読者通信)

この結果は七月号の通信に見られる。

「奇クのお蔭で或るご夫婦とお友達になれ、いい方ですのでお互いの作品も見せ合い、恥しいことですが下着類その他も交換し合っていますの」

とかなり刺激的な手紙だが、

「文通交換とかで、私はその夫の方と、主人はその奥様の方とそれぞれお手紙の上でご交際して、いろいろプレイのことをお話しもするのです。これらのことが本当に強い興奮を私どもに与え、私どものSMプレイや夫婦生活はより円満になった」

と人に知られざる楽しみをじっとかみしめて、ささやかな生活を続けているご夫婦が目に見とるようだ。

「主人も信用しているからとのことですので、男性の方でいい方ならご文通ぐらいならお友達になってもかまいません」と変ってきている。

十月号によると、交際している夫婦も二組

になっている。

(2) 荒井弥生

切腹願望の新妻が、結婚後二月目に夫の目の前でプレイをした手紙である。

「その時私は喪服を着、洋服用の下着は全くつけず、赤のお腰を下腹が完全に露出するくらいギリギリに下げて締めただけにしておきました。おへその下五センチ程のところを長さ十五センチ、深さ二センチぐらい切りましたが、予想したほどの出血もなく、初めは妙な顔つきをしていた夫も終る頃には大変興味を持ったようでした。傷が完全に治ったのは半月も経ってからでしたが、両側から肉の盛り上った傷あとが残ってしまいました」

(三十七年八、九月号読者通信)

(3) 村井やす子(神戸)

倦怠期の夫婦の間にささやかに芽生えた浣腸責の報告書がある。

「私がひどく便秘症に悩まされていましたが夫がいちじく浣腸を施してくれまして、その妙なる経験から、度々せがむようになり、初めは嫌がりあきれておりましたが、夫も近頃は休日など白昼から施す様になりました」

(三十七年四月号読者通信)

夫側の通信を見ると、

(4) MM生(兵庫)

結婚生活六年、子供も二人あって、夫婦生活もオープンでなかった夫婦が、奇クを買ったことから、

「早速妻をしばって思いきりいためつけました。本当に妻も汗を流しながら激しい息づかいの中に、人間と人間のはだの触れ合いを感じることが出来ました」

と変化し、

「大塚啓子の逆海老責めは、まったくすばらしい。妻にもしてやりました。もっと足をしめつけてやりました。本当に喜びました」

と加虐的になり、梨花悠紀子、絹川文代などモデルの悦虐ムードを、「とにかく妻を相手に実演してみます」

東浦ひかるの『滅茶苦茶』を実演しているM夫婦を考えると、夫婦生活の楽しさが匂ってくるようだ。理想的な夫婦生活のSMプレイといえよう。

全裸で逆海老責めにされている夫人を空想する。失礼。

(三十六年九月号)

(5) S Y生(宮崎)

三十三才の夫、三十八才の妻を女王さまと呼んでいる。腕力の差で妻に投げとばされているうちに、屈服することに自己の幸福を見出すようになってしまったらしい。

「ボリウムがあるのでお乗せするのも大変ですが、最近はおトイレへ行くのもご乗馬で馬はもちろんご用が済むまでお待ち申し上げ、ときには命じられた後始末もします」

と馬は告白している。

「世間から見れば異常な夫婦かも知れませんが、小生はこのために魂が浄化されたようにすがすがしく、妻もまたこの上もない征服感を満喫することによって、世帯の苦勞も忘れ幸福でいっぱいです」

ということありません。

(三十八年六月号)

(6) 田中栄太郎(大阪)

(三十八年二月号読者通信)

「夫婦であって、他人に迷惑をおよぼさないかぎり、どのような性生活をしようと差支えない」

という、ジェロームレイナー夫妻(アメリカ精神医学者)の言葉を引用し、

「縛りと浣腸に、興味のある女の方を望みます。年齢は三十二〜二十六才」

当方、私大卒三十一才、一流会社勤務とある。求婚広告とはおそれいりました。

C SかMか不明だが

読者通信に待合せ場所日時を指定しても、どれだけの人が会えたかどうか、数少ないことだろうと思う。成功した一例を紹介すると、

(1) 長田妙子(神戸)

(三十七年四月号)

「どなたか、三宮駅で待ち合せて下さる人で、いないかしら? もしお逢いできて、奇クのことなど、話し合えたらこんなうれしいことはないと思います」

とあって、

「私だって、どなたか同好のお友達がほしいわ」

二十二才のB G。

「夕方五時半頃から先だったら、いつでも行きます。白のハンカチを右手に、黒皮のハンドバッグを左腕にかかえて」

六月号の通信にその報告がある。

「三宮駅での待合せで、大変気心の合ったよ

いお友達とお知り合いになれて、本当にうれしく思っております。これもひとえに読者通信のおかげと厚くお礼申し上げます」

彼が彼女を責めたか、彼女が彼を責めたのか、私は知らない。駅前の群衆は二人をデイトの待合せとみただろう。彼女がSかMか不明である。

勇気あるお二方に心から祝福を送る。

このような通信で、SかMか不明だが、同好を求める手紙がこの外に六件あった。

D 女と女の遊び

(1) 山辺まゆみ、浜田玲子、清水和子

(東京)

(三十七年十二月号の読者通信)

「同性の方と一度責め合いたいと空想いたします。全裸開股縛り、または浣腸遊び程度まで。肌を傷つけ合うのは好みません」

同性ばかりでなく、

「男性の方の場合は半裸まで。一度乳房をクチャクチャになるまでしばらくあげられたら。異性の方に肌が傷つかない程度に責められるなら応じたいと思います」

と強烈な手紙であり、

「約束の日時、場所に黙って出かけ、おたがいあまりセンサクし合わずに、赤の見知らぬ他人としてプレイのみのおつき合いができれば」

山辺まゆみ（東京）二十七才。

この手紙を読んで、反応が無ければおかしい。三十八年一月号に五件、二月号に二件の連絡があった。

二月号の一件は二十五才のBGである。

浜田玲子（東京）

「改札口を出るとすぐ左側に伝言板があります。その前で週刊紙を読んで立って下さい」

と日時場所を指定し、

「縄は私も持っていますが、あなたも持ってきて下さい」

駅の改札口を指定したのが外に二件、デパートの売場が一件、その外は局止め、編集部気付にて連絡を待つというのである。

三月号にその報告があった。

山辺まゆみ、責められた事があるらしい。

「ある方に半ば強制的のように都内の某旅館につれて行かれ、私は例の薬局で販売している浣腸五個の責めを受け、恥ずかしさと後悔を背負って逃げるように帰宅しました。この

時の軽はずみな経験は苦いプラスでした」

とある。苦いプラスとは、

「約束は破られ、私は自分の向う見ずな甘さと、背信のショックを味わうことになりました」

山辺まゆみを責めた男の背信行為が、どのようなものであったか私は知らない。

「ひどい浣腸責めが脳裏から離れません」

と告白している。

赤の見知らぬ他人としてプレイのみのおつき合いがしたいという希望は、しよせん現実ばなれのした理想なのかもしれない。

「私にはどうしてもドタン場に立っての勇気が出ません。お約束の場所に行きたい気持ちがするの、いざその日その時刻になると、こわくなってしまふのです」

とすっかり慎重になり、

「どの通信もひそかに胸をときめかしながら読ませていただきました。まゆみは心からお礼申し上げます。いつの日か、心がとけましたら素晴らしい出会いができるかも知れませんか。お許し下さい」

と結んでいる。

背信のショックはすっかり山辺まゆみを男嫌いにしたらしい。

「これからは同性の方のみとひそかなプレイを続けようかとも考えています。どなたか、本当に不安な状態でなく、私の乳房を責めて下さる同性の方はいらっしゃらないでしょうか。同性の方なら着衣は全部とられてもかまいません」

と同性との遊びに逃げている。

さっそく四月号で同性からの呼びかけがあった。

清水和子（東京）二十五才のBG。

「私一度でいいから同性の人を虐めてみたかったの。普段はおとなしい女性になるのですが、本心は、それとはまったく逆なんです。貴女の希望通りに乳房責めにしてやりたいわ。恥かしかったら私も半裸体になってもよくてよ」

二人の女性が、山辺まゆみを責めたかどうか私は知らない。

床の間の柱にロープでがんじがらめに山辺まゆみを縛りつける。豊満なまゆみの乳房に手錠をはめる。輪を少しづつ小さくしていく。乳房の根本が手錠でくびられて、もうこれ以上乳房が大きくなれないという極限まで責めつける。まゆみの乳房はひょうたんのようになんて大きくくびれあがった。

その時、まゆみのふくよかな太ももから、一筋の白い線が流れた。屈辱と苦痛と後悔がもたらしたまゆみの汗と体臭とがスプレーした甘美な神酒であった。

ひざまづいて、まゆみの小さな足首に唇を寄せる。すんなりしたふくらはぎを伝わってくるまゆみの神酒を私は吸った。そんな夢に、私はうなされる。

(2) 伊集院かほる、中山梨津子（東京）

（三十七年七月号読者通信）伊集院かほるより中山梨津子あて、

「貴女とぜひ一緒にプレイしたくてなりません。私は異性には余り興味が持てません。同性との浣腸プレイは素晴らしいですわ」

中山梨津子、十九才の女子大生。伊集院かほる、四十才の未亡人。

六月号の中山梨津子の通信

「私の浣腸お遊戯は高校二年の時からです。事が浣腸だけに誰にでもお話し出来るわけではなく、一人で日夜楽しんで参りました」

とあり、

「今年一月に、ふとした事から同級のお友達から浣腸の趣味がある事を告白され、都内に浣腸マニアの同好会のある事を知らされまし

た」

さっそく二月に入会した。

「とても会の方々が親切に指導して下さいますので本当に幸福です」

最近、その会の名前を聞かなくなった。解散したのだろうか。知りたいものだ。

十一月号の伊集院かほるの通信

「今いろいろの浣腸の道具を使用しておりますが、私が最も好みますのは、オミソによる人工排便です」

となやましい。また、

「使用済の下着にもすごく魅力を感じます。もっとも女性に限りませんが、ぜひ同性の体臭と汗のしみた下着をお送り下さい。もちろん私だって負けずに香り高いショーツを送ります」

浣腸の記事は多くても、人工排便の報告は少い。興味あることだと思うのだが。

(3) 曾根美也子、橋本政代（大阪）

（三十七年三月号）

「三十才前後の美しい同性の方から、女王様のように、ふるまってほしいと思っております。もしもそのような方がおられましたら、私はどのような命令にでも奴隷のように一生

懸命奉仕致します」

二十一才の美しい女性らしい。

「私を思いきり意のままにしたいとお思いの方は、お便りをお待ちしております」

これに対して、八、九月号の通信に、「美也子お姉様、お姉さまとは近所なのでぜひ私の話し相手、プレイ友達になつて貰いたく、この場を通じてお呼びかけします」

橋本政代（大阪）BG。

とあり、

「赤いバッグを左手に、白いハンカチを右手首に差いて待っています」

と、待ち合せの日時場所を指定している。二人の若い女性が逢ったかどうか私は知らない。

(4) 寺島美千代、山岡久子（名古屋）

三十八年六月号、山岡久子より寺島美千代あて、

「あなたのご希望は男性とのことでしたが、女同志で理解出来れば、こんなうれしいことはありません」

とあって、

「あなたと私の住所は近い、夜でも一度お逢いして下さい。私はやや小型の女ですが、必

ずやあなたに満足を与えるだけ努力を致します」

三枚オムソカバーを持っているという。

寺島美千代、二十一才のBG。

「大抵は食塩水を用いますが、ときには石鹼液のときもあります。量は一リットル位までなら大丈夫で、排泄する時はガラス製五〇C浣腸器の外味を用います」

続いて、

「すぐ勢よく流れ出てきます。我慢のあとだけに普通でさえ勢がよいのに、先のとがったところで一層速度が早められ、その速さはすごいものです」

とあり、

「それを洗面器のような音のたちやすいものに受けます。音が大きければ大きいだけ私の感激は素晴らしいのです」

アパートの個室でする一人だけの浣腸プレイ、やはりそれだけでは満足出来ないのだろう。

「どなたか、私を縛って浣腸して下さい方、ごさいませんか。私一人でプレイするだけでしたら、どうしても手ぬるくて、最後まで我慢できなくて途中で妥協してしまうのです」

そして、

「一度オムツをあててみたいとも思っています。男性の方出来たら若い方がよろしいのですが」

と呼びかけ、

「少々きつくしても私はかえって幸福に感ずる位です」

と書いている。四月号読者通信。

男性の反応は、五月号に三件あった。

(5) 中野珠江(藤沢) 河井ルリ(新潟)

三十七年四月号、河井ルリ(BG)より

中野珠江あて通信

「便秘にかかる時が多く、姉様から度々浣腸のお世話になっていました。私はあの冷たいガラス器具や薬のひろがるときのやるせない感じを求めて、そんな必要のない時にでもお姉様に甘えていたようでした」

とあり、

「中野珠江様、貴女とお話出来ればどんなにか楽しいことでしょう」

三十六年十二月号、中野珠江の通信

「浣腸薬など、もちろん手軽に手に入れることが出来ますので、いつも一人用いております」

とある。薬局に勤める二十一才のBG。

「浣腸ファンの男性の方からのお便りがいただきたいと思います。おさしつかえなかったら私に浣腸して下さい」

住所が明記されてあるが、その後の報告は通信に見られない。多数の手紙に驚いたことだろう。

浣腸が女と女のプレイに登場したのは、最近の事なのだろうか。かなり多いことに気がつく。

河井ルリあての通信が、六月号に二件あった。

(6) 上原アキ子、静岡の一読者

静岡の一読者(文章から女性と思う)より
上原アキ子あて、三十七年六月号通信、

「生来便秘性な私は、殆ど隔日おきぐらいせねば気が済まない位病みつきになってしまいました。それも最近では自分の手でするより第三者に縛られながら思う存分されてみたいような、また、相手の方に心ゆくまでしてあげ、その苦痛から生まれる歓びを味わせてあげたいといった気持ちになってしまいました」

愛用は二〇CC硝子製シリンドラー。

「ひそかに味った感触では、大量の注入器の

ことは測りかねますが、本当に身動きできない状態で強引に注入されたりしたらなどと考えると、身内が沸き立ってくるのです」

とある。

上原アキ子の通信は四月号にある。

「私達は二〇〇〇の浣腸器によるグリセリン浣腸、温水浣腸、牛乳浣腸などを行っております」

彼女は二十四才。相手はイトコで十九才、アパートに同居している。二人共BG。

牛乳浣腸といえば、マルキド・サドの『ソドムの百二十日』に、

（神父は浣腸器をとりあげると、これにミルクをいっぱいにつめ、相手のうしろにまわり、中味を注入しました。ユージェニーはなにをされてもおとなしく従いました。神父はベッドに身を横たえたと、すぐさまユージェニーを呼びよせて、上からまたがるように命じました。

「さあ、なにかしたくば、どうかわしの口のなかでやっておくれ」

気の小さい彼女はいわれたとおりにして……やりました。すると神父は……貴重な液体を一滴のこらずとらえました」

第十日。大場正史訳。世界セクシー文学全

集。新流社。

牛乳浣腸は私の夢だ。

(7) 佐藤良子（京都）本郷綾子（東京）

三十八年一月号、本郷綾子より佐藤良子あて、

「私もゴムマニヤで、すっかりオムツカバーに引かれ、自分で作って使用しております。それで貴女様のオムツカバーをぜひおゆづり下さい」

とあって、

「出来れば貴女の尿で濡らして、ポリエチレン袋に入れていただければうれしいと思います。私も貴女の申し出ならば、お礼になんまりと送りたく思います」

そして、

「月経帯の交換などもしたく思います」とある。

三十七年十二月号佐藤良子の通信は、

「オムツカバーがご入用の方がございましたら、お便り下さいませ。四、五枚位でしたら余分に所持致しておりますから」

二十六才のBG、独身。

(8) 石山正枝（新潟）村田武子（東京）

「相撲の大ファンです。今ではマワシを締め、プレイします。デニムなどの生地を買ってきて自分でつくりました。今ではグリーン、ブルー、むらさき、コバルトの四本のマワシを持っています。裸になってマワシを締めると、身体中がシビレてくるような気持ちで、何ともいえないのです。それでも一人でプレイしているのです。そして、だれか相手になってくれる人がいないかなあと考えたりします」

三十八年五月号村田武子あて。

六月号石山正枝あて村田武子の通信。

「私たちの求めましたのは、中学生のまわしで、一寸かたくて締めにくい事と、締めた後すれまですの皮膚を痛めます。男の人の前ではやはり恥かしさが先になります。女性だけの集りが理想的と思います。A子と二人でプレイが出来ましたらとてもすばらしいと思いますわ」

女と女の遊びにもいろいろあるものだ。

三月号、四月号に通信を寄せている。

(9) 深見マサ江

（三十八年一月号）

「同性の乳房責めに興味を持ってから三年ぐ

らいになります。毎土曜日の深夜、お友達とお互いに責めて責められてのプレイをお遊びしています。彼女は三十才」

三十二才の未亡人の通信である。

「友達と二人でオシメのお遊びをしました。オシメを巻いて寝ると、まるで赤ん坊になったような感じ」とある。

E M の 女 性

(1) 知崎美左子 (千葉)

「私の身体に細引がまきついて、たたみの上で背中にとんでくるベルトの感触が、にぶい痛さにこらげる身体の前へ、後へ。いつのまにか細いロープと、ベルトを見ると私は彼の前に頭をさげるようになりました。一人になったときの腹だたしさと、身体にまといつく皮の感触のたまらない不思議な魔力」

十八才の頃、心の奥深くうえつけられたという。五尺三寸、十五貫、二十三才のマゾヒスト。六月号通信。

「中年の人に責められたい、と思うのですもの、本当に変わっているでしょう」

七月号に、東京と愛知より通信があった。

「貴女こそ私の多年求めていた人です」

とあって、

「千葉といえはそう遠くありません。知崎さんを心ゆくまで責めてみたい」

二人が結びついたかどうか私は知らない。

(2) 水野淑子 (大阪)

(三十七年十月号読者通信)

「私の念願はSの男の方と、心ゆくまでプレイすることです」

とあって、

「まず最初に、私は荒縄でがんじがらめに縛りあげられることでしょう。そしてあなたは、そんな私を眺めたり写真をとったりするでしょう。身動きもできない私に、あなたはバンドかムチで、私のお尻といわず、脚といわず、打って痛めつけて下さるのです。私はさるぐつわをはめられ、声を立てることすら許されていません」

責めは続く。

「私の足は無理に開けられ副木を当てて縛られます。腕はこれ以上曲らないという具合にまで後手に縛られます。そしてあなたは、ガラス袋のピストン式浣腸器を取り出して、いやがる私に四〇CCグリセリン(それ位ない

と私にはききませんから) 溶液を注入します。私の顔は便意の苦悶と恥しさでゆがむことでしょう」

二十一才の未婚の女性、デパートガールというから美しい人に違いない。

「もしあなたがお望みでしたら、乳房責めをはじめとして喜んで受けましょう。水責めも受けます。また全裸にされて庭の木にがんじがらめに縛られたり、さらしものにされてもかまいません。股責にも」

あくまでプレイにとどめてほしいとある。

「最後の一线だけは絶対に守って欲しいのです。また秘密も確実に守って下さる様お願い致します」

十一月号にさっそく反応があった。

大阪五件、東京二件。大阪の二件は各々バーストアップ、駅を指定している。その気になれば対面出来るわけである。東京の一件は局止めで連絡を待つ。

十二月号にも神戸と京都から通信がある。

「Mといっても一度に急に責めればこたえるもので、やはり徐々に馴らさねばならぬのではないかと思います、如何でしょうか」

と現実的な通信があった。

「年中薄着を強います。下着は年間を通じて

ナイロンパンティ、ブラジャーのみ。スカートはひざの出るタイトスカートに、五分袖以下のブラウスまたはワンピース、オーバーは冬でも薄地の布地で前はダブルボタン、襟なし、袖は七分袖、袖口広く、袖の付根も出来るだけ広くしたもの。本当にMであれば実行に移しては如何ですか」

というものである。十二月号神戸。

「寒中公園を散歩する時、オーバーの下の上半身を裸身にして、手首を肩の方へ捻り上げて歩きます」

袖口を広くする理由はここにある。

神戸氏はこうして一人の女性を責めているらしい。

「緊縛は半月か十月に一度位の割で行いますが、その時は勿論全裸でします。縄は細い革紐は、ベネシャンブラインドの調節用の細いナイロン紐を使用します」とある。

ベテランに飼育されるMの女性は幸福だ。

こういったMの女性の通信が、外に八件ある。

(3) 小倉いくよ (東京)

女性の六尺襷マニアには興味が持てなかったのだが、小倉さんの通信を読んで理解する

ことが出来た。

「女性が襷を好むのは二つの大きな理由があると思います。一つは女性特有の露出願望を満たしてくれること。もう一つは身体をぎゅうと締めつけることによる緊縛願望を挙げる事が出来ます」

と説明し、

「私の場合、襷は下着であると共に、以上の二つの理由を満たす道具でもありますので、巾は最小限に止め僅かに五センチです。したがってあまりゆるく締めておくと股間から外れてしまうので注意しなければなりません」ウエストばかりではない。

「女性の場合は胸も緊縛感を望んでいる部分なのです。私は襷と共布で胸を巻き背中で結んでブラジャーの役目をさせています。これも襷と同じく巾五センチの布ですから、乳首を覆うだけで、この胸当てと襷では身体の露出面積は最高になります」

緊縛感は自分一人でも十分味えるのだが、「露出症としての満足を得るには、素裸と大差のない自分の姿を意識させる相手が必要になってきます」

なんとなく、やってみたい衝動にかられますとある。読んでいて楽しくなるような手紙

だ。

「夏などはこの上に直接ブラウスやタイトスカートをつけます。タイトスカートは少しきつい位のものをはき、スカートの上から襷のふくらみを強調させています。勿論ブラウスの上からは胸当てが透けて薄く見えます」

勇気のある女性だ。

「最近では日中でもこの恰好で動き回っています。かがんだ時など、タイトスカートの張り切ったお尻の部分に、はっきりと襷の位置がわかるそうです」

真赤なものと水色のを三本ずつ持っているそう。

襷一本で姉妹で相撲をとっている、という及川愛子(神戸)の通信がある。三十七年五月号。

(4) 国分千代子 (東京)

女性切腹願望は、自己愛と同性愛が含まれていると思うのだが、どうも理解出来ない。

「千代子も切腹って大好き、といって男性のは嫌」

はつきりしている。

「やっぱり美しい若い女性の身体でなければ駄目。最初は日増しに丸く豊かになる自分の身体がいとしく、可愛く、だれか好きなお友

達に見せたいと思っただけ。それがいつしか切腹の真似事をして独り楽しむことを覚えてしまったの」

これなら理解出来ないことはない。

「おへそへつき立てるとき、刺激が極に達することを申し添えておきます」

そんなものですか。

その外に、藤村陵子（神戸）三十七年二月号。石川世洋子（東京）三十六年九月号。青山探（岐阜）三十六年十月号。

女性切腹に通じるだろうが、女性の生首マニヤもいる。川下米子（東京）三十七年五月号、十一月号。

(5) 井上正子（東京）

（三十六年八月号読者通信）

「四馬様、カバーからはみ出しているおしめの模様は、拡げであるのは市販の最も見なれた模様がよろしうございます。その上、濡れた感じをだしていただけたら……」

とあり、

「三月号で後手縛りうつ伏した前本妙子さんの写真に魅かれました。恥づかしい責めが待っているようで」

と浣腸のシーンを空想し、

「私の好みは心理的な残酷図です。屈辱、みじめさ、恥づかしめ、恋人の前で受ける責め、しかし最後には明るい救いがほしいと思います」

SMプレイには絶対必要だと思う。

浣腸願望にはその外に藤本美奈枝（福岡）

三十六年十二月号。咲本栄子（鳥取）三十七年四月号。女と女の遊びで詳しく紹介した。

備考 — 傾向分類

(a) このレポートは、三十六年七月号より三十八年六月号まで、二年間の奇クの読者通信を参考にしていきます。

(b) 羽村京子、竹野ひろ子、東浦ひかる、藤山秀緒などの有名な諸氏は除きました。

(c) 参考にした女性は六十人でした。敬称は略しました。傾向の分類は次の通りです。

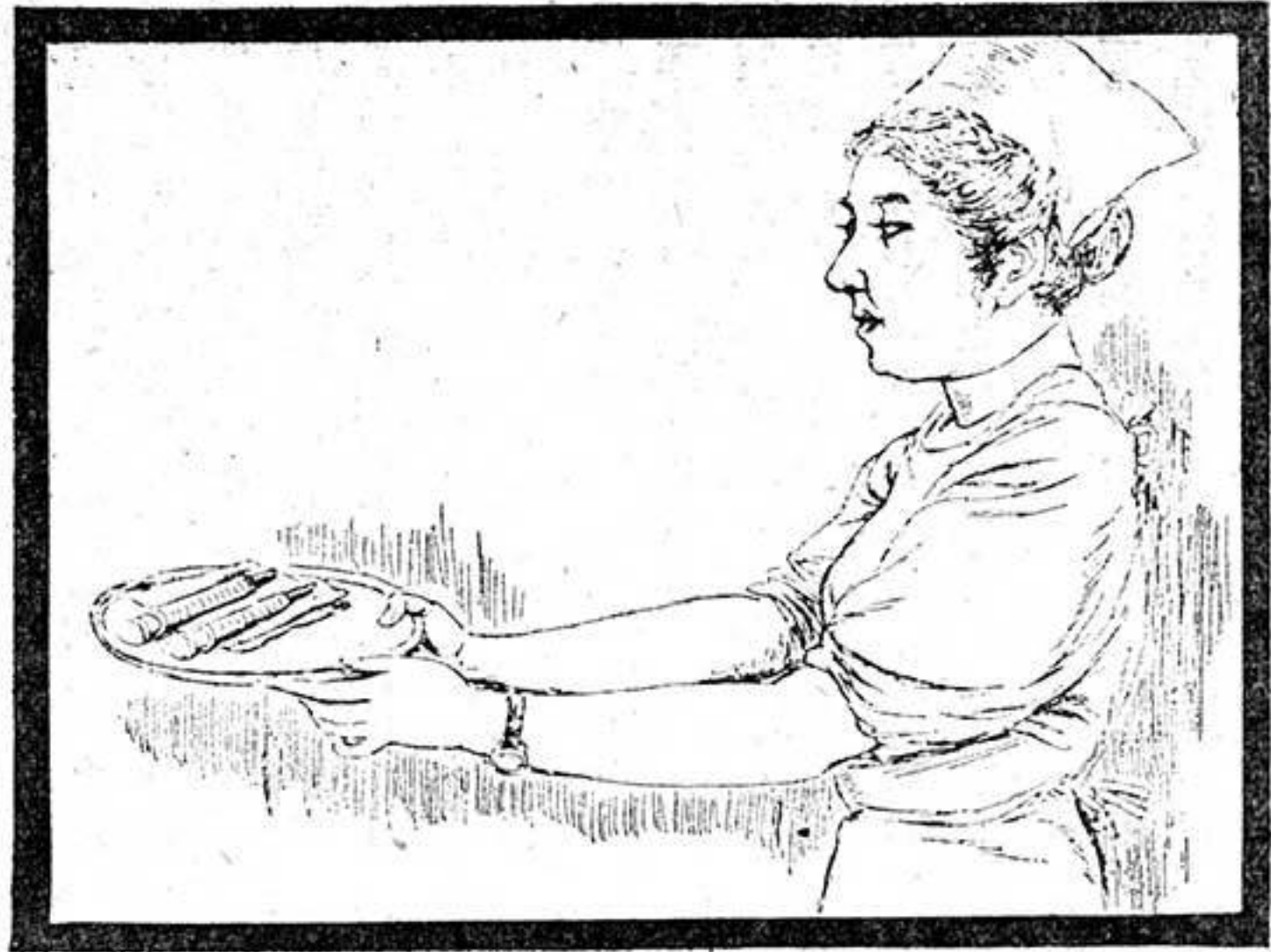
S	—	15
M	—	12
浣腸	—	13
オムツ	3	
カバー	—	6
切腹	—	4
褌	—	7
不明	—	60
計	—	60

(d) 女性の通信に対して呼びかけた男性は七十四件ありました。Sの女性に対してが三十二件。Mの女性に対してが四十二件です。

(e) 性傾向を正確に分類することはむづか

しいものです。各々の性格が非常に複雑に交錯しているからです。男性の傾向の分類は次の通りです。男性Mの手紙のほとんどが、パンティマニアであり神酒崇拜者であるのには驚きました。

セーラー服(女学生)	5	1. S	140
ハイヒール、ストッキング等	4	(註1) 批評、感想、要求を含む	
(註5) Fの種類		2. M	94
6. 女装	19	3. ゴムマニア	24
男同性愛	9	(註2) オムツカバー、メンズバンド、脱腸帯を含む	
(註6) 少年愛5件を含む、両者関係あり		浣腸	27
7. 鼻	19	(註3) 両者は関連しています	
臍	2	4. 女斗美	58
灸	9	褌マニア	33
刺青	3	切腹	64
アクロバット	3	生首	8
金色マニア	1	(註4) 各々複雑な関係がある	
計	531	5. 腰巻	8
		白足袋	1



浣腸の種々相

【続・看護婦さんとの対話】

山 岸 操

「先日はどうも失礼致しました。」
「いいえどう致しまして。毎日こう暑くっちゃ、何もする元気がなくて退屈しちゃうわ。どう、病院も暑くて大変でしょう」
「そうですね、なにせ、家にいる時のよう

に、ムームーってわけにいきませんものね、制服制帽ってわけですから」
「制服って、あつ、白衣ね、あれ、あついでしょう」
「ええ、腕のあたりピッチリしてますし、活

動に便利のように、バンドで胴を締めつけてますから」

「ほんとに大変ね。」

「ええ、でも一日も早く患者さんの苦痛を救ってあげたいと一生懸命ですもの、あまり感じませんわ。そうそう、この前お約束しましたわね、種々相のお話って」

「何だったかしら」

「オホホ、白ばつくてらっしゃる。ホラ、貴女のおすきな浣腸の種々相」

「まあ、いやあね、好きだなんて、私、ショックだったわ、あれ」

「まあそうおっしゃらずに。本当は聞きたいんでしょう。お話しして上げますわ、でも、事が事だけに、人権問題になりかねないですから、極く上っ面だけ、もの足りないなんていいっこなしよ、いいこと。」

「まあ、そんな。」

「まず小児科からお話ししましょうかしら、今は夏だから、消化不良、食中毒、といった消化器系の子供さんがどうして多いのよ。お腹の病気だったら、そう、先ず腸を洗ってみましょうってわけ。ね、先ず浣腸よ。だから浣腸器の消毒が間に合わない位。」

「外来はしないんでしょう。みんなみてるか

ら。」

「いいえ、子供ですもの、おかまいなしよ。勿論小学生位になると物心つくから、余程の事でないといけないけど、小さな子だったら、ハイ、ポンポンになりましたよね、って、左手で両足を攪んでひょいと上に上げたら、右手で浣腸するの訳ないでしょ。排便させて、粘液、血便などを見て、おかしかったら、顕微鏡検査、培養となる訳よ。」

「泣く子もいるでしょう。」

「ええ、女の子はまず泣くだけだから、有無を言わず注入しちゃうわ。困るのは男の子よ。バタバタあばれるのがいるから、そんな時は二人三人で押さえつけちゃうの。浣腸なんてものの二三十秒でしょ。簡単よ。」

「まあ、可哀そうに。」

「そんなこといってたら、とても勤まりませんよ。」

「入院してるお子さんにもよくする？」

「ええ勿論、小児結核、リュウマチ熱、白血病なんて長い子が多いわね。長ければ長い程私達と仲よくなってしまうって、お浣腸しましょうねって入ってゆくと、すぐうなずいて、横向きになるの、それこそ可哀そうなですよ。」

「病院ってすぐイルリガートルを使うわね。病院の廊下や、病室の窓越しに、イルリガートルをよくみるけど。」

「リンゲルの注射をイルリガートルと見間違ってるんじゃないかしら。でも浣腸にもよく使うわ。大体子供の場合、便の有無は付添が正直に書くから、便秘しているかどうかすぐ分るの、その点、大人は注意しないとごまかされるわ。子供は便秘すると大人より病状が急に悪化し易いから、どうしても浣腸の度数が多くなるの、そりゃグリセリンは刺戟が強すぎるし、習慣性になり易いから、イルリガートルにする場合が多いのよ。」

「それでなのね。分ったわ。」

「内外科なんかになるとそりゃ様々ね。氣を使ってやり切れないわ。毎日、検温の際、お通じはって聞くと、適当にありましたっていうの。カルテルには便通1ってわけね。ところが、変な熱がでてみたり、回診の折、先生が下腹に触診なさって、ばれるってわけ。そういう時は、見習かなんか連れてって、わざと大げさにやってやるの。」

「まあ、残酷ね、困ることもあるでしょう」

「一番困るのが大部屋ね。ベッドとベッドの間は二米位しかないでしょ。小型衝立をもっ

ていって、お尻の所だけ隠すようにするんだけど、左右両方に立てるのも大変だし、でも同病相憐れむで、皆、横を向いて、見ぬふりしてるわ、今日は人の身、明日は我が身ですよ。」

「ああ、あれ私にも経験があるわね。お産のあと便秘しちゃってね。丁度個室が満員で、一時大部屋に入れられちゃって。浣腸よ。みんなの前でやられるんですもの、その恥かしさってなかったわ。それに、まだ起きちゃいけないっていうんで差込便器でしょう。ほんとに涙が出ちゃった。」

「それなのよ。困るのは。内科で歩ける人なんかはいんだけど、安静の人、外科で足の骨折なんかで歩けない人は、どうしても差込便器でしょう。音がするから本人は恥かしがるし、夏は窓があいてるからいいとしても冬は匂いがこもってしまうし。余程注意していてもシーツをよごす人もいるし、そりゃ大変よ。」

「男の人と女とどっちがいい」

「どっちがいいってことはないわね。何たって大人だから、そりゃあきらめはいいわよ。でも手数のかかるのがあるわ。中学から高校位の、殊に女学生、恥かしがっちゃって、ど

うしてもさせないのよ。緩下剤のませろの今晩きつと排便するから、許してくれのってそりゃ手を焼かせるわ。でも、なだめたりすかしたりして、そんな子に浣腸するのっていいものね。涙ぐんで、手で顔を覆って、むき出しにされたお尻まで、恥かしさに真赤になったりしてるの。男の先生に浣腸されるんなら兎も角、同性の私達でしょう、そんなに恥かしがらなくなつて、よさそうなものと思うわ。反対にいけずうずうしいのが年増のおばちゃま族ね。大きなお尻、皺がよつてたるんだお尻を、恥かしげもなく、ニユッと突き出されると、幻滅というものかしら、仕事ではありながら、がっかりしてしまうわ。」

「やれやれ、年は取りたくないものね。」

「そういえば、時々変な人におっかるわ。浣腸マニアっていうのかしら、盛んに便秘だ便秘だと訴えるのね。浣腸してあげると、何か夢みるようにうっとりしてるらしいのよ。そういう人に限って二三日すると、又お通じがありませんと来るの。嫌ね。女の人にもたまにはあるわ。」

「へえ、浣腸されるのが好きなんで人あるのかしら。」

「あら、貴女だって怪しいものよ。私にこん

な話させて、喜んで聞いている所をみると。何だったら浣腸して差し上げましょうか。」

「いやよ、変なこと言わないでよ。」

「おっと、怒りっこなしよ。ごめんなさいね。産婦人科のことは、貴女がよく御存知ですわね。」

「ええ、身をもってその恥かしさは体験したわ。でも陣痛が始まってからの浣腸は残酷だわ。何ていうの、足をのせると、せり上げるのあれに両足をのせさせて、せり上げて開かせるんだもの、あんな凄じい恰好ってないわ。」

「浣腸しながら、お産の進行状況をよく見るためなんですよ。」

「お腹は丸々と膨らんでるでしょ。腸は子宮で完全に圧迫されてるわけね、そこへ、イルリガートルでぐいぐい石鹼液を注入するんですもの、とてもたまったもんじゃないわ。」

「直腸を圧迫して便秘し勝ちだし、便秘すると陣痛を防げるから浣腸するんですよ。それと、いざ分娩室に入ってから、娩出のためにいきみますね、その時、いきむと、便が出てきちゃうんです。すると恥かしいので、いきむのを止めてしまう方があるんです。それで腸を空にしとくんです。」

「そうそう、いきむと、まだ出そう気がする

わ。」

「そうでしょう。そうそうこの前も、いきみながら、まだ便が出そうだから、ここでもう一度浣腸してくれてきかない方がいましたっけ。何か出たら出たでいいから大丈夫って説明するのに骨が折れましたわ。」

「産んでからも便秘し易いのね。」

「ええ、便秘すると子宮の収縮が悪いですから」

「私は、お小水も出なくなつてね、導尿までされちゃった。あれ痛くってね。いやだったわ。」

「導尿は危険ですから余程の事でないとしないんですけど、大概はお産後、緩下剤と利尿剤の入ったお薬差し上げるんですけどね。」

「そうそう、飲んだけど、きかなかったのね。」

「おやおや随分頑固な方ですのね。じゃ平常は便秘なさらないの？」

「時々、二三日。下腹が張って気持ち悪いわ。」

「そりゃいけませんわ、私におっしゃいな、それこそ上手に浣腸して差し上げますわ。」

「いや、恥づかしいもの」

「しようなないネンネエですのね、ホホホ……」

△告白と体験△

コムニヤのプレイから

森 中 雨 奇 男



幼い頃から「責め」に人一倍興味を感じていた私ですが、結婚以来、妻という好伴侶を得て、一層「責め」にこり始めています。

最初は貴誌のグラビヤなどを見せながら、少しだけしらせてくれといった調子でしたが、今日この頃は、かつての貴誌を熱狂的に沸かした「古川裕子」さん顔負け?のゴムの雨具責めにも耐えられるようになりました。

今日はいままでに経験してきた数々のプレイを紹介してみたいと思います。

○

私が食べようとしたごはんの中に、小さな虫が入っていたという理由で、妻を仕置したときのことを書いてみましょう。

二度とこういう誤ちをくりかえさないように懲しめるということで、上半身裸にさせ、私の前で両手について謝罪させます。

妻はこれから加えられる「罰」と「刑」の恐怖におののきながら

「今後、二度とあなたの食物の中に、汚いものが入らないよう十分注意いたします。今回は本当にあたしが悪うございました。存分にお叱りをいただきとうございます」と言っ

てうなだれます。

私は準備してあったナイロン・ゴム引きの

ピンクのレインコート（これは約十年程前に流行したもので、私はピンクの他に、濃紺、青、緑、灰色のものなどを持っています。勿論、フードやベルトつきです）を着せフードをまぶかにかぶらせ、手足にブーツをはかせます。

レインシューズ、レインブーツの類はいろいろと揃えています。白のものが殆どで、裏布のついているものは、全部はがしてゴム地だけにしてあります。

ボタン止め式のものの、ワンホックのもの、レインカット、長短さまざまなブーツですが手にはかせるときは、長めのブーツを主に使います。その他、戦後すぐに流行した茶色アメゴムの裏地のないレインシューズなど、いまでも愛用しております。その他よく使用する雨具としては、男物の黒ゴム雨合羽、黒ゴム長（裏地なし）ビニール・レインコート（女物、男物）そして最近ササール・コートを時々つかったりします。

さて、そんな姿にして奥の間へつれてゆき床柱に抱きつくような恰好に、細目のロープで全身をしぼりつけます。そして丁度口のあたりへマイクをぶらさげ、それにテープレコーダーをつなぎます。

「先ほど俺にあやまった言葉を、よしというまでくりかえし喋れ、あとでテープをまわすから休んだりすると、刑は重くなるぞ、大きな声で言わんとテープに入らんからな」

そういつて私は部屋のフスマをしめきり、別室でテレビのスイッチを入れて、ドラマなどをみたりしています。テレビの音を消してフスマに近寄り聞き耳をたてますと、妻は相変わらず忠実に謝罪のことばをくりかえしている様子です。

△可哀そうな妻よ、もっともっと、くりかえせ、まだまだ責めは始まったばかりだよ。そのうちにくつわをかませて、言いたくても言えないようにしてやるからな。▽

一時間ほど経ってから、私はそしらぬふりをして妻に近づきます。

「どうだ、少しはこたえたかな。他の刑罰に変えてやろうか」

と言いつながら、顎に手をかけます。妻は涙のうるんだ瞳で私を見上げながら

「もう二度と、あのようなことにならないよう気をつけます、お許し下さい」

と訴えます。

「バカ！、俺がよしというまで、今の文句をくりかえせと命令した筈だぞ、今の返事は首

をふることで出来るのに何だ。命令に違反した罪は重いぞ、このテープはこれくらいにしておいてやる」

一旦ロープを解き、しばらくそのまま休ませます。一休みしたところで、手のブーツだけをぬがせ、自らの手で猿ぐつわをさせます。くつはレインコートと共地のフードケースをまず眼の真下まであてがわせ、その上へ足にはいていた、やや長めの白いゴム・ブーツの片方をあて、フードの上から同じコートのベルトでグルグルまきにさせます。これで呼吸の困難とともに、聴覚の方も困難になります。

足は黒のゴム長にかえ、つぎにオシメカバーも自分でさせます。レインカットをまずあてがい、紺のレインコートで包むようにして最後に再び手にもブーツをはかせます。

いつもこのようにして、しぼりあげるところまでは自分でさせます。ときには足や胴まですら自分でしぼらせることもあります。さて、ここで囚衣の点検ということになります。

私はまずかがんでオシメカバーから調べます。カバーの代用にしたコートがゆるいと後で又罰が加わります。これを恐れて、最初から、きつく締めてあります。OK、つぎにく

つわを調べます。ベルトに指が二本以上入れば、これも締め直しとなり、おまけに眼までかくれてしまうゴム長をもう一つ、その上へつけさせます。OK、

さて、手にもブーツをはかせてあるので、四つん這いの刑を加えることになります。この刑もまたちよつと面白いものです。時計を与えずに、十分間ちよつと、家中をはいまわれと命令し、十分目に私の前で止まれということになっています。

そこで十分からプラスマイナス三十秒以内の誤差で止まったときは、あとでくつわをはずしたときに、その差の秒数だけ顔面平手打ちをくわせます。ところが、この打つ間に少しでも声を立てたり、避けるような素振りをみせると、今度はその倍数の乳房ムチ打ちとなります。ここでも同じように声を立てたりしますと、またその倍数のお尻ムチ打ちが加わります。ここでも忠実にしたがわないうきは、三日でも四日でも許しが出るまで、声を出させないということで、くつわをはめたままにしておきます。

ところが三十秒をこえて十分をオーバーした場合、四つん這いが好きだということになって、こえた時間の十倍をまた這いまわらせ

ます。一分をこえると、だから又十分這うことになります。そして誤差があると、また同じように刑罰がつきます。しかし早く止まったときは、命令を拒否したということになって、その誤差の時間の五十倍を四つん這いさせた形で、木ワクに手足をしばりつけて庭へさらします。その上、二分以上前に止まったときは、これに秒数だけの尻ムチ打ちのおまけがつき、三分以上前なら、更にその上へ解放後、再び十分四つん這いの刑のやり直しとなり、四分以上前だと、解放後さらに十日間の長期刑を科すことにしています。

十分ジャストで止ったときは直ちに釈放、代って私が同じ「囚衣」を着て、この刑をうけることになっていますが、どうせ、もう十分間もはい回ってヘトヘトになっている妻が止まるときにストップウォッチを押すのですから、一秒や二秒は何とでもごまかせます。

このように、これをやらされると仲々簡単に許されず、以前に二度やっておりますが、最初のときは、七分十秒（苦しいので、つい早く止まるようである）で止まったので、二分五十秒の五十倍、百四十分間のしばりつけと、この間に百七十発の尻打ちを（このときはハイタタキを使った）行ったので、妻にと

っては、相当恐怖をきたしたようです。

二度目のときは、前の恐ろしさがこたえたか、よく頑張つて九分四十五秒ぐらいで止まったので、十五発の平手打ちとなつたのだが途中で泣き出したので、乳房打ち、尻打ちのどちらもやめて、二日ほどくつわをかませてそのままにしておいたことがあります。

このときは食事時は十分間はずし、ひるの間はきつく、夜はフードをつけたレインコートを着せて寝させたが、このフードヘフードケースをホック止めで口、鼻を掩うようにしたものをつけただけで、息苦しいことはなく夜はゴムくさい臭いだけの責めでした。しかし、くつわをといた後も、しばったあとかたがしばらくとれなかったほどでした。

○

翌日、同じ「囚衣」を着せて、今度は両手を後へまわさせて、高手小手に締め上げ、その縄尻を首へ回してから、三重四重と胸をしめあげ、さらに正坐させた両足をしばって結びつけます。

私はその真前へ膳をもち出し、ビールの栓など開け始めます。いま坐らしたばかりで、まだ打ったりしていないから、よく妻の姿を眺めると身体の露出しているところは、わず

かに額と眼だけです。私はこれから楽しみでわくわくというところですが、可哀そうに妻はゴム、縄目、息苦しさ、それに早や夏近い汗に攻められ始めています。

いかに夫婦間のプレイとはいえ、縄がなくとも伏目がち、うなだれがちになるのは百も承知で、「面をあげて、じっとオレを見ていろ」と大声で命令します。私はゆっくり食事をすまし、タバコをくゆらしながら、テレビのスイッチを入れます。すでに涙と汗にぬれた妻の目は夫の許しをねがい、救いを求めて光っています。涙をみると私の心もつい弱くなり、それをごま化すためにムチをとり出して、やおら打ち始めます。

ウツ、ウツと小さな声をもらしながら、妻はレインコートのすそをバサバサと乱しながら身もだえします。集中的にふり下されるムチから逃れようところげまわるにつれ縄目はますます肌に喰い込んでゆきます。

コートと長靴の間から白い太もものがのぞくと、ムチはそれを狙います。コートのすそがひろがって尻がよい音を立てます。やがて妻がぐったりしてくると、私も疲れてきます。△愛するお前よ、私のいうことをよく聞くんだ。そして忠実な、完全な私の奴隷になる

んだ、それまでは辛抱してくれ▽

フードをつかんで、ひきずり起し、くつわにキッスしてやる、ブーツでとめたベルトが私の頬でかすかに動きます。

△苦しい息の下で、一生懸命にもがきながらあえぎながら、夫に忠誠をつくす可愛い妻よ、もっともっと、いじめてあげよう▽

縄尻をとって今度は裏庭へ引立ててゆきます。小さな泉水の傍の砂利の上に坐らせておき、私は昨日とったテープを回すべく、長いコードをひっぱってきます。

そしてテープを妻のそばで回し始め「謝罪のことば」の発音が止まったところへくるたびにムチを当てます。

○

今年の四月のある日、例によってレインコートを着ると命令したところ、妻はすぐコートをつけボタンをはめた。

これを見て私は、「オレはコートを着るといっただけだぞ、ボタンをせよとはいわん、そうコートが好きなら、好きなようにさせてやる」と言って、面白いことを考えつきました。それは、天気の良い日に、もう都会ではめったにみられなくなった、そのゴムのレインコートをきて、一時間ほど外を歩いてこい

ということでした。

さすがに、これは妻も必死になって拒み、それでは条件をつけるということで、結局、雨の全然降りそうにない日の夜、往復約八キロほどある郊外電車の駅まで、一時間以内に往復してくること、その駅まで行った証拠に一区間のキップを買ってくることに、フードはかぶらなくてもよいが、背へたらしめてゆくと、白のブーツをはいてゆくこと、もし一時間以内に帰れぬときは、罰として次の雨の日、今度は男物のゴム合羽、ゴム長の服装でさらに遠い駅まで行くことなどがきまりました。

さあ、妻のつらそうな顔。勿論素肌の上へレインコートをきるだけですから、途中で脱ぐわけにもゆきません。知った人と道で会うのをさけるためには、なるべく暗い道を通る方がよいのですが、そのためには回り道となり、制限の一時間以内に帰りつくのがしんどくなります。かなり走ってでも、人に会わない方を行くか、恥をしのいで明るい道を行くか、お金はその一区間のキップを買える金しかもたせませんから、タクシーに乗ったりすることもできず、またそんな服装ですから、知った人のところへ行って、お金を借ること

も恥しくてできません。

全く困らせ始める非常によい名案ということが出来ます。だから時計も持たせませんし、一方では早く帰らないと、またつぎのきびしい罰が待っている。駅でキップを買うときは、いやでも誰かに見られる。(最初はむしろ、私をもっとも近い駅を指定したのですが妻は知人と会うのを恐れて遠い駅にしてほしいと言い出したので、それではと時間制限を考えついたようなわけです) 約八キロを一時間以内とは、女の足では少し走らねば間に合いそうありません。

三日目の夜、星が輝いていました。

妻は観念して指定した「囚衣」をつけ、うなだれながら出かけました。さすがに、そのさまに、私は出がけに抱きしめて、「気をつけてゆくんだよ」と耳もとで囁やきました。へああ、可哀想な妻よ、まだまだ私の命令はきびしくなるから、我慢するんだよ。今ごろは暗い乾いた埃っぽい夜道を人目をさけて小走りしているのか、或はブーツをひきずるようにして泣き出しているんじゃないだろうか。一時間経ちましたが、妻は帰りません。さすがに少し心配しましたが、一時間半ほどして、額に汗をうかべ、相当走った様子で帰っ

てきました。そして、

「只今かえりました。これがキップです」と私の前に正坐し、眼に涙をうかべて「時間間に合いましたか」とたずねます。

「バカッ、三十分もオーバーして何ごとだ、今度は雨の日のマラソンだぞ」

——その夜のベッドの中で、さすがに妻は、この仕置のきびしいことを訴えていました。普通、責めのプレイは第三者の介在しないところですが、この仕置は下手をすると、外部のものに発覚しそうなものです。

もちろん一週間ほど経った雨の日の夜、男の雨具をつけさせてマラソンをやらせましたし、その後レインコートだけ着せて、両手をポケットへ突っ込ませ、コートの下で両手をセロテープでしばって、外出させたこともあります。いざというときは、少し力をいれるとテープが切れ、両手が自由になりますが、そのかわり、これを切って帰ってきたときは、またその罰則をきびしくしてあります。

その他、いろいろの仕置を行いました。その中の二、三を御紹介しますと、フード、レインコート、ブーツという完全な両装束をさせて、風呂場へ引きたて、頭の上からシャワーをかぶせて、よしというまで立たせてお

く。また、そのままの姿で、湯の中や水の中へ長時間つける。爪先立ちの半吊りにして、ホースで全身に水をかける。濡れたレインコートの上からムチ打ちを加える。いったようなものです。

またときには、全然しばったりはしないのですが、手足にブーツをはかせておくこともあります。これなど、身体中、どこも不自由はないのですが、手の指を自由に使えないだけに、見ていて仲々面白いもので、ゾウキンをしぼるのに、手の白いブーツをくねらせている図や、タバコの火をつけろと命じて、マッチはもちろん一本引抜いてつけたたりすることはできませんから、両手いや、一足のブーツを使って苦勞して、やっとつけたというところもあります。このときは、わざと細かく手先を使わねばならないようなことを言いつけて、それができないと、又、別の刑罰を加える口実に使ったりします。

まだ結婚して間なしですので、十分な訓練は出来ていませんが、そのうち、又変った仕置も出来るようになると思いますので、そのときはいずれ次の機会に御報告させていただきます。こうと思います。

(おわり)

十三人の女死刑囚

その三（抵抗篇）

佐 出 須 登

1

一九××年欧州のある一小国は某大国の支配下にあった。その暴虐ぶりはすさまじく、愛国心にもえる若き女性たちは彼等に対し、雄々しくも抵抗運動に身をささげるのであったが、その代償は例外なく死であった。

クロチルドはある夜ひそかに母校の寄宿舎にしのびこんだ。勿論学校など閉鎖されているが、同志たちのアジトとなっているのだ。すでに数人の仲間が集っていたがなぜか皆黙りこくっていた。『一体、どうしたの』一人

が無言のまま指をさす。その方を見たクローは『はっ』とした。一人の美しい女性があわれ生首となって晒しものになっている。その側には燈火までがおかれてあった。よくみると同志の一人フランソアーズではないか。『あんたたち、あれをあのままでおくつもりなの！』

クローはこう叫ぶと生首の方に走っていった。ひそかに葬ってやるつもりだったのだ。しかし、獄門台の側に建札が立っている。それにはこの首をもちさった場合、ほかの誰

かで補充するというのだった。これではどうにもならぬ。誰も手をださぬわけがわかり、クローはしおしおと仲間のところに帰るほかはなかった。

フランソアーズは切腹の刑をうけたのだ。即ち短刀を左の下腹にズブリとつきたて、もがくのをもそのまま放置された。この短刀を右まで十分に引きまわせば首を打ち落す、即ち苦しみを止めてやるという。彼女は必死の力で切り裂いていった。血汐がはげしく吹きだし、腹圧のため浮き上りそうになるのをおさ

えつけながら。だがなかなか介錯の刃はもらえない。遂に最後の力をふりしぼって短刀の先を喉にあて、身体をのしあげるようにしてようやく自らの生命を断ったのだ。刑吏は彼女が絶命したのをたしかめてから首を刎ねて獄門に梟け、一方胴体は逆吊りとして晒しものにしたわけである。

2

デビーは悲しさをこらえながら広場へ急いだ。今日も同志たちの処刑が行われるのだ。しかも親友のピアもその一人である。今となっては彼女ができるだけ安らかに死んでゆくのを祈るだけだった。

広場には六台の戦車が恐ろしい姿を見せていた。地上には三十人あまりの美女が或は四肢をひろげて固定し、或は脚だけ、又は手だけを縛ったまま横たえられていた。戦車が動きだす。女たちはどうにもならず次々と下敷にされてしまう。脚から潰されるもの、頭からのされるもの、悲鳴はあつという間に消えていく。

次の三十人は自由にはされたが戦車があとを追いかける。ぐるぐるぐるっと半円を描くと美女たちはひとなめにされてしまうのだ。一番遠くまで逃げた女は運悪く火焰放射砲を

持った戦車に追われ、第一回の放射で黒焦げとなり、二度目で骨だけとなってしまい、もう一度あびせたら灰となって消えてしまった。

ピアは小さい穴をみつけてもぐりこんだ。一台がその上を通る、彼女はこれで助かったと思ったが引き帰してきた戦車は今度はその真上で止り、片方のキャタビラをとめ、もう一方でぐるぐるまわりだした。地面がけずられ、穴がつぶれてゆく。悲鳴をあげてももうのがれるすべはない。キャタビラが彼女の身体にふれ、そして粉塵に砕いていく。「ギャー、ワァー、ギャー……」砂煙の中から断末魔の叫び、血汐も肉も骨も、いまみじんに砕かれていくのだ。やがて穴は完全につぶれ戦車は去っていった。デビーがおずおずそのあとをのぞきこむ、あとには一片の肉も一滴の血も残っていないかった。想像を絶する恐怖と苦痛を味いつつ、二十才の乙女ピアはこの世を去ったのだ。

3

ナタリーは同志への連絡をつけるためいそいでいた。敵のトラックを襲う計画がもれ、このままでは全部が敵の手におちてしま

うのだ。だがすでにおそく仲間たちはことごとく死体となって横たわっている。首のついていないものは一つもなかった。呆然とたちすくむ彼女の背後に敵が近づいてくる。

ナタリーはこうして捕えられすさまじい拷問をうけた。水せめである。四肢をおさえ、じょうごを口にさしこみ、どんどん水を注ぎこむのだ。いかに飲むまいとしても鼻をつままれては飲まざるを得ず、みるみる腹がせりだしてくる。しかもこの次は足首でもって逆吊りとし全部吐かし、またこれをくりかえすのだ。とうとう彼女は参ってしまった、彼女の組のかくれ家をもらしてしまった。なんといってもまだ十九才の少女なのだ、止むを得ぬことだろう。

しかし、彼女は許されず死刑にされた。しかも火あぶりである。刑はまずローソクの焰で乳房を、花のつぼみの様な乳首をチリチリ焼くことからはじまった。悲鳴をあげて泣き叫んでもだめ、きちんと腕をふせたような乳房が、無惨にも焼きおとされてしまう。彼女は早く殺してくれるように願い、辛うじて許可になった。即ち薪を山とつんだ上に縛りつけ、火を点ずる。ようやく高くあがった焰が下半身をつつんだ、身をくねらしの断末魔の

もがき、この時、隊長がやってきた。刑吏たちは焰をかきわけて明らかに女性であることをさししめす。ガソリンがかけられ、どつとあがる焰のなかがつくりと上半身がおれまがった。煙のために窒息したのか、火傷で死んだのか、とにかく引きづりだして死をたしかめる。美しい首にはすこしも傷がなかったの、で黒焦げの身体から斬りとり、のこる胴体はもう一度ガソリンをかけて完全に焼きつくしてしまった。

ナタリーはこうして哀れな最後をとげた。しかし、彼女のもらした秘密のため残る仲間もことごとく敵の手におちたのであった。

4

ジャクリーヌは銃殺を宣せられた。一緒に死ぬ同志は五十人位か、自動小銃でバタバタと片づけられるのは運の良い方だった。そのうち殺す方でもあきてきたのか、変った殺し方がはじまった。

テリーは五十発連装の自動小銃をむけられた。今までと異なるのは射手が一人でなく一小隊全員である。その数は六十人、一体どうなるのかとおびえる身体に銃火がおそいかかる。ゴッゴッ、哀れ美しい身体は血しぶきをあげてはぜちり、わずかに人間の姿らしい

ものがくずれるのが見えただけで、それさえも粉々に散り、地上に血しぶきがのこったほかもうすべてが消えていた。

マリサには四〇ミリ砲がむけられた。彼女は目をつぶり、一心にせめて即死することを祈った。銃声！即死どころか鋭敏な信管は先端が彼女の柔かい腹部にふれただけで炸裂し、みじんにふっとばしてしまった。

メリーは七五ミリ砲である。前に五人の女を並べ、火力をずっと弱くして発射する。全員バタバタとたおれた、腹部に大穴をあけられて。彼女は傷口にブリキ板をはめて穴をはつきりさせ、この姿で晒しものとした。

ロンダはこの刑が好評だったのでアンコールとなった。前と同様五人の女の腹に穴をあけた砲弾はなんと、彼女の腹部にぴったりとはまりこんでしまった。信じられぬという様に恐怖の目をみひらく美女、夢としか思えぬ位、だが勿論すぐに死んだ。刑吏の方でも予想しない結果である。背の方に砲弾の先が、腹の方に尻がつきでている。傷口は焼きついたのか血汐は全然流れない。あまりにも見事だったので、腹に砲弾をはめこんだままアルコール漬にして晒された。

ジャクリーヌはこれらの処刑を隅に坐ったままじっとみつめていた。十七才とは思えぬ冷静さである。その雄々しさを買われて正式の処刑をうけることになった。服の着用を許されたのは思いもよらぬ好運だった。

彼女は静かに刑場の一隅に立つ。左胸に直径一〇センチの白い的がつけられた。美しくふくらみをもった乳房、その奥に秘められたハート、いまここをうちぬかれるのだ。目かくしもいましめもなかった。

十二人の射手が銃をとり狙いをさだめる。彼女は静かに目をつぶった。銃声がひびきわたり、ジャクリーヌの身体が一回転したとみるや、ぱったりとたおれた。白色的に穴があき、真赤な血汐がじゅうじゅうとほとほと流れて、みるみる胸をそめてゆく。ほほえみを浮べた美しい死顔だった。本来なら額の中央を射って止めとするのだが、あまりの清らかさのため省略され、何一つ恥かしめることなく傷口も十分に処置されてから葬られた。

5

ギロチンの方も次々と進められていく。一人ずつでは時間がかかるというので、大型がもちだされた。普通のギロチンは幅八十センチ、重量六十キロの斧が二・二メートルの高

さから落ちるのだが、これは三メートル、三〇〇キロもある刃だった。一度に六人の女が首をさしのべる、とみるまに完全に斬りはなされて、六つの首がゴロゴロと先を争う様になった。すばらしいながめだった。一〇〇人位あったというまに片附いてしまう。

エレオノラがこのあと引きだされ、この巨大な刃をながめた。彼女一人のためとしては

意外に大きいのに疑問をいだいたが、しずかに台の上にのぼり首をさしのべた。だが刑吏は髪の毛をつかむと、上半身をずるずるひきづりあげ、丁度臍部の中央にあるくぼみが刃の真下になるようにした。さすがの彼女もこれには驚き、もがきあばれたがすぐにおさえられてしまう。断首ではなく、断胴刑だったのだ。首を斬られるのなら覚悟していたが、あまりにも思いもよらぬ刑だった。たったいま

六人の女の首を一気に刎ねた巨大な刃は、轟音と共に彼女の腹の上に落下し、あざやかに胴切りにしてしまった。上半身が反動でおきあがり、どっとばかり台の下にころりおちる。血汐はいちめんとびちり、さんたんたる光景となった。ギロチンの場合、斬りおとされた首は、刑吏がつかんでさししめすことになっている。この死体は台の両側にわけ、それぞれ、手首と足首でもって斬口を下にさげ晒しものになった。

この大型ギロチンで身体をたて割りにされた女もいたという、しかし失敗だったとみえ晒された死体のうちにはみられなかった。

6

デボラは死期の近づいたことを知り、自分の今迄の生涯をふりかえってみた。優雅そ



ものといわれている彼女は、恥べき行いはい何一つなかった。圧制者に抗したことも当然なすべきことをなただけである。ただ一方の班長として、部下である同志の女性を死なせたことが心のこりであった。ザビーネ、サンドラ、マーサ……次々と彼女たちの顔が目に浮ぶ。そして親友のオードリー。

オードリーは当時妊娠八カ月の身重の身体だった。『どんな赤ちゃんかしら？』と美しい顔を輝やかせていたのに、非情にも絞首刑にされたのだ。しかも刑吏たちはその大きな腹をなでながら、『これならおもりはいらぬ』など云ってからかった。彼女はこうして無念の涙をのみながら死んでいったのである。

デボラの回想は、あまり長くは続かなかった、刑吏が入ってきたのである。

彼女は広場の中央にひきずり出された。せめて絞首刑なら……との願いもかなわなかったのだ。前には猛牛がつながれている。その角にかかって殺されるのだ。合図と共に牛は走りだし、かわしもならぬ彼女の腹にズブリと角をつきさす。ぱっと血汐が散って彼女は前にのめった。鋭い刃で刺されたのと異なり、その苦痛はすさまじかった。はいながら夢中でのがれようとするのに再び牛がとびかか

る。今度はひろがった脚に角がささり、そのままずるずるとおされてゆく。三度目は横の方から角を身体の下に入れてはねあげる。血まみれの身体が牛の背をとびこえて、どっとばかり大地にたたきつけられる……。

もう動かなくなったのをみて刑吏が近づいた。確実に死んでいたので例の如く首をかき切り、角にズブリとつきさした。胴体の方は脚を上にして牛の背にしばらくつける。その後もあばれまわる牛の角の先に、美しい首はころがりもせず、髪をふりみだしたままつきささっていた。

7

軍人は戦争に於て全力をつくしたあとならば、たとえ捕虜となっても恥ではない。但しその場合脱走を狙う義務が生じ、失敗すれば銃殺されても苦情は云えない。抵抗運動の同志たちもこれとは意味が違うが、脱走を狙う点は同じだった。どうせ死刑にされるのだ。死刑以上の罰はないだろう。

シルビアはある夜、何人かの仲間と共に脱走を計画した。暗ヤミをそっとぬけだす、だが、まわりには無数のおとし穴がはられていた。クラウドイアがその一つにひっかかる。穴の底には例のギロチンの刃が、上を向けて

おかれてあったのだ。彼女はそれをまたぐようにおちたのだからたまらない。スカリと臍のあたりまでたち割られ、一声悲鳴をあげただけで息絶えた。つづいてポーラが同じ様に鋭い槍先で下腹から背まで串ざしにされ死んでゆく。グレーヌも穴におちた、かけつけた刑吏がその中に大きな石を放りこむ、結果は云うまでもない。

シルビアはようやくおとし穴地帯をのりこえた。だが、その先には鉄条網がしかれてある。これにひっかったら、針金が次第に身体に喰いこんで全く動けなくなってしまうのだ。すでに二人ばかり、くもの巣にかかった蝶の様にしがいていいる。あとは首をとられるのをまつばかりである。

彼女は必死で出口をさがしているうちに、壁にあいている小さな穴をみつけた。『ここから出られるかも知れない』こう思って首をつきだしてみたがやはり無理だった。あきらめて首をぬこうとして彼女は驚いた。いつのまにか穴がずっとせばまっているのだ。もうぬくことはできない。どんな仕掛か、これもわなの一つなのだろう。しかも目の前に一枚の板がおかれ、それには次の様に書かれてあった。

「この穴をのぞいたものは、一時間後に首が胴よりはなれることを覚悟せよ。」

間もなく刑吏が近づいてきた。その手にしているものは、斧でも刃でもなくどうやらこのきりの様だった。暗やみのなか恐ろしい悲鳴があがる。

8

ミレーヌはじっと耳をすましていた。一緒に脱走をたくらんだ仲間はどうやら全部殺されたらしい。だが警戒は当然ゆるんだらう。

彼女は幸運だった、無事にのがれることができたのだ、正に奇蹟とも云うべきか。しかし彼女は親友であるシルビアの生首が、獄門に梟けられているのを見なくてはならなかった。よほど苦しい目にあったのか、顔はゆがみ、歯をむきだし、その間から流れた血汐がこびりついている。ミレーヌはそっとその首をもちあげた、ひそかに葬ってやろうと思ったのだ。とたんにサイレンがなりだした。ここにもわながしかけてあったのだ。

彼女は生首をだいたままにげだした。前は砂浜であり、ただでも走りにくい上に首はなかなか重かった。止むを得ず心にわびながら首をすてて逃げる。だがとうとう捕ってしまった。その場で処刑されるのだ。

彼女は生き埋めを宣告された。穴を掘り、

その底に頭を上にし少し斜めになるようにおきはしの方から少しずつ砂でもっておとしていく。細い砂は膝から下腹部をうめてゆく、こきざみにふるえる美女の姿。やがて胸へ及ぶ。かたいふたつの乳房がかくれてゆく、最後にのこった乳首をも。遂に首だけがのこった。下唇がかくれ口をあけたらそのまま砂がさらさらと入りそう、悲鳴もあげられぬ。上唇もかくれいよいよ鼻に近づく、顔をけんめいに上向けにしわずかに耐えている。ああ……鼻孔へ砂が……、はげしくむせぶ。もうだめか、苦悶する姿、鼻はかくれ、ちょっとだけ砂をふきあげたが……目だけが大きくみひらいている。いま苦悶の最中なのだ。とうとう見えるのはブロードの頭髮だけ、鼻のあたりの砂がすこし動いている。断末魔のものがきなのだ。こうしてすべてがかくれ、穴は完全にみたされミレーヌの姿は地上から消えた。腹部をねらって鋭い槍でグサリと刺す、ぶるぶると柄にひびきがったわってきたので、まだ生きていたのがわかった。この柄に彼女の名を書いた札をはりつけ、墓標のかわりにされた。

9

アンは釜ゆでの刑を宣告され、気絶せんばかりに驚いた。刑場にはすでに大釜に湯がたぎっている。その中にジョーンという女が投げこまれた。「チュウ」という音がしてもう死んでいる。即死だからまだ良い方だろう。死体は尚もぐらぐら煮たあげく粉をまぶし油であげてテンプラにされてしまった。

アンは別な釜である。中には氷がぎっしりつまっていた。ふるえあがる美女、身体のシンまで凍えてしまふ、下から火がたかれるので少しずつとけてはゆくが、その時間はかなり長かった。ようやく氷はとけ、今度は少しずつ温度があがってゆく、だんだんしのぎやすくなり、身体もあたたまってきた。彼女はほっとしたが、次第にあつくなくなってくるのだ。勿論もがいたところで出られない。肌は直接釜にはふれぬようになっていたが、これは身体を傷つけぬ方が晒しものにする時見事だからである。

今やアンは湯の中でもがき苦しんでいる。もうもうと湯気があがり、その中から悲鳴が聞える。水を求めているが与えられる筈がない。そして更にあつくなくなっていくのだ。五十五度、五十五度。やがて彼女の身体はがっくり

と湯の中に沈んだ。息絶えたのをたしかめると、薪の量はずっとまし、一気に沸とうさせる。ぐらぐら煮えたぎるなかな浮きつ沈みつ、ゴトゴトと動いている。ロープを首にひっかけて吊りだし、テーブルの大皿の上にどきりと投げだした。全身からものすごい湯気があがっている。皮ふの色はもう白ちゃけていた。唇の下についているホクロが特に哀れみをさそった。死体はこのまま食事の時までおかれ、まわりに果物をあしらってデザートとされた。

10

ミッチイが刑場にひきだされた。その一隅に血まみれの肉塊のようになって横たわっているのは、どうやらイベットらしかった。今処刑をうけているのはドロレスである。長いブルンドの髪が右肩からたれて乳房をおおっている。次々と石がたたきつけられる。四方から無数にそそぎ悲鳴をあげる間もなく動かなくなってしまった。即ち石打ちの刑である。刑吏がその傍に近づくとまだ息のある女の首をズバズバかききった。ミッチイはほっと息をついだ。苦痛はこれで終わったのだ。死体はそのままにし、首はイベットのそれと並び例の如く獄門に梃けられる。

ミッチイは柱に縛られた。これではたおれることもできず、首をとられる時はずっとおそくなるらしい。しかも石は全部正面からのみうけるのだ。前の二人よりも重刑らしい。いよいよ石が投げられる。ギザギザの岩のかたまりが脚に命中、「うっ」とうめき声もれる。次に臍のあたり、その度にこらえようととしても、こらえきれぬ苦痛の聲があがる。皮膚が破れ肉が裂け、血汐がふきだして美しい身体をいろどる。よけることもかわすこともできない。乳首にもひとつ命中した。額にもうたれくらくらす。このまま意識を失ったら幸いなのに、血汐が頬をつたわって流れおちるのがわかる。「ぐつつ」「わあつ」「ギャッ」と悲鳴は次第に高くなっていた。下半身ばかり狙っているらしく、もう三〇個も投ぜられたのに上半身にあたったのは二つだけである。

「前の二人だったら、とっくに首を刎ねられたころなのに」ミッチイがこう考えた時、刑吏が何か合図をした。すると石は上半身をおそいだした。主にふたつの乳房をねらっている。彼女の意識は次第にうすれていった。やがて身体をしばっていたつなが切れ、前にくずれおちる。尚もふりそそぐ石塊、二時間前

の美女は血まみれの肉塊と化し、もう顔もわからなかった。

11

キムはアメリカ人だった。戦争のため帰国できなくなり、この国にとどまっているうち抵抗運動に身を投じる様になったのだ。その代償として生命を失うことになったが、決して恥べきことではないと信じていた。

刑吏が宣告する。「お前はアメリカ人だから、特別アメリカと同じ死刑にしてやる。電気イス処刑だ。有難く思え」

彼女はさすがに弱々しく泣きながら、その電気イスについた。普通は頭部と大腿部に二つの極を通すのだが、彼女の場合一つの電極はむりむりに口をあけて喉のおくにさしこんだ。合図と共に、美しい身体を電流がつらぬく。強圧で意識を失なわせてから心臓、呼吸をとめるのでなく、最初から低い圧でゆっくり焼いてゆくのだ。意識は勿論まだまだはつきりしている。ブルンドの頭髮が逆立ってパチパチと火花を散らす、圧は徐々にあがり一五〇〇ボルトに達した。最初からこれ位通せば殆ど即死できるのに。二つの極をさしこんだところからもやもやと煙が立ちのぼっている。四肢をふるわせもがいているが、かたく



いましめられているのでどうにもならない。
身体全体が次第に黒ずんでくる。ようやくが
つくりと首をおとした。彼女の息の根をとめ

るのに、実に三〇〇〇ボルトの圧を要したの
だ。

次に首を斬りおとす、乳房は火傷する位の

あつさだったが、首は髪の毛をつかめばもつ
ことができた。そのブロードの髪は乾きき
り、こすると火花がまだとび散った。口内の
温度は六十八度と発表された。この美し
い生首ならぬ燃首はアルコールの大ビン
に漬け標本とされた。

12

デビーは壁に手足を大の字にのぼして
とめられた。刑吏が槍を一本と短刀を二
十本ばかりかかえて入ってきた。あの鋸
で刺し殺されるのか……それにしても短
刀をあんなにもってきて、どうしようと
云うのだろう。殺されるのは自分一人な
のに……

刑吏が短刀を一本手にとると、さっと
放った。デビーの右の首すじすれすれに
プスリと壁につきささり、彼女はヒヤリ
とした。これがもう少し左にそれれば喉
をつき破られて即死したろう。つづいて
隊長のさしめす通り、身体のまわりに
プスリ、プスリとつき刺ってゆく。剣な
げの的になっているのだ。右腕の上下、
わきの下、胸の乳房の高さ、右の脇腹の
あたり、腰、ひろげた右脚の内側と外
側。更に順序を逆にして対称の位置に左

側にもあたってゆく。左の乳房のすぐわきに……いっそ心臓に刺さってくればよいのに……どうせ殺されるのだから……そして左の首すじへ……こきざみにふるえる身体のスレスレに立つ。

あと短刀は二本のこうている。これで殺すのだろうか、隊長は頭上を指さす。短刀は栗色の髪をかすめてブスリ……、今度は股のつけねをさしめす。少しでもがいたら当ってしまふ。そして正にすれすれに……彼女の身体がビクンとふるえた。あとにのこったのは槍が一本だけ。デビーの身体は完全に短刀でかこまれ、もう狙うところがない。

隊長は実に無造作にデビーの臍をさしめす。「ここだよ」と。一瞬呆然とし、つづいて悲鳴をあげる。もう命中するのは間違いない。刑事は早くも槍をとってかまえている。

「ヒヤア」とあがる悲鳴……さっと血しぶきがとぶ。あわれ彼女は臍を槍でもってきれいにさしとめられていた。丁度虫をピンでとめた蝶のように。しばらく四肢をふるわせてもがいたのち息絶えたのである。

13

わたしの生命もあと僅かとなった。次々と死んでいった仲間たち、わたしもすぐあとを

追っていきけるのだ。「クロー」、早くいらっしやい」と呼ぶ声が聞えるよう。

わたしの刑は両脚の間に槍をはめこんで縛り、そのまま谷底へ投げおとす、槍の柄が谷底にあたると、その反動で槍はわたしの身体を首までズブリと刺し通す、即ち串刺しの刑である。死体はそのまま晒しものにするという、女性にとってこれ以上の恥はない。

……悲鳴をあげながらおちてゆく肉体、槍が一直線につき通しはったりたおれる、首にかけたロープでするすると引きあげる、股の間からつきでた柄から血汐がポタポタと……はっとわれにかえる。前に処刑されたマリイの死体が横たわっている。目を大きくみひらいた死顔、太い槍の柄の穂先は喉からわずかに突き出ている。ああどんなに苦しかったろう、足首をもってずるずると引きづっていく。

いよいよわたしの番だ。槍が脚と脚の間に縛りつけられる。このまま喉までつき通されるのか、悲鳴をあげようとしてはっとした。せめて死ぬ時は立派にしよう、どんなに恥をあたえられても、何一つさがず冷静にしておれば、どんなに苦しくともたった数秒だけがまんすれば、すべてが終ってしまうのだ。

崖の下には多勢の見物人が集っている。皆これからわたしのなぶり殺しを見ようというのだ。ふと気がつくとかメラまで用意してある。わたしが串ざしになる時間を高速度でとろうとでもいうのか、うっかり悲鳴をあげたりできなくなった。

いよいよ刑の執行が宣せられ、わたしは手を後にまわして縛られた。下では見物人がいっせいに立ちあがった。こちらの方をみている。ロープがさっと首にかけられ、或は絞首刑かと万一を期待したが、これは死体となつてからひっぱりあげるためのものだった。

「クロー、ではおとなしくあの世に行きな」
刑事はこういうと、わたしを手でもってぶらさげた。

ああ、あと一瞬で死ななくてはならない。せめて悲鳴などあげずに、立派にいさぎよく死にたい。あとあとまでたたえられる様に。

あと一瞬をすぎれば、さすがにクロチルドはいさぎよかったとたたえられるのだ。わたしはしっかりと歯を喰いしばった。どんなに苦痛がひどくとも決して声をあげまい。まして悲鳴など……恐怖はひどい、だがもうあとわずか、絶対にがんばろう、決して悲鳴など……

ドイツ軍に身も心も売り、その部下とな
って同胞を苦しめた女性のことです)

夢のひと

……悦虐絵灯・その三……

万田不二

戦争が終ったあと数年間、宗市は多くの日本人と同様食糧難に悩んだ。それに軍需品製産から電気器具製産に切換えた勤務先の経営難が財務課長の彼を奔命に疲れさせた。資材購入費の捻出、従業員の給料の手当等、重苦しい金融面の努力で、彼は心身共に疲れた。彼の妻は小学二年の一人娘を連れて、夫の郷里へ米の工面に度々出掛けた。彼も米背負いに行きたかったが、元来あまり丈夫でない体は日曜日を休息しなければ参ってしまいそうなので、己む無く留守番に廻った。

ある年の秋も深い頃、宗市は心細くなった米櫃に急立てられるように帰郷した。妻は風

邪をひき、娘も微熱を訴えて、か細い体をだるそうに動かしている始末だった。戦後初めて彼は故郷の土を踏んだ。古びた生家に着くと、永年の医業の疲労に押拉がれ、木彫りの人のように老い乾びた父と小鬢に白いもの殖えた兄、小柄な所為か齡よりずっと若く見える兄嫁が歓迎してくれた。宗市はつくづく此処が今少し東京に近かったならなァと思わずにはおれなかった。戦争になる前に死んだ母の墓に詣でる彼の頭上を山鳩が羽撃いて過ぎる。国破れて山河在り、彼は感傷的になった。入浴、にがり酒、白米の飽食に夢も見ぬ深い睡りが続いた。

翌朝、重いリュックを背負って、一番の軽便で立った。兄嫁が薩摩芋を一杯入れたボストンバッグを持って、本線に繋がる乗換駅まで送ってくれたが、貨車をその儘客車に使用している殺風景な軽便の中で、宗市は思わず目を見張った程、美しい人を見た。そのひとは箱の中程に立っている頑丈な体軀の五十がらみの男へ半ばより掛かるようにして、車輛の動揺に身を任せていた。車内の暗い灯にそのひとの稍肥り肉の体を包んだ暖色のコートが微かに、しかし贅沢な光を放った。宗市が美しい女の人のそこに必ず注目するうなじのあたりには永く水商売で磨かれたらしい艶冶

な潤おいが感じられた。勤人の他は所謂買出部隊で一杯の早朝の列車の中で、この女は形も、何か頹唐たる姿勢も全く異色であった。女はチラチラと宗市の方を——彼の勤違いでなければ——眺めていたが、間もなく白壁の家の多い富裕な村の駅で、頑丈な男に従って下車してしまった。

「さっき下りた身形の良い女、宗市さん知ってるでしょ」

軽便が発車してスピードが加わった時、兄嫁が彼に顔を近寄せて言った。

「いや、知りません」

「そう、覚えてないのネ、ずっと昔のことだから……」

「ハテ、誰だろう、まるで見当がつかん」

「本当？忘れちゃったのネ、でも名前を聞けば知ってるわ、あれはネ、五平さんよこの秀子さんよ」

「えっ、あれが秀子さんですって？」

「一寸びっくりしたでしょ、すっかり落ちてちやってるけど、あの秀子さんよ。連れの男は村会議員の田島氏」

兄嫁は尚声を落して

「彼も昔は小作人だったけど、近頃の羽振り……ね、世の中が大きく変わったのネ」

詠歎調で囁いた。何も知らない兄嫁は唯うっすら笑っていたが、宗市の記憶の壁の奥に忽ち何処からか照明が当てられ、遠い日の光景、それも恥かしい光景がまざまざと蘇り、彼の胸をじいんと熱苦しくしたのであった。

☆ ★

帰宅を急いで足早に歩いているうちに果して雨が落ちて来た。五分刈の頭に大きな雨粒が冷たい。宗市は尻を端折って、弾かれたように走り出した。村道を外れ、近回りして五平さんの家の竹林を駈抜ける時分には、もうざんざん降りだった。彼は五平さんの家の裏手の軒下へ駆け込んだ。

「うあッ、ひどい、ずぶ濡れだア」

と、何時もの彼なら、こんな風に仰山に言っただけで戸を叩いたことだろう。が、何故かこの晩、彼は茅葺の広い軒下に入ると、兵児帯に提げている手拭を取って、ゆっくり顔や手足の雨滴や泥を拭いた。無人の家は夜は一層静かに黒々と大きく雨空の下に蟠っている気配であった。それでも彼は母屋から弱々しく一條の灯が薄赤く洩れ出ているのを認めて、その方へピチャピチャ濡土を踏んで行った。灯のある部屋の障子が僅かに開いている。

——小父さん。

声を掛けようとして、彼は躊躇った。五平さんを吃驚させてやろう、という悪戯心が兆していたのに、暗い夜の而も沛然たる雨に冷え淀んだ辺りの空気が浮き気味の心を押えたのだ。しかし、彼は今夜五平さんより奥さんの秀子さんに土産話があった。彼は日曜日の今日、市の活動小屋へ行って阪妻を観て来たのである。

障子の隙からそっと内を覗いてみた。広やかな縁側の向こうに座敷がある。赤い電球が灯り、それは、宗市の目に一瞬血塗られた花びらの集まりに似たあくどい色だった。そしてそこに見た光景は、少年の彼には全く息を呑む他ないものであった。

五平さんは殿様のように高い蒲団に寝ていた——質素な己れの家の暮らしと較べて彼はそう思った——五平さんの顔の上に、女の白い足がびったり乗っている。女は秀子さんだった。麻の葉模様の浴衣の背にくろぐろと長い髪の毛を垂らし、黄色い帯を緩やかに纏っている。彼は思い掛けない二人の様子に、その場に金縛りされたように凝然と佇んだ。

女は足を替えた。五平さんの顔の上に、白く膩の浮いて柔らかそうな左足が脹脛を露わに乗った。鼻と口を女の足裏で塞がれた

五平さんは苦しいのだろう、白い寝間着の腹が切なげにヒコヒコ膨れたり凹んだりしている。それは全く妖しい無言劇だった。女は更に足を替えて、今度は右足を五平さんの喉に掛ける。女の体の向きが変わり、赤い灯影に染まった白晳の顔が此方を向いたので宗市は周章で首を竦めたが、女は少しも外へ目を遣らず俯いて男を責めることに没頭した。女の足はそれ自体仮借ない責め意思を持つ生き物のように女の全体重を受けて、男の尖った喉仏を圧潰そうとしている。逆もあの温和な五平さんの声とは思えない異様な動物的な呻き声が宗市の耳を打った。

女の足は男の胸板を責めにかかる。それから近頃目立って出て来たお腹を踏み締める。最後に、下腹部を荒々しく踵で踏み蹴った。女は倦まずに責め通し、五平さんは呻きながらひたすら忍んでいるようだ。

やがて五平さんは起きあがり、蒲団の上に端坐した。自分の前に立ちはだかって、激しい折檻の後の荒い息遣いを鎮め兼ねている秀子さんの形の良い足首を交互におし戴いて、その指に、甲に敬重の意をこめて接吻するではないか。宗市は呆然として立尽くし、身じろぎも出来ない。と、そんな五平さんの肩口

を秀子さんの足が蹴った。邪怪な、まるで犬か猫でも蹴るような仕方だ。五平さんは脆くも仰向けに倒れた。秀子さんの体が浴衣の裾を乱して、ゆらりと傾いた。黄色の帯のしどけなく解けかかった先が青畳の上に蛇のように延びた……。

宗市はさぶ濡れになって家へ戻った。直ぐ風呂場へ行って仕舞湯につかり、勉強もせず終日市で遊んでしまった後めたさもあって、早速蒲団にもぐり込んだものの、到底睡れない。体がつかつかと火照り、その癖体のしんには氷でも当てられているかのように妙に悪寒がして歯の根が合わず、カチカチ歯と歯が当たって鳴った。彼はたった今覗き見た大人の男女の凄まじい、物狂わしい姿に肝も潰れんばかりであった。男と女の夜の戯れについて、彼は未だ漠然とした観念的な知識しか持っていないかった。早熟な少年から薄い和紙に描かれた淡彩の絵や黄ばんだ写真なぞ偶に見せられることはあっても彼はそんな恥かしい行為は、特殊な変質的な人間だけがする悪戯なんだ、自分の父母にしてもまた一般の真面目な人たちは、そんなことはする筈もない、と実に荒唐な信念を頑なに堅持して己まぬ春の遅い少年の一人であった。

——でも五平さんたちのしてたことは、あれとは違う！ もっとも終りまで見てはいられなかったんだが……。赤い電灯の下に繰広げられた光景を宗市は反芻し始めた。

こっぴどく蹴倒された五平さん。むんずと乗りかかり、男の首を容赦なく両手で締める秀子さん。狂ったように男の口の中へ乱暴に手を突込んで舌を引出そうとする。

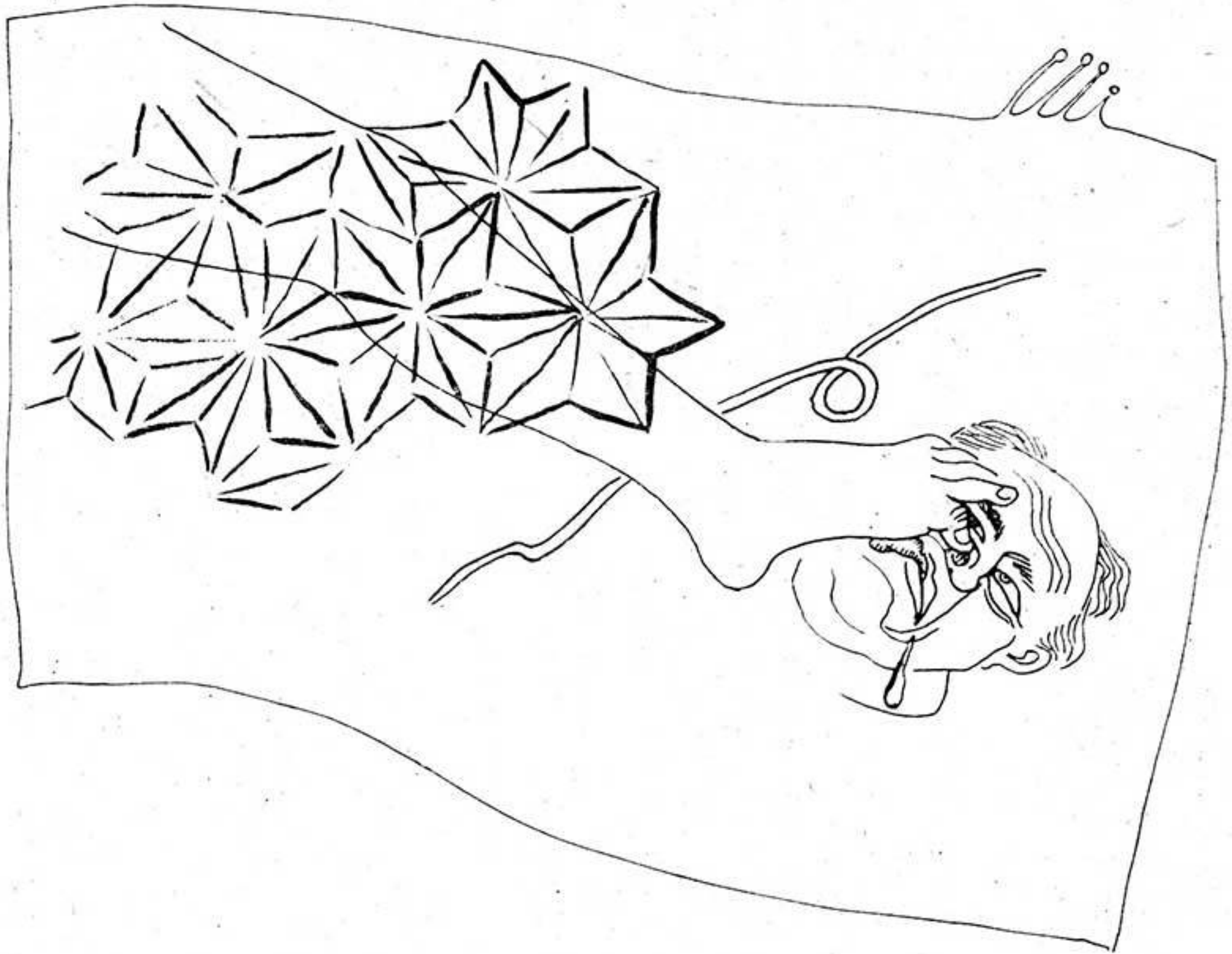
——女閻魔だ！ 彼は座敷へ飛込んで二人を引離したかったが……。秀子さんの肉付き豊かなお尻の真下に五平さんの顔が横向きに歪んでいる。日頃のこやかな微笑の浮かぶ顔が醜く弱っている。華やかな五平さんの手足の弱々しい、そして名状し難い動き。

「どうだ、これで満足したか？ まだ、まだなの？ もっといじめてあげようか？」
「え、なあに。もっとはつきり返事して。もういいなら、いいって言うのよ」

宗市は秀子さんのこの言葉を聞き、それに続いた甲高い笑声に鞭打たれように軒下を走り去ったのであった。

「おかしい人たちだ」

反側して、彼はひとり呟いた。もう雨はやみ、窓際に立つプラタナスが風にざわめいていた。県立の中学校へ通う宗市は、病氣こそ



しないが女の子

のように細ッそりした体を鍛えるべく、放課後一時間柔道場で汗をかいてから下校するのが常であった。時々柔道の稽古の後、テニスなどして遅く校門を出ることもあった。そんな夕べに橙色の灯のもと、時偶五平さんと一緒になった。

五平さんは大抵微醺を帯びており、村で信望高い医師の息子である宗市を己れの座席の傍へ招いて愛想がよ

かった。

五平さんは、村では評判のよからぬ人だった。自分の手では米ひと粒造らない有閑地主で恐ろしく遊び好きな人、多年茶屋遊びに耽溺した揚句の果、重代の財を喪い、誰かが意見したりすれば、なあに未だ山が少々あるさと嘯いているという話であった。娘程に年の違う秀子さんを内に入れるまでは、妻帯もしなかった。その秀子さんは、市の芸者屋の養女だとか、茶屋の女中だったとか色んな噂があり、素姓は不確かながら当時二十過ぎていたかどうか、長身で色白の美しい女であった。

軽便が動き出して暫くすると、屢五平さんは懐から雑誌を取出して読んだ。それは全頁アート紙を使い、余白を見事に生かした奢った体裁の川柳雑誌だった。彼は一種の川柳マニアでもあって、その後、誘われる儘に宗市が彼の家へ遊びに行くと、度々「君も川柳を作ってみないか」熱心に勧誘するのだった。

五平さんの古い、大きな家を半ば取巻く梅の木が満開の頃、一日宗市は五平さんの書齋に坐って川柳の作法を聞いた。主の書棚には彼が東京に遊学した青年時代に買ったものら

しい紀葉や露伴の小説本と、古い柳書が沢山あった。紙魚が食った跡のあるそれ等の柳書は折角見せて貰っても宗市には木版の崩し字が読めなかった。些か索然としている彼に濃い緑の地に紅梅をあしらった綺麗な着物を着た秀子さんが頻りに菓子を勧めた。薄暗い書齋の中に秀子さんの白い顔や手が浮き出すように際やかで、彼はなんとなく氣圧されて目を伏せた。そのうちに秀子さんは、つと立って彼の背後へ寄った。

「あら、これやっぱりおできネ、まア、硬くなってるじゃない」

「もう直ってるんです」

「そう、さっき氣がついたの、おできじやないかと思った。悪い場所だったわ」

「もういいんです」

「蛸の吸出しが利くわよ。今度出来たらあれをつけなさいナ、いい加減熟んだら私が膿を出してあげるわ」

「ハハハハ、おいおい、宗市君の家は医者だよ、秀子を煩わす迄もない」

五平さんが笑って窘めるように言った。

「でもおできなら任してよ。うまく膿を出して根まで出してあげる、フフフあなた嫌がるでしょう、でもぎゅッと押えつけて出してあ

げるわ。フフフフ」

馴れ馴れしく秀子さんは宗市の肩に手を置いて面白そうに笑う。はにかみ屋の彼は若い女、それも何か妖しい美しさと裏腹なさばさばした性格らしい女に漸く打解けた氣持を抱きかけた。が、秀子さんが仲々彼の傍から離れないで、彼のぼんのくぼに出来たおできの直ったしこりに親指を当てて、じっと圧すようにした為、彼はまた勝手が悪く、その辺がじんと熱くなり、果は体中ががごと燃えて来そうな胸苦しさに捕らわれた。

冷たい早春の風に逆らって、田圃路を急ぐ戻りに、宗市は未だぼんのくぼに秀子さんの指の圧力を感じていた。背中に女の膝頭が触れている感じも容易に消えなかった。くどくおできにこだわったのは親切な捌けた氣性からではなく、蛇のようなしつこい氣性の現れではないのだろうか。それに少し失敬じやないか。

「ぎゅッと押えつけて出してあげるわ、フフフ——」

風の中で秀子さんの声がする。彼はふっと学校の柔道場で、よく稽古をつけてくれる上級生に崩上四方で押え込まれた時のどっしりした重圧を思い出した。その重苦しさを秀子

さんの体の重みの想像に移そうとして、彼はそんな醜い連想をしかけた自分が堪らなく恥かしくなった。人氣のない田圃路を彼は逸散に走った。無理に秀子さんを嫌いながら……

五平さんの家の母屋に被さるように紫木蓮の花が咲いて、日差が日増しに濃くなった。土曜日の午後、柔道の稽古をさぼって早く帰宅した宗市が遊びにいくと、五平さんは昼酒を呑んで上機嫌だった。宗市は藩医の家系の内の空氣が窮屈であったから、この家の何処か頹廢的な、投げやりな生活態度が物珍らしく、時には罪惡的な臭いさえ感じたが、反面ここへ来ると何とも言えぬ氣安さにのびのびしてしまうのであった。次第に彼は五平さんにも秀子さんにも狎れていった。

「今日はひとつ、面白い絵を見せてやる」
「あらおよしなさいよ、あれはいけないわ」
お銚子を持って来た秀子さんが眉をひそめた。

「なあに大丈夫、あんなのは見せんよ。教育上よろしくないからナ、ハハハハ」

五平さんは童顔を綻ばせる。太い首が両肩の間にめり込みそうな、樂をしている贅肉の多い初老の肉体は永い間の遊蕩生活でかなり荒廢しているように見えた。

「ポンチ絵の類だよ。御覧よ、一寸面白いんだ」

もう大分酒が回っているらしい。好奇心に駆られた宗市は、とろとした目に些か卑しい色を浮かべて五平さんが差出すB六判の古い本の頁を繰った。それは五平さんの言った通りポンチ絵みたいなものであった。

しかし、一見滑稽な図柄の陰に何かへんな意味が匿されておりそうな、未熟な少年の目を欺く大人の笑いが潜んでいそうな奇妙な絵ばかりであった。例えば――

真赤な甚平を着て、黒い褌を締めた半裸の男、男は達磨に似た体格で、おかしい感じと何処か陰惨な感じが混じり合った、グロテスクな姿が巧みに描かれている。絵は続き絵になっていて、はじめに若い、柳腰の女がひとりで寝ている。そこへその達磨男が侵入して来る。驚く女の傍に達磨男は大股を広げて立つ。女は、寝間着の裾を乱して逃げようとす。部屋の中を追い回す達磨男。到頭捕らわれ、振伏せられた女の眉がへ字形になった困惑の表情、高く空を蹴っている両足に大盤石然とした達磨男の下敷きになって喘ぐ女の勞しさが誇張した筆使いで描き込んである。こんな笑いのヴェールにわれた加虐性性欲

の色合いの明らかな戯画の数々が宗市のうぶな心を途惑わせずにはおかない。鳥羽絵風の簡略な図にも彼の感性は自ずから刺戟的な幻想を醸し出した。

「へんね、不様な男ネ、こんなのに腕づくで……私なら舌嚙んじやう」

傍から覗いて秀子さんが、忌々しうに言う。宗市はもう沢山なような、もっとよく見たいような半端な気持ちで、その本を閉じたが、妙なからず動揺させられた胸のうちをそれでも二人の大人に覚られたくない一心から、こういう絵は初めてではない風を装い、別の一冊に手を出した。五平さんの膝元にあった、唐草模様の洋紙をカバーにかけた薄いその本は和綴じだった。

ぱらッと開くと――瞬間の印象では極彩色という華やかさであった。絵の上にぎっしり刷り込んだ細かな崩した平仮名の群。絵は仰向けの前髪立の美少年、上から少年を見下している美しい、冷たいお姫様の横顔、少年の足はお姫様の華麗な襦袢の裾に隠れている……

「あらッ、それ駄目よ」

秀子さんが大きな声を出した。宗市ははッとし、何気なく断りもせず他の本を手にし

たことを恥じた。

「うふ、ふふふふ、なあに構わんよ。もう知ってるよなア、宗市君」

愈々ご機嫌な五平さんの笑顔。秀子さんはだが顔を赤らめて、宗市の手から奪うように受取った和綴じ本を、五平さんの紫檀の大机の下へ押しやった。そしてひと息にこういった。

「今の絵はネ、お姫様が何でも悪いことをした、いいえ、敵方の隠密と解った小姓を掴まえたところなのよ。女ながらも武芸達者なお姫様なの。ああやって馬乗りに跨って、懐剣を抜いて小姓の首を切ってしまうところよ、ねエ、あなたそうだったわネ」

「うふ、うふ、ふふふふ、さアどうだったかな」

「そうじゃないの。そういう話よ。こんな惨たらしい絵見ない方がいい、あの次の頁にはお姫様が小姓の首を掻切っているところが出てくるわ、強い女、ぞっとするわ」

「ついでに、その場面を見せてあげなさい」「いけないわ、宗市さんに悪い絵本なんか見せちゃいけない、お内の方に済まない」

「ハハハハ、君は存外やかましまだなア。でももう皆知ってるんだよ。此頃はませてるん

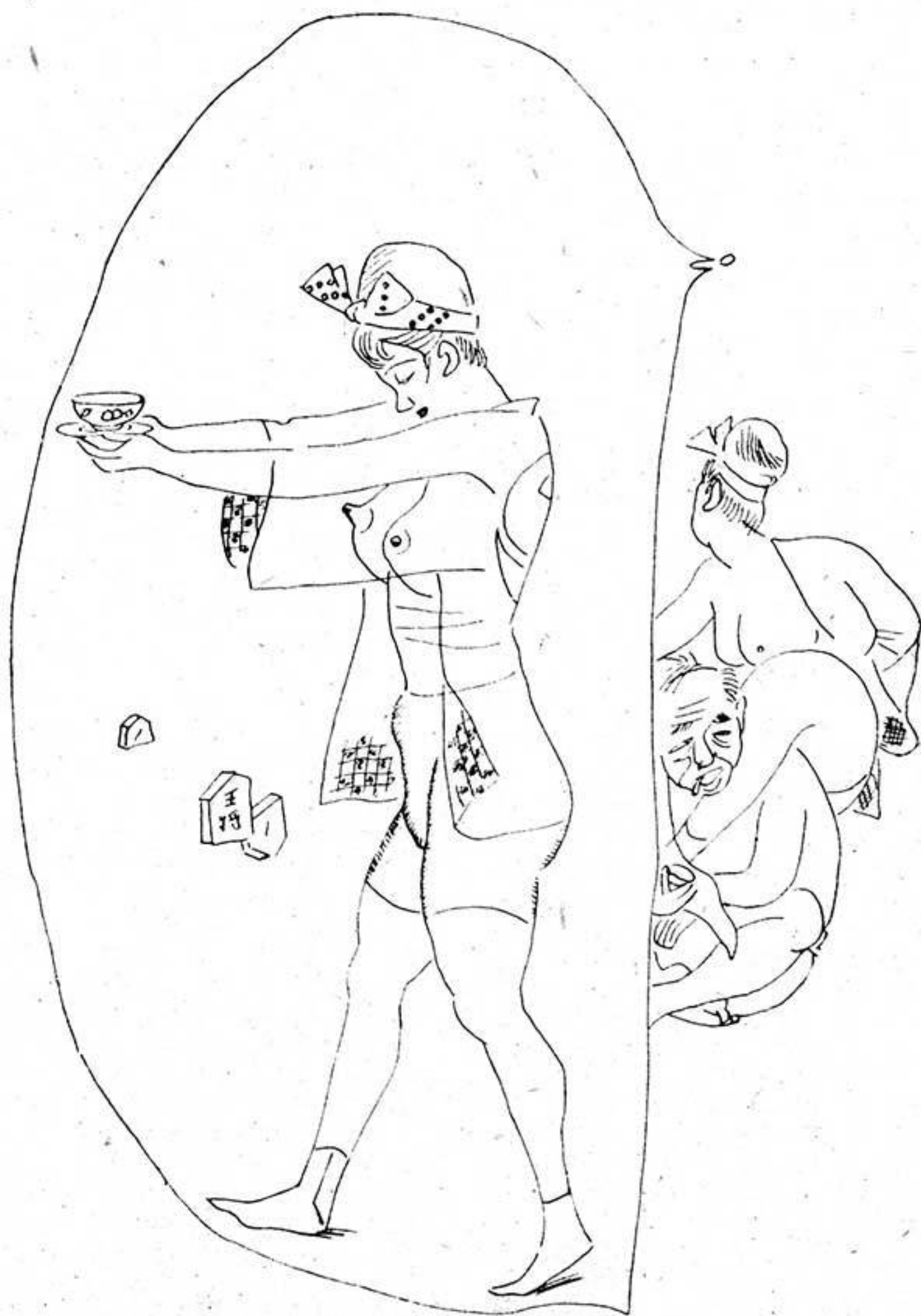
だから、宗市君だってもう中学生だ。子供だましみたいなこと言って、ふふふ」

おかしように笑って五平さんは盃を重ねている。宗市はむきになっている秀子さんの上気した、黒瞳の大きい艶やかな顔をまともに見られなかった。

端午の節句に五平さんの家の家事を手伝っている小作人の婆が、秀子さんの作った柏餅を届けに来た。お喋りの婆が母を相手に長々と油を売っている濁った声が勉強部屋にいる宗市の耳にも聞えた。

……旦那にはアお上さんぶツあって何時まんでも下りねエ、若けえからなア、おもしれえようだわ……しめえに旦那は畳へべったおれてフウフウ言ってなさるだ……それが奥さまア、障子せえ締めねエ、ろくすっぽ締めねえんで……ひとに見られたらどうするだ、犬ころじやアあんめいしなア、ほんに……現に佐兵衛どんのおっかあが無尽のけえりに……ハハハ、ほんにそうだがすよウ……

話声が切れ切れになるのは母が目顔で制している為らしい。婆は兎角淫らな事柄をあけすけに言う人であった。宗市には母の困って



いる顔が目に見えるようだった。部屋の中は真昼の光に明るかった。背が高く、みっしり肉の締まった感じの秀子さんを戯れに背負うて座敷中を歩き廻った末、女の重みに押潰されて墓みたいに平べったく延びてしまう五平さ

ん。二人の姿を想像して宗市は微笑みを浮かべかけた。その少女のように赤い唇の辺にひろがろうとした微笑は忽ち消えた。犬ころじやアあんめいし……婆の声が彼の胸を騒がせたのだ。父母は彼が道楽者の五平さんの家へ

出入することを明らかに厭わしがっていた。

彼にしても馴染むにつれてその家の自由と言ふより自堕落な、而も年齢の隔たった男女が自然に周りに漂わせるりが猥りがわしい雰囲気気が気にならない程まではいなかった。それにもかかわらず彼は勉強の余暇に川柳めいた短詩をこしらえては五平さんの家の門を潜るのだった。一度東京の医大に学んでいる兄へ出す手紙の端に川柳入門のことを書いてたら「やめろ、川柳は低級なものだ、下品だ。母さんに短歌でも教わるがいい」と、手紙で叱られた。婆の主人夫婦の噂話は、宗市にあの唐草模様のカバーをかけた和綴じ本の内容をより幻想的に思いめぐらせる因となった。

蚕豆の出荷時が来て、トラックが何台も村に出入りして村道を埃っぽくした。宗市は学校の附近の古本屋で「川柳の作り方」という本を買い、軽便の中でも読み耽っていた。時々「心の花」に歌を出している母は突発的な彼の川柳熱に些か驚いているようであったが「子供には無理よ、ホホホ、もうじき子供じやなくなるでしょうけどネ。もう少し世の中のことが解るようにならないと……」

と言った。愛読する入門書の口絵で、彼は初代柄井川柳の姿を知った。袴をつけ、脇差

を手挟み、本と筆硯を乗せた小机の前に端坐している品の良い老人で、彼は江戸浅草新堀端竜宝寺門前の名主だったそう。学識、識見共に優れた名選者ということである。宗市は、五平さんに柳多留を教えて貰おうと思った。

川柳なぞに熱中したが為に成績が落ちたと言われたくないので、宗市は毎晩遅くまで復習予習に励んだ。頭の奥に蟠まっている男女の戯れの妄想を軽んじ、吹払う為にも放課後の柔道にひと汗もふた汗もかいた。

静かな田園の夜、机に向かっていると、快い睡気が襲って来る。そんなある晩、彼は不思議な、逆も人には語れぬ汚れた夢を見た。

……風通しのよさそうな涼やかな座敷の中央に朱塗りの小机を据えて、ひとりの老人がゆるぎなくきちんと坐っている。老人は机上に重ねた半紙の一枚々々に筆で何やら印をつける仕事に勤しんでいるのは、どうやら句稿の選をやっていらっしゃるらしい。この老人に宗市は見覚えがあった。老人は最近宗市が何となく尊敬の念を抱きだした柄井川柳に違いなかった。敬意と多大の興味を以て宗市は川柳の手許を見詰めた。すると何としたことか川柳は忍術使いでもあるかのように姿を変えて、

机の前にいるのは五平さんその人になってしまった。宗市はどういう訳か非常に重たくなった臉を押し開くよう努力をして、思い設けぬ五平さんの顔を見守るばかり。さらっと襖が開く。と粹な祭半纏にびっちりした紺股引をはいた若い女が大事そうに茶托を捧げ持って現れた。恭々しいと言うよりは何処か巫山戯た、勿体ぶった仕種で、将棋の駒を散らした茶碗のお茶を勧める。五平さんが悠揚たる態度で茶碗に手を伸ばした途端、女は軽業的な身の軽さで、ひらりと五平さんの肩へ躍りあがったものだから宗市は尚更吃驚させられた。肩車である。女は五平さんの押せばしゅんと凹みそうな肉のだぶついているお腹の前に足首を交叉して、体を故意にゆらゆら動かしながら宗市を見てにっこり笑う。あッ、秀子さん！ 宗市はまたも驚いて叫んだ。（そいうよ私よ、この人は本当は悪い人なの、私を騙したの、これから私がみっちりお仕置するんだ。もし小父さんの方に味方なんかしたら承知しないわよ）目を怒らせて真紅の唇からこわい言葉を吐き出す秀子さんの剣幕に宗市はたじろぐほかない。既に太ってはいても体力のなさそうな五平さんは首ッ玉に跨がった秀子さんの体の重圧の下に切なげに上半身を

傾けている。(さアこの儘で句を選び続けるのよ、終るまで下りないわよ) 秀子さんは益々体をゆすって、五平さんを俯かせる。(うう、ううむ、重い、重い、首の骨が折れてしまうじゃないか。何でも君のいうことをきく一寸下りてくれないか) (駄目々々、うまいこと言っ。もう騙されない、こうして押潰してあげる、女のお尻に敷かれて大往生といきなさいナ、本望でしょうに) 五平さんの苦しい息がくの字に曲がった体の奥から暑熱に喘ぐ犬の息のようににはアはア聞えて来た時、それが余り切なそうでしたたまらなくなった宗市の肩と首に不意に秀子さんのしっとり重たい体が乗移って来た。宗市は事の意外な発展に狼狽して、身を揉んで遮二無二秀子さんを振落そうと座敷中を駈回った。それにしても一体どういう幻術の虜になったのか。匂うような紺股引に包まれた女の太腿が左右からきしきし彼の首を締めつける。飽くなき執拗な責苦から拔出せるものなら、地の果までも走り続ける勢いで彼は庭へ飛下りた。ひよる長い草がもつれ合って茂っているその庭は野原のように広い。走っても走っても庭の外へ出られず、肩車の秀子さんを地上に振落すことも出来ない。彼の首を締めている双の太

腿の力は毫も緩まない。その上むっとする女の体臭が毒性の臭のように彼の体力を萎えさせる。重たく、熱い腿責地獄の底で僕は息の根を止められようとしているんだ。(ちがう、ちがう僕だよ、五平さんじゃないよ) 意気地なく、彼は悲鳴をあげて後へどっと倒れた。秀子さんも当然倒れたが彼の首を挟んだ太腿は外れず、ひと際手強く締まって来るのだ。もっと力をこめようと力むあまり女の歯がきりりツと冴えた音を立てる……。

ひどくうなされて目覚めた宗市は、机に面を伏せて束の間まどろんだ自分を白々しく照らしている電灯を仰いで目をしばたいた。村の若者が祭笛を習っているらしい、少し調子外れな音色が風に乘って聞える森閑とした夜更け、宗市は初めて深い虚脱感を味わった。

それきり五平さんを訪わずにいたが、親戚へ使いに行かされた戻りに隣村と境をなしている川のほとりで、ぱったり五平さんに出逢った。

「やあ、暫く。近頃ちっとも遊びに来なくなつたネ、勉強が忙がしいの?」

月の明るい晩で、提灯をさげた五平さんは

甚だ年寄りじみて見えた。口籠る宗市に「暇になったらまたいらっしやい、秀子もさびしがってる。川柳なんか作れなんて言わなから、ハハハハ」

——五平さんは何も知らない。氣恥ずかしくそらせた宗市の目に、夜振火が川上の方でチカチカ揺れ動いていた。

その翌日、五平さんは急死した。病名は脳溢血であった。しかし検屍がうるさかったという話を宗市は父から聞いた。ピューリタンの父は暗い顔をしていた。

五平さんの一周忌が巡って来ぬうちに人々の色々なひどい陰口を後に秀子さんは村を出ていった。

★ ☆

朝の寒気をつんざく汽笛を耳に宗市は目をつむった。軽便は無感動にゴトゴト走っている。彼は兄嫁に教えられても成上がりの村会議員が連れていた女が昔の秀子さんと同じ人であるとはどうしても思えなかった。秀子さんは飽くまで彼の少年時代の一時期を妖しく彩どった女、過ぎ去った歳月の流れの間に衰えた彼の夢想癖を未だに掻立て得る女、言わば夢のひとであったのだから……。

(おわり)

きもの きもの物語

牧高志



牧 どうでしょうか、このきものきもの放
談会も回を重ねて三回ともなれば、一つ色気
たっぷりで兎角物議をかもし易い「腰巻篇」

へいっそのこと突入しましょうか。どうぞ今
晩は何なりと気の向く儘に仰言って下さい。
……と申しても矢張り話のきっかけはまず衣

料専門の吉原屋さんと云うことになり
ましょうか。

吉原屋 どうもつまらぬ物売って
いる手前上檜玉にあがって恐縮なンで
すが、今から三十年前には手前共の店
でも只今お話のあった女の腰巻を売っ
ていたもンです。丁度終戦後は洋品店
に堂々とパンティをぶらさげて居りま
すように四月頃から八月頃までは専ら
単衣ですな、九月から来年の春までは
あわせの腰巻で、まア本当の寒の入り
と云った頃には厚手ネル地の腰巻を色
取りどりにぶら下げたものでした。

終戦直後、商用で関西に行った折、
明石の街でしたか、ちゃんと紐付の腰
巻を店頭で売っておるのを見かけたこ
とがありました、もう今は無いでし
よう。

で、どうかすると、こんなお腰類を
序でに行李の中に入れて芸者町に行く
と帯や反物と一緒に結構芸妓衆に喜ば
れてその場で買って戴いたもンですが
事実あの頃は何かあっても足りなかつたンで
すねえ……その内に「吉原屋さんのお腰、と
っても具合がいいわ……」なんてことになりご

最貢がこうじてあれこれ注文が出る始末には正直な処一寸閉口したんですが、注文される方が客商売だけに段々と奇抜なものが飛び出して来ました。

一言に云ってつまり柄と生地によって来るんですワ、中でも福の家のさつき姐さん：この名前なンぞどうだってかまいませんが、この姐さんは今で云う一種の腰巻狂でして勿論れっきとした女性なンですけど、よばれたお客に「あたし、今晚どんなお腰してるか、知っていらっしゃる？」なんて、謎をかけて気を引く。まア当今ならさしずめパステルの色を当てるのと同じですネ。

すると、「御覧になりたい？ 見せてあげましょうか？」てな具合に進行する。勿論当今と違ってそう簡単にや見しゃしませんよ。処が一献召上ったお客さまの側では場所柄若干エクサイトしているから「いいから見せろ



ッ」ということになる。「駄目よ、税金無しにずるいわよ、見料払って下さる、目の前でモチ現ナマよ、そう？ わりと感心だねえ、お気前のなかないこと、あたしすっかり惚れちゃった、どうも有難う、領収書無

しで御免なさい：」何処かの映画にあつた温泉芸者の先輩なンですネきつと…。

さて——、「じゃ、その腰巻をじっくりと拝観しようじゃねえか」と来ると、どっこい、これからの難攻不落で大変なンですよ。つまり、ハイこれこれよじゃつまらない。万事女を拷問しなくちゃ駄目：というんですから一寸誰でも面喰らうンだそうですよ。

で、結局、これで着物の上からきつうあたしを後手に縛り上げて頂戴：駄目よ、しっかりひくくってよ、そしてうんとお苛めになつて：お気の済むまで：ね、と来る。こいらがこの妓の持つて生れた特技でさア、いや別段悪気



から先は全くの自由でどんな責め折檻をやってもよい訳なんだけど、この場合御本人の方つまり責められる芸妓さんの方が大いにエクサイトしてないとお腰の御開帳がスムーズにいかない。まア大抵はそのさつき姐さんを床柱に縛りつけるのが精一杯なのだが中にはわざわざ踊り場まで連れて行って適当に踊らせる武士(さむらい)も居るそうで……。「おいストップ、その儘で長襦袢をもう少し払ろげてみて呉れ」「こうなの?」「左足をもっと上げるんだ遠慮するなよ」「嫌やねえ——」と云いながら税金引換代償物資としての、お腰しを徐々に開帳に及ぶんですが、それが何んと仲々の豪華なもので……しかもめて3枚、すなわち総縮緬物と柔らかいメリンス物で、先ず外側の一枚は朱地の中に地獄変の女の苦悶篇といった処、それが鹿の子模様に浮きぼりになっている、遠くで見たらただの真赤なお腰ですが実は大したモンですな、これは……。次の中の一枚はこうした責めから解放された女のポーズが浮世絵風に織ってある縮緬のお腰でこれまた相当な逸品物、で一番奥のつまり直接肌に巻いているのがメリンス地で真赤なのなんだが、これがまた一風変っている、云うなれば腰巻には普通上に白い腰布を

つけますね、それがご丁寧にも模様物になっている。しかもこの最後の腰巻は着物のまま少々脚をあげたって腰布なぞ帯の下にかくれて見えやアしませんよ、見えたら大変で、まず公開禁止……第一こればかりは、さつき姐さんをすっ裸にしなくちゃ見られませんからネ、まア色取りどりの糸で奇麗に刺繍してあるんですがご当人の彼女に云わせると守り神見たいな一種の魔除けのつもりでいるンでしょうね。内容は法悦? に浸りながら三人の美女が手足を縛られて、何されようとした一幅の絵で図案風にさらりと逃がっている処がミソです、決して嫌味のあるものじゃなさそうです……斯う申したからと云って、別段あたしがわざわざ税金を払って詳細に拝観した訳でも何んでもありませんが、これに類似した彼女のお腰の逸品物は幸か不幸か見たことがあります。さア、何処で一体注文するンでしょうかね、余程の凝り症でなくちゃこうまでは徹底出来ませんよ。私はこう云った芸当を實際の処こんな風に考えているんです。つまり彼女がマゾ的な要素を多分に内蔵している、処が相手客の方は彼女の腰巻が拝観の本体ではなく別の物をちゃんと狙っている……のを初めからちゃんと計算に入れて、「お腰の姐さ

ん」と云う愛称に甘んじ金をせっせと貯めているンだと見るのがどうやら当たっているようで、その証拠に彼女は男の私達と違ってそんなに赤いお腰しなんぞに拘泥してはいませんよ。現に彼女から何某の金で払下げて貰ったンだという朱地に波千鳥模様の一見豪華な腰巻を仲間の一人から見せて貰ったことがあります。ただ彼女のお腰を見た時はあたしの身体を縛って呉れと云う処が大いに違ふと云えば違ふ点で、この心理は説明しなくとも判るような気がするンです。

万事斯う云う調子ですから手足も凍る真冬でも頼まれると平気で裸になったりします。勿論完全なヌードではなく何処までも赤いお腰巻を身につけてのセミヌード姿でどのような客の求めにも応じます。何しろその界限公認のお腰姐さんの看板に全く偽りなしで、お銚子の上げ下げから客のもてなしに至るまで一切真紅のお腰一枚姿でサービスするンですからO・Bに取ってはもう変な人気……私なにかも時々知人の客席によばれたことがあります、サービスの余りよくさつき姐さんが猿轡をはめられ後手に荒縄で縛られて柱にくくりつけられているのをこの眼で見たことがあります。夏なんぞはさんざん蚊に喰われて

腕と云わず、脚と云わず血が流れていました。残酷と云えば残酷でしょうが昨今のうちに猫も杓子も公然と残酷物が流行する世の中ではなお更らのこと、当時ですら残酷の研究は本格的で、一寸やそつとの聞きかじった講義なんぞ足元にも及びつかないすさまじさだったそうです。

このさつき姐さんは、さき程踊り場に曳かれて行って片足あげて無理に踊らされたと申上げましたが本来はすりりとして押し出しがよいから踊りも仲々イロっぱいものでした。で、これはいつの頃でしたか芸妓の温習会で舞台へならんだ折、これから先は皆まで申上げなくとも昨今新聞紙上を賑わせた話題の人のゴシップの切り抜きがありますからよしなに御連想の上御推察下さい。

へ新興大泉（新興キネマ大泉撮影所の意味勿論戦前のお話ですが）の一枚看板山路ふみ子はこの春九州に御挨拶に出かけ到るところで、持ち前の愛嬌を振りまいて好評を博したが、大牟田では気の荒い炭坑地だけに飛んだ事件続出で大いに面喰らったものだ。

常設館に現れるや否や「いよう別嬪、逆立ちを頼むぜ」に先ずどきもを抜かれたが続きで「赤い腰巻で踊ってくれ」に彼女も舞台に

立ち往生、ほうほうの態で楽屋に逃げ込んだ……云々とあります。何んせ戦前のことですから万事オーバーな話で只今のうちに二言三言と喋ったかと思うとミュージックに合せて、すぐ帯を解き始めるとストリップとは正に雲泥の差です。

まあこのさつき姐さんを巡っての珍談芸談はまだまだ色々ありますよ。大体只今でもそうでしょうが例えばバスに乗って坐った時正面から見る洋装の女性の白いシュミーズの中にどうかすると赤やボタン色（マゼンタ）のものがチラツクのと同じように昔でも赤一色の中にも色々濃淡があり、云うなれば千差万別だったと思います。こう云った多彩な腰巻はそもそも日本人が何処から来たものか知りませんが南方のサロンなどというものとはおよそ違いますね。光線のどぎつい南方では赤と云えば赤一色でしかも原色でおっとり澄ましておられる、ところが日本では原色も勿論ありますが、そのほかに中間色が誠に豊富で——こんな話は染物御専門の巴さんの縄張りに入るんでしょうが、ですから大いに色で苦勞する……てなことになったんですよ。処で——、この愛すべきお腰姐さんこと、さつき芸妓はんも惜しいことになりそめの風

邪がもとで肺炎を患い、とうとうあの世の人になりましたが何んせ街の人気スターであっただけにお葬式も大層賑やかに行われました。中でも入棺の折は生前の面影を偲ぶ意味でもないでしょうが、純白の死出の衣裳に下半身に真紅なお腰をまとい漆黒の黒髪を洗い髪風に垂らしての薄化粧、それこそふるいつきたい程の美しさだったそうです。

遺産ですか？ さア、巨万とまでは行かなくとも小銭位は勿論あったでしょうが例の評判の下着類は、物が物だけにそれぞれ故人と縁故のあった人達に手渡されて手元には何も残っていませんでした。生前撮った夥しい縛り写真——左様、好事家には大いに稀少価値がありそうですが門外不出のものもあつてしめて結構墓石代位になったそうです。まあ云うなれば腰巻と縄が離せなかった執念女の一人だったんでしょうねえ、とまあ斯う云うお話のお粗末の段……こいらでいさぎよくバンドをお渡しすることに致しましょう。

牧 いや、どうも、史実をあれこれ取り混ぜてのお腰懐古談と云った処、御苦勞さまでした。衣類全般を通じて造詣の深い吉原屋号さんに代ってこなた染物を背景にこれまたその道のあれにお詳しい巴さん、続いて一席

何か座を賑わせて頂けませんでしょうか、何んでも結構です…。

巴 紅紋縮緬振袖用長襦袢地と云えばさしあたり花嫁さんが着るものですが当今は大分簡略になりましたねえ。いくら和服ブームと

かなんとか騒いでも、今の

方がいきなり素肌に腰巻を

巻きつけてその上に御丁寧

にも裾除をつけようなんて

ことはまずほとんどなさら

ない。パンティの上にシユ

ミーズを着て、上下セパレ

ーツの長襦袢で花嫁さんが

忽ち出来上る世の中なんだ

から、とてもノーパンティ

のお腰一枚じゃ不安で堪ら

ない。

で、これはいつ頃でした

か戦後間もなく出た或る雑

誌に へ細君の下着につい

て…と題して職業別に丹念

にアンケートを求めたもの

がありましたっけ。それに

よるとまず何をはく、かに

対しては腰巻とパンティは

当然なこととして勿論ここで云う腰巻は裾除ではないンですからじかに腰に巻く物を指しています。どんな色かに対して腰巻は赤と桃色、よごれるのは何故か(この質問は少々意味深ですが)に分泌物、メンスならん、垢な

どとあり、次に、幾日で洗濯するかについては早くて二日目長くて一週間目となっていました。貴下(旦那さまのこと)もそれを洗濯するかに、度々という感心な亭主もいるンです。ね、また細君は何枚持っているかに対しては四枚位、寝る時はどうするかはそのま

ま、次に貴下は嗅ぐことがあるかには度々ありが半数以上、となれば、必然的にどんな匂いかにに対しては爽快、香しい、壮絶無比といった回答が半数以上ある始末。最後に盗まれたことがあるかには一度、二度、度々という被害者もあるようで、そして結びとして貴下はい見えてたかに対して某亭主はありと返事をしているンです。

まア斯うしたアンケートは何処までが本当で何処までが嘘偽りか確かめようもありませんが、お腰と云えば問題はやっぱり色合でしようかねえ。つまり何故赤いかと云うことでしようか。

これには昔から色々取沙汰されているようです。例えば月のもので不用意に汚した場合同色だから他人に気がつかれず済む、その証拠に更年期以後の女は緋縮緬などはほとんど用いなくなる



…とか、赤という色は日光から人体を保護すると云われており従って女の緋縮緬はやはり衛生的に効果ありという説、そして第三説として視覚にうったえたもの、すなわち、赤色は極めて煽情的だ、雪をあざむく白脛は仙人でさえも通力を失う、何故ならば赤い腰巻は有骨鉄腸をもとろかすべき神通力を持っているからだとし、女はただそれを利用してののだ。化粧も衣服も女は常に男を誘引するように苦心する以上やはり腰巻の色にも十分にその野心が現われている…と見るべきだ。江戸時代の浮世絵を御覧うしろ、女を描くには必らずこの腰巻を足もとにちらつかせて色彩の美を与えると共に好色美を添えているではないか…云々。どうも行きつ戻りつ腰巻論の基本問題ばかりをいじっているようで申訳ないんですが、しめくくりとしては例の迷信的なものですね。その王たるものは何んと云っても火事の防災法で、昔は…と云ってもつい最近まで浅草附近で私も見ましたが、邸宅だとよく女中さんの赤い腰巻が振られるようです、それもなるべく汚れたものが効果があった、不浄を嫌う火災も立ちどころに鎮火するという、だからお屋敷街で出火があるとその方面のやじ馬が存外多いんだそうです。

そのほか赤いお腰を九十九枚盗めば、思う女と添われる…てなこといわれて時たまこれを実行する馬鹿者がいたり、また風邪をひくと若い女のみならず汚れて血のついたもの程よいという腰巻を首に巻いて寝るとなるとこのような誠にすさまじい迷信さえもあるようです。

処で…、少々話題を転んじて縛りと腰巻と云えば最近私が聞いた伝説的物語？の中で一つ耳寄りなものがあります。某会社の専務さんで口八丁手八丁の仲の切れ者だが、たった一つの玉の傷が、月に一つぺん程頭をもたげて、どうにも云うことをきかなくなる。で、その時はさあッと北陸のさる温泉地に行つて了う。そこで苦心のあげく見付けたのが、年の頃なら二十才と少々という妙齡の美女で、名を時江という、まア態のいい二号さんでしようかねえ。その時江さんに因果を含めて…例えば到来の日から二、三日は絶対に専務さんの云いなりになること、たとえ寝言でも我儘をいっちゃいけない…とか、夫婦じゃないが夫婦以上の緊密さで緊縛を受けることなど適当な温泉憲法に従って専務さんを充分慰めなければならぬ——とかいう寸法で、予め約束してあった宿にお泊りになる。よろしい

ですねえ、このような目的と思惑のあるお泊りは…。

一獻召上る、「ホホウ…すっかり日本娘になったねえ、そうやって、しとやかなきもの姿で控えてる風情な…てものはまた格別、いかす以上だよ」「嫌やだわ…後でバツさり痛い目におあせるになるンでしょう、行きはよいよい帰りは怖い見たい」「だが…、そうはしないさせない処が専務たる所以だよ、サア、今晚はゆっくりお寝み、ただし明日は夜明けから非常呼集があるかも知れない、たとえ覚悟をして置き」てなことその場はおひらきになった…。

さて、その夜明け…ともなると情勢はもろに急変、「こらア、起きんかッ早く着替えるンだ、陽が出ちゃまずいンだ、何んだその恰好は？ 乱れ髪はまだ早い、ほほ紅つけて口紅ぬって…腰紐が無い？ この馬鹿野郎…」という到底人間扱いではない乱暴なセリフが閉め切った離れの別室から聞える——ような気がしたんだそうです。誰が聞いたって？ 番頭の話なんですから満更嘘でもないでしょう。

で、彼女を牛や馬かのように髪をつかんで曳き出す。夜明けの風はひどく冷めたい。お

まけに台風の前ぶれなのだろう、かなりの空風が吹きまくっている。単法橋のたもとまで来ると昔風の格子造りで今はあばらやに放棄されている多分女部屋なんだろうか一軒ぼつんと建っている。

その中に時江を入れる。幸い外はまだ顔も判っきり見えない薄暗さ、今日こそ思い切つてやるぞ……とばかり用意の荒縄で時江の両腕を後ろに廻わし手首を重ねて二重三重に縛り余まつた縄を前に廻わして乳房の上と下をぎゅうツと締めあげた。縄が湿めっているらしくきゅきゅツと鳴った。

「どうだッ痛いかい？ そうだろう、女は不死身だから啞、さア、これから朝の散歩としゃれて河岸を曳き廻わしてやる。誰かがきつと見るぞ、ホテルの窓から寝ぼけ眼で眺めたとたん腰を抜かす奴も出てくるだろう、狂人だわ……てなこと云って——〇番にかける女中もいるに違いない。それッ……足袋はだしで歩いたり歩いたり……こらッ歩かんかッ、革鞭が飛ぶぞ……」

とまア多分このように云ったと思うんです。その証拠に、あッ薄暗の中から二人の姿が橋の上に浮かび上がりました。時江の縄尻を持った専務氏は怪しげな足取りで一ったん河

床に降り、増水した波しぶきで没せんばかりの岸の細い道を辿り始めました。

対岸は何層楼からの旅館ホテルの林立なんです、どうしたって異様な風俗は大っぴらに見える筈です、にも拘らず時には岩山を越え脛を濡らし、そして風速何米かの烈風にさらされて曳かれて行く妙齡の美女ノ御覧なさい、北陸生れの色白の時江さんの脚にからまる紅鹿の子模様の長襦袢の裾が一陣の向い風にあふられて、夜明けと共に漸く緑を益し始めた樹々に鮮かに翻る返えりはためく真紅のお腰……風が止む、また強く吹きあげる、恥づかしいから思わず後向きになる。この馬鹿野郎ッとばかり専務の鞭が飛ぶ……滝がしぶきをあげて流れ落ちていく径はあるようで無い白足袋はびっしり濡れて滑り石伝いに渡れそうもない。

仕方がない抱いてやろうか、恥づかしいから止めて、じゃおぶってやる……丸木橋に来た、怖いわ、どうしましよう、どうしましようって渡るより手はないよ、落ちたら君ともお別れだ。

「嫌やだわ、そんな薄情なこと仰言つて……」
「なら、渡れよ、もう二軒も歩いたんだろ
う健脚じゃないか、あつままたひどく風が吹い

てやがる、今朝は馬鹿に君の赤いコシマキが翻るじゃないか……」

牧 と云う訳で……成る程、こんな方もいらっしやるんですネ、人造り国造りとは程遠い物語でしょうが、私はこんな一頁も長い人生にはあってよいと思うんです。それで、まだ余話があるんですか？

巴 いや、実はこの情景は全く偶然でしようが対岸の泊り客のAさんという方が八ミリの望遠で映画にかくし撮りされたそうで、いやはやふりあげた鞭がションボリと折れたのは専務さんの方で、爾来その温泉地に訣別、目下時江さんを連れて新天地を開拓中とのことでした。

牧 やっぱりこの道ばかりは色々と苦労しますネ、何処の国に果てようとも……です。結構でした。今晚は、期せずして吉原屋さん、巴さんお二人の独演場になってしまいました。が勿論レギュラーの椿先生、美よし野さんも控えていらっしやいますが、またの機会と致しまして、夜長の風流きもの物語の一席を——先ず終りたいと存じます。

× × ×

—完—

商 敵

(しようてき)

栗 瀬 長

「中央物産からでございます」

秘書の声に私は躊躇なく電話の受話器をと
りあげた。

「明立化学です。毎度御引立に預りまして有
難う存じます」

「いやいや、こちらこそ。兎に角お宅のは定
評があります上に、何時も発註と同時にきち
んと出荷して下さいますがらなあ、本当に大
助かりですよ」

「いや、御期待に添い得ませんで、いつも恐
縮に存じております」

「いやいや、とんでもない。ついては、この
度、東南アジアから照合がありましてね、く

わしい事は、その節お話致しますが、バイヤ
ー——と申しても後進国の事ですから大した
事はないんですが、一応御説明戴きたいと申
しますので、今夜、一寸御足勞願いたいの
ですが」

「それは、どうも。で、どちらに……」

「いえ、こちらから車を差し向けますから」

「いや、それには及びません、当然こちらか
ら出向きますべきお話、で、どちらに？」

「いやいや、夕刻、六時頃お迎えに参ります
から、食事でもしながら、簡単に説明してや
って下さい、アウトラインはすでに、こちら
の営業の者が話してありますから」

「そうですか、それではお言に甘えまして、
では、その節見本カタログ等持参致しまし
ょう」

「社長、直々では申し訳ないですが、最近の
東南アジアはなかなか鼻息が悪くてね、まあ
その節、ではどうぞよろしく」

何か聞き馴れない声とは思ったが、中央物
産ともなれば、数百名からの社員を擁し、我
が社にとっては大切なお得意、その申し出と
あれば、社長である私が、出向かない訳には
ゆかなかった。

さて、約束の六時、迎えの車には、二人の
営業部員らしい若者が、私の前後をさしはさ

むようにして、招じ入れるのを私はつゆ疑わなかった。

「御苦勞様です、では御案内致します」

「や、どうもこちらこそ。で、どちらですか」

「は、あの、静かな所が先方で希望ですの一寸不便ではございますが、当社の専務の別宅の方で、ゆるりとお話をとの事で、世田谷の奥の方でなのでございますが、いえ、なにお話が済みましたら、お送り致しますから」

「それは、それは、何から何まで御配慮戴いて、かえって痛み入ります」

車は忽ち都心を離れ、住宅街に入る。夜の車窓に飛び去る灯では、今果して何処を走っているのか、全く分らない。

つと、左右をはさむ、中央物産の社員の手がのびたと思った瞬間、私の鼻に、何か強烈な匂のするハンカチらしいものが、荒々しく当てられた。

「おい、何をする、無礼な……」

とまで言わせもせず、私は、気が遠くなるのを感じた。そこまでは意識に残っているものの、次の記憶は右腕に感ずる強烈な痛みであつた。

「お、気がついたか、どうだ、気分は」

「あ、何をする」

意識を取り戻すと同時に、私は手足が堅く縛り上げられ、荒々しくかけられた麻縄が、二の腕に、足首に強くくい込んでゐるのに気がついた。つい今まで、深々と自動車のクッションに身をまかせていたのに較べ、ここはどうか、冷いコンクリートの床に転がされた私には、床の冷たさがひしひしと身体に伝わってくる。薄暗い裸電灯一つ、あちこちに積み上げられたダンボール、木箱、一見して倉庫、それもあまり活発には使われていない、地下倉庫かと思われる。

「おい、私をどうしようというのだ。中央物産ともあるうものが、何だ、このさまは」

「ふん、中央物産？ 中央物産がきいてあきれるわあな、マンマとひっかかったな、おい明立化学の社長さんよ」

「あつ、では、お前達は——」

「お前達とは何だね、えっへっへっへ、お前達とは一寸失礼ではござんせんかね。こう見えても、あっしら等は——。おっと、何も仁義を切る必要はござんせん。私等の質問にさえ答えて戴ければ、もう用はござんせん。どうです、社長さん、縄目がお痛ござんしたら、一つ簡単にお答え戴きやしょう」

「何、何を答えるというのだ。こんなふざけた事をして。早く縄をほどき給え」

私は興奮してどなった。私の声が四方の壁にガンガン反響する。

「そうはいきませんや。では一寸物を伺いますが。お宅のメイダーライトの成分の中、あの一つをうかがわして戴きましよう」

「あ、矢張り貴様等は、大東の奴等だな」

「いやあ、とんでもない、あっしらは、天下の素浪人、大東なんて知りやしません、ただ一つだけお聞きすれば役目がすみますんで、ささ、早くおっしゃった方がお為でしょう、え」

これで総てが分った。そもそも我が明立化学のメイダーライトは、電気絶縁材料としてつとに定評があり、対抗馬である大東工業のダイオードを最近でははるかに引き離し、今や業界に於て独壇場の地位を築きつつある。

しかし、化学薬品の特許は甚だ困難であつて、簡単に説明するならば、新しい亀の子を作るのでなければ、即ち新しい化学構造を有する化学薬品でなければ、特許は認められない。メイダーライト、ダイオードの如く、単に既成物質の合成から成るものは、容易に特許が下りないだけに、その製法、配合に秘中

の秘をもたせる訳である。

幸に我がメイダライトは、ダイオードより一步後れて出発したにも拘らず、或る物質により、その真価を問われ、今や、確固たる地盤を築きつつあるのである。而もそれは、赤外分析によつては、単にあれらしいとの判断は下せても、それは各種の無機化合物として存在する以上、そのものずばりは何としても判断し得ず、而もどの程度の溶液であるかは、遂に大東工業の研究陣をもつてしても判断し得なかつたのである。

そこで、大東工業は遂に、社長である私を軟禁する事によつて、秘密を自白させ、自社の製品にそれを採用加味させようと計つたに違いない。

今ここに、私に迫っているのは、或は大東工業の社員ではないかも知れない、雇れた愚連隊であろう。しかし、私に自白を強要するからには、大東の者としてしか受け取る訳にはゆかないのだ。

「大東なら大東と男らしく言い給え」

「ほほう、男らしくとはほざきましたね、どうです、男らしく、我が社の秘密だなんて、けちな事言わないで、一つ伺わせて戴きやしょうか」

「黙り給え、金がほしかったらやる、さ、繩をほどき給え」

「金ですって、へへへえ、おっしゃいましたね、ではどうです、一億、さ、一億、びた一文かけてもそのお話には棄れませんかね」

「ほ、一億！、冗談も休み休み言い給え」

「一億、安いでしょう、メイダライトの売れ行きから言えば、年三割の配当は多すぎやしませんかってんだ、どうです。一思いに製法明かしてしまつた方が、お得というもんですぜ」

「大人しくしていればいい気になりおつて。」

そんな事は金輪際絶対に言えん」

「大人しくいければは、こつちの言い分ですぜ、どうしても言えないなりや、言えるようにしてお目にかけましょう。おい、お前、隣の部屋に御案内しろ」

「はい、兄貴、合点だ」

無造作に私のいましめを擲んだ相棒の男は、ずるずると私を次の部屋にひずり込んだ。

真暗な部屋、微くさい臭がデーンと鼻をつく。恐らく殆ど使われたことのない地下室なのだろう。

「それ、いいものを見せてやろうか、そら」
パツとついた電光の下に見出されたのは、

椅子にかたく縛りつけられ、轡をかまされた裸の女体であった。背をこちらにむけに、その女は、いやいやをするように僅かに体をふるわせたが、緊縛された身は、羞恥に身をよじる事さえも許さなかつた。

「そら、これが誰だかよく見てみるよ」

残忍そうに言う男の声と共に、荒々しく椅子が向をこちらにかえさせられた時、思わず私も私は

「アッ」と叫ばずには居られなかつた。何とそれは我が最愛の娘ではないか。又どうして娘の啓子がここに、こんな浅ましい姿で縛られているのであらう。一瞬、我と我が眼を疑わずには居られなかつた。

「おい、一体これはどうした事だ」

「フッフ、さ、お嬢さん、何とか言つてごらん、一寸、轡を解いてやるぜ、ほら」

「アアッ、お父様、わたし——」

「啓子、どうしたんだ、啓子」

「ア、助けて、お父様、お父様、御怪我じゃなかつたの？ 一体どうしたっていうんでしよう」

「それより、啓子、どうしてここに——」

「痛いわ、痛いわ、こんなに縛つて、恥づかしくて、ね、助けて、私、どうしたらいい

「アッ、啓子」

「うるさいッ」

かけようとする私を縛った縄がもう一人の男の手でぐっと後にひかれ、その反動で、私はのけぞったまま、どうとばかり後にたおれた。

「そう、もう一つ」

バシッ、腰のあたりに炸烈する皮バンド

「ウウッ」

「そら、行くぞ」

バシッ、背に、首に、皮バンドが鳴る。もう、目をあけて居られなくなった私は、両こぶしを握りしめて、目をつぶるのだった。

「どうだ、そらッ」

バシッ、バシッ

「ウウッ、ウウッ」

呻き声に、思わずも眼をあければ、娘の背と言わず、腰と言わず、一面に、縦に横に、太さ二センチ程の赤い線が、縦横に縞模様をなす、その痛ましき、

「もう、やめて呉れ、たのむ、たのむ」

「そうか、ではお答を戴きやしょう」

「ウッ」

と言ったまま、私は黙ってしまった。粒々卒苦、やっと完成した、我がメイダーライト

の秘密を、どうして敵に発表出来ようか。

「おや、まだですか。ではもう少し、お嬢さんに伺いますかな。では、今度は、痛かったでしょうから、なぜであげましようかね」

取り出された羽根、男の手でそれは啓子の感性の強い部分に当てられた。腋の下をくすぐる。

「アウッ、アウッ」

声にならぬ苦しそうな声が轡の下で叫ぶ。

「フフッ、どうです、いい気持でしょうが、

へへッ、今度はここはどうですね」

脇腹、さては愛らしい小さな足の裏、又脇腹へ、足の裏へ、そして腋の下へ、間断なくくすぐり責は続く。

「アウッ、ウウッ、ウーッ」

益々強まる啓子の呻き、何とかのがれようとするようにもがく身も、僅かに椅子に震動を与えるのみ。

「そんなに、ピクピク踊らなくてもいいでしょう、ほほう、そんなに嬉しいの、どら、そんなら、もっと喜ばしてあげようかね、ほらコチョコチョココチョコと」

残酷な男と共に、一きわ強く、くすぐられ

た啓子は、

「ウアーウッ」

と一声強く呻くと共に、ぐったりと首をたれてしまった。

「おや、のびちゃったね、しょうがないな」

「おい、どうしたんだ、止めんか、こら、死んでしまふぞ、おい」

「心配するなよ、社長さん。一寸うっとりしただけさ、水をぶっかければ、すぐ正気になるさ」

何時の間にか用意されたバケツの水が、情容赦もなく、啓子の頭から、ザブリとばかりかけられた。瞬間、ピクッと痙攣するように啓子は気がついたらしい、

「ウウッ」

「どんなもんだい、ちと、寒いがね、でも乗馬すればすぐ暖るさ。そうだ、その前に一寸いい事がある。この氷の入った氷枕を下腹に括りつけてと、さて、どうなりますかな」

「何をするんだ、おい、やめろ、馬鹿なこと——」

「馬鹿かどうか、今度は一寸お引取り願ってお隣の部屋から、お嬢さんの叫び声だけ聞いて戴くことにしましょうか」

囚人の如く引き立てられた私は、後向きに離室に連れ戻された。轡が解かれた様子、

「アアッ、助けて、助けてーっ、苦しい、冷

「たいわ、これ取ってーッ」

「駄目駄目、もう少し我慢すると、面白いことが起りますぜ」

「いや、いや、ア、ア、どうしましょう、ア、どうしましょう、解いて、お願い」

「何がどうしましょうです、え」

「あ、おトイレへ行かせて、お願いお願い」

「トイレ、そんなものありませんよ、ここは地下室ですぜ」

「いや、いや、お腹を冷すんですもの、もう我慢が出来ないわ、お父様ーッ、助けて、助けてーッ」

「啓——」

子、まで言わせず、私を引き立てた男の手が私の口を防ぐ、

「よく聞いてろ、断末魔の娘の叫びを」

「お父様ーッ、助けてーッ、あ、トイレ、トイレへ行かけて、ア、アーッ、アー」

泣き伏す声は、あっ、とうとう我慢しきれず、啓子は遂に失禁したのであろうか。

「アウッ」

おお、又もや轡がかまされたに違いない。

何という残忍な奴等であらう。私は、物を言う力が全身がぬけて、へたへたとそこに坐りこんでしまいそうになった。

「こら、立て、歩け」

再び私は娘の居る部屋に引き立てられるのであった。みれば、床一面に娘のものと思われるものが地図をえがき、それがうつすらと湯気立っているのを見た時、私は哀れさと、憤怒と恥辱の入り交った不思議な感情に、よしたとえ父娘、ここで颯り殺されようと、決して秘密は口外しまいと誓うのであった。

「まだ言えませんか、それじゃ、今度はちときつかもしれませんが、お馬にのつてもらいましょうか」

お馬とは一体何だろう。引き出されたのは私のはじめてみる奇妙な木製品であった。四本の足の上には、鋭い角をもった三角棒が横たえられていた。

「さ、ここに乗ってもらいましょう、お馬、お馬ハイシドウドウってわけさ」

「あ、何をする、そんな」

「いいから親父さんは黙っておいで。お前はメイダーライトの事だけ言えはいんだ」

「そら、足を開いて、乗るんだ、いやだったって駄目さ、そら、そら分らねえな、こうするぞ」

「ウウッ」

「いやだったって、乗ってもらうものは乗っ

てもらうんだから、そら、どうだ、いい気持だろ、え、ウフッ、」

鎧がないだけに、プランと下った足に力が入るわけはなく、もがけばもがく程、鋭い痛みが、全身をつらぬくに相違ない、

「ア、アウッ、フーッ、ウウッ」

みれば啓子の額からは玉のような脂汗がにじんでいる、もう正視するにたえない、あの堅い轡の下からもだえぬく叫び声に、遂に私は、どうすることも出来なくなってしまう。遂に見るに忍びない娘の姿の前に敗れ去った。

「おい、助けてくれ、もう下してやってくれわしは言う、助けてやってくれーッ」

「よし、そうか、それじゃ下してやろう、それ、どうだ」

ぐったりと床の上のうち伏す啓子、遂に來た敗北をじっとかみしめるのであった。今やメイダーライトの秘密は卑劣なる大東工業の暴力の前に潰え去る。明日と言わず、大東の資本力は、我が明立化学の誇るメイダーライトを忽ちにして押しつぶしてしまうだろう。

我が最愛の啓子の汗と脂の代償もむなしく

――。

サジスチック・ストーリー・シリーズ

村の祭礼

大 中 忠

今年も又村祭の時が近付いた。まわりを山又山に囲まれたこの村は、外部との交通は殆ど無かった。村人の中で、この村の外の世界を知っているのは、わずかに二、三人しか居ない。外部の影響を受けず、完全に昔のままの姿を残しているこの村だ。

祭が始まるのは、正式には本祭の一週間前だ。この時から、祭が終る迄、村中の娘は絶対に家から出ていけないし、他人に顔を見せてもいけない。それ処か、日頃から、娘達は、自分の肌を他人に見せてはならないことになっていた。

従って真夏でも娘達は長袖と、足首迄のモンペを着たままだ。もっとも、山に囲まれたこの村は真夏でも大して気温は上らず、空気も乾燥している為、そんな服装でも苦にならなかった。

こんな風習がある為、村の家の風呂は、一番家の奥まった所にあつて、他人は勿論、家の者でも簡単にはのぞけないようになっていた。この風習も結局は、年に一度の村祭の為のものなのだ。

本祭の八日前の深夜、作右衛門の家の戸がホトホト叩かれた。奥の間に寝ていたミツは

出て行った両親者と訪問との緊張した空気に肌を感じ、来るべきものが来たと察すると、覚悟はしていても、血の気が引くのを感じた。

「ミツ」

父親が、さすがに男らしく心の動揺を押えてふすまを開けた。

「ハイ」

ミツはすでに寝巻の胸元を整え、床の上に伏目勝ちに正座していた。

「巫女様のお迎えだ」

ミツは黙ってうなずくと立ち上った。巫女

のお迎えがあった時には、そのままで行かなければならない。

「もうお祭が近付いたのか」

作右衛門は可愛い花模様の寝巻を着たミツが出て行くのを見送りながらつぶやいた。巫女に呼ばれた娘が家を出る時、見送ってはいない規則がある。

ミツは土間に下りた。白い着物の巫女の姿が闇の中に浮いてみえる。

「跣足のまま」

ぞうりをはこうとしていたミツは巫女の言葉に素足で土間を踏んだ。冷い感触が足の裏にぞくりとした。

「向うを向いて座って下さい」

ミツは土間に座り込んだ。そのミツの頭に白い頭布がかぶせられた。いや頭布というより目の所だけが開いた袋といった方が良さだろう。首の辺りを軽く紐で締められる。さらに巫女はミツの両手を後にまわさせると、白く新しい縄で両手首を縛り、胸も乳房の上下に一筋ずつ縄目がかかるよう注意して縛った。縄目は特に厳しくもなかったが、初めて縄目を受けるミツにとって、新しい縄は肌に痛かった、丁寧に縛り終った巫女は縄尻を引いてミツを立たせた。

「参ります」

奥に向って声をかけた巫女はミツを先に立て外に出た。

月明りの真夜中の村道、寝巻のまま後手に縛られ、頭布をかぶせられた歩む娘、その娘が素足で土を踏み、縄尻を取るのが巫女であるだけに、その姿は寒気を感じさせる程のものであった、真夜中であり、しかも頭布をかぶせられているので、絶対に誰にも判らないのだが、ミツは後手に縛られているということによって、たまらない恥しさを憶えていた。しかし、これも村の為だ。これから祭の終る迄彼女は家に帰ることは出来ないのだ。今年の祭の間中、彼女は村のスターでもありいけにえでもあるのだ。

ミツのつれてこられたのは、谷川の傍にある籠り堂だ。六畳の間位の板敷きの部屋には、他に二人の巫女が待っていた。ここでミツは縄目を解かれた。色白の彼女の手首には赤く縄目の跡が残っていた。

「さあ始めましょう。貴女はこれからお祭の終る迄、この頭布はぬがされません。本祭迄の間、特に肌に傷をつけないように気をつけて下さい。毎日、昼間はこれでお祈りをし夜は外で水垢離をとります。休むのは、昼の

三時間、夕方の二時間、夜明け前の二時間で、その間、素肌にこれを着るだけです。では、着ているものを全部ぬいで下さい」

同性の前とはいえ、初めて肌をさらすことにミツは躊躇した。

「普段他人に肌を見せてはいけないというのは、この為です。もし他人に肌の特徴を知られていては、本祭の行事に耐えられないでしょう。しかし顔を隠しているし、肌の特徴は判らない。しかも村中の娘は祭の終る迄顔を見せないのだから、貴女が誰であるか誰にも判らないのです。知っているのは私一人、それにお家の方。私にはそれを喋ることは許されません。もし、少しでも洩らせば、すぐに死という神罰が下るのです。だから安心して裸になって下さい。但し、出来るだけ喋らないように」

ミツはこの巫女の言葉に安心して寝巻の紐を解いた。三人の巫女の見守る中で、ミツの丸い肩から寝巻は滑り落ち、続いて腰のものもはずされた。顔だけを隠した娘の姿、若々しく白い裸体が薄暗い室内に一瞬光ったが、すぐ、後にまわった巫女の一人が白い着物をミツの肩にかけた。彼女の膝迄しかない短い着物が一枚、これが彼女の体をおおうすべて

だ。

その日の夜明けからミツのお祭は始った。籠り堂の祈りは比較的楽だった。唯黙って、巫女達の後に座って居れば良かったからだ。丸い膝小僧とむっちりした太ももの半ば迄、露わにしたまま正座しているミツは、何だか自分の心が洗われて行くような気がする。板の間は脚に痛かったが、それも二日三日と経つに従って、慣れてしまうと、祈りの言葉が段々自分の心にしみ込んで来るのを感じた。しかし、深夜の水垢離は毎晩こたえた。稍を渡る風の音しか聞えない谷川の中に、一カ所この為にもうけられた深い窪みがある。全裸になったミツは合掌しながら、この深みに首迄体を沈めるのだ。その間巫女は低く祈りとなえている。冷い山の水はミツの肌を鋭く刺す。体中の動きが止ってしまうかのように感じながら、ミツは夢中になって体を沈めるのだ。首迄水が来て頭布のすそをぬらすと、ミツは息が止りそうになり、思わず口を開けて息をする。月明りに水中の白い裸身が美しくゆらめく。

水から上ると、肌は火照るように感じられる。引き締められた肌は日に日に美しさを増して行った。

そして、いよいよ本祭の前日、本殿の方では、村の若者達が明日への期待に騒ぎながら準備をしている声が木の間をぬって籠り堂迄聞えてくる。その中で、ミツは床の上に、全裸のまま横たわっていた。肌が白いだけに、それがミツに何とも云えない色気を与えていた。ミツを囲んだ巫女は手に手によく研がれた剃刀を持っていた。本祭に出される女体に邪魔なものがあってはならない。ミツの体からは生毛の一本に至る迄、完全に剃り落されなければならぬのだ。三人の巫女が両手と脚から丹念に剃刀を当て始めた。足、腋下、脇腹、下腹、敏感な娘の肌にとって、たまらない程のくすぐったさにも耐えなければならぬ。もしミツが一寸でも動いて肌に傷がつけば、この祭は充分とはいえないのだ。ミツは歯を喰いしばって、肌を這う感触に耐えた。前がすめば後と、それこそどんな窪みもどんな小さな生毛も逃すまいとする巫女の手つきだった。作業が終るとミツの体には良い香りのする油がくまなく塗られた。唯でさえ艶の美しいミツの肌だ。全身を剃られ、油をぬられた裸身は、この世を離れた美しさをしていた。

「今年は神様もお喜びでしょう」

巫女はミツの美しい肌に、ほれ込んだ様に云った。

「本当に、こんなに傷のない体は珍らしい」

「肌もきれい」

巫女達は口々にほめた。

「良いですか。お祭の方法は聞いて知っているとありますが」

ミツはうなずいた。

「打たれたら思い切り悲鳴を上げなさい。悲鳴が派手な程、神様はお喜びです。三日間は死ぬ程苦しいかもしれませんが、決して負けてしまわないように」

ミツはまたうなずく。

「それでは準備が出来る迄持って下さい。童子が来たら仕度をして下さい」

年長の巫女は出て行った。残りの巫女はミツの前に正座したまま姿勢を崩さない。ミツも座ってみたが、どうも体のやり場がないようだ。それに剃刀を当てられた体は、何と平常と違って見えることだろう。全然自分の体ではないようだ。むき出しになった体は何となくこっけいたものだ。ぴったりと合わせた肉付きの良い太ももは大理石のように光っていた。丸く盛り上った乳房の上に紅の乳首がこじんまりとついている。

話には聞いているが、実際にはどんなにされるのだろうか。村中の者は娘以外はすべて、神社の前に集まり、打たれる娘の悲鳴に合わせて「オーオー」と声を挙げる。絶対に他から入って来た者は参加出来ないし毎年一人選ばれる娘は少女と云っても良い若いのばかりだ。

巫女達と座っているミツは、その時間がとても長く感じられたが、やがで神社のある方の騒音が消えた。いよいよ、祭が始まったのだ。間もなくこの籠り堂に一人の女の子が訪れた。今年の祭礼の童子だ。彼女は籠り堂の中で、巫女の手によって、体中を良い匂のする草で清められ白く短いパツと、赤と白の、はんてんのようなものを着せられた。小麦色に日焼けした脚



がむき出しになり、まだふくらみを見せない胸も半分位露わになっている。

「さあ、今度は貴女です。手を後にまわして下さい」
一人の巫女が赤と白に染め分けられた縄を持ってミツの後にまわった。

いよいよ始まると思うと自然に高鳴ってくる胸を押さえて、ミツは丸い手を後にまわし、背中両手首を組んだ。巫女はミツの柔肌を縄が噛まないように注意しながら、ミツの両手に縄をかけた。一定の縛り方があるらしく、巫女はゆっくりと注意深く縛り始めた。両手首が動かなくなると、丸い乳房の下に二巻、上に一巻すると、背中で締め上げた。柔い胸と腕に縄が喰い込み深くびれたを作った。ミツの両手は全く動かなくなったが、特に痛みは

感じなかったし、血の流れも止っていないの
だろう、指先がしびれてくることもなかつた。

巫女はミツの縄尻を童子の手に渡した。

「さあ始めます。ゆっくり歩いて下さい」

巫女の声でミツはゆっくり立ち上った。両手の自由が奪われているので重心を失い、一寸ふらつく。

巫女の一人はミツの前に立ち、もう一人はミツの右横についた。

女としての羞恥心が芽生え出した時から、肌をさらさない生活をしている娘にとって、その全部を覆うことなく、しかも村中の人の目にさらさなければならぬのは死ぬよりもつらいことだった。しかし、村の娘の大半が同じことをするのだし、顔を隠しては、誰だか判らないということ、この行事が村にとって欠かすことの出来ない重要なものであることなどが、辛うじてミツの足を動かしていた。

今迄、かすかに聞えていた巫女の祈りの声が、段々近くなってくる。ミツは顔を上げずに、足下だけを見つめながら歩いた。いつしか、背中で縛り合わされた両手をしっかりと握りしめていた。

神社の前の広場には年頃の娘を除く村中の人が全部集っていた。人々は円型に座り、その中にはたい柱が一本と十字型に組まれた柱が一本立てられていた。

巫女は一人神段の前で声高に祈りを続けている。村人はある者は巫女の声に唱和し、ある者は唯黙って目を閉じていた。巫女の声が一きわ高くなった時、神殿の前が急に水を打ったように静まり返った、円陣の中央が割れてミツが入って来たのだ。二人の巫女につきそわれ、童子に縄尻を取らせて歩を進めるミツの姿に村人は息をのんだ。今迄何百年となく続いて来た行事だが、村一番の老人でも、今年のミツのように美しい娘は見たことが無かったのだ。顔は頭布に包まれている為、その美醜は分らないが、体の美しさは例えようもなかった。白くすべすべとした肌には、無駄な脂肪は認められない。丸い半丘を露わにする乳房、締った細腰、むっちりとした太ももに二の腕、すんなりとしたふくらはぎ。後手に縛められて歩む裸身の乙女は神々しいばかりの美しさだ。

足元ばかり見詰めて歩いていたミツも自分の肌が、人々の目にふれたのを感じたのだらう。白い体が薄桃色に染った。

社の前に近付くにつれミツの後姿が露わになった。紅白の縄に括られた両手首、その下の豊かな盛り上りを見せる二つの丘、前から見ても横から見てもその姿は美しかった。

ミツは、祈りの終わった巫女の前に座らされた。むき出しの脚に地面が痛い。始終目を伏せているミツのお払いがすむと、一人の巫女が、彼女の縄目を解いた。さして強くない縄目だがミツの白い二つの腕にはうっすらと赤い筋がついていた。ミツは巫女にうながされて立ち上り中央に進んだ。両手が自由だと、自分の体を隠したいのだが、そうするとかえって、猥雑な感じで祭の神聖さをなくしてしまふような気がしたので、ミツは両手を手持無沙汰に垂らしていた。

ミツは中央の太い柱を抱くように立たされた。柱の向う側で両手首が縛られる。むき出しの乳房に柱の感触が鋭い。両足も柱にからみつくように縛られた。

巫女は前に膝まずく童子の手に、一筋の革鞭を手渡した。もうすでに何人の娘の肌を責め、その脂と汗を吸い込んでいるのであるのか、その鞭は黒くしなやかに光っている。童子はミツの横に立つと細い脚をふんばり鞭を構えた。

「エーッ」

巫女の声と共に、鞭はミツの腰の辺りで鳴った。ミツは思わず唇を噛みしめる。童子の打つのは一度だけ、それに悲鳴を挙げてはならないのだ、

童子はふたたび膝まずくと鞭を巫女に返した。巫女はミツを連れて来た若い巫女に鞭を渡す。今度はその巫女がミツの横に立った。

「エーッ」

「ギエーッ」

ミツは演技ではなく思わず声をふりしぼった。

「オー」

続いて村人達の声。ミツの白い背中に赤い筋が見る見るうちに鮮やかに浮かび上る。

「エーッ」

「ギエーッ」

「オー」

適当に間を置いて打ち下ろされる鞭に、ミツは声をかきりと悲鳴を挙げた。体が引き裂かれそう。肌が白いだけに鞭跡は美しかった。革鞭が肌を打つ度にミツの白い体は緊張する。豊かな脂肪に包まれ美しい曲線を見せる背中の下に筋肉が隆起するのが見える。美しい。神々しい。痛々しい感じよりも美しさ

の方が勝っている。丸い背中を見せてもだえるミツの姿に村人達は自分達の罪が消えて行くように思った。

必死に背中の痛みを耐えるミツ。もう全身汗でびしょりとぬれている。手首と足首に喰い込む縄目も痛い。次々と新しく襲う鞭の痛さは、その度にミツの新しい感覚を誘った。

「エーッ」

「ヒエーッ」

「オー」

村人達の声が一きわ高く響くと一瞬、沈黙が訪れた。巫女が何をしているかは判らないが、ミツは一段落ついたことを覚った。

この鞭打ちの役目もむずかしく、悲鳴を挙げ、背中が脹れ上る程打たなければならぬが、それが元で死んでしまうようなことがあっては、その巫女が責めを受なければならぬ。

二、三年前に、この村の歴史始って以来初めての犠牲者が出た。その少女は祭の最後にも姿を見せず、一カ月後にこの世を去った。彼女を鞭打った巫女は祭の最後の日から今、ミツが縛られていた柱に後手に縛りつけられた。勿論顔は隠さず、時間も陽の出ている間

だけだった。しかし、少女が死ぬと、ただちに、巫女は着物を剥ぎ取られて縛られた。顔は勿論隠されていない。顔を露わにしたまま裸をさらすことは年頃の娘にとって死ぬ程つらい。しかも村人達はたえずその巫女の前にやって来て、彼女の体をながめた。一週間そうやってさらされた後、その巫女は人知れずこの村を去って行った。殆ど全部の人々に自分の体の隅々迄知られてしまっただけは当然のことと云えよう。

手首の鞭を解かれたミツは崩折れそうになるのを二人の巫女に支えられ、中央の十字架にかけられた。しか十字架と向い合わせに皆に背中が良く見えるように縛りつけられたのだ。ミツの背中が前よりもはっきり人々の目にさらされた。白く豊かな背中に赤い筋が幾筋も脹れ上って痛々しい。ミツは肩で大きな息をくり返した。丸い脂に包まれた肩甲骨が大きく上下し、余計彼女の姿を可憐に見せた。剃刃を当てられ油を塗られた白い肌に汗が玉のようにふき出し、余計艶を増している。丸い背中の中央に背中が縦に深い窪みを作り、その下の盛り上りは豊かな張りを見せ、その張りが急に無くなると白い二本の柱へと分れて行く、村人達にとって今年の祭は最高だ。

体も美しいし肌も白くて鞭跡が鮮やかだ。それに鞭打たれる時の悲鳴も素晴らしい。ミツは別にわざと出しているわけではないが、静かな森の空気を引き裂く悲鳴は、村人を歓ばした。

頭布の中なので顔は見えないのだが、ミツは目を固く閉じた。自分が村人達を見ていると村人達の方でも自分が誰か見えているような錯覚にとらわれるのだ。

ミツは祭のクイライマックスの三日間を同じような責めに合わされた。唯、二日目は、後手に縛られて前を打たれ、三日目は両手を上から吊られて、後といわず前といわず、体

中を打たれたのだ。

毎晩毎晩、ミツは燃えるような肌に寝もやらず、転々ところがりまわった。白い体はもうすっかり赤く脹れ上っていた。しかし、その苦しみも、三日間で終り、巫女達は、彼女の回復に全力を尽した。充分な栄養と休養、それに秘蔵の薬は若いミツの体に見る見る効き目を表わした。痛みは間もなく去り、痛々しく裂けた鞭跡もやがてふさがった。そして一週間後には、鞭跡こそ一面に残っているが若々しく、美しい体はもうすっかり元通りになった。

その日、ミツはふたたび初日のように、後手に縛り上げられた。あの紅白の縄で丁寧

に。そして、今後は裸馬にまたがらされた。裸のまま歩くさえ恥しさに消え入りそうになったのに、今度は馬にまたがるのだから、ミツの恥しさは例えようもなかった。しかし、巫女は有無を云わず、ミツを馬に押し上げ腰をしっかりと胴体に縛りつけた。手綱はあの童子が握る。

馬のゆれは、じかにミツの肢体に響いてくる。手首と乳房に喰い込む縄目、そして腰に結ばれた縄、馬上にさらす。ミツは高くゆられながら青い空を見た。自分の裸体は美しいと思った。丸い胸を張り、後手の指を握りしめてミツは頭を挙げた。

(完)



(リポート)

△テレビ△に現れた緊縛場面

田村清彦

ああ悲しみを袂に秘めて

八月二十二日(木)の午後および二十三日(金)午前九時からの読売テレビ(10チャンネル)は、新東宝映画「サタン城の魔王」を放送していた。この映画は、同テレビ局が今までに何回か放送したものであり、また私としては、六年ほどまえに映画館で観たこと

もあるのだが、この目、改めて鑑賞してみても、やはり素敵だと思った。私の心をつかんだのは美しい菊姫(北沢典子)の扱い方が卓抜であったためである。いわば、この種の時代劇映画の定石を忠実に踏んだ演出法であったのである。

美しい振り袖姿の姫君が住んでいる大邸宅や、広い庭や、座敷に置かれた琴や、座敷に通じる長い廊下などのたたずまいは、まさに夢の世界の大名屋敷の典型だった。その姫君が腰元一人を伴って夜道を歩いていると、数人の黒装束の男たちが襲ってくる。その情景は特に幻想的である。場面が三転すると、格子戸のはまった牢屋のなかに捕われた菊姫が下を向いて坐っている。カメラが近づくと、格子戸のあいだから見えるこの可憐な乙女の高胸に四筋の縄がかけられている。さらわれてきて牢屋にとじこめられ、じっと正座している菊姫の愁いを含んだ美しい表情をカメラは大きくとらえる。江川宇礼雄が牢のなかへやってきて姫の体をだくと、姫は括られたままで身を悶える。あとで明智十三郎が助け出しにやってくる前後にも、うなだれて坐っているこの美しい縄目姿の姫君を何度も映し出してくれる。両手を後ろに回されているので長い袂が膝の両側に長く垂れて揺れ動く。姫君を救い出すために地下牢へ来た明智十三郎が大勢の敵方の侍たちと戦うときの場面は特に魅力的だ。牢のなかで、後手姿のまま立ちあがった菊姫が左へ右へと歩きたびに、捕われの姫君の悲しみを秘めた両の振り袖がひるがえり、美しい動きを見せる

のだった。

北沢典子と言え、読者のなかには、同じく新東宝映画の「危し、伊達六十二万石」を思い出す人もあるだろう。あの映画では、腰元姿の彼女が白い扱帯で後ろ手に縛られ、庭の木の枝に吊り上げられていじめられる緊迫感に満ちたシーンがあったからである。そのときの彼女も、やはり、袖丈二尺七、八寸の美しい矢がすりの振り袖を着ていた。

八月二十七日（火）午後九時半からの朝日テレビ（6チャンネル）は鞍馬天狗を放送していた。純白の振り袖を着た花嫁姿の成瀬麗子が小林勝彦にさらわれてしまう。小林は成瀬を奥深い洞窟のなかへ伴って行き、太い縄を彼女の胸に四重にかけて後ろ手に括しあげてしまうのだ。美貌の成瀬麗子は縛られたままで失心しておおむけにたおれている。鞍馬天狗の中村竹弥が彼女を救いにくる。成瀬麗子の縄目姿は二十数分のあいだに六、七回画面に現れたようであった。端坐姿勢でなかったのは残念だった。縄目もゆるんでいて、形ばかりの縛しめだった。

八月三十一日（土）午後三時十五分からの毎日テレビ（4チャンネル）は、東映歌舞伎の舞台劇を録画放送していた。旗本退屈男「残月妻恋坂」という芝居である。後半で花柳小菊が二人の武士におそわれ、両手を取られ

てさらわれる。やがて、次の次の場面になると、花柳小菊が舞台右手に坐らされている。野と林を背景にした場所で、彼女は、型通り、二本の白い縄をそのふくよかな胸にかけられ、両手を後に回して括られている。花柳小菊の後ろに長い縄尻を手にした苦い侍が立っている。彼女の袂の振りが前を向いて垂れている。その五、六人の侍がいるなかに首領らしい加賀邦男の姿も見える。花柳小菊が身悶えすると侍が縄尻を引く。まもなく、そこへ市川右太衛門の旗本退屈男すなわち早乙女主人之介が現れて、彼女の背後に回り、縛しめを解いてやる。

花柳小菊は、美貌とお色気において不世出の名女優であると私は思う。まことに、花のような華やかさと柳のようなたおやかさと小菊のような優しさとを兼ね具えた女優である。この人は、その長い役者生活において、いったい今日までに、何回、あのようなやかな両手を後ろに回されて縛しめの縄目を受けたことなのであろうか。その回数、その場合の演技上の心構え、リハーサルおよび本番のときの心境などについて、私は、この人が生きていううちに、いちどご本人に直接訊ねてみたいという強い欲望に駆られるのである――。

（昭和三十八年九月十日記）

「奇譚三十九夜」物語

|| 第三十一夜 ||

辻村 隆

秋雨が静かに静かに、宵の舗道をしとどに洩らして居りました。車が一台又一台——、ビルの前で停ってクラブには、レギュラーメンバー八人、定刻には、又ぞろ退屈を持扱いかねた顔で揃っておりました。

今宵は珍らしくもゴルフ氏とスバル氏がフォトを持参しました。先ずゴルフ氏のフォトから廻覧が始まります。寡黙の彼は、終始にこにこし乍ら、めいめいの勝手気儘な批評をきいておりましたがややあって、重い口を開いて、語り始めたのです。

第七十一話 肉体の担保

「私の如き消極的な人間は、皆さんの様に緊縛のフォトを撮ると云

う機会などには、滅多に恵まれるものではないと、半ば諦めておりました処、案外何でもない、フトした所にチャンスを掴むものだと云うことを、今回始めて経験しました。拙ない出来ですが御覧下さった数葉は、この私が自ら撮ったものです。それはこんな機会からです。丁度あれは……」

秋晴れの午下り——、私は昨夜の役員総会の二次会で珍らしく痛飲し、今日は遅くまで寝ていた。総会屋の出現で、もめにもめた総会が、やっと全議題を可決し終って疲れも手伝っていたのだろうか私にしては珍らしいことだった。

木曜日でいつもなら、メンバーと奈良の国際ゴルフクラブへ飛ばすのだが、それを断わって、一日をゆっくり自宅でくつろぐことにした。

家内は娘の縁談が定まってからと云うもの、私をおっぼり出して持たせて行く嫁入道具の選定に夢中で、私がおるにも拘わらず、ひる前から、娘を連れてデパートへそわそわと出掛けて行った。結婚して三十年近くもなると、女房族は随分図々しくなってくる。

所存なく、私は書斎へ入り込み、お手伝さんに軽い中食をもってこさせて、サンドイッチを囓り乍ら、テレビのニュースを見る。

こんな時こそと、私は立上るとロッカーを開き、奥深く蔵い込んだ奇クの最近号を二、三冊とり出し、誰憚らず机上に拡げて、丹念に読み始めた、忙しさに務れて、いつも拾い読みに過ぎない。

お手伝いのお品さんが、紅茶を入れたポットを持って来て、遠慮勝ちに來客を告げた。

「私に用なの？ 会社の人？ それとも又いつもの記者連かい？」

「いいえ、女の方で奥様に御用だそうですが、御不在だと申し上げたら、それじゃ旦那様にでもお目にかかり度いと申します」

「ウン、断わればいいのに……」

私は折角奇クの雰囲気解けこみかかったのに、時ならぬ來訪者で、多少不気嫌になり乍ら、それでも居留守を使う程の悪度胸もなく、渋々合うことにした。

応接室に入ると、ソファにつつましく座っていた女性が、慌てて立上って、恭々しく丁寧に深々と辞儀をした。礼を返して、

「家内に御用事でこられたんですね、私で間に合いますか——」

「はい、奥様の甥御様の、夙川の光伸様と中学の同級にありました津川隆子と申します。兼々奥様から何かと御じっこんにして頂いております」

そう述べる彼女を私はじっと観察した。余り美人とはいえないが

細身の締まった流動美は、活潑的なタイプに見えた。甥の光伸と同級なら、二十六、七才と云った処か——。

「で、どんな御用——」

「……」

津川隆子なる女性は少し云い洩って、もじもじしていたが、思い切ったように口をきった。

「実は社長様を見込みまして、お金を少し許り拝借願えたらと思ひまして……ええ、勿論ただでは申し上げます。私の体を担保に致します。少しトウが立っておりますので、御不満かとは存じますが煮るなり、焼くなり、御金を拝借している間は、御自由にして頂いて結構で御座います。駄目でしょうか……」

津川隆子は、ゾツとする様な艶冶な眼ざしで私に突飛でもない事を云ってのけた。

「そ、それは又一体どう云う事かね。余り意外なことで、急に返事も出来ないが……」

實際、私はそれだけ云うのに、しどろもどろだった。

「随分運つ葉な女と御考えて御座いましょう。でもこれは、考へに考へた挙句で御座います。判っきり申し上げますなら、私、奥様の御留守を承知で御伺い申し上げます。社長様に御逢いするのが目的でしたか……」

「だが、どうして又私を——」

「男と見込んだからで御座います。でも、駄目なら結構で御座います。唯、今申し上げますこと、夙川の光伸様には内緒にしておいて下さいませ——」

「いや、少し待って下さい。いいとも悪いともいっていない。余り

急だったので咄嗟に返事出来なかったまでだ。それに、私は今日それでも数分前、始めて貴女に逢ったばかりだから、何とも返事しかねたのだよ——」

私は、津川隆子のこんな申し出に一応警戒心を抱き乍らも、激しい興味を持たざるを得なかった。

「当然のことだと思いますわ。私自己紹介致します。住所は豊中市岡町三十一番地、二十六才、独身、家族は父と二人暮らしです。仕事に電話交換手です。父は昨年停年、銀行を退職しましたが、肺ガンの宣告をうけてまして、余命発許も御座いません。死ぬ迄に存分に父に尽くしたいと思い、それで……」

「分りましたよ。いくらいるんだね——」

そう聞かざるを得なかった。

「沢山とは申しません。お返しするのが大変ですから……。五万円余り拝借願えたら……」

「五万円だね……担保は君の体——。それで返済日は？」

「三カ月待つて頂きたいのですが——、出来れば担保のなしくずしで充当していただければ……」

そこで、津川隆子はパッと羞恥を示した。肉体の切売りを、自ら提示したことに、女としての恥かしさ、猥らさを自覚したのであるうか。容姿がつつましいだけに、その赤裸々な提案が尚更、生々しく私の胸につきささった。

「よかろう——、しかし私もこの年だ。若い者の様にはいけない。しかし君が先刻云った、煮るなり、焼くなりの言葉が気に入ったよ。併し、念の為聞いておくが、この様なことをまさか、あちこちで云ってやしないだろうね——」

「まあ、失礼ですわ。

私コールガ

ールじゃあ

りません……

……結構です

わ。帰らせ

て頂だきま

す」「ま、

まちたまえ

分ったよ。

じゃあこう

しょう。兎

も角私は担

保を写真に

とっておき

たい。初対

面なんだか

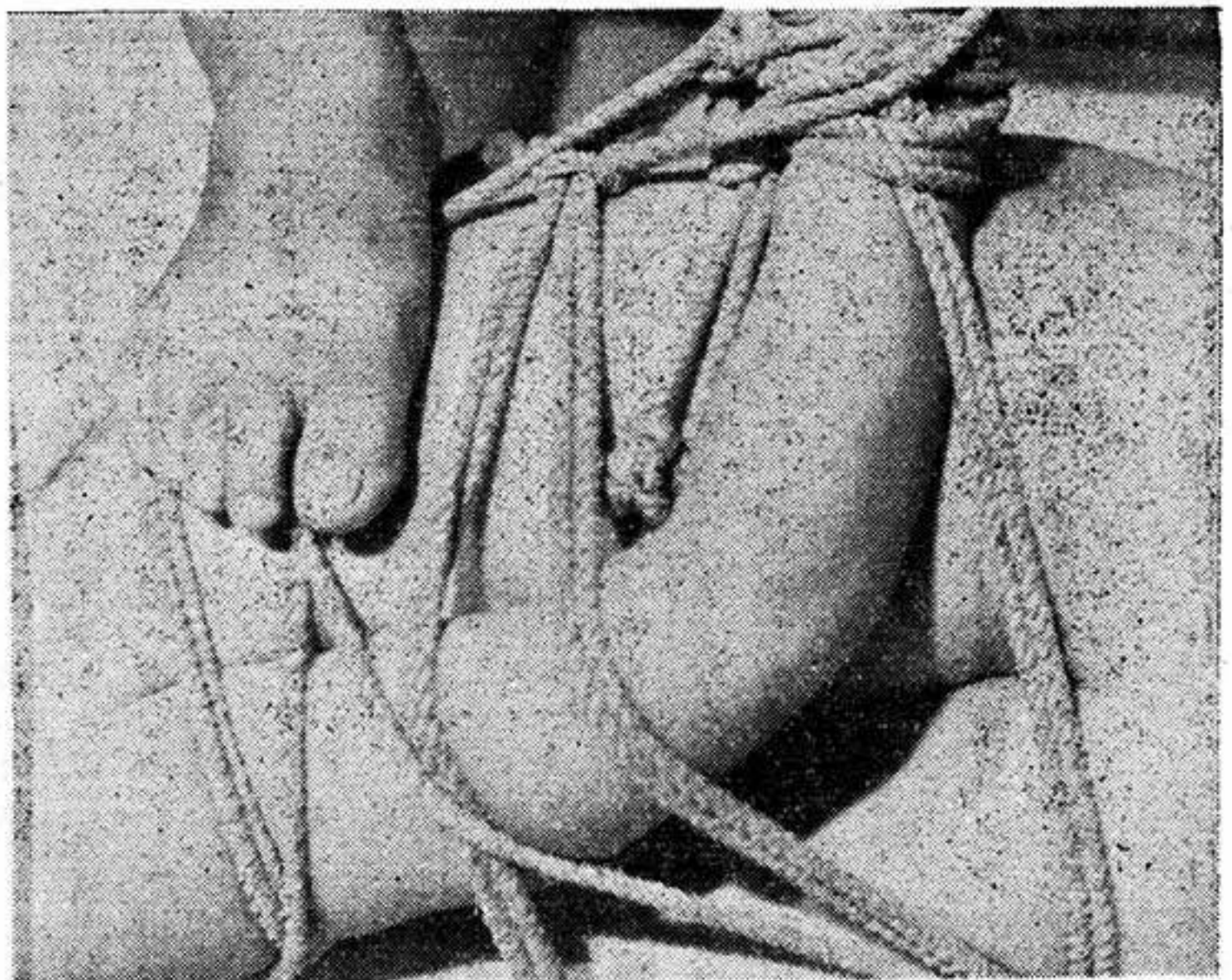
ら、いざと云う時にね——。何なら、写真をとることで、担保のな

しくずしにしていってもよいがね……」

「と、申しますと、私の裸を……?」

「尚更いいね。しかしいやならいいんだ。私もない話として、別段すすめないよ——」

私も強く出た。貸してやる方ですから遠慮することはない。五万円のヌードは高いが、一回きりじゃなし、それに、その時、フト、



三十九夜でのフォトの件が脳裡をかすめたからである。

津川隆子は暫らく考え込んだ。それからゆっくりとなづいた。「体の方には自信ありませんけど、それでも御差支えなかったら、一向に構いませんわ」

私は隆子を持たせて書斎に戻ると、個人小切手にためらいなく、五万円を書き込んだ。

アバンチュールは当って砕けろだ。況して私の如き消極的な人間は、こういう機会でもない到底自分から云い出せたものでない。

小切手を渡すと、流石に隆子はホッとした様に肩を落して、押し戴いた。張りつめていた偽悪の緊張感がとけた時、素顔がチラリと覗いた。そこには育ちのよさを物語る、しっとりと落付いた盛りを過ぎようとする娘の悲しくも澄んで眸が、今にも露をこぼそうとして、懸命にこらえているのが読みとれたのである。

「さあ、ビジネスは終わった。約束通り、ひとつ煮て喰うことにしよう。ここではないけない——。大阪のキタの新地に、『新月』と云う待合がある。そこへ行って待っていてくれ給え」

果して行くだろうか——。ひよっとして、この儘逃げるのではないだろうか、そんな危惧を感じたが、兎も角彼女を信用することにした。

津川隆子は一礼してうなづき、出て行こうとして、『新月』の場所を私にたずね、改めて楚々としたすり足で退場していった。

万一を慮んばかり、私は銀行に電話して、五万円の引出は、明日にする様依頼して、私はおしなさんに急用が出来たからと云って暫く使わなかったニコンのほこりを払い、押入に吊してある、二、三本の縄をバッグの底に忍ばせて、車を呼んだ。自家用は家内が使っ

ているので、今日は反って都合がよい。年甲斐もなく、私の胸は期待に大きくふくらみ、車中、いろいろと緊縛のポーズを思い出しては、ひとりにやっていた。

十三辺り、数百米の自動車の停滞も、さして気にならず、私はしきりに妄想を働かせていたのである。

○

『新月』のおかみにきくと、既に津川隆子は半時間前から来て待っていた。

「社長さんが若い女の人と待ち合わすなんて本当にお珍らしいこともあるんですね。粹筋なんですか——」

「いや、それが狐につままれた様な話で……」

と、心易い仲だから、いきさつを話すと、

「へえー、何とねえ。それで娘なんですかね。私たちの若い頃とは世の中も変わりましたね……」

と呆れたり、驚いたりの体である。

「今更、情事でもないしネ。これでひとつオタノシミとゆくつもりだよ」

私はバッグのカメラをおかみの眼の前でブラブラさせて見せた。

私のマニヤぶりを知っている女将は男のように大きく笑って、

「私も覗きたくなりましたよ。一度、ギョッ、ギョッと縛って見たい——」

女将のサジストぶりを知っているから、

「ああ、覗きたけりゃ、来たっていいんだよ」

そう云って、私は奥まった、秘密の会合などに使う部屋へ、女中の案内なしでドンドン歩いていった。勝手知ったる我が家の如き心

易さである。

襖を開けると、津川隆子はビクリとして振り向いた。私だと知ると、安堵と不安が相半ばした顔付で、小さく頭を下げた。

それに応えて、この間をそっと覗くと、心得顔に床がとってある。苦笑がにじみ出た。

今更くどくどして説明するのも憶却であった。私は無言でバッグを開き、カメラにストロボをとりつけ、ぞろぞろと数条の縄をとり出した。いぶかしげな隆子の視線を外らして、私は上着とズボンをと、備付の私専用の着物に着換えると、

「少し涼しいけど、脱ぎますか——」

それで、隆子はやっと、口を開く機会を得た様に、

「あの——、その縄で私を縛るのではないでしょうね」

「いえ、お察しの通り、貴女を縛るつもりですよ。私達のグループでは、こうして女性を縛ったり、軽く責めたりするのを、SMのプレイと云っております。軽い気持でプレイと考えていただければよろしい。遊戯ですね」

不安げに隆子の顔は急に硬ばり、心なしか蒼ざめた様であった。ひとり呟やく様に、

「どうなさろうと、どうせ私の体は抵当に入っているんだから……」

それは自分に対する、諦観の念を押しているようにも思えた。

彼女は次の間へ消えると、数分経って、浴衣に着換えてあらわれた。

「さあ、どうなさろうと御自由ですわ——」

やや不貞腐れて見えたが、心の不安をカバーしようとする、懸命の虚勢ではなかったろうか。数時間前迄は赤の他人だった二人が、

今こうして密室めいた部屋で相向い合っている。何とも奇妙で複雑である。

私は努めてドライに振舞おうとした。片手に縄を持ち、隆子に近づくと浴衣に手をかけた。それをそっと身をそらして、彼女は自ら浴衣の紐をとき、肩からおろしていった。

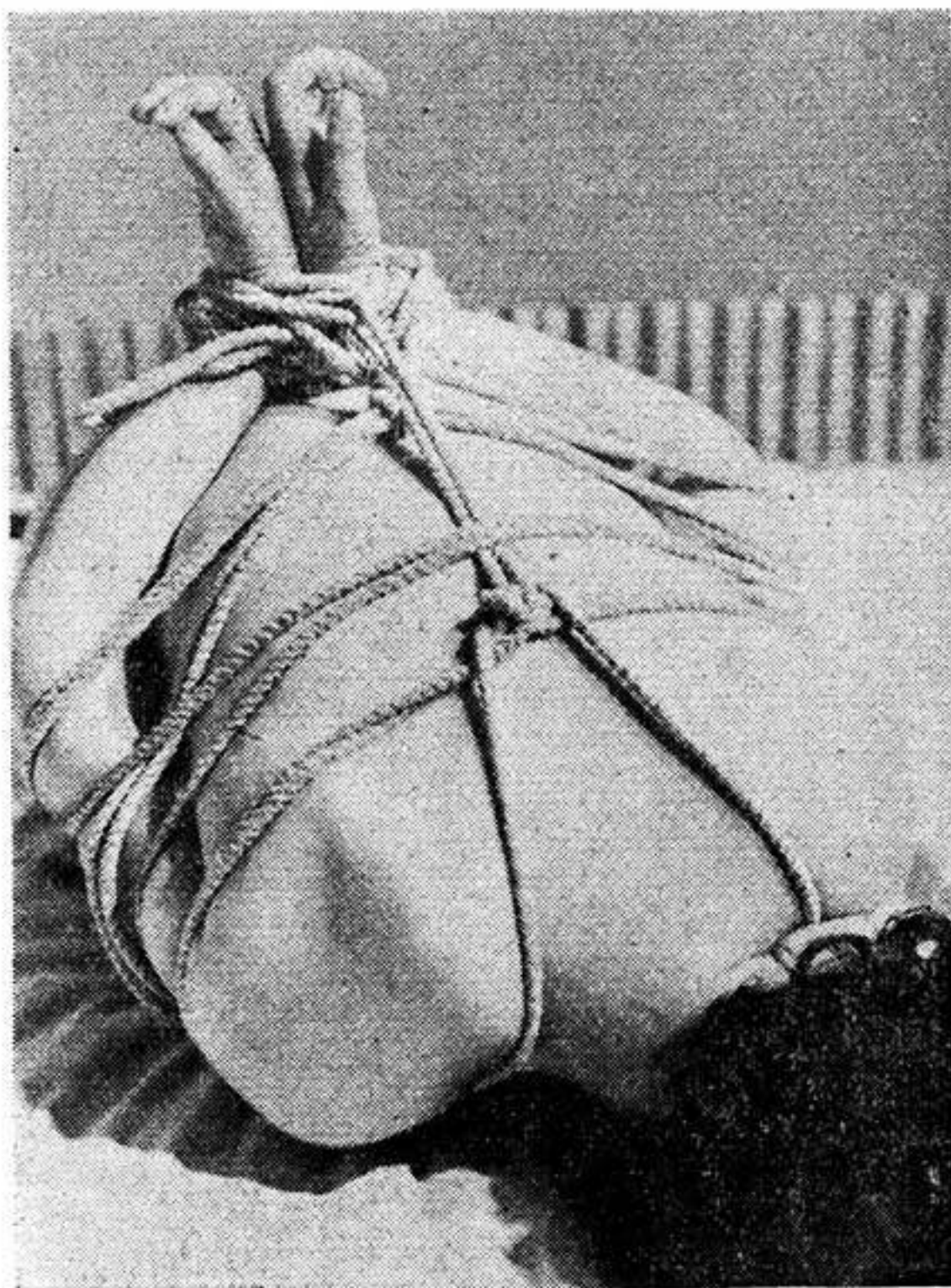
細い乍らよくしまった体であったし、乳は娘らしく固く尖っていた。こうした体が案外きつい緊縛に耐えられる事を、私は三十九夜の連中から聞き知っている。

浴衣の下は、覚悟の事とて、何もまもってはいかなかった。

私はプレイの予備行動とも云うべき、シンブルな縛りは省略することにした。相当の代償を払ってのプレイであるから、直ちに本番に突入すればいいのである。それに形だけのものより、例え、フォートの枚数は少なくともいいかう、実際に実のある、誤間化しのない緊縛のフォートがとりたかった。

私は荷造用の古い縄を使って、神妙にうつむいている隆子の二の腕をとると、先ず高手小手に、後手に縛り上げた、二の腕で締め上げ、「ウフー」と軽い呻きを洩らした彼女に委細かまわず、胸に縄を廻して、乳房の上下を深く二重廻し、首縄をかけ、更に一本の縄で両脚を強く締めて縛って、体を押えつける様にして、脚の縄と胸の縄をしめ上げて、彼女の身動きのとれない様に縛り上げた。

生れて初めての経験なのか、胸を圧迫されて苦しいのか、彼女はしなやかな体をしきりにくねらせ、絶えず低い呻き声を洩らした。ととのった顔が苦悶に歪んで、それが又醜くもあったが、反面、如何にも苦しげに被虐にのたうつ様子が歴々と窺われて、私の興趣をいやが上にもそそった。



日本手拭で頬がくびれる程に猿轡をかますと、呻きはこもって、微かに地底からはい出る地虫の、羽根をすり合す音のように陰にもり啼くように聞えた。

ストロボが一瞬の白銀の尖光を放つ度、彼女の昧像は一枚一枚フィルムに焼きつけられていった。

右に左に、前後に振り廻し、転がして、既にフィルムは半分を費消している。

残酷なムードが昂まってくると、私は猿轡を外し、大きく溜息を吐き出した彼女に、忽ち、縄がその顔面を捉えて、蒼白い顔に数条の縄が顔一杯に喰い込んだ。

眼に鼻に、唇に縄は深々と喰い入り、彼女の容貌は更に変化して

いった。

ハアハアと喘ぐ息が、シンと静まり返った部屋に手にとる様にきこえた。彼女の乳房はブルブルと、まるでそれだけが別の生きものの様に妖しく震えていた。

私のフィルムは既に二本目の終りに近附いていた。かれこれ二時間、私は急激な昂奮と緊縛する労力とで、全身にけだるい疲労を覚えつつあった。

これ程撮るつもりはなかったので、フィルム二本準備して来たのが悔やまれたが、数えてみれば七二枚とることになる。しかし、いつの間にかこれ程撮っていたのだろうか、既にフィルムの枚数を示す数字は二十八を指していた。あと八枚きり――。

私はそれ迄夢中で使っていた古縄を解き、黙然と腕を擦り乍ら、跪座する彼女に、真新しい白い縄を使うことにした。

それまで、津川隆子は、呻きはもらしても痛いとか、やめてくれとは口走らなかつた。

飽迄自分の立場に忍従する彼女に、私は焦立ち乍ら、段々と激しい意欲にかられて来て、この女の哀願と悲鳴をきいてやりたくなつた。

長い縄なので二条にして、私は隆子の体を正座させて押えつけると、荷物かなんぞのように、足から背にかけて、犇々締めつけてしぼり上げた。両手は合せて、手首できつく縛り、転がした。

八枚のフィルムがまたたく間に費消された。もうよかろう――、私はゆるゆると彼女の縄をといいた。ぐったりとした彼女は畳の上に、恥も外聞もなく、手足を大きく伸ばして打伏していた。疲労の濃い体に鞭打って、カメラ類や縄をしまったが、彼女は一向起き上

る気配もなく、しかも何かを期待する様に、ドタリと体を寝返りさせて、転がったまま、じっとしていた。

彼女を娼婦か、コールガールのように思いたくはなかったし、しかも貸借の絡んだ、弱い立場の彼女だけに、借りた瞬間から身を投げ出す気でいたに違いない。

「身支度をして帰り給え。担保のうちから、第一回分五千円差引いとくからね——。又、撮りたくなったら電話でもするよ。じゃあ——」

わざと金額を明示し、私は部屋を出た。老いても、プレイボーイを以て任ずる私は、これがやがて、隆子自身に、どんな反応を示すかを、はっきり計算に入れ乍ら、襖をしめた。

愛情の交歓は、貸借や義理でなしに、お互いの心の底から湧き出た、必然的なものでないと、赤線と何ら変らないと云うのが私の持論であつたからである。一回五千円としても、十回も同一人物を撮れば飽きるに違いない。しかし十回の緊縛の過程が、やがて私達の間に、何らかの変つたものを形成して行くに違いないであろうことを、私は確信している。

「……と云うわけですが、このフォトがの第一回そのものです。私は五万円を価値ある様につかうべく、いずれ、緊縛にふさわしい場所を選んで、津川隆子の凡ゆる角度、あらゆるポーズのフォトをものするつもりです」

ゴルフ氏はこういつて結びました。ついでスバル氏のキャビネ版のフォトが、期待する一同の前へ、次々と廻覧され始めました。

咳一咳——、スバル氏はおもむろに語り始めたのです。

第七十二話 悠起子と真砂子

「ここに居られる皆さんなら、奇クの古い読者でもありましようから、御存知と思いますが、七、八年前の奇クのグラビアを毎号の様に賑わした、伊吹真砂子が、もう私の記憶から薄らいでいた今頃、ヒョッコリ電話をかけて来たのです。話は、そこから始まるのです……」

○

受話器をとると、聞き馴れない女の声が、——辻村さん？、あたし、あたしよ——と、さも馴れ馴れしげに、私の耳に飛び込んで来た。

「えッ、誰？ 分らないかって？……さあ。ああ、伊吹さんか——これはお珍らしい、又誰かと思った。何年振りかね……」

「今、大阪駅の中央出口にいるの。一度お目にかかれない？。いろいろと頼みたいことがあるんだけど——」

「いきなり掛けてきて、頼みたいって、一体何だい。まあ昔馴染だから、事と次第によっちゃあネ……」

「電話ではくわしく云えないわ。出て来て頂戴よ——」

「あーゆくよ。一寸待合室の横のパラーで待っていてくれ給え」電話をきくと、仕掛けた仕事もあったが、匆々に切上げて、兎も角車を飛ばした。

構内パラー。数年振りであるが、伊吹真砂子はすぐに分った。手を振っている。

「まあ、辻村さん、随分ブクブクと肥えたのね。あの頃の面影ない



わよ」

「君は又、チツとも変ってないね。塚本君と一緒に撮らなくなっ
から、もう七、八年経つだろう。あの頃のままだよ。えーおい、一
体いくつになったんだい」

「レディのとは聞かないこと。それより私の頼みきいてよ……」

「時と場合によりけりだが
ね。一通り話を語り給えー」

珍らしく黒髪を自然の儘長
く伸ばした彼女は、少し肥え
た様であった。

伊吹真砂子の頼みとは次の
様なことであった。

あの時、(モデルをやめる
時)彼女は結婚を理由に退ぞ
いたのであった。噂によれば
片想いの医師に失恋して、多
少やけもあって、母親のきめ
た見合結婚で、一応納まった
かに見えたが、培養された彼
女のマゾ性は、おとなしく、
しかも至ってノーマルな平凡
な夫に、いつしかあきたらな
くなって来た。三年半許り結
婚生活は続いたが、子供はな
かった。

夫と別れた事について、色々と私的な理由があったが、プライバ
シーの問題だから、是で触れる必要もなからう。

伊吹真砂子は、モデルを止めてからも、折があれば、よく奇クを
店頭で見たりした。昔、自分のフォトがグラビヤを飾ったことに、
止めても一抹のノスタルジャを覚えていたに違いない。

彼女はアパートで一人暮らしをしていたが、生活はかなり潤沢であ
ったらしい。コピーリストと云う職業が稀少価値もあって、結構一人
の気軽さを愉しんでいた様であった。奇クを買って帰っても、誰に
気兼ねないので、耽読出来た。

もう一度と、フト思う時がある。しかし、一旦この世界を去ると
再び自分の方から頼んで行くのがうとましく思われ、と同時に、フ
ト自分の年令を振返って見たりするのであった。

春日ルミとコンビを組んで、SMプレイのフォトを、幾度か忘れ
る程に撮ったが、彼女はいつも被虐者の立場にあった。そのグラビ
ヤも今は殆んど影をひそめ、春日ルミに変わって絹川文代が登場し、
彼女に変わって、梨花悠紀子、大塚啓子がいつもグラビヤを飾ってい
た。

アパートで唯一人、それらのフォトを見つめていると、彼女は無
精に、過ぎこし昔がなつかしく、殊に好きなタイプの梨花悠紀子に
自分の姿がダブって、被虐の願望に、転々とし、眠れぬ夜がつづい
たと云うのである。「鑑賞用緊縛女性」として、梨花が登場したの
も、辻村隆の紹介によるものであった。彼女は昔なじみの辻村隆に
頼めば、或いは、こうした悠紀子とのSMプレイが叶えられるので
はないかと思った。

別段、マネーが目的でもなく、奇クのグラビヤに掲載してもらい

たいなどとは更々考えていない。唯、なまの梨花悠紀子に一度逢って見て、写真の彼女を、ジカにこの眼でたしかめ、若し可能ならばあの悠紀子に縛ってもらいたい——。

彼女はテレビで長谷百合を見るたび、映画で三条江梨子を見るたび、梨花のイメージをしのんだ。長谷や三条は手の届かない処にあるが梨花悠紀子なら、今はいざ知らず、かつては自分と同じ被虐モデルのグループの一人ではないか——。そんな気易さを、相手かまわず、伊吹真砂子はヒタと持ち続ける様になった。その願望も、辻村隆に頼めば、或いは果せない事もない、いや、必然的に果せそうな気もする——。

それが嵩じて、今日、思いもかけぬ電話となり——、
今、私は伊吹真砂子と、薄暗い喫茶の片隅で、相對していたのである。

○

女性被虐マニア（確かに、今の伊吹真砂子はモデルではなく、一人の女性被虐マニアとして登場している）は、よく奇巧の読者通信を通じて、その願望を披瀝してくるが、まさか、昔なじみの伊吹さんから、こんな意外な頼みをきこうとは思わなかった。

「いよいよ、病コウモウかね。女性のひとり暮らしは、氣鬱が嵩じていつしか幻想的な願望が凝固して行くものなんだ。しかし又、梨花君とは……。彼女は果してどう云うか、責任もてないよ、それに、このところ、少し許り逢っていないしね」

「駄目なら駄目でいいの。もともとだから。でも、辻村さんに出逢ったら、何だか可能性がありそうな氣になって来たわ。」

「あくかあかんか、まあ一ぺん電話して見ようや。けれど、彼女、

あの会社にいるかな？」

私は半ば独り言になって、兎も角も彼女が勤めていると知らされている会社に電話すべく、手帖を拡げて、連絡の電話を探した。

「Rさんは二カ月許り前、おやめになりました。たしか、〇〇化粧品株式会社におつとめとか聞いておりますが——」

会社の交換手の返事である。電話帳をくって、そこを探す。ヤレヤレ。

「唯今、H百貨店の化粧品売場に宣伝販売中に参っております。御用なら、御伺いしておきます——」

へえ——彼女、唯今、化粧品の宣伝販売員らしい。Hデパートなら、眼と鼻の先だ。

燈台もと暗しとはこのこと。目指す、梨花悠紀子は、私達と数百年とは離れていない、膨大な企業の片隅で、働いていたのだ。

一階化粧品売場——。いずれがはやめ、かきつばたの、若々しい女性群の中に、いたいた、まぎれもなく、梨花悠紀子が、アルトのよく透る声で、彼女の前に立つ、ずんぐりした二三人の娘に、しきりに化粧品の説明をしていた。私は尻こそばゆくなって、急には近づけなかった。

彼女は、あのお釜のバケモノの様な髪型から脱皮して、逆毛を立てず、ナチュラルな、短い毛に形をかえていた。フォトで見る顔とは別人の様だって、さり気なく、説明にきき入る女達の後ろに立つ——。氣配でこちらを見て、彼女は「アラッ」と云う顔付になったが、すぐ手癖に戻って、説明をつづけていた。仲々、仕事に忠実である。

伊吹真砂子は、そんな悠紀子をうっとりとした様に私の傍らで眺

めていた。

二人の娘は、彼女の様に美しくなるべく、千円札を出して買っていった。愛想よく応待し、恭々しく辞儀をしたあと、悠紀子は悪戯ツ子の様に、メツと私をにらんだ。

「職場では話出来ないわ。六時ごろ、地下の店員出口で待っててね。いいでしょ……」

彼女は、横手の伊吹真砂子に対して、会釈するでもなく、すぐ目を外らせて、私にそう云った。勿論、私とて、こんな派手な場所ですくする気は毛頭ない。伊吹の紹介も出来ず、私はうなずいて、ソクサとそこを立去った。

閉店の午後六時まで、たつぷり二時間半はある。私は梨花を掴まえた以上、慌てることもないと、兎も角一度家へ、カメラやアクセサリー、それにマネーをある程度準備する為に帰ることにした。

伊吹とも午後六時、店員出口でち落逢う約束で、デパートの入口で別れた――。

○

三人はペープメントを、黄昏の人波に押されて歩いている。キタの喫茶食堂で、私達はやっとくつろいだ。夕食時とて人は多いが、ガヤガヤしているのが、反って話に都合よい。

私は伊吹真砂子を改めて紹介し、彼女の願望を梨花に伝えた。

「随分撮らないから、もうカンが狂ったわ。それに今迄は縛られてばかりだったのに、急に始めて逢った人を縛るなんて、うまくゆくかしら……」

悠紀子は多分に気の進まぬ返事である。

「縛られる方だったら構わないけど、縄のあとが、以前の様に五日

も一週間も消えないなんての困るしネ――」

しかし夕食のスペシャル・ランチが、彼女の空腹を満たし、二杯のコップのビールが、彼女を多少奔放な気持ちにかり立てたのであろうか、

「余りきついのはいやよ。それにお金はいらないから、一時間許りのおつき合いで勘弁してね――」

と云うことで、やっと彼女はうなづいたのである。伊吹真砂子は話の合間、微笑をきらさず、年相応の落付いた態度で、傍観者のように、私達の話のやりとりをきいていた。

話がうまくまとまった時、始めて会心の笑みがこぼれ、

「御無理を云ってすみません――」

と、どちらへともなく頭を下げた。

ここからは、ゆきつけの旅館は遠かったので、とり合えず、銀橋の方向へ車を飛ばした。

部屋に入ると、流石に二人とも昔とった杵柄である。私がライトの準備や、カメラの位置を考えている間に、スルスルと洋服をぬいでいった。旅館の備えつけの浴衣をきて、やや手持無沙汰に待っている。

一時間と云う時間の制約がなかったら、私はこの又とないチャンスに、随分とりまくったことであろう。女性二人の緊縛、相互緊縛、諸種のプレイ。どれを撮ろうとしても、謂わば、二人は緊縛のベテランなのだ――。

私の意の儘に動いてくれたであろう。けれど余りに条件が揃いすぎ、よすぎると、反ってとまどってしまったって、何と云うこともなしに、喋べり、遊ぶ時間が多くなってしまう。

梨花と云い、伊吹と云い、余りにも心易すぎたからでもあろう。兎も角、伊吹真砂子の希望通り、一切私は手を藉さず、梨花の自主的な観念によって縛らそうと試みた。

「もう始めていいの——」

ドライな彼女はパツと浴衣を脱ぎ捨てると、私のバッグから使い馴れただんだらの柔い縄をとり出した。

「この縄で随分縛られたものだね——」

梨花は感慨深げに、二三度その縄をしごいた。

伊吹は受身だから、シートに正座して、今や遅しと、悠紀子の縄を、胸を、打震わして待ち兼ねていた。

「構いません？」

梨花はそう伊吹に声をかけ、彼女が深くうなづくと、しなやかな手で伊吹の腕をとり、両手を後に廻した。速写式に、間断なく、私のフィルムは送られて行く。

門前の小僧、習わぬ経を読むの例え通り、悠紀子の縄捌きは鮮やかで、忽ちにして、伊吹の両手を縛ると、胸に二重三重と廻し、腕をぐいと吊り上げて、背で結んだ

「これでいい？——」

「いいよ。どんどん虐めてやり給え——」

私は有頂天で、二人のプレイに焦点を当てている。

「どうも照れちゃうな。痛くない？」

なかなか伊吹さんと云えなくて、第一人称を抜いて悠紀子は声をかける。

「ええちつとも——、思う様になさっていいのよ、咬んでも、髪を引っ張っても、バンドで叩いても、構わないわ——」

伊吹真砂子も亦、一人称ぬきで返事だ。

初対面の二人どうし、お互いのペットネームを呼ぶのも白々しいと云って本名を呼び合う程親しくないのに、正に始まるプレイの方は、レスボスの境地を行こうとするのだから、お互いに都合が悪い——。

悠紀子は伊吹の背に、ヒタと体を寄せると、長い黒髪をくるくると指に巻きつけた。悠紀子の指に光る二本の指輪は、彼女の生活の豊かさを物置っていた。一本はたしかにダイヤのきらめきに違いなかった。

ぐいと髪を引張ると、真砂子の顔は引かれて仰向いた。眼をつむった彼女の顔は、満足を絵で描いた様に、うっとり夢我の境地に浸っている様に思えた。

マゾと目されていた悠紀子が、サジストめいたプレイに興味を持っていた事は意外だった。私の構成によらず自意的に女性二人のプレイの展開を見るのは、何と愉しいことであろうか——。我乍ら恵まれた男だと自負し乍らも、私のカメラは次々とシャッターをきっていた。女体の匂いがむせかえる様に部屋に充満していた。

いつしか悠紀子自身、プレイにとけ込みつつあった。激しい感情の起伏を抑制するかのように、彼女は伊吹の肩に歯を立てた。歯が徐々に深く、伊吹の肌に喰い込み、パツと離すと、綺麗な歯並びの歯型が、クッキリと赤く、伊吹真砂子の肩に残っていた。

二人はまるで、十年の旧知のように、よく気の合ったプレイに耽溺していた。私はまったく無視され、忘れられた存在だった。

既に一時間は過ぎていた。私は黙って、時間の経過を知らせなかった。

もう、完全に私は第三者的存在だった。二人とも、私に忖度することなく、気を許して、のびのびと自由に振舞っていた。

彼女達にとっても、モデルとしての制約も履行もない、気儘に振舞える機会は、おそらく始めてではなかったであろうか——。

とり立てて、ああしろ、こうしろと云われる気遣いもなく、況してや、モデル料をもらうわけでもないの、日頃の鬱屈を吐き出しているかの様に見受けられた。

期せずして、こうした機会をもった事を、喜び合い、そしてその歓びを分ち合っている様でもあった。

プレイのあとの軽い疲労が二人を押し包んだ。もの憂げに真砂子が私に声をかけた。

「ねえーえ、今二人で約束したの。今夜ここへ二人で泊ることにきめたの。悪いけど、辻村さん一人で帰っていただけない？」

「私はいいけど、悠紀子ちゃんどうなの？ 構わないのかい——」

悠紀子は、私を見ずにかすかにうなづいた。
「こんな筈ではなかったが——、予想以上に意気投合したらしい。まあいいや……」

私は静かにカメラを片付け始めたバッグを肩にかけて立上った。
「ホテルの金は払っとくよ。まあ、ゆっくりね——」

それ以上は何も云えず、私は二本の縄をわざと置いて部屋を出てゆくことにした。

狂言廻しの私の役は終った。

ほろ苦い哀愁に包まれ、ぼんやりと二人に目をそそぎ乍ら、人間の味う快楽の底辺、明日は他人であるかも知れない二人——数時間まえ迄はまぎれもなく他人であった二人が今、煙草をわけてのみ、

甘い囁やきかわしてゐる。その綾にかぎりない女心の妖しさに、私は何となく空怖ろしいものを感じていた。

スイッチを消して、カーテンを開くと、ホテルの谷間の間隙から辛うじて差し込む、秋の月光が、冷めたくこぼれていた。

「何かに熱中すると、飽くなき追求をする伊吹真砂子の性質を知っておりますから、多分二人は、私をヌキにして、何処かの空の下で甘い時間を過しているかも知れません。S傾向の女とM傾向の女が出会った時、そこには世間並みの同性愛以上の熱情が醸し出されて行く事でしょう。Mでもあるが、多分にS的傾向をもっている伊吹真砂子は、きっと梨花格紀子をM的存在に仕立てて、炎のように燃え立つ幻影に瑞々しくふくれ上っているに違いないと思うのです。

私はこのとおきおきの題材を、別題の手記風にして、奇クに発表する予定でしたが、思わずもここへ御披露してしまいました。今夜持参したフオトは、そのうちの、ほんの五枚程度ですが、殆んどはオ・リミットの多いものが多いのは残念です。奇クへ発表することを意識して撮ったものでないだけに、やむを得なかったと思います」

スバル氏はこう云い終って、静かにピースにガスライターをあてました。

冴えた月が窓から忍び込みました。はや冬のおとずれも知らずかの様に、このビルの一室の、メカニズムされたここに、どうして生きて行くのか、キリキリキリキリと、微かな啼声を散らして、こほろぎの忍び音が、耳をすませば聞えてくる夜でした。

退屈男達は立上り、それで——、誰からともなく散って行きました。

【懸賞告白】

鼻の狂想

これは、鼻につかれた僕の偽らざる告白である。つまらない繰り言とさげすまれるかもしれないが、僕は打ち明けざるを得なかったのである。



水 上 健 三

僕は大学を卒業後、或る電機メーカーに勤めているサラリーマンですが、自分の変った性癖について書いてみたいと思います。

今から考えてみると、僕は小学生の頃から異常だった様です。あれは二年生の頃でしたか、クラスにきれいな女の子がいましたが、授業中に急に彼女の鼻が見たくなって、身をかがめて、その女の子の鼻の穴をのぞいた事があります。

その頃は、「自分は変っている」などと自覚していませんでしたから、そんな事を平気でやれたのでしょうが、まわりのクラスメートは何と思った事でしょう。それというのも小さかった頃、僕の鼻が人並はずれて大きかったので、クラスメートによくひやかされたましたが、そのせいで鼻に対して自意識過剰になっていたからだと思います。

この頃に、僕はある女優さんに一目惚れしてしまいました。彼女の涼しげな二重マブタと、スナナリとした形のよい鼻に魅了されてしまったのです。そして「メーカーシップ係になり、彼女の鼻を真近に見てみたい。彼女の鼻に指を入れたりして、思いきりもて遊んでみたい。」と真剣に考えたものでした。今でも彼女は映画界で活躍していますし、彼女の映

画が来れば必ず見に行きます。しかし小学校の後半は転校、父の他界などのゴタゴタが続いたので、僕の鼻への興味は次第に薄れてしまいました。

ところが、中学校時代に、窓辺で友達と話をしていた時に、いきなりその友達がカーテンを僕にかぶせておさえつけると、その上から僕の鼻をつまんでひねったのです。ジーンと快感が全身に走りましたが、その時はあまり急でもあり、クラスメートの手前恥かしくて、必死に抵抗して逃げましたが、後になってから「もう一度そんなにして鼻をひねって欲しい。」と思いました。

その時から又、僕の鼻に対する興味が一段と高まったのです。小学校の頃は横に広がっていた僕の鼻が、その頃からは父に似て高くなり、形もどうやら他人にうらやましがられる位に整ってきた事も、鼻に対する関心を高めた大きな原因だったのでしょう。

そして、とうとう僕の運命を変える日が来ました。それは高校の高学年になって、大学の受験準備をしている頃でした。僕が古本屋で参考書をアサッていてふと脇を見ると、面白い表紙の本が置いてあったのです。確か真中に、王冠、そのまわりと上に女の人を描いて

あったと思います。何の気なしにその本を開いてみると、女性が台の上に縛りつけられ、その傍にいる男が、彼女の鼻を上向けて責めている絵が目飛び込みました。四馬孝先生の絵です。値段を見ると大変高いので、びっくりして、そのまま古本屋を飛び出してしまいました。胸がドキドキしていたのを憶えています。ところが、家に帰ってからどうしても欲しくなり、小遣いの残り全部をはたいて、その本を買いました。これが、僕が奇クを知ったそもそのナレソメでした。

その頃の僕は、いじめる事は面白いだろうとは考えていましたが、いじめられて喜ぶ人のいる事は知りませんでしたから、本の内容はまったくの神秘の世界でした。それからというものは、毎日のように古本屋を捜し、通いつめたものです。そして、奇クを置いてある貸本屋をみつけました。それこそ天にも登る気持で、その貸本屋に入会したのですが、その店は、わずか二カ月ほどで古本屋に変わってしまったのです。それからの僕の古本屋通いは一層ひどいものになりました。なにしろノドがカラカラに渴いている所に、水を一口だけ与えられたのと、同じ様なものでしたから。

そんな時に、郊外に、古い奇クをたくさん置いてある古本屋を見つけました。早速選び始めると、しばらく見ていたその店の主人が「その本は特殊な人達の読む本だから売れない。」と言うのです。ポカンとしていると、「とにかく、その本を置いて帰りなさい。」と、きびしくきめつけるのです。

その時はカッとなって店を飛び出し、家に帰って来たのですが、都心では文句一言言われないのと思うと、どうにも口惜しくて寝られませんでした。

「僕があまり長く立ち読みしていたのがいけなかったのだ。」と一人合点し、「僕がその特殊な人間の一人である事を打ち明ければ売ってくれるだろう。」と思って、又出掛けて行きましたが以前と同様な問答を繰返した結果。

「どうしても欲しいのです。」

「ダメですね。」

「お金さえ払えば良いのでしょう。」

「いや、この本は、もっと年を取った人でないと売れないんです」

「でも都心では売ってくれますよ。」

「では、そこで買って下さい。」

「でも、そこには、こんなに古いのは置いてないんです。」

「そうですか、とにかくウチでは、若い人には売りませんからお帰り下さい。」

……顔を真赤にしながら散々ネバツたけれども、むこうが売らないと言うものを買う訳にはいきません。スゴスゴと尻尾を巻いて帰って来たのですが、その時のみじめな気持を御想像下さい。

その頃は、まだ、どこで奇クを売っているのか見当もつきませんでした。ある日、近くの本屋の店頭で奇クの並んでいるのが目に入りました。小さな店だったので気付かなかったのです。——身近にあるものには、あまり欲が出ないものですが、僕もこの時以後、以前の様に激しく奇クを求めて走り回る様な事はしなくなりました。しかし本屋で奇クを見つけると、手に取らずにはいられません。新しい号は必ず手に入るのですが、ずっと以前の旧刊号が手に入らなくなったのは、まことに残念です。

僕は中学生の頃から、映画は大好きでしたが、この頃では、一回目には映画を観賞し、二回目には女優さんの鼻を観賞する習慣がついてしまいました。そういう意味で思いつくのが『水兵さんは暇がない』です。男女のキッスシーンで、女優さんの鼻の穴が完全にこ

ちらを向き、男性がキッスする度に、彼女の形のよい鼻の穴がピクピクッと広がるのです。相当長い時間キッスシーンが続いたと思います。息をつめて画面を見つめていたものです。

その頃から、「女性の美の中心は鼻であって、他の部分品（失礼）がいくら良くても、鼻の形が悪くては美人とは言えないし、少し他が悪くても、鼻の形が美しければ美人だと言える。」という僕ナリの考え方が固まってきた。そして色々な女性を見る度に、この考え方への確信が強まっています。（イササカ勝手な考え方ですけども。）

この頃では、僕自身をいじめてもらいたいと思う事があります。鼻責めに限らず、僕の意志や人間性を無視したようなはずかしめを受けたと思うのです。又、そのようなはずかしめを女性に与えたいとも思います。（もちろん、鼻責めが中心ですが。）

夜寝る前に、自分で自分をいじめる事がよくあります。洗濯バサミを全身につけてみたり、鼻の中に硬貨をいれたり、マチ針を身体にあちこちにさしたりするのです。そんな事をしていて、とても興奮して、誰か他の人にされてみたいと考えるのです。近頃は夏に

近いので、虫も数多く飛んで来ますが、その中で、毒も無く噛みつきもしない虫（例えばコガネ虫のような）を顔や身体の上にのせ、自由に歩かせたりします。時々虫が鼻の穴やオヘソに入ってきますが、為すがままにさせておきます。僕の意志を無視される（ある意味では、僕の意志に従っているのですが）事で、とても興奮してしまうのです。

ところで、僕が不思議に思っている事は、よく外国の責め絵や写真を見ますが、今までに鼻責めの絵や写真が一枚も見当たらないという事です。外国には鼻責めは存在しないのでしょうか。高く美しい外人女性の鼻を鼻責めにしたら素晴らしいと思うのですが……。

こんな恥かしい、くだらない事をクダクダしく書き述べましたが、こんな人間もいる事を、誰かに打ち明けないではいられなかったのです。

以上は鼻に対する僕の偽りのない、飾り気のない告白です。まだ書き忘れたことがあるかもしれませんが、書いたことは本当のことばかりです。

大分夜もふけました。明日の勤めがありま



随筆

美容と浣腸

栗瀬 長

新聞をみれば、緩下剤と共に浣腸の広告によく見受けられるのが、

「女性のニキビ吹出物ものには便秘が大敵、便秘には〇〇浣腸」

といった種類のものだ。新聞ばかりではない、女性なんとかといった週刊紙、婦人雑誌の附録などにも、頻々としてあらわれるのが、この種の広告ばかりでなく、美容・医学講座であり、相談である。

かくほど左様に女性には便秘がつきものな

のであろうか。どうも然りといわざるを得ないような気がする。

というのは、先ず第一に女性、殊に若い女性のもつ羞恥心は、トイレに先ず反応する。

例えば、某週刊紙にこんな記事があった。即ち、トイレに入って、お小水の音は恥かしいものだ、よって、水洗の水を流しながらすれば、その音は消される。これが、外で待っている人に対するエチケットだというのだ。

今でこそ私もささやかな事業を営んでいる

が、嘗て、宮仕えした頃、BGの会話を小耳にはさんだ事がある。

「あの方のおトイレ長いわね、居眠りしてるんじゃないの」

といった具合である。トイレが長かろうが短かかろうが、大きなお世話だというのは我々男性の考え、女性にとっては長尻も一つの軽蔑の種ともなるもの、どうしても早糞にならねばならず、何かと脱糞のチャンスをするものらしい。

元来、便秘とは、多分に習慣性のものである。一定した時機に催した便意を我慢すれば、そのまま便意は遠ざかって、次の周期まで繰り越される性質がある。その中、直腸末端にたまった便からは、水分がどんどん腸管壁から吸収されて、固定化され、便意を遠ざけると共に脱糞を困難ならしめ、痔の原因ともなり、便秘症にもなってくるのである。

ここで一寸痔疾にふれておくが、痔瘻のうちに、結核性その他に原因のある痔は別として、日本人に最も多いのは裂痔、脱肛といわれている。米食者の常として、大量の食物摂取——カロリーはあってもビタミン、ミネラルの少い米飯からは、必然的に大量の摂取が要求される。副食に余程心を配らねばならぬ

のだが——のため、老廃物が必然的に多くなり、それが肛門への過重負担となり、加えて日本式便所様式では、尚更肛門を押し開く恰好となつて、脱肛並に裂痔を促進するといふ。

さて、話を元に戻して、羞恥から我慢した便意は、便秘症を知らず知らずの中にひき起す。加えて、女性には、下腹部に子宮なるものが存在して、常に腸管を圧迫している。殊に妊娠後は、腸の圧迫が激しく、必らずや便秘をとまなうものであつて、分娩時には陣痛を防げる点から、必らず浣腸がどこされる所以である。

妊娠していなくても、腹腔内に大きな面積を占める子宮によって、腸管は圧迫され、押しまげられて、殊に子宮後屈の場合は尚更それが顕著である。

かくの如く、第一に、心理的には羞恥心からくる便意我慢による習慣性便秘、身体的には生理的構造による便秘、両々相まって女性には便秘が比較的多いと思考される。

さて次にはその害毒である。腸内にたまつた便からは毒素が発生し、それが腸壁から吸収され、のぼせ、めまい、吹出物を生ずる。極端な場合には、腹痛、発熱をとまない、殊

に幼児にあつてはヒキツケの原因となるなどと物の本には書いてある。

ここで一番女性が気にするのは、のぼせでもめまいでもない。この吹出物、ニキビといった美容上の大敵である。十七、八の男子高校生が、俺もそれそれ一人前だといわんばかりに、ニキビの二つ三つ、額に浮ばせているのは、一寸愛嬌もあるが、若い女性はどうな場合でもいだけない。

ニキビ取りの美顔水をぬったり、せっせと硼砂をとかした水で顔を洗う心理もうなずけないではない。そこに原因は便秘ですよといわれれば、あわてて、果汁だ、ジュースだ、生野菜だ、毎朝一杯の水だ食塩水だ、とあわてるのは無理もない。そして遂には、そつと人目をしのんで、浣腸のご厄介にもなろうというもの。

こうした理論と實際を応用して、私は妻を浣腸に導入した過程を一寸ご紹介したい。

新婚当時、アパート住いだった私達、

「随分早いんだなあ」

「だって、トイレに入つたと思ったら、コツコツって誰かノックするんですもの、おちおち用も足せないわ、あわてて出て来ちゃった」

といった具合である。その中、私は妻の額にニキビとまではいかないが、小さな吹出ものを見つけたわけだ。

「おい君、額どうした。何か出来てるぞ」

「まあ、お目が早いね、どうしたんでしよう。小娘じやあるまいし。いやだわ、吹出ものなんて」

「みつともないじゃないか」

「ほんと、恥かしくって、いやになっちゃうの。化粧品が合わないのかしら」

「そうじゃないだろう」

「じゃ、なあに」

「一寸きくが、君、便秘してやしない」

「まあ、いやあね、恥づかしい」

「恥づかしいことなんかあるものか、本当の事いつてごらん、便秘してるんだらう。」

「ううん、まあね。」

「まあねってのは何だい、二日？ 三日？」

「そうね、もう四日目、いや、いや」

「そりやいけないよ、四日もためちゃ」

そこで一しきり、便秘の害を、少し誇大に説明、ほつておいては大変な事になるとおどかせば、

「まあ、じゃどうすればいいの、教えて、お願い。」

ここまでくれば、もうこっちのペースである。

「よし、直してやる、僕のいう事を何でも聞くかい。」

「ええ、いいわ、こんな顔じゃ恥づかしくて、お買物にも行けやしないわ。」

女とはこうしたものである。めまいのぼせといったものより、美容上の問題の方がはるかに重大なのだ。

「よし、じや待っといで。」

私は、かねて用意の、何時かの日の来らんことをと願いつつ、用意してあった、というよりは私の愛玩物である、グリセリン浣腸器五〇cc入りと、グリセリンのポンド瓶をとり出したのである。

「まあ、何よ、それ、注射？」

「冗談じゃない、医者でもない僕がこんな太い注射なんか出来るわけがないじゃないか」

「アッ、それ」

「そうよ、浣腸器さ」

「まあ、それ、私にするの、そんなもの何処にあったの？」

「何処って？ こりや、家庭常備品だよ、健康保険組合のパンフレットにも、ちゃんと書いてあるよ、家庭常備品の項にさ。さ、横に

おなり、僕がしてあげる。」

「いや、いやよ、恥づかしいわ。」

「恥づかしい事なんかあるものか、僕等は夫婦なんだよ、さ、横になって」

両手で顔をおおいながら言われるままに両膝を深く折りまげるのであった。お定まりの注腸、ものの一分とたたない中に、

「あつ、もう出たいわ。」

「冗談じゃない、五分は我慢しなくちや、グリセリンがよく滲み込まないよ」

小きざみに全身をふるわす様は、今をはやりのツイストの如く、何か私の官能をゆすぶる。一寸嗜虐的になった私は、グツとばかり妻を押さえつけて、

「駄目だ、我慢しなくちや、いいか」

「だって、いや、いや、もう駄目だわ」

言うが早いかとび起きて、トイレにかけつける妻であった。三分、五分、煙草が一本、吸い尽す頃になって、お腹をさすりさすり戻ってきた妻の恥づかしいような、それでいてその晴ればれとした顔。

「あつ、気持よくなったわー、あつ、すっきりしたわ。」

「そうかい、そりやよかった。ね、僕のいうことよくきくもんだらう。便秘したら、又浣

腸してあげるよ。」

これが口火となって、私は時々、妻の顔の吹出物を口実とし、妻は妻で時には、

「ねえ、浣腸して。」

というわけで、期せずして、意志の通じ合うようになったわけである。

勿論、便秘が習慣性のものであり、更に度重なる浣腸は、刺戟に刺戟を要求するものであつて、過度にわたれば弊害も考えられえない故、私も適度にコントロールしながら、共に楽しんでいるといった現状である。

結婚前からひそかに愛用してきた、エネマシリンジ、イルリガートルは、まだ妻には刺戟が強すぎると思つて、秘蔵しあり、何時の日にかこれを活用しうるチャンスをうかがっているわけである。

話が自分のことにわたつて恐縮であつたが毎日相当量の軽便浣腸が生産され、多種多様の浣腸薬が市販されている今日、若き女性もひそかにニキビをつぶしては、くしやんとつぶれた空の浣腸器をトイレに流しているのではないだろうか。BGのハンドバッグの中味、そこには軽便浣腸器も、そつと秘められているかも知れない。それは単にマニアの空想だけであろうか。



△告白△

雨合羽とお仕置

伊藤三郎

私は北海道の比較的大きな市に住む医師です。私は長いこと、ゴム製の雨衣を着た若い女性に特別な魅力を感じてきましたが、ずっと、これは自分だけの奇癖と思って恥しく思っていました。妻にさえ打明けず、自分の胸にしまっていました。ところが一年ほど前、旅先で入った書店で偶然本誌の記事を読み、同じような人々が世の中にいるのを知って、息がとまるほどびっくりし、また心強く思いました。そ

の後入手できる限り本誌を買っていますが、ゴム衣ファンの投稿が多いのに勇気を得て、生まれてはじめて投稿することに決心しました。

私の体験の告白に入る前に、まず編集部の方々へのお願を記しておきたいと思います。一、ゴムの雨衣を使った写真やさし絵をもっと載せて下さい。今までも多少はありましたが、純粹のゴム雨衣ファンを本当に魅きつ

けるものは殆んどないようです。私達が、一番魅力的と考えるのは、ゴム製の雨合羽やレインコートをきっちり身に着け、頭巾を正しく被ってバンドを締め、膝までもとどくゴム長靴をはいた完全武装の美しい女性が雨の中ですぶ濡れになってつつましく立っている姿です。無理に肌を出して挑発的な姿をしたのは、私にはかえって厭な気がします。また、着ているゴム雨衣が水に濡れてピカピカ光っ

ていることも大切な条件です。

二、本誌の読者のために特にゴム雨衣類を売ってくれる店を推選して下さい。店員から不審がられて赤面する心配なしに買える店がせめて東京や大阪のような大都市に一軒でもあると、どんなに安心でしょう。

数カ月前に投稿しておられた東京の古村氏などは、御本人がお店の御主人のようですがこういう方のせめて電話番号だけでも知らせて頂けるとよいのですが。(男女交際の幹旋などとちがって、トラブルの恐れは全然ないでしょうから)このところビニールや化繊に押されてゴム雨衣類はだんだん影が薄くなってきました。ひとところあれほど流行して我々に喜びを与えてくれた女性用のゴム引レインコートなども今では全然なくなってしまいました。注文生産もしてくれるような優良店の推選をぜひたのみます。

では、読者諸氏にとって退屈かも知れませんが、私の回想に入りましょう。

私の回想は昭和十六年ごろにさかのぼります。私は当時十九才でまだ医学生になったばかりでした。父はやはり医者で、東京に病院を持っていましたが、そのころは健康を害して郷里にひきこもり、長兄夫婦が院長代理と

して病院を預っていました。義姉は女子医専を出て結婚してからまだ一年ほどでした。しかし、彼女は優秀な産婦人科医であっただけでなく、万事呑気で人任せな兄と違って、経営の才もあり、二十三才の若さですでに病院随一の実力者となっていました。看護婦達の間には待遇改善でゴタゴタが起りかけた時、手早く特高と連絡して首謀者を逮捕させ、完全に弾圧に成功した手腕には親類中の者が一目おいていました。

その頃は次第に戦時気分が濃くなって行きましたが、義姉は国策協力にも熱心で、その頃まであった自動車を処分して、ずっと以前に田舎にかえしていた老車夫を呼びもどし、医師の往診には人力車を使うようにしたのも彼女でした。また義姉は自分で消防隊を組織して、十人ほどの看護婦をみずから指揮し、毎週消防訓練をやってはりきっていました。これも義姉の発案だったと思いますが、病院には鉄道員の着るような黒く光る、厚く重いゴムで出来た雨合羽とゴム長靴とが沢山備えられ、看護婦達は義姉の命令で、消防訓練のときも、また雨の日の走り使いや、往診の同伴にも、この雨合羽と長靴で完全武装させられたのです。若い看護婦たちの中には、この

服装をいやがった者もいましたが、絶対の権力を持つ美姉が怖くて、みな命ぜられたとおりにしていました。

森川八重という美人の看護婦がいました。当時二十二才位で私よりも二つ三つ年上でしたが、一寸見ると十七、八才位に見える可憐な感じの女でした。彼女は父が若いころ使っていた車夫の孫で、父が郷里から連れてきた全くの仔飼いの看護婦でした。

私は、はじめは彼女にはほとんど関心がありませんでした。しかしある雨の日、車で往診する義姉の相伴をして、ゴムの雨合羽をキチンと着てバンドを締めて頭巾を被り、ゴム長靴をはいて姉の鞆や器械類を持って俥の後を小走りに門外に消えて行った、この森川の姿に、私はなぜか突然に魅かれたのです。それから、私は雨の日や消防訓練の時の彼女の姿を見ることに秘密の喜びを求めるようになりました。また、それまで看護婦達とはほとんど口を利いたことのなかった私も、わざと雨の降る日に彼女を使いに出したり、駅まで迎いに来させたりしました。楚々とした女らしい肢体をゴム雨合羽で包み、頭巾を被った森川の可憐な姿は、戦争で暗くなりがちな私の心を強く捉えたのでした。

私が彼女の雨衣姿に特に魅かれていたことは、まだ彼女には全くわからなかったようでした。でも、私が気軽に彼女に話しかけることは嬉しかったらしく、時々自分の生いたちのこと、病院での勤務の辛さのことなどいろいろ打明けてくれました。ただ、私が一寸妙に思ったのは、森川がほかの看護婦以上に義姉のことを怖れているらしい、ということでした。ある時、私は何気なく聞いてみました。

「森川、お前はよっぽど姉が怖いらしいな。どうだ、凶星だろう」

私が冗談半分にいったのに、森川の美しい顔はサッと硬ばってしまいました。でも、彼女は強いて落着こうと努めながら

「ハイ、それはそうでございます。三郎様。でも、わたくしだけではございません。この看護婦は、みんな若奥様のお声を聞いたただけで、身がすくむような気がすると申ししておりますわ。若奥様は、大学の有名な内科の教授のお嬢様で、それに美しくて、才媛でいらっしやいますでしょう。わたくしどものことなどまるで犬か猫のようにお考えのようでございますわ。わたくしも、ほかの先生がたのお伴をする時は気が楽でございますけれど

も、若奥様の往診のお伴の時は、いつも緊張しすぎて、かえって注射器を間違えたりしてひどいお叱りを頂戴したりしてしまうのでございます」

森川八重は貧しい、不幸な生い立ちの女でした。車夫の孫で、職工を父に、女工を母にもつ彼女は小学校時代から働かされたそうです。それでも頭が良いので高等小学校までやってもらった彼女も、卒業するとすぐ花街へ売られるか、それとも女工になるしか途がありませんでした。ところが、成績がよかったために、学校の先生の特別の推せんで私の父が援助して看護婦の資格を取らせてやった、ということでした。でも、彼女の境遇を知れば知るほど、清らかで素直な森川が私は好きになりました。

ここまではまだよいのですが、これから先になると、私の恥をお話ししなければなりません。私は、二十才の誕生日を迎えて数日後のことでしたが、やはり或る雨の降る夕方、とうとう森川と秘密の逢瀬を求めてしまいました。義姉のお伴をして帰ったばかりの、ゴムの雨合羽とゴム長靴に身を固めた森川八重を、私は人気のない納戸の古ベッドのある部屋へ誘い込むことに成功しました。

「森川ッ、僕はお前が、お前のその雨装束の姿が好きなんだ。もう一年近くも我慢してたんだ。お前はこんなに愛してる僕の気持がわからないのか」

「どうか、お許し下さいませ、三郎様、お願いでございます」

森川が動くたびに雨合羽がキュッ、キュッと鳴り、ゴムの匂いが快く鼻をつきました。私は、はじめて森川に彼女の雨衣姿が私の心を捉えたことを打明け、これからも私と逢うときには必ずこの服装をするように命じました。意外なことに、彼女は、

「あら、不思議でございますわ、三郎様。実は、わたくしもこの恰好をいたしますと、とても身が締まるような気がいたしますの。やっぱりゴムの雨合羽や長靴は、わたくしどものような下下の働く者の服装でございますわね」

と言いました。

それから数週間は、まるで夢のようでした。納戸よりももっと安全な、鍵のかかる古病室が私達の落ち合う室でした。森川は、意外に堅肥りの肢体の持主で、ゴムの雨合羽で包まれた胸のふくらみは、うぶだった私にはとても魅力的でした。

でも、雨合羽の乱れを直し、女らしく髪をととのえて、ゴムの頭巾を被り直す森川の素直で可憐な姿を見てみると、彼女が自分よりも少し年上のことも忘れて私は憐れに、またすまなく感ずるのでした。あの最初の夕から約一カ月たった或る晩、私はしんみりした気持ちでこう言いました。

「森川、僕はお前にすまないと思っている。今までお前がうちの使用人なのをいいことにして、お前に無理なことばかりしてきた。でも、これからはお前を召使い扱いしないで、対等の女性として扱おう。お前を、いやこれからは君と言おう。君を森川なんて軽蔑して呼び捨てにせずに八重さんと呼ぼう」

彼女は、びっくりしたように、しかし嬉しそうに私を見上げました。

「まあ、でもわたくしのような女にそんな事をして頂きましたら罰が当たりますわ。わたくしはどうせひとさまにお仕えるために生れた女でございます。どうかいつまでもお呼び捨てになすって下さいませ」

「バカだな、お前、いや君、そういう卑屈な根性がだめなんだ。君は美人で頭がよくて、性質も良い女なんだ。僕は本気なんだ。もう三年待ってくれ、そうしたら僕も一人前だ。」

誰にも気がねせずに結婚しよう」

しかし、彼女は淋しそうにうつむき、つぶやくように言いました。

「でも、わたくしはやっぱり職工の娘で身分の卑しい女でございますもの。お父様が絶対にお許しになりませんわ。それに……」と言いかけて、森川はハッと口を押えました。

「それについて、何。何か言いにくいことでもあるのか、八重さん」と私が訊ねると、彼女はしばらくためらっていました。やがて決心したように、こう言いました。

「ハイ。あのう、実はまえから申し上げようと思っておりましたけれども……。いずれはわかることでございますから、思い切って申し上げますわ。三郎様、あのう、わたくしはあなた様よりも前から、若先生に……。お許し下さいませ……」

彼女はゴムの雨合羽の頭巾を被ったままの顔を古ベッドに埋めてはげしく泣き出しました。私は眼の前が真ッ暗になりました。

「何ッ、森川、お前は、あの……兄貴と。何という女だ、お前は。僕が……、僕がこんな一生懸命に愛してるのに……」

あとは声になりませんでした。私はただ、「申しわけございません」と泣いて詫びる雨

合羽、ゴム長靴姿の森川八重の手をふり切つて狂気のように自室へ帰り、配給の酒を一口に呑んで、寝つこうとしましたが、だめでした。まだ人生に未経験の私は、全く自分だけのことしか考えず、森川の立場を察してやるだけの度量がありませんでした。ただ自分の愛した女に裏切られたという気持、可愛さ余って憎さ百倍、という気持だけでした。

それから私が森川に対してとった行動は、二十才の青年とは思えない、陰険な、恥ずべき行為でした。私は彼女の朋輩の島田という看護婦に金をやってスパイをさせ、森川と兄との関係を示す証拠を手に入れた上、島田に命じて義姉に密告させたのです。それも、兄が学会で四、五日病院を留守にした時を見はからつての陰謀でした。

案の定、才媛であるだけにヒステリー質の義姉の怒りは傍で見ても凄じいものでした。彼女は、診察の時以外は大抵院長室にいましたが、その日の午後、思いつめたような顔をして、白い診察衣のまま、私のところにやって来ました。

「あのね、三郎さん、ちょっと極秘で御相談したいことがあるんだけど、ここじゃ話にくいから院長室に来て下さらない」

私達は院長室の安楽椅子に坐りました。

「こんなことまだ学生の貴方に相談したくないんですけど……。あの、森川八重って若い看護婦知ってらっしゃる？」

「ええ、知ってますよ。何しろ彼女は美人だからな」と私はわざと義姉の嫉妬心を煽るような口調で答えました。

「あの女がね、言にくいことなんですけど……お兄様と始終外で会ってるっていう話ほんとう？」

「ええ、まあ知らないのは姉さんと国のおやさかと思っただけ。やっぱり本当なの。あの看護婦、おとなしそうな顔をして、私の前では柔順らしくしてくるに……。やっぱり、貧乏人の娘は信用がおけないわねッ」

柳眉を逆立てた義姉は、糊の利いた白衣のまま、サッと立上ってベルを押しました。誰も出て来なかったので、一層苛立った彼女は、もう一度強く押しました。出て来たのは島田でした。

「何をグズグズしてたの。島田ッ！ 大急ぎで森川を呼んでおいでッ」

「あの、森川は、ただいま勤務中でございます

す、若奥様」

「かまわないわ、婦長に言ってお前が代っておいでッ」

島田がその剣幕に恐れて下ると、義姉は私に向って「三郎さん、森川が来たら立会って下さいね」と言いました。

ドアをノックする音がして、白い制服制帽姿の森川八重がいつもの清楚な姿でつましく現われました。

「お呼びでございますか、若奥様」とうやうやしく一礼して、直立不動の姿勢です。しばらく沈黙がつづきました。しかし、腰かけて足を組んだままの義姉の眼は憎しみに燃えて八重の全身を射るように見つめていました。森川よりも一つ年上の義姉でしたが、私は女の階級の差を目前に見る思いでした。森川の方はもうすっかり恐れ入って、ちょうど姫君の恋人と密会した廉でお仕置に怯えている美人の腰元という風情でした。美しく、残忍な牝豹に睨み据えられて、立ちすくんでしまった可憐な餌食の牝鹿、といった方がよいかも知れませんが。もうすぐ彼女は牝豹の牙でむごたらしく引き裂かれて、むさぼり食われてしまうのです。

義姉は、わざと落ちついた調子で切り出し

ました。

「ちょっと、お前に訊ねたいんだけど」

「はいッ、若奥様、何でもございましょうか」

「ほかの看護婦達の話だと、お前はとても上等な時計をもっているんだってね」

森川はサッと顔を硬ばらせました。

「ハ、ハイ、若奥様、イエ……あのう」

「どうなの、持ってるの、持っていないの、はつきりお言いッ」

まるで検事の取調べです。

「ハイッ、あのう、持っておりますでございます。若奥様」

義姉は皮肉に口もとをゆがめて

「そう、正直に白状したわね。これにまちがいないわね」と診察衣のポケットから女持ちの腕時計を出しました。

「まあ、若奥様……」

「何がまあよ、森川ッ、これは私のより上等よ。まず、五十円以下じゃ買えないわね。大体、お前のお給料はいくらなの」

「ハイッ、月に二十円頂いております、若奥様」

「フン、そのお前が、どうしてこんなに身分不相応なものを持ってるの。まさか泥棒したんじゃないわね」

「ハ、ハイッ、そうではございません、若奥様」

「サア、森川ッ、かくそうだったってだめよ、お前と若先生とのことについては全部証拠を私はつかんでいるんだから」

森川は、観念したのか、素直に、

「申しわけございません、若奥様」とただ恐れ入るばかりでした。

「森川ッ、お前は本当なら女工か女中にでもなるところを、うちのお父様のお情けで看護婦にして頂いた女のくせに、よくも恩を仇で返すようなことができたものね。奉公人の分際で何て生意気な女なの、お前は」

「何とも申しわけございません、若奥様、わたくしが悪うございました。どうかお気のすみますようにお仕置して下さいませ」

私は、教養のある義姉がまさか手を出すとは思いませんでした。しかし、次の瞬間、ピシャッというはげしい音とともに嫉妬に狂った義姉の手が、看護婦の制服、制帽姿の森川の頬を打ちました。つづいて何度も派手な平手打の音。でも、森川はただ直立不動のまま無抵抗に殴られているだけです。それが一層義姉を激昂させたのでしょう。

「お前のような女は殺して骨をしゃぶっても

あき足りないわッ」

言うが早い、森川を床にころがして、顔といわず胸といわず腰といわず腹といわず、ところどころ堅いハイヒールの足で蹴りはじめました。さすがに今度は森川も痛さに耐えかねて

「お許し下さいませ、お願いでございます。お慈悲でございます、若奥様」と悲鳴をあげています。私も、ほかの医師たちに聞こえてはと気がかりになり、

「姉さん、もういいでしょう。これ以上やったら森川は死にますよ」と、とりなしてみました。

「死んだってかまわないわよ、看護婦の一人や二人」と言いながらも、姉はしばらく蹴るのをやめて、床に横たわって涙を流している看護婦姿の森川の腰のあたりを片脚で踏みつけていました。がやがて、急に思いついたように、森川を立たせました。じっと彼女を睨んだ義姉は、いきなり

「森川ッ、お前、まさか妊娠してはいないわね」とするどく訊ねました。森川は、ぼっと顔を赤くして

「ハ、ハイッ、そんなことはございません」とうつむいて答えました。

「お前の言うことは信用できないわ。こっちへおいでッ」

義姉は邪慳に森川の腕をつかんで、無理やりに診察室の方へ引きずって行きます。

「あんまりでございます。若奥様、お許し下さいませ、看護婦も人間でございます。犬や猫ではございません」

今度だけは、森川もはじめて抵抗しましたが、義姉は有無を言わず診察室の方へ彼女をつれて行ってしまいました。やがて、長い悲しげな悲鳴。私は、自分の復讐の薬が利きすぎたのに愕然としました。

しばらくして、涙を眼に一杯ためた森川を従えた義姉がかえってきました。今度は少し落ついた様子です。

「さすがに、妊娠はしてなかったわ。でも」と姉はまたきびしい調子で森川に言いました。

「森川、お前これで許してもらえと思ったら大まちがいよ。こんな教育のない、身分の卑しい女に主人をとられるなんて、思っただけでも気が狂いそうだわ。もうこんな女の顔見たくないわ。森川、今晚ひと晩はお前をお庭の木につないで雨に打たせてやるわ。すぐ下って、ゴムの雨合羽と長靴を着けておいで

ッ

あんなにひどい目にあわされて、女として最大の辱しめを受けながらも、長年の習性で「失礼いたしました。でございます、若奥様、では下らせて頂きます」

と、うやうやしく最敬礼するのでした。やがて森川は、あのゴムの雨合羽、ゴム長靴に身を固めて入ってきました。義姉は、彼女をきつく後手に括ると、縄尻を私に渡して

「三郎さん、この不忠者をお庭につないで下さいな。森川ッ、今夜ひと晩雨に打たれてゆっくりお前のした事を考えるといいわ。昔ならお手打ちものよ」

と言った義姉は出て行きました。私は、もう日の暮れた雨の庭に森川をつれ出し、楓の木に縄を括りつけました。雨合羽が濡れて電灯の光に黒く光っていました。

「おい森川、お前はまさか僕が姉に告げ口したとは思ってないだろうね」

「ハイ、三郎様、あなた様はそんなことをなさるお方ではいらっしゃいませんもの。わたくしはどのみち、若奥様からきびしいお仕置をお受けする運命だったのでございます。どなたもお恨みいたしません」

この、人を疑わない純情な森川の清い眸に

ユニホーム物語

美わしき乙女の制服

川崎進一

制服というものがいつ頃から、どこで、どのようにして発生したかは知りませんが、少くとも最近の制服は、集団としての統制の必要上、あるいは能率の点からみて規格といった点を抜きにしては考えられますまい。こうした必要性の上に立って、制服はますます多くなってきました。

若い女性の一番美しい姿、それは彼女等が職場で真剣になって働いている時だと思えます。それは動作に、寸分の無駄がないからです。そうした職場における制服には遊びの時につける無駄なアクセサリは、かえって美しさを害うように思われます。例えば、ペチコートで張らせたスカート、あくの強いお化粧等は、まことに不自然に感ぜられます。制服を着けている時は、常に個人個人が、その会社の代表者と感じている必要はありません。

一人一人にあってみれば、別にどうとい

った個性もない女性でも、集団として統制された女性の一群には、私は常にハッとさせられるのです。

雑然たる服装のホステス達の並いるバーやキャバレーに、私は何の魅力も感じません。喫茶店やレストランに、もしまちまちの服装のウェイトレスが雑然としていたら食欲も起らないのではないのでしょうか。一斉に揃いのユニフォームで、お給仕されると、つい余計に注文したくなるものです。

このウェイトレスの制服の色と食欲には大きな関係があるとのこと。ものの本によれば、薄紫系の色は概して食欲を減退させるといわれています。殊に紫がかった赤は食堂の制服には禁物であって、一番食欲をそそる色は桃に似たクリーム色といわれています。

血圧を下げる色調はブルー系、オレンジ系は血圧を上げるといわれますし、緑は心

見つめられて、私は激しい悔恨の情に襲われました。私は、自分がやはりこの女を愛していることを知りました。でも、卑劣な私は、どうしても自分が彼女を裏切ったとは告白できなかつたのです。

「森川、僕は、僕は……もうお前とは絶対会わない……」

と、わけのわからぬことを口走って、その場から私は逃げ出しました。それでも病院の窓から、雨に打たれている雨衣姿の森川を私は何度も見つめました。

島田の話によると、その夜、執念深い義姉は雨中にカサをさして庭に出て、ゴムの雨合羽姿で括られて手出しのできない哀れな森川を、またまた手ひどく折檻していたそうで森川の切ない悲鳴が夜おそくまで聞こえていたとのことでした。

私の貧しい回想はこれで終わります。数日後兄が帰ってきた時は森川は、もう解雇されたあとでした。彼女はその後、派出看護婦になったとか風の便りに聞きましたが、それからの消息は一切わかりません。

雨の中で、ゴムの雨合羽、ゴム長靴に身を固めて、後手に括られ、ゴムの頭巾をまぶかに被った森川八重の可憐な姿が、今でも私の網膜に焼きついています。

(終)

をなごませる色。こう考えてくると、制服の色一つにも、何かと心を配らねばならないと思われまふ。

さて制服といえば、日常いろいろなものが想い出されます。学生生徒の通学制服はおくとして、デパートの女店員、看護婦、ウエイトレス、銀行の女子店員、電話交換手、工場作業員、石油サービスステーションのフラワーガール等々。

しかし、さっそうとして頼もしく、そして美しく見える制服、それは、エア・ホステスあるいはバスガールをもって止どめをさすでしょう。彼女達の制服には、清潔感、品格、かなりの身体的運動をとまなう職場の実用性等が、長年にわたる経験から巧みに調和されているからでしょう。

「あこがれのユニフォーム」という言葉が使われます。あこがれといえば、まずスチューデントのそれと解釈してよいかと思われまふ。それは毎年変わってゆくものではなく、エール・フランスでも、BOACでもスカンジナビア航空でも、いずれも永年にわたりほとんどその型をかえず、それぞれの会社の特徴を誇らかに示しています。

型はとみれば、ほとんどが、オーソドックスなテーラードスーツであり、ウエストは十分にしぼり、襟は白、袖を細めにし

て、服の色は、ブルーか紺にほとんど一致しています。理知的で無駄なく、機敏に、しかもお客様に信頼と安心感を与えるべくあのキリリとした格調高いエアホステスの制服が生れたのも、超スピードの世界、空の案内役としての必然性からでありまふ。

こうした点は、スピードの点でいささかひけ劣ると同様、格調の高さにおいて差はあるとはいえ、スチューデントの制服よりはるかに長い歴史をもつ、バスガールの制服にもそれを見出すことができます。

しかし、私にはこうした美しさの一面の外に、何か心をひかれるものがあるのです。個性を自由に抑圧されたような、被虐的な要素が感ぜられるのは、私だけなのでしょう。

何はともあれ、制服というものは、ネコの眼のように変るパリモードとは無関係なのが本来の姿なのです。何よりも団体生活をより規律正しく、より機能的にするのがその本来の目的であって、それを着ている者、自らがその制服に誇りをもつことが大切です。

その心の誇りが見る者をして、憧憬の念を抱かずにはおられない境地に到らしむるのだといつては過言でしょうか。

女子寮の雪合戦

高木紀久枝

今日は楽しい休日です。お寝坊をして、暖かい寝床から起き出して見れば、戸外は見わたすかぎりの銀世界。昨日から降り続いていた雪が一晩の内にふんわりと降りつもったのでしよう。

皆と一緒にストーブを囲みながらにぎやかな朝食が終るとゴム靴をはき、スカーフを頭にかぶったりなどして、数名が庭に出てきました。まだ時折り綿のような雪が舞い降りていますが元気いっぱい私等はそれほど寒いとも感じません。始めは雪だるまを作るやら

雪を踏み固めた上をすべったりなどしてはしゃいでいますと、三人、五人と仲間が加わって益々にぎやかになってきました。暫くすると、そんなことにも倦きたらしく、誰かが

「今度は雪合戦をしましょうよ」

といい始めます。勿論おてんば連中の多い女子寮のことですから、誰にも異存はありません。

「あら、いいわ、賛成よ」

「ワァー、面白い、やりましょう」

と二つ返事で、早速二階組と階下組の二組

に分れました。

「さあ、始めましょう、よくって?」

「いいわ、オーケーよ」

たちまち若い女ばかりの華やかな雪合戦が始まります。赤、青、黄、色とりどりの手袋をはめた両手に雪をつかんで勢よく相手方に投げつけるのです。それが鮮やかな色彩のセーターやスカートにあたると、まるで花がさいたようにパッと飛び散ったりします。それでも女の力で投げる雪ですから、顔にまともに当りでもない限り、痛いと思うようなこ

とはありません。皆は頬をリンゴのように紅潮させて白い息をはき乍ら、キャーキャー、ワーワーと、黄色い声を出し合って大騒ぎでした。寮内に残っている友人達もいつの間にか窓から顔突き出して笑いながら眺めています。それを見ると誰かが大声で叫びました。

「何をボンヤリ見ているのよーッ、早く応援に来てーッ」

「気がきかないわねーッ」

すると窓からも応答が聞こえてきます。

「ようし、行くわよ、待っててねーッ」

「加勢に行くわーッ」

やがて寮内から数名ずつかたまるようにしながら飛び出して来た友人らは、二階組は二階組へ階下組は階下組へ加わって、早速雪の投げ合いが始まります。こうなれば割合おとなしい連中も仲間はずれになるのがいやなのか、それともおてんば連にけしかけられたのかは分かりませんが、次々に雪合戦に加わって来ましたので両軍ともほとんど全員出動の大合戦になっていました。

女子寮の庭にはバレーボールコートが二つあり、かなりの広さですから、これだけの人員の雪合戦にせまくて困るようなことはありません。

ません。その両端をそれぞれ両軍の陣地に見たてて陣地の構築が始まりました。雪を陣地の前に高々と盛りあげてまるでバリケードさながら、そのかげである者はせっせと弾丸を作っては山のように積み上げています。中には寮内からシャベルまで持ち出してきて、皆一生懸命なのです。

私は階下組でしたが、見わたすと二階組も私等の方を偵察しながら同じようなことをしています。それが一段落するとどちらからともなく攻撃が始まりました。元気のよい連中が数名で、両手に弾丸をつかんだまま「ワーッ」「ワーッ」と嬌声を出して攻めてきます。勿論私等もそれをじゃましようと雨あられのように雪の弾丸を投げつけるのですが、それをかいくぐった相手方は、バリケード越しに味方の陣地に弾丸をたたき込んで逃げに行きます。それをまた数名で追っかけて雪をあびせかける等大変な大乱戦になってきました。

ふと気がつく、いつの間にかまた烈しく雪が降り始めて遠くは見えないくらいに綿雪が舞っています。皆も頭からまっ白に雪をかぶってまるで雪国の光景さながら、それでも誰も雪合戦を中止しようとはしません。ます

ます元気いっぱい雪を蹴ちらしながら、逃げたり追っかけたり雪を投げつけたり、どうかするとすべって転んで雪の中に半分身体が埋まるやら、おしまいには敵か味方か、とっさには判間を間違えるような混戦なのです。

こうなれば、普断でさえ女同志の「降参ごっこで」投げたり転がしたり、馬乗りに跨がって押えつけるなど、あられもない真似を平気でやってのけているお転ば連中の多い女子寮のことですから、ただ雪を投げ合うだけの雪合戦に終るはずはありません。案の定、誰かが逃げる拍子に足がもつれて深々と積もった雪の中にドウト、うつぶせに倒れると後から息をはずませながら、追いつがっていた一人が得たりとばかりに飛びかかって背中の中にがばっと勢いよく馬乗りに跨りました。

「ワー、卑怯よ、放してッ！」

組み敷かれた女は、あわれにも顔を雪の中にめり込ませたままびっくりして跳ね起きようと手足をばたつかせています。赤いチェックのスカートがまくれ上って肉付きのよい白い素足が、太もものあたりまであらわになりピンクのゴム靴が雪を蹴っています。すぐそばでは敵味方入り乱れて雪の投げ合いをしています。ますが、私等の女子寮では一対一で組み打

ちを始めたら誰も手を借さない慣習になって
いますので、今日の場合も組み敷かれた女を
誰も助太刀しようとはしません。

「さあ！ どうだ、降参か」

馬乗りになった女は、誇らしそうに黄色い
ネッカチーフで包んだ顔をうつむけて両手で
ぐいっと相手の頭を力一ぱい押えつけるので
す。

「ウッ！ つめたい！ 助けてっ！ 降参す
るッ」

顔全体をまともに積雪の中に押し込まれて
は負かされた方はたまりません。やっこのこ
とでそう叫ぶのがせい一ぱいでした。

「降参するなら許してやるわ、そのかわり今
日は失格よ、いい？」

「ええ、ええ」

そこで組み敷かれていた女はやっと起き上
って、全身雪まみれになりながら一人すごす
ごと寮に引き退って行きます。それをきっか
けにあっちこちでお転ば連中の「雪中の降
参ごっこ」が始まりました。降りしきる雪の
中でもんどり打って転りながら烈しく雪をは
ねてばしるの格闘なのです。中には敵陣の隙
に乗じて飛び込んでわざとおとなしくて弱い
少女を追い回わし、遂にとらえてお得意の押

さえ込みで散々な目にあわせている勇敢な友
人もいます。敵方のデブの満子もその一人で
した。「キャー、キャー」と黄色い色が聞こ
えると思つてふりかえって見れば、いつの間
にか侵入してきた満子に、いつかもこっぴど
くやつつけられたチビのチーちゃんが、はが
いじめにだきすくめられて逃げようとあはれ
ています。きつと満子は以前の押え込みに味
をしめて、また弱いチーちゃんを獲物にする
つもりなのでしょう。

私はチーちゃんに加勢するわけにもいかず
見ていますと、あつという間にチーちゃんの
足がすべって、ドシーンと尻もちをつきまし
た。何と皮肉なことに、そこは初めに私等が
踏み固めてへって遊んだ場所なのですから、
雪の表面はカチカチでつるんつるんしていま
す。そんな所に転がされたのではチーちゃん
もまったく今日はツイていません。間もなく
満子は完全にチーちゃんを雪の上に押さえ込
んでいました。わざとスカートをたくし上げ
るようにして太もものつけ根までむき出しに
した満子のムチムチした内股の間に仰むけに
なったチーちゃんの可憐な顔がギューッとは
さまれています。

「ワァー、苦しい、重いわよ」

チーちゃんはそんな叫び声を出しながら、
細く小さい足をバタバタさせてもがくのです
が、体重も力量も比較にはなりませんからチ
ーちゃんはおわれにも満子の全身の重みでぐ
いぐい細かい喉首を絞められるばかりなので
す。それでも身体に似合わず意外に勝気な点
もあり、そんなひどい目に会わされながらも
まだ降参をいいません。

「フフ……私ふとってるから重いわよ、おあ
いにくさま」

満子は弱いチーちゃんを、どっしりと押さ
え込んだのがさも嬉しいらしく、丸々した大
きい顔をにっとほころばせながら勝ち誇った
表情でした。

私は二人の組み打ちに氣をとられてあまり
夢中になって見てれてばかりいたものではな
ら、いつの間にかすっかり油断をしていまし
た。いきなり横あいから二つ三つ雪の弾丸が
さつと私の頬をかすめるようにして飛んでき
たかと思うと、その中の一つが運悪く私の頭
へパシッとあたってパッと飛び散りました。

「痛い！」

私は思わず声を出して振り向くと、攻撃を
しかけて来た敵方の数名がキャッキャッとい
ながら、もう雪を蹴立てて一目散に逃げて行

きます。よく見ればその中に絹子がまじっているではありませんか。私は彼女の姿が目にとまると何となく激しいサジスチックな衝動にかられました。ましてさっきからデブの満子が弱いチーちゃんを組み敷いた光景を眼の前にしてかなり取りのぼせ気味でしたから、なおさらだったでしょう。

「ようし、やったわねッ！」

私はそういうと急にゴム靴をぬぎすてるのももどかしく赤いソックスだけのはだしになって、いきなり絹子の後を追っかけました。普断ならさぞつめたいでしょうがその時は夢中でしたからそうも感じません。私はそくそくと両足が雪の中に埋まり込んで意外にも走りにくいのをじれったくながら、それでも絹子の走る方へ先回りをして追いつめようとしてます。絹子はそれに気がつくこと

「イヤー、助けて！ かんにんよ」

などと叫びながら急に方向を変えて陣地とは違った方へ逃げて行きます。私は息をはずませながらしつこく追ひすがりました。ゴム靴をぬいではだしになっていきますのでスピードは断然私が速く、見る間に追いついて行きます。とうとう彼女は逃げ場を失って小さい木が何本か植えてある一寸したしげみの後ろ

へ回り込んだ所をやっととらえました。

ここはせまい細い空地になっているのです。が誰一人まだ足をふみ入れた者もないと見えて足あと一つなく、白い雪がふんわりと敷きつめたように積っています。

「さあ！ とうとうつかまえたわ、もう逃がさない」

私はそういつて絹子をうむをいわずその場にねじり倒しました。彼女はまだ満十六才のあどけない顔立ちの少女ですから、おてんばの私にかかつては、ひとたまりもありません。あつという間に深々と降り積もった雪の中に埋まるように転って私の膝の下に押えられています。

「イヤーよ、放してッ！」

全身雪まみれになりながら、それでもやるきになって下から私を突きつけるやうと手足をばたつかせます。鮮かな紺青色のスカートがぱつとめくれて、すっきりと伸び切った白く可愛い素足が丸い膝よりまだ上の方までしどけなくあらわになっていました。いつしかゴムの雨靴が片方脱げ落ちてソックスもはいてない彼女の片足は全くのはだしなのです。私は絹子を仰向けに押さえつけると胸のあたりへむんずとばかり勢よく馬乗りに跨りまし

た。もうこうなればしめたものです。私のスカートもとくにたくれ上って、両足がもものあたりまでむき出しになり膝から下は柔い雪の中にめり込んでジーンとする程のつめたさなのですが、そんなことにかまってはいられません。私は片方ずつ膝を浮かせながら、絹子の腕の付け根から肩のあたりをぐっ、ぐっと踏み付けにしました。こんなに降り積もった雪の上で同性を組み敷くのは、私にとっても初めての経験ですが、普段と同じ押さえ込みをしようと思っていましたので、その用意なのです。絹子はもういくらじたばたしても駄目だと思いあきらめたのでしょうか、悲痛な表情で私を見上げながら、

「かんにんして、降参よ！」

といいます。

いつもなら降参といったらずぐに許してやるのですが、その時の私はせっかく組み敷いたばかりなのに放してやるのが惜しくてなりません。少し意地が悪かったかも知れませんが、

「あらだめよ、そんなにすぐ降参をいっちゃ」

といいながら、すかさずにじり上って絹子の顔を内股でキッチリとはさみ込みました。

いくら何でも押さえ込みもせずには彼女を許してはやれません。彼女がかぶっていた赤いスカーフは、後ろへずり落ちてバラバラに乱れた短い髪が雪でグッショリと濡れています。

「うっ！ ひどいわ、苦しいわよ」

見れば完全な押さえ込みで太ももにはさまれた彼女の顔は、口から下をたくれた私のスカートに蔽いかくされて鼻から上だけをやっと股の間からのぞかせた、異様な姿になっています。

また烈しく雪が降りしきり始めました。水気を含んだ綿雪が間断もなく舞いおりて一面の空間までが真っ白に見える程でした。それが私と絹子の上にも遠慮なく降りかかるのですからたまりません。上に跨っている私は顔をうつむけることもできるのですから



まだよいとしても私の足の間にはさまれて上を向いたなりの絹子はどうにも避けようがないのです。見る見るうちに私の両ももの間にキッチリはさみこまれた彼女の顔の上にたえ間なく綿雪が降りかかって、うっすらと積もってくるではありませんか、眼にも鼻にも眉毛にもたちまち時ならぬ雪の花がさいたようです。

「ああっ！ あっ！」

絹子は小さく叫びました。もう眼を開いてはおられません。固く眼をつぶったまましきりに顔を動かそうともがいています。たくれたスカートの下で丸い顎がクリクリッと動きます。

「うっ！ つめたいッ！ やめてッ！」

絹子は顔に降りつもる雪を手ではらいのけることすらできず、とうとう悲鳴を上げました。でも私は彼女の顔に降り積もった雪をはらいのけてやろうとはせず、わざと意地悪く悲痛な表情を見下している気になっていました。その時ふと、私の頭に急に思い浮かんだことがあります。昨年の八九月合併号に載っていた三隅千恵子さんの「高

木紀久枝さんへプレゼント」のことでした。

あれには私が絹子を馬乗りに組み敷いた美しい挿絵が何枚も出ていましたが、その中の第四図の押さえ込みと寸分違わないポーズを現在の私は実際に行っているわけなのです。女が女の首の上に跨って顔を内股の間にはさみ込みは何と素晴らしいのでしょうか。千恵子さんはこう書いていらっしゃいました。

「高い所から眼をつぶって飛び降りるような気持で思い切って顔の上にお乗りになっては如何でしょう、それはそれはすごいばかりの快さですよ」と。

私はそれを思い出すと、お恥かしいことながら絹子を押し込んだついでに何となく顔の上に乗ってみたい衝動を感じました。今までもそんなことを考えたことは何度かはありますが、悪いような気がしてどうしてもできなかったのです。でも今日は絹子と二人だけで誰にも見られていないことが、一そう私を大胆にしたのかも知れません。それに降りしきる雪が普段とは違った気分をかり立てたのでしょうか。

とにかく私は前後の考えもなく、何かに憑かれたように無我夢中で一歩前にじり上るとうっすらと雪をかぶっている絹子の顔の上に

ペタッとまともに馬乗りに跨ってみました。

私の胸は異様な興奮にかられてドキドキと高鳴っています。一瞬、パンティー一枚の私のヒップは丁度水びたしになったようにジュクッと濡れてヒヤッと凍りつく程のつめたさがズーンと伝わって来ます。後から考えてみれば雪をかぶった顔の上にじかに跨ったのですから、そうなるのが当然でしょうが、その時の私はいささかびっくりしました。

「う……うっ！」

絹子は口も鼻も私のズブ濡れのヒップに完全に敷きつぶされて声も出ません。こんなひどい目に会わされた彼女にしてみれば、どんなにつらく苦しい思いをしたことでしょう。

柔い雪の中に頭全体がすっぽり埋まったまま私のたくれたスカートの間からやっとなら上だけをのぞかせたあわれな格好で、絹子はかすかに呻きました。もうこれで普断から一度はやってみたいとひそかに望んでいた、三隅千恵子さんの「最後のとどめ」の真似がどうにかできたわけですから思い残すことはありません。私は大急ぎで絹子の顔の上からぱっと飛びのきました。

「絹ちゃん、ごめんね」

といえば、やっと許されて自由になった彼、

女は、

「ひどい人」

と顔を伏せて、肩で早い呼吸を繰り返しながら手袋をはめたままの手の平で、ぐっしょり濡れた顔や唇のあたりをしきりにぬぐっています。私は女だてらにあまりひどいことをしたのが後めたく、絹子が可哀そうな気もしましたが、今更どうしようもありません。やっとな上体を起こそうとしている彼女をわざと見ないようにして、私はもとの場所へ引きかえして来ました。急にソックスだけのはだしの足やじっくり濡れたパンティのつめたさが身にしてみても、全身冷え切った感じがした。

見れば雪合戦の人員もぐんと減ってまばらになっています。降参をいって引き退ったり乱暴な事のきらいな連中は途中で逃げ帰ったのでしょうか。気がつくときさっきのデブの満子にニヤニヤしながら近づいてきました。おてんばでオッチョコチョイの私でも、彼女とともに戦っては体重と腕力負けであまり勝目がありませんし、内心では「困ったことになったわ」と思いながら用心していますと、満子はいきなり私にかかって来る風でもありません。

「紀久ちゃん、どうしたのよ、はだしになんか

なつて、つめたくないの
？」

といいます。

「つめたいわよ、今絹ちゃんを追っかけて、やっつけて来たところなの」

「あら、そう？ 降参させ
た」

「ええ勿論よ」

「あらあら、紀久ちゃんもやるわね」

「それより、貴女はチーちゃんをどうしたのよ」

「まあ、見てたのね、もうとっくに負かしたわよ」

「押さえ込みででしょう」

「ええ、そうよ」

「貴女の押さえ込みにかかっちゃ、たまらないわ」

「肥ってるからっていうんでしょう？」

「あら、そんな意味じゃないわ」

「ホ……、コマ化さなくてもいいのよ、今度は紀久ち



ゃん、貴女を押さえ込んで見たいわね」

「あら結構よ、たくさんだわ」

「いいましたが、満子は急に私を相手にする気配を見せるのです。私は素早く逃げ出そうかとも思いましたが、そんな卑怯な真似もできません。ふと一計を案じて私は、

「満ちゃんだめよ、ほら〇〇さんが呼んでるわ」

といいながら、満子の後の方をゆびさしました。

「あら、何よ」

満子は一瞬氣勢をそがれて、後を振りむきました。この時ばかりは満子も完全に油断して、すっかり身体がおるすになっていきます。私は「今だッ！」とばかりにぱっと身を翻えすと、満身の力をこめて満子の背中をドシーンと突きとばしました。

「あっ！」

満子はいきなり不意をつかれたのですからたまりません。足がもつれて大きい身体が前にのめったかと思う間もなく、ドサッとばかりに雪の中に埋ま

りながら、ぶざまにうつ伏せにひっくりかえりました。パツと雪が飛び散って、めくれたスカートの下からは、むちむちと肥えた太い二本の素足がしどけなくむき出しになっています。

「しめたっ！」

と、私は間髪を入れずに躍りかかって真赤なセーターを着た彼女の背中にむんと勢いよく馬乗りに跨りました。

「ああっ！ ずるいわよッ！」

満子は勝てるつもりから、逆にどっしり組み敷かれたのが、さぞくやしかったのでしょう。矢庭にむくむくっと激しく身体を動かして跳ね起きようとします。私もうっかりしていれば、腕力の強い彼女に跳ね返されますから必死でした。両手で彼女の後頭部の髪をわしづかみにして、力まかせに相手の顔を深々と積んだ雪の中に押しつけます。

「ワァッ！」

満子は一声わめいて、しきりに手足をばたつかせています。流石に力量の優れた彼女でも、こうなってはそう簡単に私を跳ねのけることはできません。

「さあ！ 降参か！」

私は両方の膝頭で満子の丸々した肩のあた

りをギューとばかりに踏み敷きながら、二度三度とありったけの力で頭を押さえつけ、いやという程、顔を雪の中に埋まり込ませました。

「うっ！ う……」

「どうだ、降参か！」

「ヒヤッ！ つめたい、コ、コウサンッ」

満子は雪の中から、やっと叫ぶのです。遂に私はデブの満子を負かしました。意気揚々と立ち上ると、雪まみれになった彼女も続いて身体を起こしながら、

「まあ、紀久ちゃん、ずるいわよ。不意討ちなんかかけて」

といかにもくやしそうな表情でした。

「ハハ……、負け惜しみをいったってだめ」

「にくらしい、いつか仇討ちをするわよ」

「何いってるの、かえり討ちよ、おあいにくさまね」

「ようし、憶えとき！」

そうしている内に、皆も雪合戦を中止してぞろぞろと寮に入って行きます。降り積る雪の中で思いきり暴れ回って誰しも満足だったのでしょう。まっ赤に上気した顔が明るく輝いていました。

それにしてもこの日は、私にとっては幸運

の一日でした。それまでも女子寮の友人を馬乗りに組み敷いて首の上に跨り、顔を太ももにはさみ込んでの押さえ込みなら、何度も行ったことがあります。相手の顔の上にまともにヒップをのせてべったり馬乗りに跨った経験はこの日が初めてでした。三隅千恵子さんの「最後のとどめ」をいつか一度は思い切った真似をしたいと念じながら、どうしても実現できなかったのですが、やっと念願がかなえられてこんな嬉しいことはありません。絹子には少しばかり気の毒でしたが、私はこれで愛らしい絹子を完全に屈服させた感じがして心の中が浮々してきます。

その日の晩、おてんば連中が三、四人集まった所で、オッチョコチョイの私は、とうとうかくし切れずに、昼間の絹子との出来事をくわしくしゃべってしまいました。皆は目を丸くしたり感心したりしながら、息をのんで聞き入っています。

「まあ！ ほんと？」

「イヤー、紀久ちゃんったら、やるわね」

「最後のとどめの一番乗りは、紀久ちゃんだったわ」

「あーら、見たかったわ、すごくいい気持ちだった？」

「ハハ……、それほどでもなかったわ、だって雪が降って絹ちゃんの顔にも薄くつもってたでしょう。そこへ乗ったものだからパンテイーがズブ濡れになって、凍りつくみたいにつめたかった」

「まあ！ ホ……傑作ねエーッ」

「じゃ、紀久ちゃん、もうこりこりした？」

「そうでもないんでしょう？」

「そうね、こりこりはしないわよ」

「じゃ、やっぱりいい気持だったのね、うら

やましいわ」

「紀久ちゃん、よかったじゃない？」

等とほめそやすのです。私は皆におだてられて、悪い気持はしませんでした。雪合戦でジツクリ濡れて全身冷え切ったのが原因でしょうか、翌日から風邪を引いて、とうとう三日間も工場を休んでしまいました。

ことによったら女だてらに絹子を組み敷いて顔の上にまともに馬乗りに跨るなど、あま

りあられないひどい事をしましたから、その罰があたったのかも知れません。でも、もうすっかり元気を回復して、毎日出勤していますから、ご心配には及びません。

その内に、何か機会がありましたら、今度は雪の上ではなく、濡れたりなどしない場所で誰かを組み敷いて、もう一度顔の上に乗ってみたいと考えています。もしそんなことが実現するようなことでもありましたら、またお知らせいたしましょう。

ふたたび妊婦マニアへのアピール

「臨月腹」に寄せて

瀬 沼 四 郎

安原さゆりさんの「臨月腹」フォト、（りく）……（りみ）（九月号発表）と（よむ）……（よみ）（十一月号発表）の全二十三葉を入手して、例によって若干の感想を書いてみたいと思います。こうして筆をとった次第です。待望の臨月腹は流石に期待にそむきません

でした。見事に盛り上って前方に飛び出したため、弓なりにそり返った臨月の妊婦の裸像は、何度見てもあきないものがあります。この膨れ上がった下腹に、まるまると大きくなった胎児が入っているのかと思うと、一層想像力がかき立てられます。主婦の友社発行の、

「家庭医学全書」の七〇六ページに、妊娠末期の妊婦の真横から見た断面図があります。その輪郭の線が、（りみ）のうちの真横からのもの——（よむ）の中にもう一葉、非常によく似たのがあります——のシルエットと、とてもよく一致しているのに感心しました。だから写真を見ていると、まるでさゆりさんの腹の中が透けて見えるか、または腹をたち割るかしたように、丸くつき出た下腹にうまく納まっている胎児の様子が、まるで手にとるように目に浮かんで来ます。なるほど、こんな風に腹の中にはまりこんでいるんだな、ということが、よく分ります。妊婦の解剖断面図と見くらべてみる、さゆりさんの「臨月

腹」のこういう鑑賞法もあるということをご参考までに記しました。

次にそれぞれについて、個別に感想を述べます。

第一に、全体として、有志の提供によるもので写真部のとられたものではないので、やむを得ないとは思いますが、同じようなポーズのものが大変多いことです。ことに、あとから分譲されたものの中には、前のものと画面があまりにも似ているものが多いのは残念です。勿論同じ写真でないことはちょっと注意して見れば分りますが、そのことを別にしても、大多数が、腕を上挙げて直立した姿勢を側面から写したもので、手をかえ品をかえてはありますが、変化に乏しいことは否定できません。将来写真部でさつえいされるときには、このようなことは起こらないと思いますが、念のため。

現在二十三歳の妊娠中の読者（九カ月）に交渉中とのことですから、近いうちにすばらしい臨月ヌードが見られると思います。そのときは、正面（真正面）から、側面から、背面からなどのアングルの変化とともに、立ったり、坐ったり、四つん這いになったり、仰臥したり、横臥したりした妊婦の様々な姿態が心ゆくまで鑑賞できるようにして下さい。

第二に、やはりバックの処理が乱雑です。光線の点も、考慮してほしかったものがいく

つかあります。

折角勇を鼓して提供して下さい方には、申しわけないと重々思いながら、苦言を呈することになってしまいました。他意はありませんのでお許し願いたいと思います。

小生の氣に入ったものとしては、（りく）のうち斜め前からの一枚、クローズ・アップによるデフォルマシオンの迫力に圧倒されました。臍がはっきり写っているのもよく、腹部中央線もくっきり出ています。（りせ）、（りみ）もそれぞれよい、（新分譲分にも似たのがあります）他もそれぞれよいのですがことに一糸まとわぬ裸体で、そのために下腹部でカットされているものに迫力があるように思います。勿論そうでないものには、全体の体つきが見られるという利点がありますがしゃがむなり、手や足で隠すなりして、全裸のままとればどうでしょうか。いかに薄く小さくても、パンティはパンティであり、むしろタオルか何かの方がよかった——あらためて全裸の威力というものに感じ入った次第です。パンティをつけると、いかにも人為的で、自然な感じがしないためでしょうか。腹の形でいちばんよいと思ったのは、（よま）のうち、腕を下におろしている一葉です。腕を挙げると、弓状に反りかえった感じは出ますが、乳房が上にひっぱられ、胸から腹にかけて伸びた感じを与えます。この（よ

ま）の一葉は、下腹部でカットされているので、全身の感じがちょっとつかみにくいのが残念ですが、妊婦の膨れた腹の感じがすごく感じられる点で（腹もいちばん大きいようです）とても氣に入りました。

とにかく、影浦氏によれば、「長かった五年間」ということですが、小生が三十六年十二月号にはじめて投稿してから二年たらず、三十七年八月九月号の「妊婦マニアへのアピール」から約一年で「臨月腹」フォト分譲が実現したのです。このような「実におどろくべき」写真をあえて分譲されて、マニアの期待に答えられた代理部の勇氣に、深い謝意を表したいと思います。

安原さゆりさん、ご苦労さまでした。分譲前のおそろべき臨月腹を惜しげなくマニアの鑑賞に供せられたあなたは、すでに生まれたであろう愛し子とともに、ごきげんよくお暮し下さい。本当にありがとうございます。あなたの臨月腹は、好事家の手に、いつまでも残って鑑賞されつつあるでしょう。さようなら。

妊婦マニアの皆さん、ともどもに、われらの今後の発展のために、祝杯をあげようではありませんか。小生もまた、最近ぞくぞくと名乗りをあげるマニアの仲間たちに伍して、勇気づけられ、勇氣百倍してこの道に貢献したいと思う一人です。

（終）

＼私のイメージ＼

夢の中の妊婦

瀬沼四郎



夢を見た――

――薄い霧のようなものの中から急に明かるいところへ出たので、それ以前がどうなっていたのかさっぱり分からないのだが、気がついてみると、ボクは羽村京子さんと一緒に居て、一面の壁が上から下まですっかり一枚のガラス張りになった、広さが五十平方メー

トル程のとても明かるい部屋の中で、彼女と向かい合って応接セットに坐っているのだ。ホテルかアパートか知らないが、勿論一度も来たことのないデラックスな部屋で、随分オカネがかかるだろうなあと思うのだが、ちっとも気にならないから妙だ。自分がどこに居るのか全く見当もつかない癖に平然として

いるのもおかしいが、ボクも羽村さんも一度だって会ったことはないのに、ボクは彼女をチャンと知っていて、彼女もボクを知っているらしいのは益々妙だな、と思ったが、夢の中なんていつでもそんなものなんだろう、分からない矛盾だらけのこと許り起こっても、変だな、と思うだけで、別にどうということ

もないのだ。

羽村さんは、クリームと茶の細い縞柄の妊婦服をゆったり着て、柔らかな椅子に深々と腰をかけ、まるで小山みたいに膨らんだ大きなオナカを突き出して後ろにもたれている。お白粉っ気一つない素肌が抜けるように白く、縞みたいに光沢のあるキメの細かい皮膚が、まるで、十六七歳の少女のように若々しいのだ。こんな可憐な美人だとは思っていなかったが、それにしても年令のことが大分違うんじゃないか、と気になったものだから、

「随分お若いですね」

と、つい聞いてしまった。彼女はその可憐な顔をちょっと動かして、

「二十歳よ。もっとオバアチャンだと思ったの？」

と、こちらの考えたことが分かるようなことを言って、ひどくコケティッシュな目付きをして笑うのだ。そう言われると、変だ、変だと思っっている癖に、そうかなという気がして何となく納得してしまうから妙だ。

それでボクは、彼女の盛り上ったオナカのことを聞くことにして、

「何カ月ですか」

と言うと、

「臨月……もう過ぎたかしら。今日が予定日なのよ」

と即座に答えた。羽村さんの答えはいつも明快で、簡潔で、その度にひどくコケティッシュな顔付きをするのだ。何だか気になったが、親愛の情を表わしているのだと思って、我慢することにした。

しばらく黙っていると、彼女が急に立ち上って、

「カンチョウして下さる？」

と、いきなり聞いた。(浣腸?……だってボクは浣腸器なんて持っていないし、それとも彼女が持っているのかな?)とあわててキョロキョロ探していたら、

「あら、いやだ……わたし、カンチョウじゃなくてカンショウして下さる? って言ったのよ」

と、あかい顔をして言った。なぜあかい顔をしたのか分らないが、それよりボクが聞き違えたことが、どうしてこんなにすぐ分かったんだろうと、不思議に思って、彼女の顔を見ると、

「ねえ、カンショウして下さる？」

と、も一度聞いた。なる程「浣腸用妊婦」じゃなくて、「鑑賞用妊婦」って訳か、

「勿論です。ええ、お願いします」

と言ったが、いよいよ待望の妊婦のオナカが見られるというのに、胸がドキドキもしないし、頭がカーッとなっても来ない。おかしいぞ、こんな筈はないんだが、と思っても、馬鹿に張りのない、だらけたような気持ちでいるのはどういう訳か、困ったな、困ったなと思っていると、彼女はズンズン部屋の真ん中へ歩いて行って、洋服を脱ぎ始めるのだ。

鑑賞して下さる? っていうのは、脱いでもいい? ということだったんだな、と、やっと分かって、感心して見ていると、彼女はいつの間にか、すっかり脱いでしまって、不思議なことに脱いだ洋服が、どこにも見当たらないのだ。

「さあ、鑑賞して」

と、クルリとこちらを向いたのを見ると、オナカはものすごい膨れようで、真ん丸い白い大きな腹に、青い静脈が一面に透けて見えて実にグロテスクに見える。アクビをしたような臍の上下に褐色の中央線がタテに走っている。乳首の周りは濃い褐色になって、すごいボリュームの重そうな乳房が胸にくっついていて。それにしても、このオナカの大きさはどうだろう。

「わあ、すごく大きいんだな」

と、思ったままが口に出てしまうと、

「ヒンタイなんですって」

と、彼女は何ごともなさそうに言うのだ。

(品胎って、三つ児のことなんだな。なる程大きいのも当然なんだな)と、今度はスララと分かったのだから、自分でも妙だと思った。

「一体腹囲は何センチ位なの？」

と、好奇心を起こして聞いてみたら、

「一メートル二十センチ位あるのよ」

と言って、それから、

「ちょっと待ってね。今やってみるから」

と言うので、黙って見ていたら、息をウーンと吸いこんで、グッと力んでみせた。ものすごく膨れ上った腹がもう一段グンと丸く前に飛び出して、グロテスクなオナカが、もう一つグロテスクになった。

「こうした時に測って、一メートル二十センチなの」

と説明をつけ加えてくれる。

それから、彼女は横を向いたり、向こうを向いたりして、いろんな角度から妊婦のヌードをボクに鑑賞させてくれた訳だが、まったくそのすばらしいオナカには圧倒されてしま

った。

坐ったり、しゃがんだり、四つん這いになったり、寝そべったりしたところも見せてもらったが、あの大きいオナカが、ゴロゴロとあっちに垂れたり、こっちに、圧しつけられて歪んだりする様を見るのは本当に楽しかった。ボクはあんな見せ物なら、何度でも見せてほしいものだと思っている。

ただボクが一つ不思議に思ったことは、オナカが余りすごい膨らみようなので、オナカが大きくなった乳房のすぐ下まで来ているものだから、よくそれで苦しくないと思っ

て聞いてみたら、

「子宮底が肋骨より上に来てるんですって」ということだったが、これは彼女の説明によるところだ。(子宮は女の体の内側に下から、つまり壺を逆さに伏せたようについているので、子宮底は子宮が膨れるに従って上方に上って来る。彼女の場合子宮が余り大きくなり過ぎたので、胸郭の中まで入りこんで来た)という訳だ。

女の体の中に逆さに袋がついているというのも面白いが、そんなに大きくなったら、腸や胃や肝臓などはどこに行ってしまうのだろうか。そう言えば彼女は、ボクの見てる前では

何一つ飲み食いしなかったけれども、子宮でオナカの中が一杯になっちゃって、胃も腸もなくなっちゃったんじゃないか、ボクがカンチョウと言ったときにあかい顔をしたのも、それに関係があるんじゃないか、などと、んでもない余計なことが頭に浮んで来て離れないのだ。

夢の中ではボクの考えがどうしても本当に思えて来て、マジメにそれを考えていたものだ。今もって、羽村さんがどうしてあんなに若かったのか、どうして品胎なんかになっていたのか、さっぱり分からないが、小柄で可憐な美少女のようだった彼女が、どうしてお逃れ向きにも、品胎で臨月で、しかも予定日だなんて、あんな大きなオナカをしていたのか、尚一層分からないのである。

それから彼女は、どこから出したのか、万年筆のようなものを出して、その先をオヘソにネジ込んだ。驚いたことにそれは三センチ位もオヘソの中に入ってしまったのだ。彼女が手真似で合図するので、覗いて見たら、その万年筆のようなものは中が望遠鏡のようになっていて、腹の中が見えるのにはびっくりした。

三つの胎児がヘソの緒でつながって、まる

で風車の羽根のように、水族館の水槽の中のように明かるい羊水の中をグルグルと廻っている。あんなに廻ったらヘソの緒がもつれてしまいやせぬかな、と心配していると、急に止まって、今度は反対の向きにぐるぐると廻りはじめた。あんまり珍らしいので感心して見ていると、彼女はサッと望遠鏡(?)を抜き取って、どこかにしまってしまった。見ると彼女の臍は、前と同じで、アクビをしているように見えるところも、ちっとも変わりがなく、この臍がどういうしかけで、あんなものがネジ込めるようになっていいのか、少しも分らないのだ。

すると今度は、また、どこからかゴムの管を出して来て、その先をやはり臍にネジ込み他の端にあるゴム球を握って、空気をシュッとシュッとオナカに入れ始めた。オナカはだんだんに膨らみ、直径が大きくなって、体が反りくり返って来る。どうして分かるのか自分でも変だと思うが、オナカの球の直径が五十センチを超え、六十センチになった。気がついてみると、いつの間にか、彼女のオナカはプラスチックのような無機質の感じに変わっていて、プラスチック(?)の球の中が透けて見えるのだ。そして先刻望遠鏡で覗いたの

と同じ、風車の羽根のようにグルグル廻る三つの胎児が羊水の中に浮かんでいるのだ。

一人でもあんなに腹が膨れるのに、胎児が三つも入っているのはよほど大変だろうと思うのだが、こんなに沢山ある羊水の中をこんなに早く動きまわるのでは、まるでオナカの中に風呂があるようなものだ、と妙なことを考えていると、胎児の規則正しい運動がますます早くなって、もうすぐ目にもとまらぬ速さになるのではないかという気がした。ハッと気がついて、(あつ、大変だ、危ない)と叫ぼうとしたトタンに――

――彼女のオナカが爆発してしまったのかしなかったのか、ボクにはよく分からない。目が醒める前にそんな音は聞かなかったように思う。しかし今となっては、どちらにしても、ちっともかまわないことだ。妙なことにドンドン膨れ始めてからの彼女のオナカの表面が、まるでガラスのようにツルツルになっていたことと、最後にもうすぐ直径が七十センチになる、と知っていたことと、その大きなプラスチック(?)の透明な球の向こうに仮面のようにボクを見詰めている彼女の顔が一向に苦しそうな表情をしていなかったことをハッキリ覚えているのだ。オナカが無茶苦

茶に膨らんで、アクロバットのように反りかえった姿勢の彼女は、生きている人間と言うよりは、何か人形でも見ているようで、妙に実感が湧かなかったのを覚えている。

いつの間にあんなことになってしまったのか、よく考えてみると、彼女が妊娠しているハダカを鑑賞させてくれたところまでは、いろいろ辻褄の合わないところもあったにしてもまだよかったが、あの妙な望遠鏡を取り出した辺りから妖しくなってしまうと、あんなことになったのだ、と今思い当たったのだ。あんな望遠鏡を覗かなければよかった、と今にして思うのだが、悔んでも追いつかないことだ。あんなに馬鹿馬鹿しくってお話にもならないが、こういう次第である。

それにしても、夢の中でも、あんなに若々しい羽村京子さんの、しかも妊娠してあんなにものすごいオナカをしたところを、ハダカにして見ることが出来たのだから、よろこばなければならぬかも知れない。ただ目が覚めてから、ボクはその間中一度も彼女の体に触らなかつたことに気がついた。夢の中ではあるいは触ることが不可能なのかも知れないと思う。

「長篇SM小説」

宇宙のどこかで

△太平洋戦争終結▽

佐 治 麻 造

一郎は、他の奴隷や囚人達と一緒に二、三日前から集積所に繋がれて少た。彼等は既に受入れ国別、仕向地別に仕分けされ、十名宛連鎖されて埠頭の近くの倉庫に入れられて居るのだった。泰平洋の向う側の国が矢張り受入数は圧倒的に多く、一郎も其の群に入っている。

日に何回となく引込線に長い貨車の列が入って来て、方々から集められた奴隷や囚人の群を送り込んで行った。船積み等待つ一郎達の鎖錠は、奉仕員用に大量生産された物と同じものであった。唯鼻環はあちら製のステンレス製のもので、あちら製の高周波接合機によって、もはや切断する以外に外すすべもなくピッチリと嵌められて居た。奴隷であった者も懲役囚であった者も、皆、それ迄の番号

を消されて整理番号を打たれて居る。

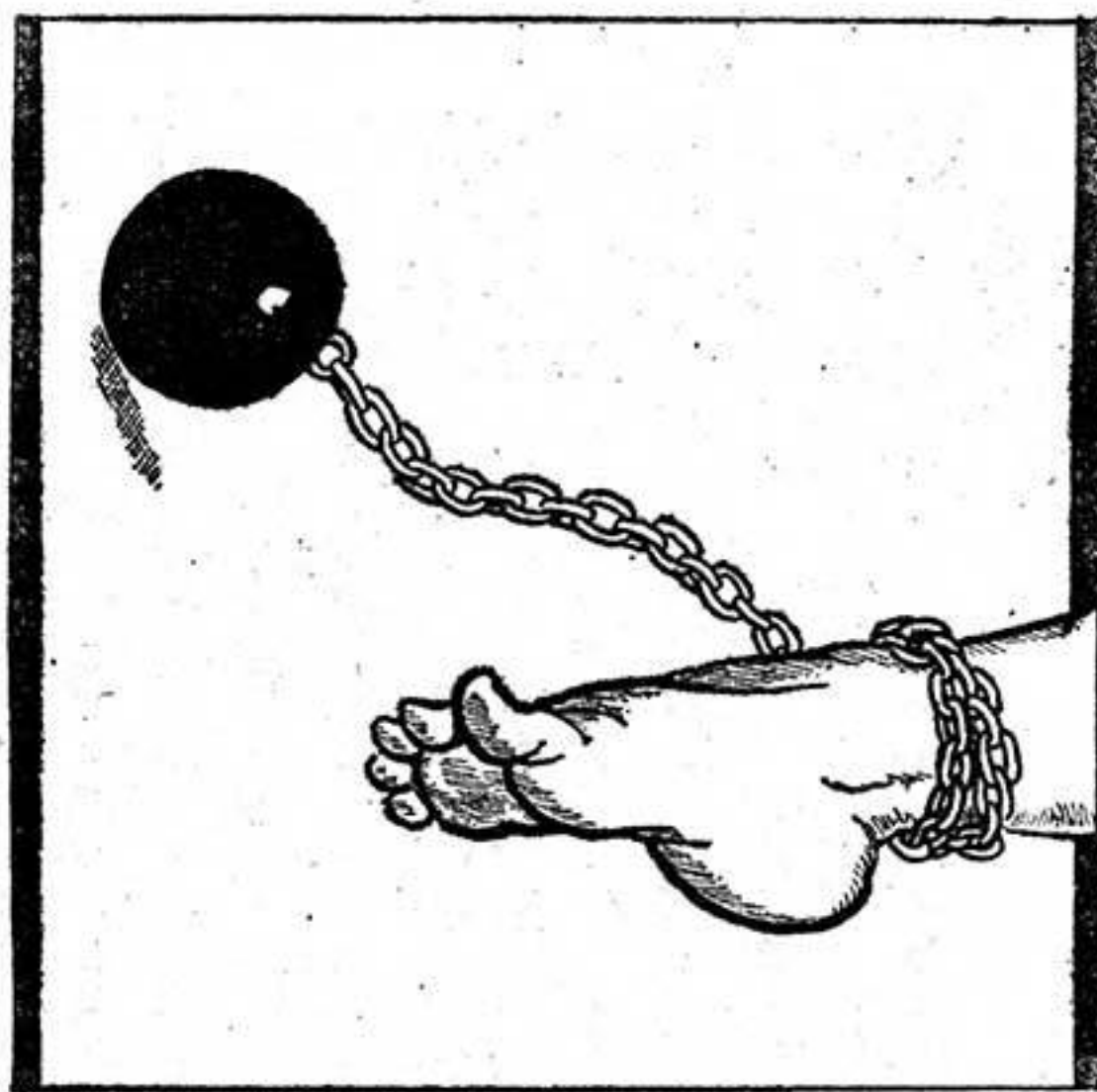
「ちきしょう!! 俺は諦め切れねえぜ」

隣の列の中段に繋がれて居る男が、鎖の音を立てて身もだえし乍ら云った。

「又、云ってやがる。同じ事を何度云や気が済むんだ? 諦めておとなしくしてねえと又餌を貰えなくなるぞ」

一郎の前の男がそっと正座の足を崩し乍ら嘲けた。

「けどよう、身に覚えもねえ上官のやった事を被せられてさ、復員して一カ月目にパクられて……。C級だかの戦犯だてんで監獄におち込まれたんだぜ。その上によ、もう三カ月程で出られると云う時にさ、有無を云わせず一生涯奴隷だ、なんて、あんまりひどいじゃね



えか。俺はもう口惜しくって口惜しくって……」

其の男は男泣きに泣き出したが、他の連中は又か、と云う様に相手にもしなかった。

彼は新婚の夢さめやらぬ中に召集されて戦火の巷を何度となく潜り抜けた末、終戦時には内地に居て即時帰郷したのであった。遠縁の家の疎開して居た妻を探し当てた彼は今迄の辛苦も消えて行く様に思い、田舎町の町はずれに在る其の家の粗末な離れの間が天国の様にも感じられたことだった。

「復員手当は一カ月も経たねえうちに心細くなりやがって、何かいい働き口はと思つてた矢先に踏み込んで来やがったんだ……」

其の日もきびしい残暑を思わせる或る晴れた朝、涼しい朝寝を楽しんで居る彼を、駐在所の婦人警官に案内されて一人の婦人憲兵が襲った。靴のままで踏み込んで来た彼女に枕を蹴飛ばされて、彼は六尺禪一本の姿で畳の上に起き直った眼をパチクリさせた。シュミーズ姿の彼の女房は、ささくれた肩紐のあたりに其の大きなくくりした乳房をこぼれそうにし乍ら小柄な体をオロオロさせて、世帯道具を雑然と並べた片隅で震えて居た。

「戦犯の容疑で進駐軍が逮捕しに来られたのよ」

案内した来た婦人警官が、少し開き残った硝子障子をガタピシと動かして乍ら土間に立って云った。

「戦犯だって？ そんな馬鹿な!!」

眼をこすり乍ら驚いて立ち上った彼の左手を婦人憲兵が白手袋の手で背後にねじ上げ、次の瞬間には金属音と共に手錠が其の手首を捉えて居た。

「いてえじゃねえか!! 何をしゃがるんだ」

末だ自由な右手を振り振り足踏みして抵抗する彼に婦人警官が眉を寄せ乍ら云った。

「おとなしくしないと射ち殺されるわよ」

右手首にも鋼鉄の環がガッチリと嵌まり、彼は自分の意気地なさ情けない思いだった。

「お、お前さん、覚えがあるのかい？」

「なに、きっと何かの間違いだあな。心配しないでいいぜ。俺は何もした覚えはねえものな」

「そ、そんならいけど……。ねえ、そんなに縛る前に何か着させてやって下さいな」彼の女房がオロオロと哀願したが、婦人警官は制帽を髪に留め直し乍ら

「どうせ……」

と云い掛けて口をつぐみ、婦人憲兵の方は終始沈黙のままであった。ほんの少し伸びかけたばかりの彼の頭髮が乱暴に掻き回され、六尺禪の腰回りの内側をグルリと指先で探られると身体検査は済んで居た。彼より二寸は高い婦人憲兵が其の体を近寄せて白手袋の両腕を動かす度に、ぴっちりと体に合った制服の胸許から香水が仄かに匂った。

「スラリとした金髪で眉を綺麗に描いてやがってさ、大きな眼に長いまつげの別嬪だったな。其の癖、力は強いんだ……」

綺麗な歯を見せて少し開いた赤い唇を心持ち歪めた彼女に上膊を掴まれた彼は他愛もなく悲鳴を挙げて身もだえした。ずるずると引き摺って来られた彼は、土間への敷居の所で腰を思い切り蹴られ、ぬるぬると踏み固められた土間の床に両膝をついて呻いた。手錠が背中がガチガチと鳴り、彼の女房は泣きそうな顔で声を呑んで見守

って居た。

再び上膊を掴まれて立たされた彼は、肩のあたりを手荒く突飛ばされ乍ら、未だ黒い暗い幕の切れ端がぶら下って居る出入口の外へ追い出された。母屋の人々や近所の人達が集って恐ろしそうに遠くから眺めて居る中を通り抜け、こわれかかった古びた門を出ると、白い警棒の先で右肩を背後から強く押され、又も尻を蹴り飛ばされた。左の方に行けと云うのだ。泣き乍ら追って来た彼の女房は、婦人警官に引き止められ慰められて、半ば赤土にむかれた白塗りの土塀に身を寄せて噤り上げて居た。

堪らなくなった彼が振り返る度に、警棒が容赦なく肩や背中を小突き、革靴の先がふくらはぎや腿を蹴った。小道を百米程行った所の県道のと真中には白塗りのジープが待って居て、其の前後には数台宛の三輪車や荷馬車や木炭自動車が困り果てて停って居た。彼を車上に追い上げて運転席に坐った婦人憲兵は、コンパクトを取出して暫し口紅を塗り直した末、漸くのことでエンジンをかけたのであった。

「いくら云った所で、何ともなるもんじゃなかったな。捕虜だった毛唐がさ、此奴だと云ったんだな、それでおしまいさ。それも其の御本人が俺を見た訳じゃないんだ。写真を本国に送って証言とやらをさせるんだからひどいもんさ。捕虜虐待のかどで簡単に懲役六年だとさ。泥棒やなんかとは訳が違うんだから、少しは手心して貰えるかと思ってたんだが、監獄の役人なんて杓子定規なものさ。強盗やなんかやった連中と全く同じに取扱ってくれたぜ。同じ鎖に繋がれてしまや、世間の連中には区別がつく筈もねえけど、本当に情けなくて癪にさわって……」

其の男の泣きごとを耳にして、一郎のうしろに繋がれて居る年配の男が両手を重そうに持ち上げて動かし乍ら

「お前なんか未だいい方だよ。こうなった以上、もう仕様が無いんだから、すっぱり諦めろんだな。そして少しでも言葉が分る様にしないと自分が困るだけだぞ。教えてやろうか？」

一郎は自分の尻の間で微かに動く連鎖の気配と、其の物の云い方によって、其の男が鼻をほじり乍らしゃべって居るのが分った。

「俺の知ってる女囚なんか、お前よりはるかに可哀想なもんだよ」
其の男は云い続けた。

「大きなお邸に住んでた綺麗なお嬢さんだったんだがな、会社の社長をしてるお父さんが仕事の都合で進駐軍の連中を招いてパーティを催したんだ。其のお嬢さんもせい一杯おめかししてもてなしたんだな。ちきしょう、此の手錠はやけに重たいじゃないか。鼻環が邪魔になって鼻くそもほじれやしない。」

其の男は鼻をほじるのをやめて両手を腿の上においたらしく、連鎖が音を立てて床に鳴って動かなくなった。

「それでな、そのお嬢さんにさ、酔っ払った進駐軍の将校が乱暴しようとしたんだ。未だ男を知らないお嬢さんが死物狂いになって手向ったのは無理もないけど怪我させてしまったんだ。一緒に居た毛唐女の将校共が、やつかみ半分に、お嬢さんの方から誘惑したなんて証言したもんだから、可哀想に五年喰らい込んでしまった訳さ。俺の近くの監房に入れられてたが、毎日々々泣き乍ら苦役したな。そして我る日一人の毛唐女がやって来て、さんざん鞭打って行きやがったもんだ。怪我させられた将校の女房なんだよ。全く可哀想で見ちゃ居られなかったぜ。このどこかに来てるに違いないが、そ

んな人も居るんだからな」

ゴム靴とスラックスをはいた若い娘が音もなく背後の方からやって来て鞭を床に鳴らせた。

「お黙り!! お前達、何度云ったら分るの? お前は又、足を崩してたわね」

鞭が容赦なく鳴って、おとなしく正座を続けて居た一郎も背中を打たれて唇を噛んで呻いた。

「お前達は罪に服して居た罪人なんだから。不平を云うことはないじゃないの!!」

娘はあたりの男囚達を見下して鋭く云った。

「さあ、五番の列!! 用便の時間だよ。お立ち」

連鎖と足鎖の音が響いて、五番の列の十名は戸外に連れ出されて行った。

○

金網越しに流れ去る夕暮時の町々を喰い入る様に見詰めて泣き喚く女達を乗せたトラックは、MP達のオートバイに護られて真一文字に港へノンストップで急いだ。連鎖に引かれて一番最後にトラックから降りた久江の素肌を、潮を含んだ夕風が撫でた。煌々と電灯をつけた大きな倉庫群へ、次々とトラックが哀れな男女の群を運び込んで来て居る。身もだえて何かを喚く男や、嗚咽し立ちすくみ膝をついて悲しむ女達には容赦なく鞭が飛んだ。

久江達の一群の男女は、倉庫の入口の所で坐らされて順番を待った。倉庫の中でテキパキと立ち動く人々の半分以上は、黒人を混えた異邦人である。腕章をつけた婦人警官に事務的に促がされて、久江達は立ち上った。冷たいコンクリートの床を素足で踏んで眩しい

程の電灯の下に追われて来た女囚達は、白い上張り大きなマスクをした二名の金髪の女医によって身体検査をされた。

「ちゃんと並んで。横を向いて」

跨間を通した鎖で手錠から手錠へと縦一列に連鎖されて居る女囚達は、付き添って来た婦人警官に命じられて左へ体を回して横一列になった。右腿の前側に触れて手錠に繋がった重い鎖が更に左腿の内側から後ろ側に冷たく回り、頭上の電灯に真正面から全身を照らされた女囚達は深く頭を垂れて屈辱に喘いだ。

其の前を少し離れて男囚の一行が黒人兵に追われて足鎖を床に曳き摺り乍ら通って行った。ガムを噛み噛み口汚く罵る其の黒人兵が鳴らして居る鞭を一目見た久江は恐ろしさに膝もなえるばかりだった。多数の細い革紐をない合せた長い鞭で、握り太の根元から先端に向って細くなつて居り、牛や馬の群を御するのには要ると思われる代物であった。

一番端の久江は真先に検査を受けねばならない。金髪の女医が色々な器具で彼女の体を小突き回して手早く調べた。耳たぶから採られた血液がデスクの女医に回され、立って居る女医はハイヒールを鳴らして隣りの女囚に移った。検査器具を胸の前に吊った黒人の婦人兵が久江の背後で何か呶鳴った。

「お尻を上げて、四つ這うのよ。」

婦人警官が教えて呉れたが、其の言葉が久江の聞いた最後の母国語であった。命じられた通りに、足鎖の長さ一杯に両脚をひろげ高くお尻を上げて両手を床についた久江は両肩を震わせて嗚咽をこらえた。黒人女の太い右手が伸びて、久江の首から背筋に沿うて冷たく光る鉄鎖をグイとして横にはねのけ其の分厚い唇が嘲けりて

歪んで何か呟いた。

検査器具を催促する女医の鋭い叱り声に黒人女は久江のお尻をパシッと平手で撲りつけ、あわてて駆け寄って膝をかかめて器具を差出した。久江はガクリと両膝を床に落し、そして暫したためらった後おずおずと立ち上って啜り上げ、重い手錠と連鎖を持ち上げて顔を掩って更に啜り上げた。

「ギャーッ」

少し離れた照明灯の下あたりで悲鳴が断続して湧き上った。鼻環の孔をあけられて居るのだ。入口の薄暗い床に正座して処理を待つて居る囚人の群から一名の女囚が矢庭に立ち上って外に逃れようとした。前後の女囚が跨間を通る連鎖にこすられ、僅かに引摺られて呻き声を挙げた。恐ろしさと絶望とで前後も忘れた其の若い女囚は忽ち非情の鉄鎖に体をせかれて倒れたが、悲痛な叫びを挙げ乍らコンクリートの床をのたうち回った。両手両足を大きく空に泳がせてもだえ悲しむ度に鎖が激しく鳴り、そして鉄枷が床に軋んでガリガリガチンガチンと音を立てる。

剥奪された自由を恋うて、所詮空しいあがきを示した其の女囚は連鎖をピンと一杯に張って両膝で立って戸外を振り向き更に膝に力をこめてにじり出ようと乍ら咽喉も張り裂けんばかりに絶叫し、そしてガバッと床に突伏して全身を震わせて号泣し初めたのであった。

囚人の群を蹴散らかして駆け寄った黒人の婦人兵が、ニヤリと黒い頬に冷笑を浮べて、輪に束ねた長い鞭をばらりと解いて女囚から三、四米程離れた所から大きく振った。シュルツと空気が鳴って鈍く大きな音が女囚の背に響き、途端に魂切る様な悲鳴が肺腑を抉っ

て、そして忽ち低い呻きに変った。更に加えられた凄まじい一撃を受けて、若い女囚の全身はけいれんし手足の指はそり返った。

其の女囚の後ろに繋がれた年かさの女囚が唇をわななかせ恐怖の眼を大きく見開いたまま、それでも必死の面持ちで不自由な両手を使って、半ば失神した若い女囚の体を元の位置に引き摺り込んでやり、そして両手を胸で合掌して黒人女に赦しを乞うてやって居た。

恐ろしさとみじめさとに顔を掩うて立ちすくんで居た久江の両手が連鎖でぐいと引かれて顔から離れた。身体検査が済んだのだ。微かな希望もあえなく砕け去って、久江達十名の女囚は全員合格したのだった。追われて行く先には恐ろしくも忌むしい鼻中隔穿孔機があった。人間社会から蹴落された者の象徴である鼻環をつけられるのだ。久江を最後尾にした女囚の列は、物悲しくも凄まじい悲鳴が一しきり済む度に、一匹分宛前進した。連鎖されてから初めて、久江の胸にたとえ様のない悲哀が湧き起った。

「此の鎖から逃れられるものなら……」

久江は自分の両手首がガッチリと捉えた重い頑丈な手錠と、それに錠で結合された太い連鎖を見下ろして、喘ぎ身もだえするのだった。しかし此の鎖錠を施された身がどうする事が出来よう、女囚の列は機械的に一匹又一匹と次々に処理され、そして久江の番になっ

てしまった。

高周波によって継目もなく鼻の壁の孔に通されたステンレスの鼻環が微かに揺れてチカリと反射が眼に映り、そして其の重さを鼻に感じ乍ら頭部の固縛を解かれた久江は熱い涙で頬を濡した。彼女は自分が未だ少女の頃、父の奴隷店に遊びに行つて、奴隷達の鼻環に縄をつけて引摺り回して面白がったりした事を思い出した。

「けど、あの頃は未だ子供だったんだから仕方ないけど、昨日迄勤めてた会社の奴隷をちょいちょい鼻環で吊るしてやったりしたのは可哀想なことをしたわ」

久江も自分がつけられて見て、鼻環のみじめさが初めて身に沁みて分ったのだった。

少し離れた所では、男囚達が更にもう一個の錠を嵌め施されて居た。其の有様を横眼で眺めて久江はすぐ顔をそむけて頬を染めたが男囚達の切なくも悲痛な其の思ひは、久江には理解出来る筈もなかった。

完全に奴隷の身とされた奉仕員達は、男女の別もなく別棟の倉庫に追い込まれ、床の白線の上は、列毎に並んで明朝の船積み等待った。各所から搬入される囚人達の全部の処理が完了する迄は横になる事は許されず固いコンクリートの上にじっと正座させられた。身心に加えられた大きな打撃に打ちひしがれた男女が諦らめて疲れ果てた其の体を崩す度に、あの恐ろしい長い鞭が鳴って彼等の血を凍らせた。

「久江さん……」

二米程離れた右隣りの列の女から呼び掛けられた久江が振り向くと、小山昭子が弱々しく微笑んで居た。昭子は其の細面の頬を一日で更にげっそりとさせて、端正な鼻の先にぶら下がった鼻環をうるさそうにし乍ら、

「久江さん、あなたも!! お互い哀れな身になったものねえ。ああ痛い。あなた平気なの? 私もう、手や足が痛くて痛くてこのままずっと外しては呉れないらしいわね。ああ、ちよっとでいいから外して欲しいわ。手を動かすと、飛び上る様に痛くてずきずきするの

よ。辛いわ……お水が欲しい……」

夜中も過ぎて、奴隷達は一滴の水さえ与えられないまま、漸く横になる事を許された。崩れる様に固い床に身を横たえた久江は背中の鞭痕の痛さに呻いた。どうとも出来る筈もないと知りつつも鼻環をグルグル回したり引張ったりして居ると、涸れ果てた筈の涙が再び頬を伝わった。まどろんだと思う間もなく、夜が白む頃彼等は鞭の音に叩き起された。暫しの眠りに我が身の上を忘れて居た奴隷達は、目覚めと共に己が哀れな境涯を見出したのであろうか、あちらこちらで啜り泣きの声が低く続いた。

殆んど聞き取れない外国語の命令や号令、そして罵声と鞭音にわななき乍ら、奴隷の男女は鉄鎖を鳴らして次々と輸送船の中に追い込まれて行く。幾つもの大きな船艙の各々は鉄格子の床で幾層にも仕切られて居た。一層の高さは約二米、そして船により、又船艙によって異なりはするが四層乃至六層位で、臨時に設けられた強力な送風機が唸って居た。

久江は最下層のすぐ上の層に追い込まれた。鋼管を溶接して組んだ床の格子は一尺四方に近い大きさで、其の中に足を落さない様に歩くのは、足鎖の身にはかなりの注意を要した。十名宛連鎖された男女が六組、空腹と渇きによるめき乍ら追い込まれると、次の組からは久江達の頭上の層に切り替えられ鎖と鋼管とが触れ合う金属音がガンガン響き、時々踏み外した足がふくらはぎを見せて天井の格子から落ちて来た。

五つの層が奴隷達で満たされると船艙の壁に設けられた階段を昇って背の高い男女はガムを噛み噛み外に出てしまふ船艙の大きなハッチが重々しく閉じられた。途端、内部は一筋の光も射さぬ真暗闇

となつて、囚われの男女は心細さに苛まれた。

「食事や、それから御不浄なんか、どうするのかしら？」

久江は光を求めて八方に眼をこらし乍ら悲しく考えた。体に当る鋼管がやけに冷たく、熔接の箇所がチクチクと肌に痛かった。

「こうして泰平洋を越えて運んで行かれるのかしら？ 死んでしまふわ……」

けだもの以下の扱いを受けて骨の髄迄屈辱を味わい乍らも、何故か死ぬのは怖ろしかった。死と云う事を考えただけでも体中に脂汗が滲み出て唇がわななくのだ。上下も分らぬどこかで恐怖にひきつれた悲鳴と喚きが方々で湧いて船艙の鉄壁に反響した。突然階段に電灯がついて現われた数名の黒人船員が強力な懐中電灯の光を投げかけ乍ら、小さな西瓜位の大きさのゴム袋を一ヶ宛投げ配って歩いた。ずっしりと液体の入った其の袋を投げられて受け留める事が出来ず格子の間から落した者には二度と与えられない。二世らしい派手な服装の若い婦人が携帯用スピーカーで奴隷達に云った。

「其の袋がお前達の一日分の飲食物なのよ。空の袋と引き換えに毎日一個宛やるからね。分ったかい？ 吸口を吸えば出る様になつてるわ」

二世婦人の優越感に満ちた声を聞いて、袋を取り落した連中は色を失った。ままならぬ両手で辛うじて受け留め得た久江は、袋を胸に抱いてホッと吐息を洩らした。久江は其の上更に頭上の格子の間から落ちて来た袋を一個手に入れてしまった。電灯の光に眼が眩んだ久江には、はっきりとは見えはしなかったが、取り落したのは若い男らしく、意気地なく泣声を立てて狼狽した居た。返してやろうと久江が足場に注意し乍ら立ち上った時、泣きそうな顔で恨めしそ

うに床の格子を覗き込んで居る昭子の姿がチラと見えた。

「昭子さん、どうしたの？」

連鎖の許す限り近ずいた久江が、胸に二個の袋を抱えたまま低い声で訊ねると昭子は

「袋を、袋を落してしまつたのよ、不意だったもんだし、手錠かけられてるもの……。頼んでも返して呉れないの」

「そうお。私二つあるのよ。一個上げるわ」

しかし距離は四、五米もあるし、其の時電灯が消えて再び闇となつた船艙の中で久江は困惑した。

「ね、お願い!! 少し動いてよ」

久江が連鎖の前方の女達に頼んだが、吸口を貪る彼女達は動くともしないし昭子の方も同様であつた。

「私にお貸しよ。渡してやるから」

久江と昭子の間あたりで女の声がした。心に兆す疑いの念を払いのけた久江が声を頼りに袋の一つを差出すと、自分の袋を膝の間に挟む気配がして手錠の嵌まつた両手が鎖の音と共に闇の中をまさぐって来て、久江の手から袋を受取った。暫し闇に眼をこらして気配を覗った久江が

「昭子さん、貰った？」

と訊ねると彼女の嬉し気な声が返って来た。

「ええ、ありがとう。助かったわ」

仲介して呉れた女を僅か乍らも疑つた事を久江は恥じたが、飢渴に責められれば皆こんなにも浅間しくなるのかと思うと情けなさが胸に泌み渡つたのだった。

「おい、俺の袋を返して呉れよ。ひどいじゃないか。おい……」

頭上の男の悲し気な哀願の声を聞えぬふりをして吸口から一口吸った久江はゲッと胸が詰る思いがした。嘗て其の色を見ただけで顔をそむけた奴隷食と同じ悪臭が匂うのだ。しかし激しい渇きには勝てなかった。息もつかせずに半分以上飲んだ久江は漸く吸口から口を離し、中味の残りがポタポタ垂れるのにも構わず床の鋼管に頬を押し当て袋を握り締めたまま声を忍んで泣いたのだった。

欲張っては見たものの初めての奴隷食を二日分も飲み切れる筈もなく、渇きと飢が少しは癒えた男女は人間らしい心を取り戻したのか、未ず餌にありつかない連中に手から手へ、下から上へと袋が返されて来て全員は闇の中で一先ずホッとして横になった。重々しいスクリューシャフトの回転音が底の方から響いて来て、やがて船は走り出した。故国を離れたのだ。耐え切れないむせび泣きが一斉に湧き上った。

「一目だけでも外を見たいわ」

しかし如何に泣こうが悲しがろうが、もはや人格も自由もそして国籍すらも剝奪された身は、投げ与えられた餌の空袋を落さない様にと鎖錠にからませたり挟んだりし乍ら、真暗闇の中で鎖を鳴らし、蠢めく外には致し方がないのであった。何時間経ったか、突然怒りに満ちた男の声が聞えた。耐え切れなくなって誰かが遂にそのまま垂れ流し、そしてそれを浴びた男が怒って居るのだ。久江は鉄の枷に痛められてずきずきする両手首にも構わずに両手で両耳を掩った。

両手首を繋ぐ短い鎖が鼻環を強く押え、鋼鉄の匂いが微かに酸っぱかった。溜息と共に仰臥しようとした久江は背筋を走る鉄鎖の痛さに顔をしかめて体をよじって其の鎖を背中から外した。闇の中を

突然生暖かい液体が降って来て久江の胸を濡した。固形物が落ちて来て誰かに当たった模様だった。嘔吐物も降って来た。送排風機によって空気の流れは微かに感じられはするものの悪臭が立ちこめ、このままで何日間、否何十日間を過すのかと考えると久江は気も狂いそうになった。そして何時間かの後、彼女も遂に洩らす他なかったのだった。

一日に一度、最上部に設けられた消火用栓から、海水がしこたま降り注ぎ最後にはほんの少しだけ真水が注がれ、そして排水ポンプが唸った。下層の奴隷達は上層の連中を羨みそねんだが仕方ない事であった。二日目からの餌袋の配給は各層の階段寄りに居る奴隷から順次奥の方へと手渡しで行われる様になったので、取落した袋を返さない事で胸を晴らす事も出来なくなってしまう。そして各層毎に一団となって互いに他の層とは口汚なく罵り合う様になったのだが、それこそ支配者の狙う所であった。しかし、異常な境涯に突き落された彼等が、それに気付かなかったのも無理はなかった。

昼も夜も分らぬ真暗闇の中で久江が二十何個目かの餌袋を受け取って暫くすると船が停った。僅かに開かれたハッチから青空を仰いだ奴隷達は痛む眼をしばたき乍ら蘇生の思いで狂喜した。二時間の後ホースで浴びせられた水を全身から滴らせつつ、初めて見る異国の港に久江は立ちすくんで居た。

見たこともない様な高いビルが立ち並び大きな道路にはピカピカの自動車が行き来して居る。新聞社のカメラが四方からジャブーの男女の群を撮った。カメラマンの要求で何の落度もない一匹の女奴隷が長い鞭の一撃を喰って身をのけぞらせて倒れ伏して手足を縮めた。

大きな倉庫へ追い込まれた奴隷達は番号を刷り直され、十匹宛連鎖で一まとめにされたまま競売台上に追い上げられ、奴隷商達に次々とせり落されて行った。船艙での生地獄の苦しみを味わった久江は異国の男女達に其の浅間しい姿を眺められ値踏みされても、もはや胸は熱くならなかった。今はただ、一刻も早く手足に重く食い込む此の手錠足錠を外して欲しかった。列の中で自分だけがつけられて居る首の鎖を解いて貰い度かった。

「十五年間と云うものを毛唐達の奴隷としてこき使われたよ。政府

当局の努力や、国際情勢の変化等で思ったより早く解放されて帰って来れた訳さ、三十年間は覚悟してたんだが……。送還船の中で久江と会ってな、結婚したよ。永い労苦のせいか子供は出来ず、去年とうとう亡くなってしまったが……。年金のお陰で気楽に余生を送らせて貰ってると言う次第さ。俺が帰ってからは我が国も軍備が急に強化されるし、いろいろと世の中も変わったなあ」

武林一郎と名乗る過ぎし泰平洋戦争の名パイロットだった此の老人は、白樺荘での或る午さがり、斯う語り終えて青空を仰いで眼を細めてしばいたのでした。

《フェチ通信》

パンティと私

山口 明

週刊平凡九月二十六日号によると、女性六百六十人（主婦二百六十五人、学生八十五人、BG三百十人）のアンケートの結果、パンティの平均所有量は、主婦七・七枚、学生九・五枚、BG十・五枚で、最高は四十枚、最低はたった三枚だった相です。これは私には意外でした。人に見えない処でおしゃれを楽しむとか云って、男より下着に金をかける女性

が、その所有量に於いて男性を上廻るのは解かるとしても、女性の下着フェチの存在などを考えると、六百六十人中、最高が四十枚とは如何にも少なすぎますし、三枚に至っては正に論外で、どんな女性か一度お顔を見てやりたい気すらして来ます。

いずれにしても最近のデパートの婦人下着売場は、だんだんと男性には買いにくい処と

なってきました。私は初め、男性でも客には違いないのだから、もっと男の買いやすい、人目につかない場所につくって呉れないものかと恨めしく思い、浅はかにも投書などした事がありました。思えば大多数の客は女性なのです。婦人下着だけで毎月平均二千万円を売ると云うデパートとしては、その売上げも男性の客が少い程良いとの事であってみれば、男性が変にうろろうして呉れない方がいい訳です。

私などは普段女性のパンティ以外穿いた事はありませんが、いくら私でもサイズを確かめてから買う訳ではないので、大概の場合、前身頃が小さすぎて使用不能な物が多く残念に思っています。それだけにまるで詠えた様

に、自分の肌にぴったりと吸いつく様な感じのパンティを見つけた時には、その感激も一入です。今自分の穿いているこのパンティも若し自分が買わなかったとしたら、何時かはきっと女性の匂いを知る事が出来たであろうにと思うと、余計愛着を覚えてくるのです。折角買ったものですから、自分で穿けなければ意味はないのです。

パンティの布地も色々ありますが、その感触から云えば、半透明のナイロンが最高です。時々手で触わってみたり撫でたりして独り悦に入っている私ですが、マニヤにはそれがこの上もなく嬉しく楽しいものなのです。女性には衛生上良くなくても、持つ楽しみから云っても、もっとナイロンを愛用すべきだと思います。併し同じナイロンでも透けて見える物は余り感心出来ません。どうしても手触りが荒くなるのです。またパンティのスタイルも色々変った物が現在出廻っていますが何と云っても、ゴムで太股を締めつける様なオーソドックスなスタイルを私は愛します。これは私の好みですが、平凡紙も鴨居羊子などの変り型パンティなどは、現在実用には程遠い事を報じています。以下同紙によると、学生とBGは全然持っていないし、代表的な意見として或るお嬢さんは「全面的に拒否はしないけれどもピタリしないわ」と云っています。同じ傾向として透けて見える

ナイロン・パンティに就いては、「持ってはいるけど、実際に身につけようと思うと、何か抵抗を感じる」と答えたり、「興味は感じるが、普段つける物ではないから買わない」と答えたりしています。下着専門店では、「昨年は相当売れています。見た目に可愛いらしいし、身につけなくても持つ楽しみがあるんじゃないですか。実用と云うより、専らタンスの中のアクセサリーの意味があるんじゃないかね。だから極く親しい関係の恋人とか、若い夫がプレセント用に買う事が多いのですが、貰って思わず「あらッいやだ」とポツと赤くなる相手の姿を想像してニヤニヤする恋人や、若夫婦達の間のユーモアと云う事ではないでしょうか」と云っています。

事実ささやかな私の体験によってもそれは証明出来ます。私の地元の池袋の一隅には、夜の蝶族の密集したアパートがあります。天気の良い日などは実に壮観です。女性は大勢集まると驚く程大胆になると云いますが、それがよくわかります。何時客にスカートをまくられるかわからない彼女等とすれば、意識して豪華な物を身につけたくなるのか、それとも必需品のパンティをも単に服装のアクセサリーとして楽しんでいるものなのかはわかりませんが、パンティのスタイルその物はシンプルでも、フリルやレースがついて、おまけに刺繍などを華やかにあしらった豪華な

物が圧倒的に多いのです。マニヤならずとも思わず見とれてしまう事必定です。従ってスキャンティとか透けて見えるパンティなどは今迄にはんの数える程しか見た事はありません。一番愛用するだろうと思われる彼女等にして然りですから、一般の御婦人の実用には余り関係がない事は確かかも知れません。

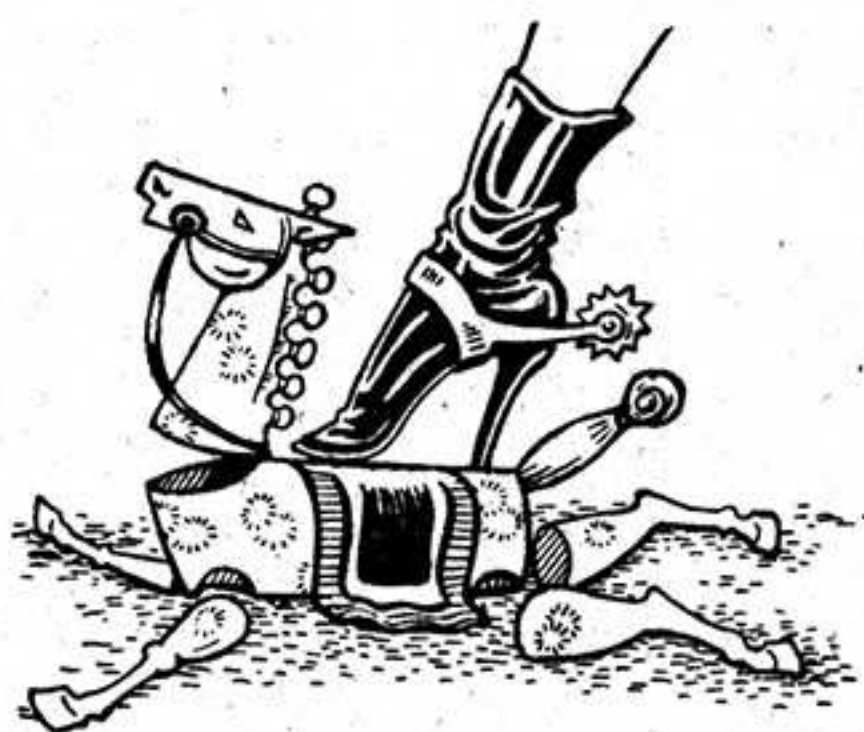
最後に色ですが、私の好みは赤が最高で、次にピンク、ブルー、白、ラベンダーの順になります。淡い色の方がムードがあってやさそうですが、実際に穿く段になると、肌の色に似たピンクなどよりも、女性用のパンティを穿いているのだと云う強い意識が必要な私は、どうしても赤を多く使用してしまう事になるのです。昔は白が圧倒的に多かったものが、最近では色物と白の割合は半々になって来たと言ふ紙も語っています。池袋の例のアパートでも、白よりも色物の方が遙かに多いし、思ったより真赤が多いのですから感激です。

輝姿も凛々しい男性的な方々からすれば、立派な男性が女性のパンティに浮身をやつすなど、誠に想像も出来ない位歯痒い事だと思えますが、それでも私は決してそれを恥じてはおりません。私にとってそれは、健全な社会生活を営む上に於いて、必要欠くべからざる事なのであり、又生甲斐にもなっているのですから。

「読者告白」

畜生責二題

佐野光子



序

編集長様、毎日ご苦勞様な事とお察しいたします。先日から私の家畜の平伏人が、私の鞭の下で色々とお恥しい事を書いては、投稿しておりますけれど、案外、伏人は内氣な恥しがりやですので、私の本当のサドぶりを皆様にお解りいただけないのではないかと存じます。筆を取らせていただいた次第でございます。

私って、伏人が書いているような事は、勿

論いたしますけれど、あんな、生ぬるい責めでは満足出ませんのよ。モットモットものすごい責めをいたしておりますの。だって、そうしないと、私もつまらないし、伏人だって、ヒイヒイいいながらも、私のそばをはなれられないで、家畜の身分に満足いたしておりますのよ。

きつと、読者の皆様方は私の申し上げる事を、本気になさらないかも存じせんけれど、本当の事ですもの、仕方ございませんわ。こ

の度は、私の考え出した、変った責めを二つばかり皆様にお話しいたします。もしご希望があれば、続けて皆様に誌上でお目にかかりたいと存じます。皆様、よろしくね。

一

奴隸の伏人は、当年四十三才、一寸見たところは、三十七、八才位にしか見えない、わりかた若々しい感じのする二枚目半といった男ですの、体格も、一米七十八センチ、七十八キロで、昔、スポーツできたえた体は、私

のどんな責めにもたえられるだけの健康さを持っておりまうすの。それに、五百人ばかりの従業員を使う相当な会社の社長さんなのよ。

案外、女の子にもてるんだけれど、私は絶対に安心なの、だって、私のように伏人のマゾを満足させられる女の子って、めったにおりませんものね。もし、浮気でもしたら、鞭で思いきり、いためつけてやるわ。そしたら必ずまた私の鎖に喜んで、つながれるようになるんですもの。私って、相当の自信家ですのね、ホホ……。

伏人の事ばかり書きましたけれど、私だって相当なものよ、一寸恥しいけど、身長一米六十一センチ、体重十四貫、当年とって二十七才、あるバーのマダムをやってますの。勿論自まえよ、だって私と伏人はお金で結ばれたんじゃないんですもの。

字はあまりうまくないけど、それでも、旧制の大学を出ているのよ。皆さんお店へいらっしゃる方は、私の事を一寸バルドーに似ているなんて、おっしゃるの、私もそう思うんだけど……。

あんまり二人の事ばかり書いても仕方がございせんから、そろそろ本題に入りますわ。

よく、奇クを見ておりますと、奴隷男が犬になるプレイを見かけますが、皆様、あんな程度でご満足なのかしら。私の犬責めは一寸違いますのよ、まず犬の服装から申しあげましょう。

伏人の身体にピッタリ合った、シェパードの毛皮で作った、犬のぬいぐるみを、人間犬に着せますの、顔は、目と鼻と口の部分だけ切り取って外から見えるようにしますのよ。

そして、私の自慢のできるアイディアは、尻尾ですのよ。洋装店などで売っている、えりにつけるアクセサリーの毛皮はすぐ毛がぬけて、駄目になりますので、一流の毛皮店で狐のえりまきを買って、もったいないけど、尻尾の部分だけ切り取りますの。そして丈夫な針金を二本尻尾の中へ見えないように通して、先に出ている余った針金の部分を七センチ位に切り落して、それをサラシ布を細く切って、グルグル巻きつけるのよ。そして直径一センチ五ミリ位の太さにして指にはめ、ゴムサックをかぶせますの。これで尻尾はでき上りですの。始めのうちは、この尻尾をさし込むと、伏人の奴、ヒイヒイっていましたけど、今ではこの尻尾がお尻に付いていないと、本当の犬になった気がしないなんて申し

ますのよ。

そして、尻尾の中に入っている針金を色々にまげて、日本犬のようにピンと立った尻尾になったり、また、やせ犬のようにダラリと下った尻尾になったりいたしますの、でも私はピンと立った尻尾の方が好きですわ。

始めのうちは、尻尾がすぐ抜けますので、はりつけましたけど、今はセロテープなしでもちゃんとついていきますの、本当の犬になっちゃったんでしょか。

これで、犬の形は全部ととのったわけでございますけれど、皆様と違うところは、私は人間犬を室内では決して、飼育いたしませんの、夜遅くなってから、お庭か、あるいは遠くの温泉にでも行った時に、野外で訓練いたしますのよ。私のきびしい訓練のおかげで、伏人はどこに出しても恥しくないような立派な犬になりましたわ、どんな芸当でもいたしますし、残飯なんかは、本当の犬より上手に口だけで食べますの。それに、ほかの人間犬の方達と違って、お尻を動かさないで、尻尾だけ動かす事だってできますのよ、すごいでしょう。この前、伊豆の湯ヶ島へ行った時は夜一時ごろから外へ出掛けて、二時間ばかり久しぶりで訓練いたしましたの。私がいつも

用意している、牛の骨を遠くへほうっては、くわえてこさせるの。本当に面白かったわ。私が、地べたにはいた唾なんか、どろと一緒にはペロペロなめちゃうの。

だけど、その時、本当に驚いた事があったの。だって誰も居ないと思っていたら、十米位離れたところに、若いアベックがやってきたのよ、でも私とっさに決心したの。一寸月あかりだけで薄暗いし、本当の犬に他人は見えてくれるかどうかって、そして、わざわざいやがる伏人の鎖を引いて、その人達の傍へ行ったのよ。二人の若いアベックは驚いた様子でしたけれど、

「大きな犬ですね、なんという犬ですか」と私に聞くのです。私は、しらばっくれて「いえ、シェパードの雑種ですの、野良犬だったんですけど、番犬になるんで飼ってますのよ、でもなかなか芸ができますの。一寸、お見せしましょうか」

というと、私の後でふるえながら、這いたばっている伏人の背を鞭で思いきり打ちえますと、

「ソラッ！」

といって、牛の骨をほうりました。

かんねんした様子の伏人は、その骨に向っ

て一目散に走って行きましたの。二人のアベックは、

「一寸足が変ですね」

△フェチ通信△

ゴムとブルマー

西淀川 (T・Y生)

編集部の皆様、その後如何お過しですか。過日初めて読者通信に投稿したのですが、貴誌十二月号に早速お取り上げ戴き恐縮しております。ところで今日は一ゴムマニヤとして私の趣向を告白したいと思えます。告白等と申し上げる様な大げさなものではございませんが……。

さて、私はいつの頃からか、女子中学生が体育の時間にはく、黒又は紺のヒダのあるブルマーに非常に興味を持つようになりました。と、同時にゴムのドッチボールとブルマーを組合わせて、いろいろ連想して種々のプレイを楽しんでおります。

今日はその一、二をここに申し上げたいと思います。

といいましたので、私はハッとしましたが、

「ハア、足を骨折して、一寸形が変になって

先ず用意するものは、女子中学生用黒ブルマー、ゴム製オムツカバー、ゴムドッチボール(これは最近ほとんどビニール製ビーチボールになりましたが、これだと圧力を加えた時、キュッキュッと音が出てあまりうまくありません)いずれも市販で簡単に入手できるものだと思います。また、夏の場合は非常に汗が出ますが、その時は婦人用水着を着用すれば、ほとんど汗は水着が吸いとってくれます。

さて、いよいよプレーに入りますが、衣服を脱いで裸になり、まず初めに肌にピッタリ密着するようにゴム製オムツカバーを着けます。その時の最初のタッチは、何ともいい表わせません。ゴムオムツカバーを

ますの」

と、冷汗をかきながら、ごまかしたのでございます。

その日、宿へ帰ってから、久しぶりで、どうやら本当の犬らしくなった伏人に、ごほうびとして、特殊な飲料水を下げ渡してやりましたの。

二

今まで、お話しいたしましたのは、責めというより遊びの部類に入ると思いますが、大体マゾ男って、空想ばかり発達して本当の責めに対しては、案外意気地がないものですね。私の伏人なんかは、その点相当以上の実行力を持っていますけど、それでもできない事だってありますのよ。

本当に伏人って幸せな奴。勿論、私も幸せよ、だって二人の秘密のプレイをしている時以外の伏人ってとっても紳士だし、私だって貞女なのよ。そうですとも、プレイが普段の生活の中にまでけじめがつかないで入り込んだら、お互いに丈夫で長持ちいたしませんものね。

では皆様、また機会がありましたらね。さようなら――。

ぴったり当てたままで、今度はゴムドッチボールとブルマーを用意します。

まずドッチボールに空気を入れ適度に膨らませます。次にブルマーをはきます。そして、このブルマーの中に適度に膨らませておいた先程のドッチボールを無理矢理押し込む時の間がまた最高です。この頃になりますと、先に着けたゴム製オムツカバーが、丁度体温の温みで、ゴムがやわらかくなって、より一層肌にぴったり密着して、ゴムの感触としては最高の状態になっています。

殊に汗ばんだ肌に密着したオムツカバーの感触は、身体を動かすたび、腰の伸び縮みの際には、はっきりとゴムのタッチが意識でき、その感触は、とうてい筆では書き表わせないくらいです。

そしてドッチボールをブルマーの中へ押し込んだまま、部屋中を歩いたり、二階へ通じる階段を上り下りしていると、ドッチボールのプリプリしたゴムの感触が何ともいえない響きを伝えます。

あるいはドッチボールを押し込んだまま他のボールにまたがったり、また四つ這い

になって、そのプリプリとした弾力とゴムの感触を心ゆくまで味わったりします。また、時には、ゴム製オムツカバーを着け、ブルマーをはき、ドッチボールをブルマーの中へ押し込んだ上から、更に雨ガッパのズボンをスソにゴムを入れブルマー型に改造したゴム布をはく時もあります。

この時は、オムツカバーのゴムのタッチもさることながら、ドッチボールを押し込んだために、異様に膨らんだ腹部を鏡に映し出して、いつまでも一人で見とれております。まだまだ他に、ゴムオムツカバーの代りにゴムズロースをはくとか、プレイの方法には、いろいろありますが、長くなりますので、今日はこのくらいにしておきます。ゴムカバーの代りに、バンドとか、ビニール製のいろいろ各自工夫したものを着けるのも一考でしょう。

ゴムマニヤの皆様も、何か自分はどういうプレイをしているというようなことがあれば、お互い誌上に発表し合おうじゃありませんか。それによって、今まで知らなかったヒントを得て新しく楽しいプレイの一つも生れてくると思います。

〈読者体験記〉

斬られる女と腰巻

森 田 敬 三

鋭い悲鳴と共にのけぞる女、一瞬、裾前が僅かに開いて赤く眼を射る腰巻の鮮烈さ。崩れるように仆れると、苦しそうに一転して、もがく脚に裾が割れ、真紅の腰巻が燃えるといった時代劇実演の、美しく着飾った女が斬られる場合です。

私はこの、女が赤い腰巻を乱して斬られる場面が大好きで、当地へ巡業して来る芝居をしばしば見に行きます。今日では赤い腰巻はせめて芝居の斬られる場面か、或いは余程の乱斗の場面以外には、殆んど見る事が出来ないからです。数年前までは水島早苗や千原

みどり等の劇団が、女剣戟でずい分と楽しませてくれました。

筋書きや科白は二の次で、何と言っても魅力は、その女優さんたちの美しさと、女同志が長刀を揮っての大立廻りの裾から、ぱっぱと蹴出される赤い湯文字。斬れて死ぬ女の乱れた裾に、恥かし気にまつわる赤い腰巻でした。それも、芸者さんのように初めから人に見せるための赤湯文字は余り色気がないので、誰にも見せないように大切に隠してある赤腰巻が、斬られた衝撃と絶命の苦悶に、覚えず踏み開かれる処に、得も言われぬ色気が

漂います。

何時か見た『大尉の娘』もなかなかの好演でした。

半狂乱になった娘が、裏切った恋人の結婚式場に放火して多数の死傷者を出し、退役軍人の父に自決を求められて胸を刺そうとするが氣力が足りず、遂に父に追廻されて刺殺されるという凄惨な場面。その父も続いて切腹しますが、舞台一面に全切声をあげて逃げまどう娘の裾から蹴出される緋縮緬の腰巻の美しさ。

やがて追附かれてグサと脇腹を刺され、絶



叫と共に仆れると、断末魔の苦悶に裾前はハラリと開き、真紅の腰巻を波打たせて二転三転、やがて絶命の姿勢になります。その苦悶の間にも赤い腰巻を恥かしがって、掻き合わせようと幾度か空しく手が泳ぐ。その羞恥と苦悶と赤い腰巻の織りなす華麗な絵巻は観客の魂を吸い尽くすものがありました。職業とは言え演じて居る若い女優さんは本当に恥かしくて堪らなかったでしょう。

雑誌の口絵や挿画にも、女が斬られ、或は絶命した場面には、殆ど例外なく赤い腰巻が恥かし気に見せてあります。これが無いと、画面には殺される悲惨さだけが見えて、その女の美しさ、艶かしさが出ないのでしょうか。但し、時代物の挿画の腰巻が殆ど赤くなつたのは、つい最近の三年間で、それ迄はみんなピンクの腰巻で、史実に反していました。実際に徳川中期頃から大平洋戦争までの腰巻は、年寄りなら白、やくざの女房が青くらいなもので、其他は大い赤だったのですから。映画は四、五年前までは斬られる女が写実的に裾を乱して見せましたが、白黒なのでよく感じが出ません。困ったことに、近年天然色映画がふえるにつれ、殆んど腰巻が画面に見られなくなりました。

ふんだんに見せてくれたのは『歌麿をめぐる五人の女』くらいなものです。話によると最近の時代劇では女優さんは、色気を充分に出すために昔の人をそのままに、ノーパンティで赤い腰巻をするよう指導されているそうですが、残念なことに、それを見せにくれません。『はだか大名』で某武家の娘が風呂から帰って、高田浩吉の『大名』に挨拶する時ほんの一瞬裾に赤いものがひらめいて、「ははあ、やはり赤いのをしてるな」と思わせた位のものです。

それでも、天然色の『右門捕物帳』や怪談ものは、よく見に行きます。この種の映画に限つて、せめて数秒間、殺される女の赤い腰巻を見せてくれるからです。どの映画だったかラストシーンで、殺しの場面ではないが、女スリが赤い腰巻を蹴散らして恋人の右門を追う場面が、末だに印象に残っています。其他の映画では女優さんが決して腰巻を見せてくれません。

もっとも、有名な女優さんにして見れば、天然色に真赤な腰巻を出して死んだ姿などを日本中の人に見られては、恥かしくて堪らないでしょうが、然し、これは写実に反します。ある若い主婦が自殺か他殺か分らない死

に方をした時、警察では、その和服の裾が少しも乱れていない処から、他殺と断定したそうです。どんなに我慢強くても、意識を失った後もやはり体は動くものですから、裾は必ず乱れるのです。だから女は自害する時、必ず膝を縛ります。

芝居でも最近では、腰巻を見せない傾向が強くなりました。先月見た大川龍之助一座にも、美しい小唄の師匠が斬られる場面などありました。やはり見せません。仆れ伏して居るのを私が、客席の位置を変えて観察すると、裾にチラリと、殆ど見えない程度にのぞいて居るのが、やはり赤い腰巻です。折角赤いのをしているのに、見せてくれたらと恨めしくなります。

私は時々、女が斬られる下手な絵を画きますが、腰巻は必ず最後に赤く着色します。すると、今までの殺される悲惨な場面が、一転して艶めかしい、美しい場面になります。それは不思議なほどです。若しこの赤い腰巻を先に着色すると、漂う色気に幻惑されて絵がうまく出来ません。

愛読する奇クにも、最近女が腰巻を乱した姿が殆ど見られなくなり、寂しく感じます。僅かに滝れい子先生の絵が私を慰めてく

れます。

この、絵を画くために私は、時々、斬られる女を実演します。と言うのは、腰巻の乱し具合ばかりは、自分でやって見る以外に観察の方法がないからです。妻の居ない間に、彼女の着物を借用して、下は勿論、裸まで完全に除って素肌には赤い腰巻をします。何だか女になったような感じです。のけぞる際は、片膝を高く上げると、チラリと赤いものが裾の割れ目に閃めきますが、そのまま仆れても、動かなければ腰巻は出ません。斬られた女は死の苦痛に、右に左に転がって悶えると、忽ち裾前は大きく開いて、真紅の腰巻が悩ましく乱れ、誰れも見えて居ないのに、恥かしさに顔が火照ってきます。その腰巻も割れて、白い太ももが出る頃には、もう恥かしさ堪らず動作を止めてしまいます。

これを、代りに白い腰巻でやってみても、大した色気も出ず、さして恥かしくも感じません。

近來次第に多くなった和服女性が、どんな腰巻をして居るかは私の興味の焦点なので、何時も裾に眼が行きます。街頭で、たまに赤いに出合ふと嬉しくなつて、その女性の右側に腰巻の最もよく見える位置を保つて、少

時一緒に歩いたりします。然し、実際に赤いのは二十人に一人も見当りません。

何故でしょう？ 赤い腰巻のチラチラする情景は、男女を問わず、誰が見たって美しい限りの筈ですのに。答えは簡単です。つまり最近の所謂『流行』が、決して人々の好みからでなく、メーカーの方針によって決定されるからです。そのメーカーたちが、あの昭和初期のような芸術的な和服とは似ても似つかぬ殺風景な、原始的な、但し眼新しい柄や模様の着物を売出せば、何も知らない若い世代の人達は、何の抵抗もなく受入れて、どんどん売れるからです。

従つて腰巻も、赤を止めてピンクに、そして白に、更に白のレース附きにと眼まぐるしく変化をつくつて売るのが、それが青にも花模様にもならず、一様に白のレース附きで洋服のスリッパの感覚を出すものになったのは、これがアメリカ人の下着に似て居て、海の彼方の支配者の氣に入るからです。日本人たちが、如何にアメリカに心服し、あこがれて居るかということの証明に、これがなるのです。他国の支配を受ける場合、こうした服装の隅々にまで支配者の政策は侵透して来ます。すべての生活様式から思想までがアメ

リカンナイズされ、日本民族が世界に誇る古典舞踊や邦楽、歌舞伎等は、古臭い時代遅れのものとして捨て去られ（キモノも例外ではありません）アメリカの芸術の中の、最も低級なものが盛んに入つて来ます。

然し、いずれにせよ、最も悲惨であるべき殺人場面さえ、あれ程美化してしまふ『赤い腰巻』は、決して日本人の生活から消え去ることはないでしょう。『非活動的』『非文化的』『封建的』『時代遅れ』などと、散々に悪罵されて、一時は全滅かに見えた女性のキモノが、その世界最高の美しさの故に再び普及し始めた限りは、そのキモノの美しさの核心である『赤い腰巻』は必ず復活するでしょう。

奥さん、お嬢さん方よ、赤い腰巻とノーパントリーの恥じらいは、貴女の魅力を倍加します。どうか、これで夫や恋人を悩殺して下さい。『赤い腰巻』を、残酷な『殺し』の場面ではなく、愛の囁きの中に、生活そのものの中に氾濫させて、人生を楽しめるものにして下さい。洋服では、絶対にこの美しさは出せないのですから。

（おわり）

中村竹弥奮斗公演

青山播磨

おもだか・しの

於・新橋演舞場
 作・南条範夫
 演出・武智鉄二

中日過ぎに、見物いたしました。

話の筋は、今までの番町皿屋敷とは、大分変って居り、お菊に横恋慕して、きっぱりはねつけられた播磨の悪友が、断られた腹いせに酒宴の席上家宝の皿を捧げて出たお菊の足を払って、ころばせて皿を割らせ、仲間の者と共に、お菊を手討にせよと云立てます。

播磨はお菊を深く愛して居り、深い関係に有るので、何とか助け様と、色々取なしますが、大勢に云い立てられ、仕方無く女の仕置は妻の役だからと云って、妻のさきにお菊を渡してしまいます。此のさきと云う奥方は、大名の娘ですが、大変に嫉妬深い仕末の悪い

代物で、播磨も、かねがねもてあまして居たのでした。それが客の前で粗相をしたお菊を渡されたので、かねてからの嫉妬を爆発させ、自分の部屋の庭先へ引据えて、折檻を始めます。やがて客の席に居る播磨の耳にも、絹をさく様な悲鳴が、高く低く、或いは絶え入る様に聞えて来ます。

此のあたりの演出は、中々よく播磨の心中を良く演じ、悲鳴は舞台の陰から聞えて来るのですが、長谷川秀子のお菊は此の悲鳴を、どう云う風にして出して居るのか判りませんが、演技以上のものを感じさせ、次の場面を予想させるのに十分なもので、武智氏の指導

宜しきを得たものと思います。

次の二幕の二場が我々の為の見せ場で、さきの部屋の庭先です。さきは、先程から庭先で女中達に、お菊を弓の折れで打たせて居りました。舞台向って右手に例の井戸が有り、雪景色です。お菊は先程の正装のまま、土の上にくず折れる様に顔を伏せて居ります。その側に女中が二人立って居り、座敷にはさきと女中が二人居ります。

「顔をお上げ」と、さきが云うと、庭の女中が二人お菊の両手を取って、無理に顔をねじ向かせますが、割合不自然に成らず、此の女中連も、奥方に負けず劣らず、中々下地が有

そうに見えました。

その後、一しきり二人掛りで打据えますが此れは公開の演技としては此の位で我慢しなければ成らないでしょう。此の責は、普通の奉公人に対して主人が行う折檻と違い、お菊は重代の血を割った科人ですから、どの様に責められても、ひたすらに苦しむだけで、許しを乞う訳には行かない所に妙味が有り、責殺される運命と観念し乍らも、なお肉体の苦痛に堪えかねて慈悲を願う矛盾が見せ場になって居り、繋がれて居なくても逃げ出す訳に行かず、縛られずとも動く事が出来ない有様は、縄付の折檻とは又気分が違って中々よいものです。

弓折れの打擲が一段落すると、奥方は「その様な事では手ぬるい。着物をぬがせて、肌をいため付けておやり」と命じますので、奥方の傍に控えて居た二人の女中の内、一人は火鉢の火の中に火箸を入れ焼火箸の用意をし他の一人は庭へ下りて二人と共にお菊を追廻し、上になり下になりし乍ら帯をほどいてしまします。さすがにお菊も着物の前を押さえ立て立りますが、元氣のよい女中が後から掛って着物も剥ぎ取ってしまします。

此の時の伴奏には、楽器を使わず、少人数

の謡が使つて有り、舟橋の後を謡って居ましたが、場面との調和もよく、効果がありました。謡手の氏名等は、番組にも書いて有りませんし、何にも発表されて居ませんが、武智氏と肝胆相照らす若い観世兄弟の謡は、舞台の気分をよくつかんで、効果を上げて居りました。白の下着に薄桃色の扱帯姿のお菊は、髪が二筋三筋顔に掛けて、中々凄艶です。

お菊を下着姿にしてしまった女中達は、その両腕を抱え込んで摑まえると、一人が前に廻り、自分の簪を抜いて、菊の左の袖をまくり上げ、高腕に突立て、力を入れて刺し通します。此の所は、中々上手く呼吸が合つて、菊は齒を喰しはってこらえて居ますが、簪を突刺したまま手を放して、一寸間を置き引抜くと、さっと血が吹いて腕に伝わり着物にも飛散ります。女中はそのまましゃがんで、菊の両足を抱えると、裾をはだけて今度は左の太股を突上げます、三寸位も深く通して引抜きますが、血紅の工合は大変よく中々よい色の血が流れて、着物を染めます。

腕押さえの女中達に突放された菊は痛みに堪え兼ねて、崩れる様に打伏しますが、奥方は、「縛っておしまい」と、冷たく命じます。そこで三人はお菊の足を持って縁側の近

くまで、引ずって行き抱え起すと、菊のしこきを解いて、後手に縛上げてしまします。縄を掛ける前に手足に傷を付けて置く位置は、史実に有る事か、作者の創作か判りませんが処刑前の罪人に施す処置とし、誠に良い方法だと思ひます。

こうして一の腕と太股に深きずを作ると、出血は間もなく止まりますが、きずの痛みの為に、殆んど手足を動かせなくなり、自由を失つて抵抗出来なくなつてしましますか、縛り上げるにしても、急ぐ必要もなく全ての取扱いが大変楽に成ります。もっとも、こらえ性の無い罪人だと、泣叫んで始末が悪くなるかもしれませんが、助からぬ身の上と観念させるには、何よりの処置でしょう。

私はちゃんとした縄を使わない縛りには、全く興味を持って居りませんので、此の縛り方については、何も申しません。しかし、割合しつかりと、乳房の上と下に一回ずつ廻して結びましたので、こういう風な縛り方の好きな人でしたら、十分満足されたいと思ひます。舞台の上で、女優さんがやる事ですから、たとい細引を使つても、大した事は出来そうも無いので、寧ろこんな所で我慢した演出家の見解に敬意を表すべきでしょうか。

後手にされた帯無しの下着姿は、方々に血がにじみ出して、大変美しく演技が割合控え目で、激しく暴れたり、大声を立てない事も、伴奏の謡と相まって、想像力を働かす余地が十分有り、映画等では得られない雰囲気醸し出す事に成功したと思います。

やがて火箸の焼加減を見はからい、袱紗で柄をつかんで、取出すと、庭に居る奥方に渡しますので、受取った奥方はそれをお菊に見せびらかし乍ら、近寄って行きます。此のあたり、長谷川の演技は中々よいと思います。やがて、女中達に押さえられた身体をのけぞる様にして怯えるお菊の左の頬に火箸を押付けるとサツと煙が出て、血が流れ出します。

つぎに女中の一人が、奥方の火箸を受取ると、代りに煙管を持たせ、お菊の右の鬢の毛を一掴み程、鬢から引いて取ると、煙管の雁首に巻き付けて、奥方に手を貸し菊の腰に足を掛け、二人掛りで引張ると髪の毛と共に、血のついた皮がはがれて取れて了い、お菊は苦しみの為地に倒れます。

此の次が愈々井戸吊りで、倒れているお菊を三人が抱えて井戸の所へ持って行き、つるべ縄を後手に結び付けて吊上げます。此の所は、お菊は井戸の中リフトの上に立って居る

ので、吊しの感じは殆んど有りませんが、そのまま又折弓で打たれる所など、演技としては先ず先ずと云った所です。

やがて、四人掛りで綱を繰り出し、井戸に下して、水漬けにしますが、女中達が手を放すと、滑車がカラカラと廻って、本水がはね返ります。女中達は中をのぞいて、「あれ、あの様に苦しがって居ります」などとおしゃべりをし乍ら、見物して居りますが、「上げて見ましょう」と云って皆で引上げます。

引上げられて来たお菊は、元結、切れて、髪はおどろに成り、ぬれた下着に血がにじんで広がり、一段と見事な姿に成って居ます。少し離れて見物して居た奥方は、思い出して懐剣を抜くと、「死ぬよりも苦しい目にあわせよう」と云って、お菊の顔に刃を向けて近づいて行くと、わなないて居るお菊の口にくわえさせます。奥方に逆らう事の出来ないお菊は観念して刃を中に向けた懐剣をくわえて居ると、奥方は柄を持直し、満身の力をこめて両頬を耳元迄引裂って了います。すると奥の方から播磨がお菊の名を呼び乍らやって来る気配がするので、お菊は井戸に吊したまま奥方を始め女中達一同は、自分の部屋へ帰って了います。

その後へ、播磨がお菊の名を呼び乍ら探しに来て、此の有様を見付け、助け下しますがお菊は、

「此んな姿に成って生長らえても生甲斐が有りませぬ故、御手討にして下され」

と頼むので、仕方無く介錯する事に成ります。此の斬方はどうも変な斬方で、左の肩口から血が大分ににじみ出しますが、後で死骸を抱き起して、顔を見る仕草が有るので、首を斬り落した訳ではないらしく、袈裟掛に斬下げたのかとも思いますが、私には此ういう切付け方で人を即死させる事が出来るとは、思えません。

第三幕には、お菊の姉という事に成って居る遊女勝山が男装で、出て来ます。髪は後には鬢に結って、熨斗目に馬乗袴を着け、大小を差した姿は中々良く、一寸楽しめました。

最近映画でも演劇でも、此の方の趣味が中々盛んですが、ろくなものは無い様で、入場料金を詐欺にあった様に思う事が多いので、困って居りましたが、此の青山播磨は作者、演出者の呼吸が良く合ひ、最上の部に入れた良いと思われ、大変楽しく拝見して参りました。

体験小説

愛情は縄に結ばれて

新井マ・リ子

自分でもどうやら女らしくなってきたなと思う胸のふくらみをグッと締めつけられ、後に組み合わされた両の手首が上へ吊り上げられると、右の肩の骨にグキッと痛みを感じ思わず「アッ」という声が出ます。

「痛かった？」と彼の声、反射的に首を横に振る私。ああ私にもこのような素質があるのか知ら、何だか恐い。彼が現われるまでの私は、ごく当り前の女だったのに。

今年の六月の初め頃、彼が私の勤めているお店に来たのです。新宿のあるキャバレーで

す。その頃の私は家庭の事情で家出して、遊んでもいられないので、女一人食べられるだけの仕事を捜したのですが、大学を中退しているのも、どうしてもこういう所になってしまいました。勤め始めて三カ月位でしたので女給という仕事に馴れられず、おとなしいお客様ならよいんですが、酒ぐせの悪い人や、いやらしいお客の時は、本当に困ってしまいました。

彼はこのお店へ来るお客としてはとても上品でした。私は本番で彼のテーブルへ出まし

たが、ビールを飲みながら

「本番というのは、他の客から指名がかかるで行っちゃうんだろう。」

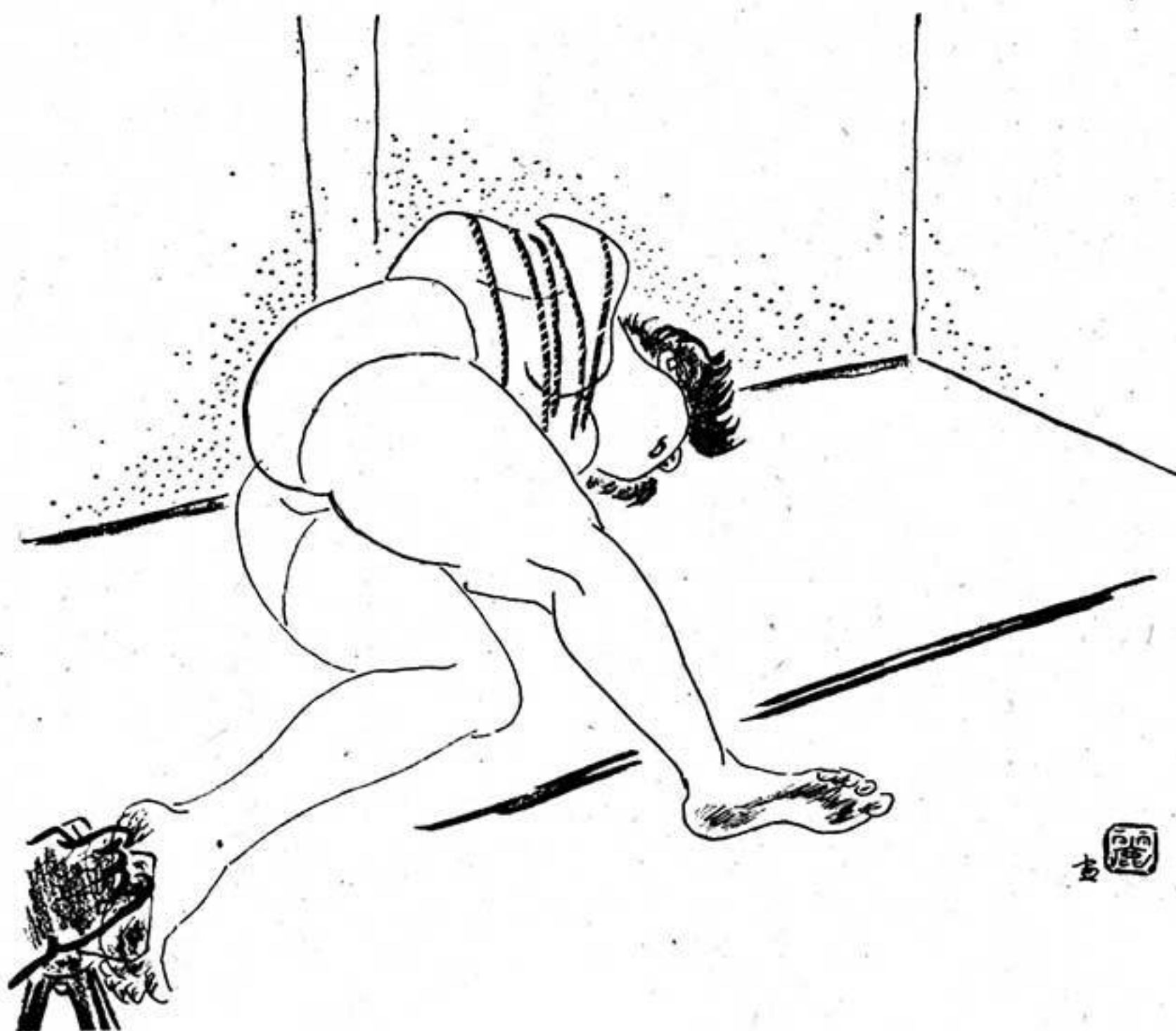
「そうです。」

「じゃ君を、ご指名にしよう。」

「ホント、ありがとう。」

というやりとりから本番から指名に直してくれて、その日はビールを五、六本飲んで帰りました。

いやらしい話は一つもしませんでした。それから二、三度来る内に写真のモデルになっ



てくれというのはです。勿論普通のコスチュームのモデルです。私もセーラー服からすぐイブニングになってしまったし、家出してから一度も写真を撮らないので、喜んで承知しま

した。お店では店の貸衣装を着てますが、自分のドレスはまだ幾つありません。今度新しく作った、胸と背中が三角に大きくあいていてノースリッパ。生地をタップリ使ってパ



ーッと広がるフレアーのワンピースを着て銀座の並木通りの約束した所へ行くと彼はもう来ていて、「チャア」と声を掛けながら、そばへ来て、ヘアスタイルやドレスがよく似合っているとほめてくれました。

七月の半ば頃でカンカン照りの日でしたので、彼は「こう暑くちゃ日なたじゃ大変だからデパートの中で撮りましょう。」と松坂屋へ入りました。なる程、ここなら冷房完備で涼しい訳です。へ入ると彼が「デパートで買物する女性てなテーマで撮りますから一人で来た積りでブラブラしてて下さい。そこをスナップしますから。」という事

で、私もそのつもりでケースをのぞいたりマヌカンを見上げたりしていましたが、カメラがたえず自分をねらっていると思うと、どうしても表情や体がこわばって思うように動けません。すると彼が近づいてきて

「無理にカメラを意識しまいとせずに、逆にカメラを意識して芝居するつもりになりなさい。」というので、気を彼のいうようにするとその方が動きが楽になりました。

アクセサリー売場でネックレスやブレスレットを首や手にカラめて鏡に写して、一寸キザなポーズをとったりすると彼は、その仕草が気に入ったのか、今までより激しく私の周囲を回りながらシャッターを切ります。そこを四、五人の女学生が見ていて「キレイな人ネ。」「ファッションモデルか知ら?。」なんて声が聞こえるので、一寸得意になって自然にアクションが大きくなってしまいました。

撮影が済んでお茶をご馳走になり別れる時に彼が「ほんのお礼のしるしだ。」といって小さな包をくれました。帰ってから開けて見ると千円の商品券でした。彼がその晩、お店に来たので返そうとすると、「いや、本職のモデルを頼めばもっとかかるんだから。」と受け取ってくれません。

それからモデルに頼まれる度にくれるので悪いなと思っていると、今度はヌードになつてくれないかというのです。これには一寸考えましたが、「君のような美しい体の線はこの頃のヌード写真のモデルとしては最適なんだ。」なんておだてられて、今までのところでは彼は品行方正ですし信用できると思つて思い切つて承知しました。

彼のアパートは洋室なのでベッドを片づけて急造のスタジオにして撮りました。とに角全裸で男の人の前へ出るのは始めてですので恥かしくてふるえてしまいましたが、彼を恐いとは思いませんでした。不思議なもので、コスチュームの時は悪いなと思ひながら受け取つていた商品券も、この時はごく自然に受け取つてしまいました。ヌードの時は二千元券に値上りました。

いつも撮影が済むと食事したり一緒に映画を見たりするのです、九月のある日、いつものように、撮影がすんでから映画を見ましたが、この時は凄く縛りシーンがありました。彼が特に、その映画を目的に入つたのでしよう。映画館を出て喫茶店に入りましたが、この時始めて映画の縛りのシーンが話題になりました。今まで一緒に見た中にもお姫様が縛

られたり女給が鞭で打たれたりする映画も見ましたが、特に話題にはなりませんでしたが、この時は、私の方から話題にしてしまったので、今考えると彼のその時の胸の内は「しめたっ！」てなことだったのでしよう。

その時のいきさつはこうです。喫茶店のソファに落ちて着いミルクティを一口飲むと彼が「どう面白かった。」と聞くので「イヤーだ、私気持悪くなりそうだったわ。」と返事をする

と、彼は「ナニあーあれか、フン一寸面白かったね。」

「マア面白かったなんて。」

「君はどう思う。」

「どう思つて?」

「女が縛られたり、こう、ひどくいじめられるようなシーンを見るとさ。」

「女優さんで大変だと思うわ、男の人ってあんな所が面白いの?」

「人によるがね、ああいったシーンのある映画を捜して、そこだけを楽しみに見に行く人だつてある位だよ。」

「へエ、そんな男の方ばかりでしょう。」

「女性にだつてあるよ、自分がその悲劇のヒロインになつたつもりになつてさ。この間も隣りにいた女の子が……女の子たつて君位

だつたけども、お姫様が山賊にいじめられていると、さも苦しうに『ああ早く若様、助けに来て頂だい』なんてつぶやいてたよ。助けに来て頂いだなんてのは自分の事に使う言葉だよ、お姫様に同情するというのなら助けに来てやればいいのに、という筈だ。」

「フン、どっちでも構わないじゃない。けど、そんなシーンばかり見て歩く人なんてホントにいるのか知ら。」

「いるさ、見るだけじゃなしに実際に女性を縛りたいと思つている人もいるんだよ。」

「ンマア。」

「また、そういう人達を喜ばせる本だつてあるよ。」

「マア、そうすると女の子で私は縛られたいなんて人いるの?」

「ああいるよ、その本に縛られた女の写真も出ているし、読者の欄には『縛られたい』てな投書も出てるよ。」

「女の子を縛りたいなんて男の人も?」

「ウン。」

「ホントか知ら。」

「ここにもいるよ。」

「エエッ?」

私は驚いて彼の顔を見ました。

「実はお願いがあるんだ。」と彼。

「なあに？」

「君を縛らしてくれないか。」

私はただ彼の顔を見つめるだけでした。

「驚くのも無理はないさ、君にはそんな事に対する興味はないらしいから、だが理解してくれない？　ただ縛るだけだよ、僕としては縛る事よりも縛られた女性の色々なポーズを写真に撮りたいんだよ。だから形だけでよいんだよ、その他の事は何もしないよ。」

それから、どうしてそんな事に興味を持つようになったかを一生懸命説明しました。でも私にはそんな事がホントに仲々納得できないので、

「とにかく考えさして。」と、それ以上話を進めさせませんでした。

実際彼がいうように私も恋愛小説を読んだり、メロドラマ映画をみたりチャンバラ映画でお姫様がいじめられたりすれば、自分がそのヒロインになったような気にもなりますがそれも読んだり見たりしている間だけの事。本を伏せ映画館を出てしまえば、もうそんな事は全然頭の中から消えているのです。それを現実に自分が縛られて五体の自由をうばわれるなんて。と、その時は思ったのです。

その晩、彼は早速本を持ってお店へ来てクロドと頼むので、この本見てから返事するというと彼も安心したのか、それ以上はいりませんでした。アパートへ帰ってから軽い気持ちでパラッと開くとハッとして胸が急に高鳴り始めました。四馬孝の絵が最初に目にうつったのですが、今まで厭らしい事と内心思っていたのとは逆にその絵に引きつけられていくのです。そっとページをめくると今度は写真でしたが、ああやっぱり実物は厭らしいなと感じました。絵の方がいい、それも四馬孝の絵が一番感じがよいと思いました。

目次の所々赤丸がつけてあります。彼が特に読めというつもりでつけたのでしょうか。告白文でした。色々読んでいる中に興味が湧いて来て、頭の中で（面白そうだな、やってみようかしら）（駄目々々こんな事）（でもやって見たいな）と、結局彼ともう一度よく話してからにしようと思ひ、その事ばかりが頭へこびり付いてしまい、どうも困りました。と、いう事は大いに興味があるという事になります。彼は返事を待ち焦れてるだろうから何と答えようかしら「やっぱりおことわりするわ。」それとも「ウン。」というかなと思案投首の所へ彼からご指名がかりました。

席に着くと、早速「どう？　決心がついた……」

「ウン、じゃあ縛らして上げるわ。」

「アリガトオ。」

急に彼が変な声を出したので隣りのボックスのお客が皆こっちを向きました。私も一種のアバンチュールだと思い切って承知してしまいました。

彼はもう嬉しいらしく、いつもよりメートルを上げました。けれども実行する日時は忘れずに約束して行きました。彼のいうには相手に本当の悲鳴を上げさせ泣きさけさせるのは本当のつまり『真性サディスト』だが、僕のはそういう場面を君に演技してもらって、それをカメラに納めようってんだから偽物『偽似サディスト』だよ、なんていいきかします。打ったりしないし縛るのも私の我慢できるだけの範囲にするそうです。

とうとう約束の日です。あれからも幾度か迷ったのですが、結局、出て来てしまいました。場所は彼のアパート。ヌードの時も彼の部屋でしたが、ヌードの時とはドアをノックする気持が違います。ノックすると彼がドアを開けながら

「ヤアよく来てくれたね。」

私を中に引き入れるようにしながら

「ああはいったけども、来てくれないんじゃないかと思ったよ。」

「私もどうしようかと思ったけど、約束は約束ですものね。」

「ウン有難とう。よく来てくれたね。」

彼はいつものように紅茶を入れながら

「とに角君はノーマルなんだから縛られるという事に不安や悪感情を持っているだろう。」

「そうよ、あの本に投書してる人みたいに自分から、縛られたいなんて気持は少しもないわ。」

「そうだろうね……じゃあ僕の頼みにOKしてくれた訳は？」

「訳って別にないけど……あなたを信用してるから……。」

「……。」

「それにある程度興味も感じてるからよ。」

「ありがとう、とに角縛られてみてね、そしてどうにも馴れなかつたらハッキリいって下さいね。」

「そりゃあそうだわ、とに角経験してみない事にはわからないわ。」

私としては彼にお客という以上の気持を感じ始めてもいましたし、もし断ってそれっき

りになってしまふ事もおそれましたから……

「早く始めて。何だか胸がドキドキしてきたわ。」と明るくいうと、彼も事を始める糸口が見つかったと思つたらしく、

「では始めさせていただきます。」と最敬礼なんかして緊張した空気をほぐします。

「このままでもいいの？」

「ウン、初めからヌードでキリキリ縛り上げて一遍で懲りられちゃ大変なもの。」

「フフ考えてんのね。」

「そうさ、優秀なモデルを獲得するか否かの瀬戸際だからね。」

彼は私を椅子にかけさせると、両手を後で組ませます。何だか体全体が硬ばってきて、特に胸のあたりがつっぱるような気がしました。手首を先に縛るのかと思ひながら両手を回すと、彼は胸に掛け一巻毎に一寸と引き締めますが、痛くも苦しくありません。きつと遠慮しているのでしょうか。二巻きして背中ではねじったらしく後の手首を組み直して縛り付けます。この時初めて縄が直接肌に触れました。トゲトゲした縄が両手首を重ねて巻きつき初めてグッと締める力を感じました。私の感情は極度に緊張しているらしく、胸の底から何か固りがつき上げてきます。手首を縛

ると彼は前へ回って

「どんな気持。」

私はとっさに答える言葉が見つからず、テレかくしに笑おうとすると、頬のあたりが硬ばって思うように笑顔が作れず、つい下を向いてしまいました。と、目は自然に胸を見ます。その胸には真新しい青味のある麻縄が黒のドレスの胸に二本走っているのが見えます。私は体の緊張をほぐそうと大きく息を吐き、一寸彼を見上げ、すぐ目を伏せました。「写し始めるよ。」の声にもただコックリうなづくだけでした。厭らしいと思う気持は少しは起りましたが、それより恥かしい気持の方がずっとつよく、口をきく事もできません。それから彼の「上を向いて、目を伏せて、左を向いて唇をかんで。」という言葉に体をねじり足の向きを替え、まるで催眠術にでもかけられたように彼のいう通りポーズをするばかりです。と、今まで明々と灯っていた三つのライトの中一灯だけ残してパッと消しました。

ヤレ終りかと思つたら胸の縄が淋しいから一寸縛り直すといいながら、私の気持等かまわないようにサッサと縛り直し始めます。私は案外素直にポーズするので気をよくしたら

しい様子です。今度は乳房の下へも二巻して後手首を縛るとグッと上へ引き上げました。この時です、肩がグキッとしたのは。「アッ。」と思わずいって(痛いわヤメて)というスキを与えず、

「痛かった?ご免ね。」といわれて、つい「大丈夫よ。」といってしまうました。それを聞くとは彼は吊り上げた縄で胸を縛って背中に回っている縄に結びつけてしまいました。手首も前より上がっているの、上半身が一つの塊

りになってしまったようです。殊に手の指ははれぼったく握ってるのか開いてるのか解らなくなり、呼吸も心持息苦しいようです。

そうしている中にも、私の頭の中では(暑いわ、手首が痛い。息苦しい、もうこんな事今日限りだわ)(何だか、自分がポーズしている中に、一生懸命演技している俳優のよう、素敵な気持だわ)というように相反する気が持が入り混じりながら、ダンダン彼に引きずられて行くようです。やっと彼は気が済んだ

か暑かったライトも消え、縄から解放され、窓を開けると涼しい風が吹き込んでホッとて、手首をさすりながらボンヤリ外を眺めていると、後片づけを済ました彼が、冷たいジュースを作ってくれました。

「どうも、つい調子にのっちゃってご免ね。感想はどう?もう懲りごり?」

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

B1	全裸エビ責仰向け(関谷)	一組一枚	一〇〇〇円
B2	逆エビ責め全裸像(水本)	五組五枚	四〇〇〇円
B3	乳首ペンチ挟み(竹野)	十組十枚	七五〇〇円
B4	後手十字縛肩口上(梨花)	二十組二十枚	一四〇〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B5	足の裏擦り責め(竹野)	B6	おへソいじめ大写真(関谷)
B7	剥いだバタフライ(関谷)	B8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)	B10	無防備双手吊り(絹川)
B11	豊満臀部エビ縛り(水本)	B12	一糸纏わぬ股間縛り(水本)
B13	全裸亀甲股間縛り(関谷)	B14	足踏付け二つ折り(大塚)
B15	尻突出しムチ打ち(関谷)	B16	手錠にもだえる(竹野)

B17	尻突出エビ責め(水本)	B18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B19	息もつがせぬ猿轡(竹野)	B20	投げ出した全裸(関谷)
B21	美しき尻部の露出(絹川)	B22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B23	後手柱縛り脚線美(竹野)	B24	強制鼻挟水呑ませ(梨花)
B25	苦悶にねじる裸身(関谷)	B26	責めに気を失って(関谷)
B27	さアどうでもして(関谷)	B28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B29	投げだされた女体(竹野)	B30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)	B32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B33	踏みつけマゾ境地(東浦)		

B34	すべてをさらけて(関谷)	B35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B36	クリップ鼻挟み(絹川)	B37	台上的マゾポーズ(大塚)
B38	吊られゆく美体(絹川)	B39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B40	マゾ女性の表情美(東浦)	B41	喰い込む股間縄(絹川)
B42	灸責めに悶える(梨花)	B43	犠牲台の人身御供(大塚)
B44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)	B45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B46	手枷足枷大写真(四方)	B47	鎖に悶える足首美(柳初)
B48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)	B49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B50	女囚菱縄さらし(絹川)		

△読者体験記▽

グループ切腹プレイのレポート

山田 久仁子

私の拙い体験を御載せただいてからずい分長いことになります。その後、私のプレイにもいろいろと変化がありましたので、御報告かたがた御批判をいただきたいと思ひまして筆を執った次第でございます。

たしか私は前回に、これが最後のプレイだろうという様な事を書いた記憶がございます。実際あのような方法でのプレイは肌に傷痕をのこしますので、どうしても女性としてはたびたびやる事は出来ません。プレイとは云つてもどうしてもより本当に近い方法や感情を求めますと、それだけ真実の切腹に近く

なり危険性や傷痕が大きく、思い切つてプレイが出来ない不満感を味あわなければなりません。

私の場合、今迄行なつたプレイの感覚が強く残つていて、それだけこの不満感も深くあります。そのためなかなか大抵のプレイでは満足感が得られないのでございます。プレイの初め、今まさに突立てようとする時の息苦しくなる様な悦び、突立てた一瞬、激しいしびれる様な痛み。カーぱい引きまわしはじめた時の下腹の肌が切りさかれる手ごたえの感覚と全身にひびく苦痛。流れる鮮血とはみ出

して来る黄色い脂肪層。

自分のお腹を自分でカーぱい切り開いていく感情は実際に多少のプレイを試みられた方には良くおわかりの事と思ひます。実際、この様にプレイした者には忘れられない感情でございします。切腹の悦びそのものとも云えましょう。

私も肌の傷痕を怖れて、あのような刃物も使うプレイを絶対行なわないと誓いをたてましたが、昨年十二月九日に遂にそれを破つてしまふ事になりました。その事情をお知らせ致したいと思ひます。実は私とFさんがプレイ

を致しまして、これを最後に定めてからプレイが行えぬ不満感を転換できるだろうか、それとなく切腹に関心をもつ方々を探す事にむけはじめたのでございますが、女性の方には意外と同じ関心を持つ方々の多い事を発見致した次第でございます。どういうふうにして切腹に関心を持つ方々を探せたか、それだけ御報告致しまして、相当長い文章になるかと存じますが、ここではこの点は割愛致したいと思ひます。出来ましたら、又別の機会に発表させていただきます。

ところで私はFさんを除いて他に三名の方々と切腹について話し合う様になり、グループの様になってしまいました。大体一年程前から全員で五名の切腹愛好グループが出来たのでございます。始めは自分の体験とかいろいろの写真とか資料や切腹のシチュエーションを設定して、どういう切腹をするかという様な事を話し合っていました、その後一人の方の発案で一カ月に一回か二カ月に一回位皆で集って、皆の見ている前でプレイをやってみようという事になりました。

このプレイは腹部に傷をつけない様なもので皆の前で一人一人が思い思いのスタイルでなるだけ真に迫った切腹の型を実演するもの

でございます。勿論苦痛はありませんが皆から見られているという事が非常に強いスリルとしげきになりますし、他の人が切腹する姿を見るといふことによつて大変エキサイト致しますので皆から大変好かれ、月一回のプレイを行う時には、ほとんど全員が出席致しました。

いつもまず幹事をきめて日時や場所を都合致しましたが、五名もの人数で誰からも悟られず思うさまにプレイが行なえる場所がなかなかなく留守になった方のお宅に留守番にかこつけて集ったり旅行という事で旅館を使つたこともございました。

今迄のやり方ですと、まずくじ引きをして順番をきめ、その順に各々の方が自分で工夫をこらして思い思いの方法とスタイルでプレイを行うのです。

ところで、このメンバーは私とFさんを除くと最年長二六才、最年少二〇才で、この方が一人学生で他はBGでございます。この三名の方はイニシアルを使わないでA、B、Cさんと呼びたいと思ひます。

さて、十一月のプレイをしてから皆で次の回のプレイについて話し合いましたが、皆の意見が期せずしてもっと強い刺激を受けるプ

レイを行えたらという事になりました。当然の事で、皆で一度本当の切腹を、例え浅くてもよいからやってみようという意見が出てまいりました。大抵の方は本当に出来たら、本物の短刀でお腹をかき切つて腸を引き出した程でございますし、たった今したプレイの昂奮がさめていままから、その点で反対はないのですが女性の場合、肌に残ること一番怖れるので、これが一番の障害でございました。

しかし、ごく浅い様な場合、手当がよければ私の体験からしても傷痕が、そんなに残ることについてそう心配しなくてもよいと考えましたので、その点を説明したところ皆大変乗り気になってしまい、この次のプレイには本当に刃物を使って実際にプレイを行う事にきまりました。しかし実際にプレイを行うのは危険があると大変ですから、Fさんが提案してまずとにかく皆の下腹部の脂肪層の厚みを計り、これによつてプレイの方法をきめることに致しました。

消毒した注射針を持ったFさんが計られる方の後から抱く様にして右手で下腹部に針をゆっくり突立てるのです。筋肉に針が突立つ時の特有の鈍い痛みによつて脂肪の厚みを計

る方法を行いました。皆その方法は初めてでしたがすぐにわかりました。

「もう少し深く」「ちょっと浅くして」という様にして針でさぐって下腹部の脂肪の厚さを計るのです。私の場合は以前よりふとったせいかさらに厚くなっている様でした。皆それぞれ人によって多少のちがいはありましたが余り大差はない様でした。こうして下腹部の脂肪の厚さを計り次に誰がどの様なプレイをするかと云う点をきめました。出血や傷口の大きさによって手当てする方法や、そのための準備が必要だからでございます。

私達のプレイは今迄の各々の方が自分のプレイのプランを誰にも黙っていて、その時になつて各々の方がそのプランによってプレイをするので、どういうプレイが行われるかまったく前もってわからないのです。しかし今度は少くとも切り方と深さ、長さをきめる必要がございました。その他の事は各々の方にかかせられました。さて話合った結果次の様にきまりました。

まず大別して、浅く大きく切る人と深くして小さく切る人とに分けましたが、まず最初のグループとしてはAさん―浅く大きく切る。深さは一分以内で下腹部を左脇腹から右

脇腹まで一文字に一ぱいに切る。したがって長さは一尺近くなります。浅いので傷が開く事はまずありませんが、長いので傷痕を残さないため手当を、充分にする必要がございます。

Bさん―浅く一文字。深さは一分以内で下腹部を一文字に切る。Aさんはやや下腹部でも上部であるのにBさんは出来るだけ下部を切る。

Fさん―浅く十文字。深さは一分以内で、もし出来ればもっと深く左下腹部から右下腹部まで切り、さらに刃先をへそに突立てて出来る限り下まで切下す。今度の位置は以前の傷痕のやや上を切ることにしました。

Cさん―深く一文字。ただし普通の一文字とちがってへその真下に刃を上向けに突込み上に向かって逆に切上げる。出来ればへそまで、深さは六分―七分位にします。長さは二寸程を望んでいます。

私―今迄のプレイはすべて一文字でしたのが十文字切腹というのが、どういうものなのか、やってみたくてたまらいので十文字にします。へその下で横に一文字に三寸程刃を抜いてへその真下に突込んでへその方に向かつて切上げます。深さは出来るだけ深く八分と

致しました。

以上が切り方のあらましでございますが、この他に共通な事として刃物は全員メスを使うこと。くじ引で順をきめ―これはいつもと同じです―その逆に切腹するが切りおえても刃を抜かず、突立てたまま全員が切りおえるまで待つことでした。それから着衣は各々の人が自由にきめますが、いずれの場合にしても白むくの代用として浴衣を着用して皆が集り、いざ切腹する時に各々の服装で行うことに致しました。

日時は十二月九日の夜で今度のプレイは出血してあたりを汚したりすると困りますし、又血のついた衣類を処理したりしなければいけませんし、傷の手当がありますので、どうしても旅館を使うわけにまいりませんでした。ところが非常に好都合にちようどBさんのお宅が留守になることがあり、それが十二月九日でしたので十二月九日に致しました。

当日は夕方から、Bさんのお家に集りました。まず、皆で場所をこしらえました。八帖のお座敷に白ビニールのカバーをかけた大きな座ぶとんを丸く並べ、各々の姿体がすっきり見られる様にしました。

中央に燭台をすえましたがローソクの灯で

は細かい所が見えないので灯をつける事はつ
けませんが、これは形ばかりに致しました。各
々の前に三宝を一つずつすえFさんが用意の
メスをそれぞれの深さにビニールばんそう
をまき、白布——ホータイで巻きしめまし
た。この他傷の手当に使う清潔なガーゼとホ
ータイと水、その他の薬品類を用意致しまし
た。この他にアミダ式にした順番決定用のく
じを用意致しました。

これがすむと各々の方が順にお風呂を使っ
て、それぞれの準備を致します。私はこの前
のプレイの経験から正坐して行くと下腹部に
ゆるみが出来て何となく気分的に面白くない
のと、実際突立てるのに苦勞するのでいろい
ろと考えた末、以前皆川様のレポートの中で
力士のしめ込の様なものをするとういという
様にお書きになったのを思い出し、ためしに
やってみると大変うまくいくので、これを使
うことに致しました。

しめ込みといっても適当なものがないので
巾のごく広いホータイを用いることにしまし
た。しかしこれもためしてみましたがところが
そのまま用いますとまるでよれよれの縄の様
になってしまいますので、やや固めの紙をた
たんで芯にして入れ、これで締めることに致

しました。お風呂を上ると実際に下腹にしめ
込みを締めてみました。しめ込みといっても
前から見てT型というよりY型になる様にし
め、力をいれてぎゅっとしめると下腹部がギ
ュツとしめられキリッとして大変気持ち上か
らもすぐれたものでした。その上から白い浴
衣をはおりました。

一時間程して皆の用意が出来た頃、次の間
に集ってまず幹事のBさんからプレイの手順
について簡単な説明があつてFさんからめい
めいの腹切力を渡されました。皆それを三宝
にのせて並んで坐り、Bさんの手でくじ引を
はじめました。皆が紙にしるしをつけ終ると
異常なコーフンがあたりにたちこめます。誰
がいつ切腹するかということはいつも大変エ
キサイトするのでございます。何といつても
一番最初に切腹する人は人前で切腹するハズ
カシさと悦びで大変スリルがあるからござ
います。

白い浴衣で並んでいる五人は皆上気した顔
をBさんの方に向けています。開いてみると
一番がBさんでした。「ア、アッ」という声
が皆の口から洩れます。次がFさん、第三番
目が私。第四番目がAさん、最後がCさんで
した。Bさんに促がされて皆次の部屋に入り

ました。

床の間を背にして、中央から一、二、三、
四、五番の順に丸く右廻りに正坐しました。
いよいよプレイが行われるのです。皆がヒザ
の前の三宝にメスをのせ、きちんと正坐する
とBさんが一礼して「B子、唯今より切腹致
します。お見とどけ下さい」というと浴衣を
サツと脱ぎすてました。

Bさんは下にマッ白い海水着を着けていま
した。後で聞いてみると御自分で作られたの
だそうです。コンビネーション型ですがフレ
ヤ等の全くないものでつき過る位に体にピッ
タリで体の線どころか、おへそのくぼみまで
はつきり表れる程でした。上背のある体格の
良いBさんには全くピッタリでした。

皆の見守る中でBさんは右手で刀を取上げ
切ッ先を調べてから左手で水着の上から左下
腹部をゆっくりと撫でていきます。きつと水着
の上からそのまま切るのでしょう。Bさんは
上背はあり大柄な体ですが全体として引きし
まっついて下腹部の脂肪のつき方が割合にう
すく、形のよい腹部でした。

上気した顔をうつむかせていましたが右手
をまわし、切ッ先のキラリとのぞいている刃
先を左下腹部のあたりにかまえ、一瞬ためら

っていた様に見えましたが、左手で抑えている所をねらってサッと突立てました。

皆息をのみましたがBさんは声も洩らさず唯ちよっと体を硬くしたようでした。まぢがいなく腹に突立っているのですが、浅いのでまだ血は出てきません。

白い海水着にきちっと包まれた左下腹部に刃を突立ておえたBさんは一呼吸すると腰をうかしたままでじりじりと引廻しはじめました。まず海水着のき地が切り裂かれ、腹部に沿って張り切っているために丸く開き、その奥に細い赤い線が見えています。それがみるみる太くなってゆき、



床柱を背にしたBさんは白の海水着を着けたまま、さっと下腹に突き立てました。

所々ぽつぽつと血があふれってきます。Bさんは右下腹部まで一息にかき切るつもりらしく、息もつかずに同じ位の早さでじりじりと引廻して行きます。

海水着はもう二寸程切裂かれて丸く開いてみえる肌の傷口から血が三条程つつと水着にしみ込みます。しみ込んだ所は始めポツツと赤くなり、次にそのしみの様に見える赤い点が次第に拡がってゆきます。もう三寸程になり、出血は次第に多くなり傷口の下側の水着がだんだん赤く染っていきます。ちょうど四寸五分程でへその真下、二寸五分程を更に右にじりじりと進んでいきます。水着は一寸以上も切開かれ、口をあけ出血が所々下腹部から太股の内側あたりまで拡がっています。うつ向いた顔は上

氣していますが苦痛の色はみられませんでした。

下腹部もずい分下ですが、ほとんどへその位置で二寸五分位下を一文字というよりやや浅いU字型に切り、右脇まで十分引きつけ、切ると刃を止めました。ほとんど太股のつけ根あたりでございました。下腹部一面赤く染められた水着は、ほとんど中央で三寸程も切り開かれ、もう少しずつ固まり初めた血がくっついた傷口がのぞいています。傷口は開いていない様でした。それでもごく浅いとは云っても八分から九分位もあると相当強裂な感じでした。皆喰いいる様に見つめていましたがBさんが右下腹部まで引きつけ切ると口口にため息がもれます。

私自身も顔がほてって息苦しくなる様な氣持でした。切りおえたBさんはまっ赤に上氣した顔をあげ一礼すると右手で刃を腹に突立てたまま坐り直しました。これを合図のように一礼するとFさんが待ちかねた様にして浴衣を脱ぎすてました。

Fさんは着衣なしで、右手にメスをしっかりと握ると、腰をうかせて左手で下腹を大きく撫で、左下腹部の以前のプレイの跡より更に左より上方に右手をまわして刃先を構えま

す。以前の傷跡がうっすらと見える下腹部をぴんと張ると、一瞬「うッッ」という様な呻き声がもれ、もう刃先は腹に突立っていました。Bさんよりもやや早目にぎゅっと右に引まわしていきます。

傷口が一瞬白く見え、次にそこに血がポツポツと浮出し、みるみる傷口に拡がって太くなります。へその下を通るころには左下腹部には四条程血が長く下腹部をつたって太股から更にひざの下まで流れつたって白いビニールの上にポトポトと赤い点をつけはじめました。ほとんど手を止めず右脇まで引き廻すと刃を抜き取り、ちよっと握り直すのもどかしい様に左手で導くとへそに向かって力一杯たたきつける様に突立えます。豊かな腹部に深く暗くくぼんで見えるへそのまん中に突立ったのでしょう、刃は全く見えなく深く突き立てられた様に見えました。

「うむっ」という様な呻声がありました。後で聞いた所、この一瞬が一番痛かったそうでしたが、これは全く無理のない話でございました。へその中心からやや外れると脂肪がほとんどなく、この位浅く突立てても筋肉に刃先が喰入るからでございます。力一杯に切り下すFさん。へそのあたりからもり上った

下腹にかけて、赤い線がすつとのびて行きます。横の切口と合うと、そこをさらに下に切下します。ほとんどへそから四寸以上も切下します。昂奮のあまり手がわなわなとふるえているのがはっきり見えます。

十分切り下すと私達の作法通り刃を下腹に突立てたまま一礼致しました。出血は横の傷口の方が多く、太股、床にかけて血が糸を乱した様に流れています。傷口そのものはたての方が大きくややひらき気味で一、二カ所黄色い脂肪層がのぞいているところがございました。

次はいよいよ私の番でございました。私自身も胸が苦しくなる様な氣持でしたが、あたりの方々の荒い息づかいがきこえてまいります。氣を落ちつかせる様にして浴衣を脱ぎさりざっとたんで右手に置くと正坐して下腹部を見下すとぴんと張り切った肌が見下せました。固くしめているしめ込みが大変氣持をたかぶらせてくれます。いよいよ右手に刃を取上げしっかりにぎりしめ、左手を下腹にそえると氣が遠くなりそうな悦びと見られているという恥かしさとスリル、いよいよ突立てようとする期待とで顔がかったほてって来るのを感じました。

見ていた方からあとで聞くとまっ赤に上氣していたそうです。ほとんど夢中でした。刃先をこころ思うところに構えると少し手心を加えて突立てました。「ブスッ」という弾力のある、ものが破れる、あの忘れられない手ごたえ、同時に筋肉に刃先が喰入った特長のある疼痛に思わず「アッ！」と声をもらしてしまいました。

思いのほか深く突立ったようです。まちがいにしに筋肉まで突込んでいます。血がたちまち刃のまわりにもつくりと盛り上りタラタラと流れ落ちはじめました。全く夢中でしたが左手で左脇腹を抑えて右手でちょっと刃を抜く様にして力一ぱい引まわしました。皆の視線が私の手元に注がれていることがよくわかり、かつ顔に血が上って来るのを感じました。思った通り臍に突立った刃は重くてなかなか引まわせません。

左手で強く脇腹を抑え、それこそ力一ぱいに右手に力をこめると、ぞりっぞりっと手ごたえがしてヒフが切れ、傷口が引きつれ血が急に激しく流れはじめます。一度切れると後は割合力がいりませんでした。手を全く止めずに引まわしました。しかし、思わず「痛い」と心の中で叫んだ程で多分今迄のプレイのう

ちで一番痛かったと思います。しかし子供の時に指をナイフで切った痛さと全然ちがうもので、ああいう嫌悪する痛さではなく全身にひびき、体がしびれる様な痛さでした。

たちまち二寸五分程へその下を横にかき切りました。出血はかなり多くしめ込みのホータイは血でまっ赤になっています。切りおえて手をとめると、ぐっと傷口が一寸程もはぜてあの見なれた房になった黄色い脂肪層が大きくはみ出しています。皆の「アアッ」という様な感たんの声を夢中で聞き、刃を抜きとると白布まで血まみれの刃を上向にもちかえたたきつける様にしめ込の所に刃を上向に突き立てました。

のけぞりたい程の痛さ、筋肉に突立った痛さとちがう鋭い痛みでした。

「アッ！」と思わず大きな声を洩らしてしまいました。何という覚悟の悪さと自分をばげまして力一ぱい切上げます。でも大変痛くて気が遠くなりそうでした。しかし容しゃなく自分の腹部を切りさいて切腹を続けるかの一入の自分は冷静で——というより情熱につかれて——刃を切り上げて行きます。

ぞりっぞりっと肌の切れる手ごたえと刃の重さは横に切っている時とほとんど変わりませ

ん。血が激しく溢れ出て来たのをみると小さな血管を切ったからでしょうか。夢中で横の切傷まで切上げました。この切腹の一つの期待として横の切口と合さった時の——十文字切腹の感じを知りたかったのです。でもほとんど手ごたえは変らなかつた様でした。

手をゆるめたために傷口が開き脂肪層がはみ出していますが、むしろ傷口そのものは横の一字よりやや小さくなっています。脂肪が押出される様に傷口から大きくはみ出し、その様子は横の切口よりむしろずっと物凄く見えました。どうしようかという一瞬のためらいがありました。ここまでやったのだからと刃先に力をこめて力一ぱいへそに向かつて切上げました。

だんだんと浅くなつてしまいましたが、ぞりっぞりっぞりっと、手ごたえがして激しい痛みが自然にのけぞる様になり血がぼつと溢れ出しました。最後にへそに切込むのに左手でしっかりへその横をおさえてへその奥深く、くぼんだくぼみに力まかせに切込みました。下腹部のヒフと異なる固い感触ですべる様な感じがしたと思ったら、くびれたへその中央に刃が立っていて血がどくどく流れていました。

最後の止めをとぐつと刃に力をこめて突込む様にしました。鋭い痛みと固い手ごたえがしましたが、ささっていく様子はありませんでした。私はそのままの姿勢で一礼しました。私の切腹は終わったのです。引廻している時は痛かったのですが今は気が昂っているせいか全く痛みはありませんでした。血はまだどんどん流れていました。血はほとんどまっすぐにしめ込に吸込まれ、傷は横の方が大きく開いています。皮下脂肪がもち上るようにあふれて傷口一ぱいにはみ出していました。

次にAさんでした。この時になって私は汗をびっしょりかいているのに気付きました。

Aさんが浴衣をぬぐとちょうど藤山さんの様なスタイルでした。長靴こそはいていませんが男物のワイシャツと相当古くなったカーキ色の乗馬ズボンという姿態した。Aさんは正坐すると一礼してメスを執り上げ口にくわえて再び立上りワイシャツのボタンを上から外しました。もろん立腹で、下は全く素肌でした。ワイシャツを開くとバンドに手をかけてぐつとゆるめ、両手でウェストのくびれから押し下げて下腹部を表し、力一ぱいぎゅっとバンドをしめ直します。

右手でメスを取り直し下腹部を左手で大き

く撫でるとみるまに左脇腹のほとんど一ぱいにもう骨盤の端、すぐ上にゆっくり刃をあてると用意のハンケチをポケットから取出しこれをたたんだままかみしめ、突立てずにすぐ引まわします。浅いのでそんなに苦痛はないと思われませんが、見てみると、とても苦しうに眉をひそめて全身を悩まし気にふるわせて、じりじりと引まわしていきます。浅いので血が糸の様にすじを引いて下腹部に流れ、バンドの所にたまっています。

刃はへその下二寸程の下腹部を右にほとんど右脇腹までかき切りました。傷はわずかに開いています。脂肪は見えません。たちまちに右脇まで引まわすと右脇に刃を立てたまま立腹の姿勢で一礼します。大部分の血はズボンの内側に流れている様ですがバンドの所で溢れた血が三条程乗馬ズボンの内側にたれてたちまち大きくしみ通っています。

最後にCさんが一礼すると待ちかねていた様に浴衣を脱ぎすてます。もうCさん以外の全部の人が切腹をおえて腹部を血で染めて刃をまだ突立てたままCさんの切腹を待っているのです。CさんもFさんの様に着衣なしで右手に刃をにぎると立上り、やや足を開き気味で下腹部を撫でるのもどかし、へその真

下に刃を上に向けたまま力一ぱい、たたきつける様に突立てました。

「アッッ！」という鋭い叫び声が洩れましたが、刃をしっかりとにぎりしめたまま体を固くしています。早くも血が刃の周囲にもり上って流れおちます。「ウムーッ」という様な呻き声をもらして刃をじりじりと切り上げます。痛そうに眉をひそめ、傷口を見ながら左手で右の乳房をしっかりとにぎりしめています。切上げるにつれて血は激しく下腹部から内股にかけて流れ、一度手をゆるめた時黄色い脂肪層がはみ出してきました。

下腹部の丸いふくらみを縦に切り割っていくのは普通の切腹と全然異った美しさと凄さがございました。Cさんは「うむッーもっ」とつぶやくと、そのままじりじりと切上り遂に二寸程切上げてへその所で刃を止めました。なかなかへその所に切込めない様でやや口を開いてアエグ様にしていました。思いついた様に奥深くくぼんで見えるへそに叩き込みました。

「ウッ！ イタッ！」と叫んで体をのけぞらせます。しかし刃はへそまで見事に切込まれ、傷口は丸く開いて脂肪層がはつきりと見えました。血はかなり激しくしたたり落ちてい

ます。

全員の切腹が終わりました。全員が切腹しおえた所を自動シャッターをAさんが押して写真をうつしました。皆はしばらくそのままお互いの出血の具合等を見せ合っていました。ほとんどの人がその頃は出血が止っていた様です。

Bさんに促がされて皆メスを腹から抜いて三宝にもどしました。まずFさんが自分の手当をしてから、一人ずつ手当をしていきました。手当がすむと今のプレイの感想を話合いました。出血はやはり常識的に考えて深く切る方が多い様ですが苦痛についてはたしかに痛いと言っても、こういう様な苦痛かを皆に比較してもらおう基準がないので何とも云えませんが、思っていたよりずっと痛くなく、とてもこらえ切れない程の苦痛だったという人は一人もないことがわかりましたが、これで云える様にいわゆる皮切り程度の切腹なら、どの様な女性でも切腹を望む程なら立派に行えると確信を持つことが出来ました。

引廻している時の感じについてうまく云えない様でしたが皆の感想をまとめると少くも次の様なものでした。腹部の切りさかれる痛みが腹部から全身に伝わり、その苦痛が又自

分で自分のお腹を切っているという実感を強めて手に力をこめさせそのために新たな苦痛が又力をこめさせる。自分がなくなって腹部を切さく苦痛とそれをもっと望む底知れないものと一体となっていく感じという様なものでありました。たしかに切腹している時は痛いと思いますが、その痛さが一体となって望んでやまないものを行っているという喜びが切腹の感情でありましょう。

私達のプレイはいずれも皮下脂肪まででありますが、腹壁を断ち切り腹膜を切って腸が溢れる様に出来たら、どんなにか素晴らしいことでしょう。この点は私共の一致した願望でございます。

それから実際にプレイをしてみても皆一様に云えることは引まわす際に思ったよりずっと力があることでございました。メスの様に鋭利な刃物でもあれだけの力を必要とするところから充分腹壁を切るためには両手引はもちろんです。刃を上下に動かしかき切る様にするか刃をねかせて引き切る様にした方が私共の様な女性の場合、たとえ気力が充分で潔くても力が足りないものであるから、その方がよいであろうという様な意見が出ておりましたが、各位様の御意見は如何なものでし

う。まだいろいろと気のついた事柄もございますでしょうか。

今回は主としてグループでの切腹プレイの御報告までに何かマニアの方へのお役に立てたらと思って筆を執った次第でございます。マニアの皆様の御批判をいただけたら幸と存じます。

○本誌の御購読について○

本誌の発行についてのお問合せが最近数多く参っておりますが、本誌は今後毎月確実に発行いたします。但し、書店に対する配本が円滑を欠きますから、是非直接御注文下さるようお願い申し上げます。本誌は毎月二十五日に発売いたしておりますが、予約お申込み下されば、二十日頃に嚴重包装の上、急送いたします。尚、予約お申込みの方には、随時目録、KK通信などを発送させていただきます。局留の方は、二十五日頃局へお受取りにおいで下さい。

〔本誌在庫旧号総目次〕

昭和三十五年九月号 (早秋特大号)

定価三〇〇円 (割付値一五〇円)

△巻頭口絵▽ 絵物語「網にかかった女」

▽ 毘に落ちた小羊▽ 襲いかかる狼の手▽ 息も

つけぬ猿ぐつわ▽ 後手のいましめ▽ 美しい変

化▽ 非情の鉄棒▽ 煙草の火▽ はかない休息。

切腹画「女郎花割腹」戯画選「娘子軍自刃」

(南村俊平) マゾフォト「驕慢」「圧倒」○ 読

者投稿画廊「ファンタジック・エネマ」(宮

崎昭平)「戦陣の血祭」(浜毅)「ポニイ」

「山の頂」(ENOG)「三角木の仕置」(四

馬孝画)「風流いろは草紙」(滝れい子画)

○ 或る夜の夢物語 (遠藤山二路)

△ グラビヤ・フォト▽ ○ 不安と羞恥と嘆願

(津川路子) ○ 美しきミノムシ (絹川文代)

○ 怨嗟とあきらめ (春丘リル) ○ 山また山谷

また谷 (絹川文代) ○ 女囚引廻しの図 (桜井

葉子) ○ 引っ捕えた妖獣 (絹川文代)

△ 本文▽ 緊縛と表情について (大熊寿夫)

映画通信「男性責めシーンを拾う (菅良太)

随想「悦虐は卑猥に通じない」(松井籟子)

縛り写真撮影、アイデアの見本例 (牧高志)

女相撲と女斗美 (雪崎京人) 宇宙のどこかで

(佐治麻造) 緊縛のイメージ「縛られたイン

テリ令嬢」(浦田紀夫) エッセイ「縛りは貴

重品たれ」(宮部透可志) 浣腸マニヤの告白

「私の浣腸」(春村玲子)「影の国」(雪俊

遙) 男性責小説「妖嬈」(槇村奏) 倒錯の倫

理性△ 仏米の映画にふれて▽ (菅良太) 創作

「演習地」(三条卓史) 最近の縛られた女優

達 (大河原珠樹) 愛好者の記録 (とやま・か

づひこ) 或る強盗事件 (南時夫) マゾ男性よ

嘆くことなかれ (諸岡堅雄) 懸賞入選作品「

零の舞踏会」(氷見竜也) マニヤの独り言、(

SS生) 乗馬ズボンシリーズ「夕陽を染める

乙女たち」(藤山秀緒) 一悦虐者の回想「快

楽」(一ノ瀬悦子) 告白「女装の楽しみ」(

比良野裕) 浣腸通信「あるヒント」(津川八

郎)

昭和三十八年十二月号 (新緑躍進号)

定価三〇〇円 (割引特価一五〇円)

△ 巻頭口絵▽ ○ 美しき女奴隷▽ 女奴隷のセ

リ市▽ 女奴隷の烙印▽ 檻に飼われた女奴隷▽

逃亡奴隷に対する折檻▽ サークス団の猛訓練

▽ バレー団の苛酷な調教▽ 人肉市場の女奴隷

▽ 農場用轡馬の奴隷▽ 織姫の難行苦行▽ ハレ

ムの淫虐地獄。○ スクリンに於ける縛シー

ン点綴 (田辺啓二提供) 四馬孝緊縛画集「一本

足の力カシ」熱燐責めの椅子「アクロバ

ットの仕置」○ 男性緊縛フォト「穴倉幽閉」

(湖田平雄) ○ 変形拘束私案 (杉原虹児) ○

乗馬服の女性 (愛馬を前にして)

△ グラビヤ・フォト▽ ○ 哀憫美形特選写真

▽ 冷光 (絹川文代) ▽ 究道女 (大塚啓子) ▽

声なき表情 (絹川文代) ▽ 陽光にはじらう女

(絹川文代) ▽ 追い曳き (大塚啓子) ▽ 囚女

の祈願 (愛川悦子) ▽ 円転舞 (絹川文代) ▽

白蓮の起伏 (桜井葉子) ▽ 白壁反転 (大塚啓

子) ▽ 呪縛への執着 (絹川文代)

△ 本文▽ 告白「二人だけの協約書」(南条

三吉) セミドキュメンタリー「蠢めく蒼い群

れ」(近藤一) 考察「腹を切る事」(折伏下

男) 随筆「アブチック放談」(浮家鷹三) 麻

生氏の生活と意見 (麻生保) 裸馬 (槇村奏)

異色小説「サド侯爵の紅」(蒼野礼) 愛好者

の記録 (とやま・かづひこ) 乗馬ズボンシリ

ーズ「太平洋にかけ橋」(藤山秀緒) 告白

手記「澤原カオルと私と」(近藤一) 公開通

信「サド女性へ贈る手紙」(緒方春生) 宇宙

のどこかで (佐治麻造) 架空臨時増刊マゾソ

ドミア特集号 (XYZ) 実験レポート「浣腸」

(栗瀬長) マゾヒズム百景 (馬場好男) 連

載第三次元小説「影の国」(雪俊遙) 懸賞入

選作品「霧の舞踏会」(氷見竜也) 告白「倒

錯女装化への悲願」(織田四平) 特高拷問史 (

庄田美起夫) 誘拐令嬢の緊縛スタイルについ

て (浦田紀夫) 女性乗馬考雑感 (鞍良人) 手

記「妻を訓練する」(間地誉夫) 映画通信「

縛られた女優たち」(大河原珠樹) アプスト

ーリー「雨の夜の男」(沢本雪二) 編集つれ

づれ草「私の編集ノートより」(編集子) あ

る女優の乗馬日記より (倉仁成人)

◎ 以上の二号は、定価三〇〇円のところ、半

額の一五〇円に割引きました。昭和三十

八年十一月号誌上に総目次を発表しました。昭

和三十五年八月号は売切れしました。昭和三十

五年七月号は在庫しております。売切れぬ中

お申込み願います。

〔本誌最近号総目次〕

昭和三十三年十二月号

(定価二五〇円)

△第一グラビヤ▽ 荒縄と黒革フ
ンドシ(大塚啓子) 高手小手強烈
小手しぼり(梨花悠紀子) 猿ぐつ
わ(二種) (梨花悠紀子) 鉄の足
枷とくさり(絹川文代) 乳房自慢
豊満しぼり(桜井葉子) 黒髪のは
きまわし(大塚啓子) 女体切腹シ
リーズ第二回(大塚啓子)
△巻頭口絵▽ アイデア画「美女
と刺青」(栗原伸画) 責画「輸送
函の女」(四馬孝画) 責画「裸像彫
刻製作」(四馬孝画) 女相撲「お
座敷娘相撲」(雪崎京人提供) マ
ゾ画「社長室の番号夫人」(四馬
孝画) 女体切腹「女忍者の切腹」
(四馬孝画) 緊縛画「齒列検査」
(四馬孝画)
△第二グラビヤ▽ 全面無防備の
女体(長野良子) 麗しの縛られポ
ーズ(長野良子) 水滴責め(新井
マリ子) 凝視と放心の点景(新井
マリ子) 両足棒縛り(新井マリ子
黒い触手(新井マリ子) 黒色バ
ンド着用しぼり(遠藤百合子)
△本文▽ 懸賞告白入選作品「男
のサドと女の愛」(糸島博) 十三
人の女死刑囚(佐出須登) マゾヒ

スチック・ストーリー・シリーズ
「屈従への過程」(来島世郎) 「
奇譚三十九夜」物語(第三十夜)
(辻村隆) 浣腸体験記「駆虫記」
(栗瀬長) 白百合抄(悦庵絵灯籠
二) (万田不仁) 女相撲研究「女
相撲史一考」(岡平吉夫) 連載小
説「花と蛇」(団鬼六)
「奇クサロン」 ○被虐モデル忘
願者(塚本鉄三) ○先月号の読後
感と奇クへの所感(佐渡耕作) ○
倒錯したセックスと正常なるセッ
クス(原勝彦) ○継子いじめとお
灸責め(昼行燈生) ○女体各部の
フェテッシュ(森中悦夫) ○夫婦
のお仕置プレイ(益原駿夫) ○女
の生首(前川成雄) ○女斗美とし
ての女相撲と女子プロレス(YM
生) ○私は赤ちやんになりたい(白
川晴夫) 最近の邦画の縛りシー
ン(東山映史) 浣腸見た聴いた
りプレイしたり(阿久津猛) ○プ
レイングマゾヒストの資格につい
て(大倉安雄) ○離婚した婦人が
割腹(神崎太一郎) ○ガン作マニ
ヤのノート(芳野眉美)
△本文▽ 風俗回想記「劣氏の美
人踊子責め(越原秀美) 分譲写真
のアイデア「連続Mフォト(長門
弘) きものきもの物語(牧高志)
切腹体験記「切腹への憧憬」(津

田亜紀子) 浣腸マニヤ「白昼夢」
(滝次郎サジスチック・ストーリ
ー・シリーズ「初子のこと」(大
中忠) マニヤ通信「願いの叶つ
た百子嬢へ」(中田あきら) ナル
シスの発見(羽村京子) 続風の町
から「山辺まゆみの告白」(山辺
まゆみ) 肥満体婦人に憧れる(戸
井隆三) ふたたび悦庵の旅へ「火
の国」(梶泉里子) 当代女武勇列
伝「御子柴マリの場合」(諸岡堅
雄)

昭和三十三年十一月号

(定価二五〇円)

△第一グラビヤ▽ 荒縄の下にあ
えぐ「荒縄とげにもだえる四態」
(大塚啓子) 片足吊りと吊りの序
曲(絹川文代) 紐にくびれた女体
の幻想(遠藤百合子) 縄に愛され
た魅惑の乳房(遠藤百合子) 屈従
と愉悦の交響楽(梨花悠紀子)
△巻頭口絵▽ アイデア画「可愛
い牝馬」(四馬孝画) マゾ画「
お寝みの御挨拶」靴でむれた足
をお舐め(四馬孝画) 女体切腹
「女賊捕物帖」(四馬孝画) 女相
撲「お嬢さん相撲の醍醐味(雪崎
京人提供) 責画「このあと何が襲
いくるか」(四馬孝画)
△第二グラビヤ▽ ゴムの猿ぐつ
わとハイヒール(大塚啓子) ゴム

とゴム紐「猿轡表情四態」(大塚
啓子) ローソク台となった女体(東
浦ひかる) 夫婦のSMプレイ「
晒首と女体晒し」(新宮明夫) 女
体切腹シリーズ(大塚啓子) 新
モデルの素描「小手はじめ」(荒
井マリ子) 「いや、いや、いや」
(五月亜紀子)
△本文▽ 随想、オブラートの効
用(栗瀬長) S・S・S「甘美な
悪夢」(大中忠) 美女の平手打と
注射を願望する男(綾真須男) 女
性乗馬考「跨がる女性」(鞍良人)
告白「初めてのプレイ」(渡辺
己津男) 十三人の女死刑囚(佐出
須登) 「奇譚三十九夜」物語(辻
村隆) 最近見た女斗場面の映画(山
田隆夫) きものきもの物語(牧
高志) 旅の楽しさ「浣腸にこと寄
せて」(渡辺かね) 倒錯日記抄(久
保征一郎) 手製のふんどしと赤
い水着(R・いちろう) 重子の奇
癖(女素舞夫) 連載小説「花と蛇」
(団鬼六) ガン作・マニヤのノ
ー(芳野眉美) 私の鼻を責めて下
さい(湯谷照夫)
△奇クサロン▽ ○戦争と残酷ム
ード(森清) 「ミセス生首」の感
激(前川成雄) ○アブノーマルな
絵(森洋三) ○佐川奈津子様への
公開状(佐野光子) ○窃視と窃聴

- (龜田孫一) ○切腹心理学 (室津三郎) ○緊縛女体談 (青弘之) ○ゴムの魅力 (桂木健三) ○責めの文献「姦通と処刑」 (芦田邦夫) ○「甘い暴力」の股間縛りと忍者もの (東山映史) ○女体血斗阿修羅 (蒲生女斗彦) ○或る切腹マニヤの幻想図 (桐原柴門) ○美しい永遠の女死刑囚 (黒田寿) ○アクロバット (阿部能丸) ○興行女相撲への一提案 (岡平吉夫) ○通信コーナー ○私は赤ちやんになりた (白川晴夫)
- △本文▽鈴蘭香水「悦虐絵灯籠」 (万田不仁) 新々播州皿屋敷 (岸本青柳) 狂愛の布地 (野中信敏) 「妊婦フォトに関連して」 (影浦栄) ゴムプレイの甘い生活 (津田亜紀子) 長篇SM小説「宇宙のどこかで」 (佐治麻造) 用便紙にひかれて (岡山勉) 女の足と下着 (姫馬痴人) 女が縛られるとき (中屋敷真) 素人女相撲観戦記 (岡平吉夫) 私のイメージ「悦虐美女 オンパレード」 (近藤二)
- 昭和三十八年十月号 (定価二〇〇円)
- △第一グラビヤ▽OSMプレイ・ガール (辻村隆構成) (一) 羞らしいの初登場 (遠藤百合子) (二) 輝の魅力とバックスタイル (遠藤百合子)
- (三) 縄と豊かさの美意識 (遠藤百合子) ○愛読者夫婦のSMプレイ (新宮明夫提供) (一) 斬首、(二) 処刑を待つ、(三) さらし首、(四) 女めしうど○ベテラン・モデルの傑出ポーズ (塚本鉄三・構成) (一) 引き回される乙女、(二) 顔面に対する汚辱と弄戯、(三) 脱がされた青い囚衣 (梨花悠紀子) ○鼻を足にて踏みにじる (絹川文代)
- △巻頭口絵▽浣腸「高圧浣腸ポンプ」 (四馬孝画溺死体の幻想 (滝れい子) 女体切腹「ズベ公の仁義」 (滝れい子) 女相撲「肉弾相打つ豊麗美女」 (雪崎京人) マゾ画「美女と川人足」 (滝れい子画) アイデア画「革製オシメ・カバ」 (四馬孝画)
- △第二グラビヤ▽○雁字搦目の陶酔境 (絹川文代) ○縄目にあえぐ美貌のモデル (大塚啓子) (一) 顔面なぶり、(二) 踏みつけ、(三) 押し倒し、強烈龜甲しぼり、○煙草責めの構想 (梨花悠紀子) ○縛り過程の分解「後手しぼりについて」 (愛川悦子) ○吊られた足首、逆さ吊りの第一歩 (梨花悠紀子) ○ムチ打ちの態勢とその後 (岡谷富佐子)
- △本文▽残酷ごっこ「続女家庭教師」 (大中忠) ある女の手記「まりも譚」 (楠佐和子) 被虐愛ざんげ「変身記」 (万田不仁) 告白浣腸開眼「無花果の幻想」 (小池一郎) 特高の調室にて「下着泥棒」 (庄田美起夫) 手記「冥府の広場」 (大塚啓子) ゴムマニヤの空想 (或る理髪店にて) (斎藤七郎) 「体験小説「華鼻受難」 (花房孝子) 女体切腹の構想 (桐原柴門) 若妻のサド夢「湯上り偶談」 (沖田小五郎) 胸毛のある男優たち (梶孫一) 異色推理小説「炎の殺し」 (野本大蔵) 風俗回想談「劣氏の残酷責 (越原秀美) 告白手記に解説を (栗瀬長) 被虐モデル遠藤百合子さんの登場「S・Mプレイ・ガール」 (辻村隆) 絵と写真のアイデア提供 (正岡ツトム) 長篇SM小説「宇宙のどこかで」 (佐治麻造) コルセットの歴史 (成田一郎) 緊縛研究講座「絹川さんとマゾヒズム」 (牧野純一) 私の特写フォト「アクロバットと白足袋」 (阿部能丸) 或る新婚旅行の思い出「琅玕」 (幌泉里子) アブ随筆「思い出の記」 (南方佳男) 「奇譚三十九夜」物語「第二十八夜」 (辻村隆)
- 昭和三十八年九月号 (定価二〇〇円)
- △第一グラビヤ▽○夢幻の中のトルソ (絹川文代) ○浴槽の女神 (梨花悠紀子) ○脚下の黒髪 (大塚啓子) ○縄による弄び、(一) 拒否 (二) 哀願、(三) 拗言、四諦観、(絹川文代) ○捕われの終結 (大塚啓子) ○引き回しのワンカット (東浦ひかる) ○顔と足の悦虐表情 (岡谷富佐子)
- △巻頭口絵▽アイデア画「倉庫の鼠」 (四馬孝画) 妊婦の浣腸二題「助産婦の診察」 便秘した妊婦 (四馬孝画) マゾヒスチック・グラフ「大井川の渡し人足」 (滝れい子画) 女体切腹「花吹雪女弁天小僧」 (滝れい子画) 傑作責画「クリップの惨酷」 (四馬孝画) 新婚夫婦のプレイ「エフ付の荷物」 (四馬孝画)
- △第二グラビヤ▽○憂囚のまざなし (梨花悠紀子) ○夫婦のS・M写真「絞首刑のプレイ」 (新宮明夫) ○椅子の下悦虐 (梨花悠紀子) 柔軟性の実験 (黒川不二夫画) ○調理台上のいけにえ (大塚啓子) ○疑惑のおののき (絹川文代)
- △本文▽巻頭雑文「あなたまかせのよせがき帖」 (編集同人) 告白「自虐鬼の懺悔」 (長岡愛一郎) 告白通信「五、六、七、八月号の魅力ある責めの感想」 (栗島令

〔私のイメージ〕

水責め

黒田 寿

水責めにあった女性で最も有名なのは、一六七六年に「火の法廷」で魔法使として捕われ、拷問にかけられたブランヴィリエ夫人だろう。平面の台の上に四肢をせいっぱいに

ひろげて寝かされ、皮製の漏斗を口中に突っこみ、それに水をどんどん注ぎこむ方法で、しかも水は手桶に三杯用意されていた。彼女は裁判長に対し、「わたしの身にこん

十二月号まで紹介しました。在庫が必ずしも多くありませんので、ごらんになって御希望の月号がございましたら、売切れにならぬ中お申込み願います。

尚、昭和三十八年五、六、七、八月号の総目次一覧は、昭和三十八年十一月号誌上に載せてあります。六、七、八月号は、若干在庫がありますが、五月号は売切れになっています。

なに入ると思いますの”と云ったと伝えられているが、いずれにせよ、その苦しさは言語に絶し、皮製の漏斗にはっきりと彼女の歯のあとが残っていたと云う。

彼女は遂に自白してしまい、ノートルダム寺院の下に設けられた断頭台にのぼることになったが、その途中口の中で呪文のようなものをとなえていた。私はこの時の彼女の心境を次の如く想像する。

“首を斬られるだけの軽い刑なら、あんなに苦しまずにささと白状すればよかった”当時魔法使や毒殺犯人に対する処刑は、火あぶりか車裂きだったので、まさに寛大の極みと云えるだろう。

刑吏の斧がふりおろされ夫人の首は血しぶ

子)終身刑(平伏人)投稿告白「女性の下着と私」(田川一)浅春山荘シリーズ「浅子像」(柴里雷九)パンティ(川崎連)女性切腹の追想(武林長作)映画通信「邦洋画は残酷ムード」(東映史)美保子の処方箋(藤井四郎)マゾ・マゾ・アンド・マゾ(平伏人)長篇SM小説「宇宙のどこかで」(佐治麻造)女相撲ファンタジー「首投げと足の裏の魅惑」(女素

舞夫)ガン作・マニヤのノート(芳野眉美)女相撲の思い出話(津谷正春)被虐愛さんげ「薔薇赤く」(万田不仁)マゾ芸術考「女性男装管見」女やくざを中心に「(田島直士)灼熱の乗馬ズボン」(殉国の妖花)(藤山秀緒)検便随想(栗瀬長)告白「自己愛の記録」(渡部かね)あるフェチシストの告白「女子バレー部の罰則」(並原睦夫)体験告白「溺死体」

(驚野時江)ある女囚の記録「この辱しめと苦しみ」(大熊正)切腹とその姿態の雑感(浜路貞之助)病院惨酷物語(山岸操)「臨月腹」に期待して(瀬沼五郎)映画通信「復活した新東宝映画」(東山映史)

◎本誌最近号について
本誌最近号の総目次を以上の通り、昭和三十八年九月号より同年

十二月号まで紹介しました。在庫が必ずしも多くありませんので、ごらんになって御希望の月号がございましたら、売切れにならぬ中お申込み願います。

尚、昭和三十八年五、六、七、八月号の総目次一覧は、昭和三十八年十一月号誌上に載せてあります。六、七、八月号は、若干在庫がありますが、五月号は売切れになっています。

きをあげて胴をはなれ、あとになって首と胴体べつべつに「火の法廷」で焼かれた。その灰は市民が争って拾ったと云う。

以上はデイクソン・カーの小説にも登場しているが、ここでわれらのモデル娘たちを責めてみたい。バケツ三杯をノルマとし、飲めなかったり、途中で吐いたりしたら死刑に処すことにして、首をふっていやいやし、もがきあばれても、鼻をつまめば飲まざるを得ない。美女たちの腹がみるみるせりだしてくるのは、実にすばらしい見ものである。

先ず新入トリオ、長野良子が二杯目の中頃で激しくあえぎだした。大きくふくらんだ腹部が痛々しい。吐くかともた刑事が親切にもその首すじを両手でぐっとしめつけた。目が大きく見ひらきもがいたが、手はゆるめられない。このため吐かずにはすんだものの、あの世ゆきとなってしまう。

新井マリ子も良子が息絶える頃参ってしまった。即ち死刑確定となったわけ、そのまま河に放りこむこととする。泳ぎは出来たかも知れぬが、この状態ではブクブクと沈むよりほかはなく、一時間ほどしてから引きあげた時は完全な死体となっていた。

五月亜紀子は二杯目もう少しというところまでがんばったが、同僚二人のあとを追うことになる。彼女は銃殺が面白い。普通は左胸を狙うのだが、ここでは勿論腹部のふくらみを狙うべきである。十二発の弾丸の命中と共に、水しぶき血しぶきをあげて大きくのけぞってゆく。

東浦ひかるはさすがにベテラン、新人トリオの最期を横目で見ながら、軽く二杯目を飲み干し三杯目にかかる。この調子では「或は？」と期待されたが、惜しむらくは排泄の要求に耐えることが出来なかった。これもやはり死刑になるのだ。刑事は大きなおなかの中央に槍でもって、実に無造作にズブリと突き刺す。弱々しい悲鳴があがり、どっと血汐が噴きだすとみるや、たちまちこのふくらみは小さくなってしまう。

水野茂美は二杯半まで飲んだがあとはあきらめてしまった。彼女は死を願ひ、そのまま冷凍室に送られる。零下四〇度という寒さ、ピンピンしていた魚がたちまち木の様に凍ってしまふ位である。中からかすかに悲鳴が聞えていたが、一時間後に戸をあけてみると、野性美満点といわれ、ピチピチしていた彼女は冷凍人間と変っていた。腹の中にたっぷり

入っていた水も同様に。大のこぎりでゴリゴリと腹部を両断し、この氷をとりだす。

絹川文代は優勝候補の一人だったのに、身体具合がよほど悪かったのか、必死の思いで飲もうとしたが、だめだった。惜しや三杯目も残りコップ一杯分と云うのに参ってしまった。刑事はわざわざこの残りを彼女に見せる。それ位ならと叫んだが、すでに死刑は確定であった。哀れ文代は泣きながら、大きな腹部をかかえて絞首台にのぼる。彼女の体重は平常よりも二〇キロ以上も増加していた。刑事はその下腹をなでながら「これならおもりはいらぬ」と云う。普通女性の絞首刑のおもりは八キロのが二箇だから、たしかに必要なはいらしい。

絞首台上の彼女の顔が、苦悶と恐怖にあえぐ。正に吐こうとする寸前、ロープをさっと首にまき、どんと突き落され、かよい咽喉は一気にぐっと絞まった。「もう吐けないだろう」刑事が話しかける。ブラン、ブランとゆれる身体は、水袋を口でしばってぶら下がった様だった。

梨花悠紀子もがんばって遂に三杯を飲み干した。四肢のいましめをはずされ、台上に起きあがる。殆ど力つきていたが、よろよろと

立ちあがろうとした時、急激な運動に耐えられなかった彼女の胃は、彼女の意志を裏切つて収縮しようとする。その顔が苦しげにゆがんだ、正に吐く寸前であった。口がばあっとひらく、液体がその中から……。

この時、後にまわった刑吏の大刀がさつきらめいたとみるや、哀れ悠紀子の首は簡単に宙をとんだ。どっとおびただしい水柱が首の切口から三メートルも高く噴出した。もちろん紅に染まっている。血汐と水と、どちらの量が多かったろう。床にころがった生首の唇からも右の端には血汐が、左の端からは無色の液体が流れていた。

大塚啓子も、とうとう三杯飲んで助命された。幸いにも悠紀子の最後を見ていたので、

いましめをはずされたあとも、じっと台上に横たわっていた。そろそろと立ちあがる、呼吸も苦しい位腹部のふくらみはものすごい。戸をあけて外に出ようとする。三つばかりの階段があるので、慎重に床をほうようにして降りようと腰をかがめる。その時後からどつと突きとばされた。「ギャツ」と悲鳴をあげて啓子の身体はころげおちる。

この時、彼女は「吐いてはならぬ」という意識が残っていたのが災した。必死に口をとじ、吐くのを防いだ、下にくろがった彼女は早くも断末魔の苦しみにあえいでいた。あまり無理をしたため胃袋が破裂してしまったのだ。あまりのことに口惜し涙にくれながら啓子は死を願い、美しい首を刑吏に渡したの

である。

最後に残ったのは新人中のボーイ遠藤百合子、期待にそむかず、ベテランに負けず三杯ことごとく飲み干したのであった。刑吏は最後の仕あげをしてから放免するという。それは排出口をプラスチックでふさいでしまうのだ。百合子は驚き泣きわめいたが許されぬ。

こうしてふくらみは次第に下にうつり、ますます大きくなり、その苦しみは今までの誰よりもひどく、つらいものだった。かすかにぶい音がして急にそのふくらみはとれ、かわりに腹部全体がもりがあった様になった。苦しみはいよいよ増し、とうとう早く殺してくれる様に願ったが、かなえられない。ようやく自分が最高の刑に処せられたことに気がついた。こうしてもだえ、苦しみ、のたうちまわる。百合子が冷たくなつたのは、かなりあとのことだった。

私のごひいきモデル娘たちは、この様にして死体と変り、美しい生首を私の前に並べています。そして明日になれば再び元の姿にもどり、また私の処刑場へ来るのです。明日は火あぶりに、明後日に股裂きにでもしようかと考えながら私の空想は終りを知りません。

懸賞（告白と手記と体験） 原稿募集

☆金賞☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従つて必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限りません。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくききませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

お 臍 十 年

多 山 皓



(第一図) 甘い暴力の

エルケ・ソマー

読者諸君の中には、十年前なんて、まだ奇クの名前さえ知らない、あどけない小、中学生だった人も多いだろう。

昭和28年12月号の「甘美なる倒錯の花園」という特集の中に、僕は「お臍の魅力」という一文を出した。これが後になって、須藤律夫氏の「臍窩の省察」をはじめとして、何人かの人によって発表された「おへソ物」のはじまりであったようで、自負している次第である。

それから、十年たった今年は、ちょっとした「おへソブーム」のようだ。いわゆるバカンス・ルック。

白昼堂々と銀座の真中をおへソが通る。まだそこまではないかにもにしても、海岸やプールへゆけば、必ずかわいいネーブルが見られるという、我々ネーブル・マニヤにとっては随分ありがたい世の中になったわけ



(第二図) 万里昌代
のおへソ

である。

昭和28年のしかも僕の一文が掲載された十二月に、洋画のお色気攻勢がはじまった。マルキー・キャロルの「浮気なカロリーヌ」とジーナ・ロロブリージタの「夜毎の美女」がそれ。

それ以来、外国映画のおへソは見あきるほど見られることになった。殊に今年は大蔵映画や「夜もの」でずい分おへソが輸入されている。こうなると、いささか食傷気味で高い金を払って見る気もなくなる。

しかし「ジプシー」でストリッパーを演じたナタリー・ウッド、「太陽のための18才」

のカトリーヌ・スパーク、「夜の終り」のクリステイナ・ステイプウコフスカ、「夏物語」のロレッテ・デ・ルーカ「甘い暴力」のエルケ・ソマ―(第一図)等のおへソはなかなか男の心を引くような見せ方をして魅力であった。

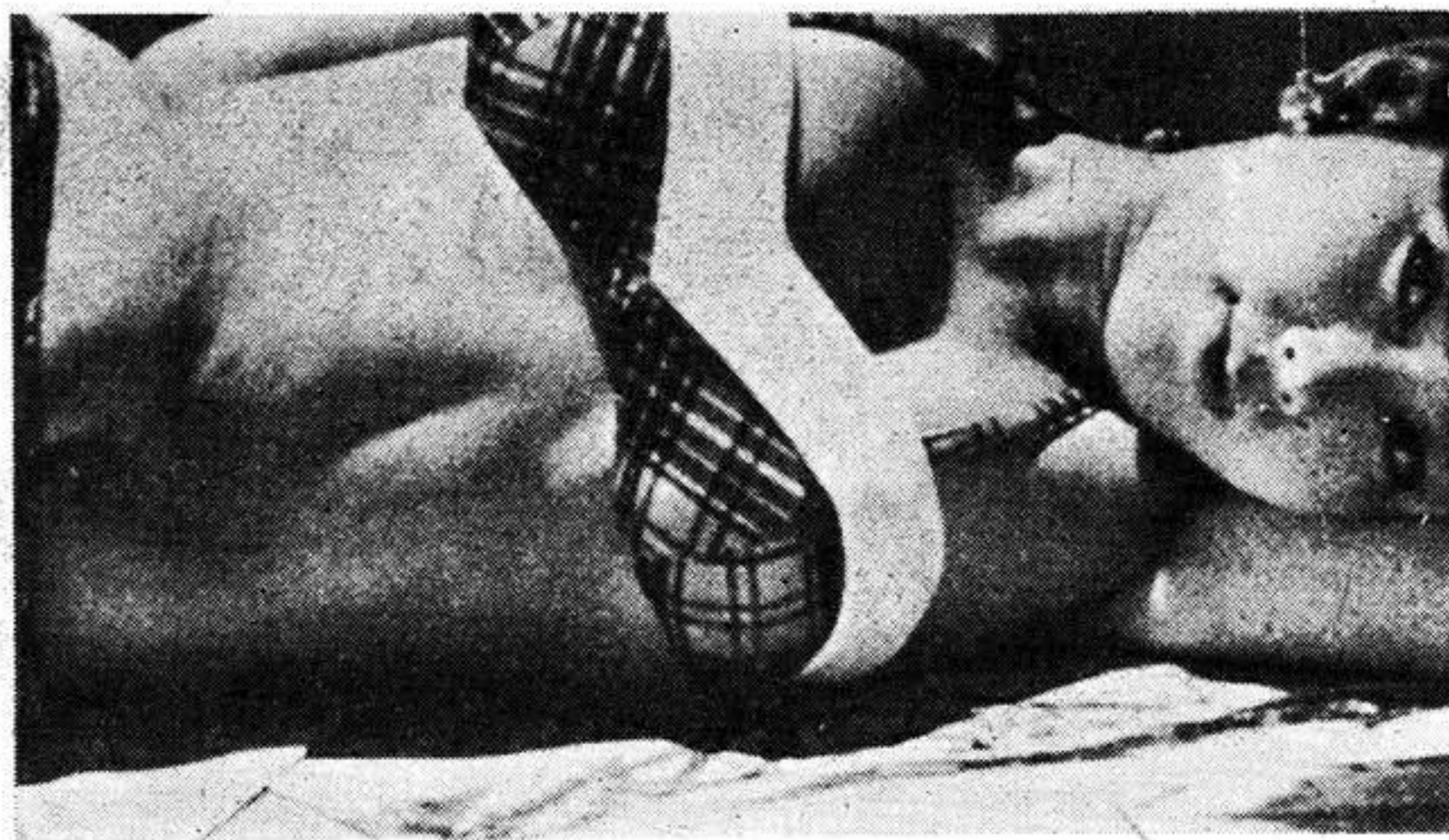
邦画のヌード攻勢が始まったのは、少しおくれで昭和31年、例の尻まくり事件の前田通子の「女真珠王の復讐」に始まる。



(第三図) 北あけみのおへソ

以来、新東宝には現在なお活躍中の三原葉子を筆頭に、万里昌代、扇町京子等が続々誕生した。今大映で純情娘をやっている三条江梨子も三条魔子としてグラマー女優扱いだった。

この中で一番印象に残るのは万里昌代のおへソで(第二図)、梨花悠紀子さんのおへソのように健康的な大型なすばらしいものだった。



(第四図)

日活のおへソ、星あけみ

た。今でも古い映画雑誌や、日本カメラの別冊で時々たのしませてもらっている。

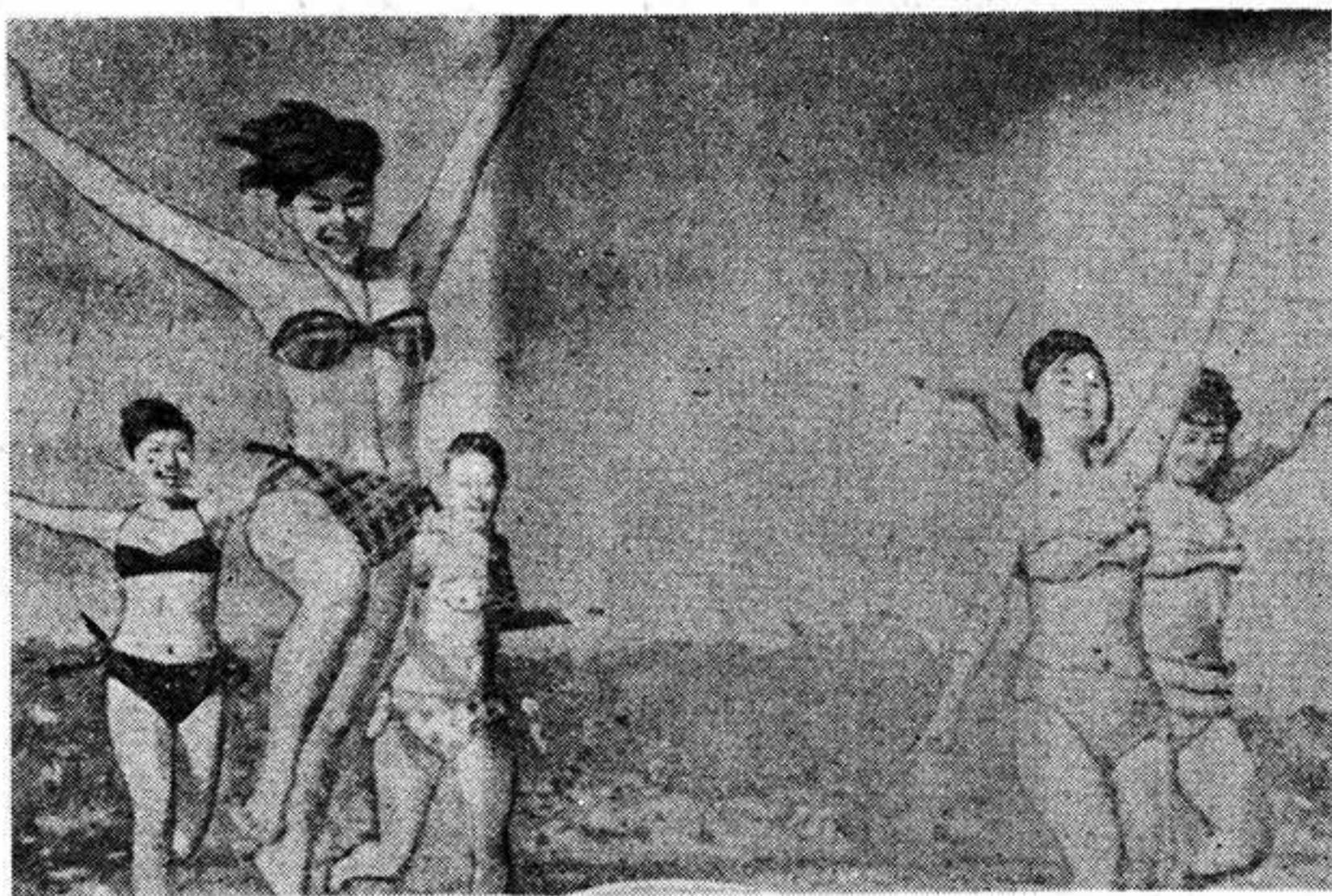
新東宝映画の中で一番印象に残ったのは、昭和32年正月の「五人の犯罪者」で純情娘の三ツ矢歌子が始らいながら、はじめからおわりまで、可憐なおへソを出しっぱなしだった。新東宝以外にもおへソ女優が多ぜいあらわれた。海女映画で売り出した泉京子、日活の救世主筑波久子、和製プキの北あけみ(第三図)、「歌麿をめぐる五人の女」の一人中田康子、日活のおへソ星あけみ(第四図)……。

しかし、その中でおへソ映画の最高点として忘れられないのは、35年夏の松竹映画「真夏の情事」(第五図)

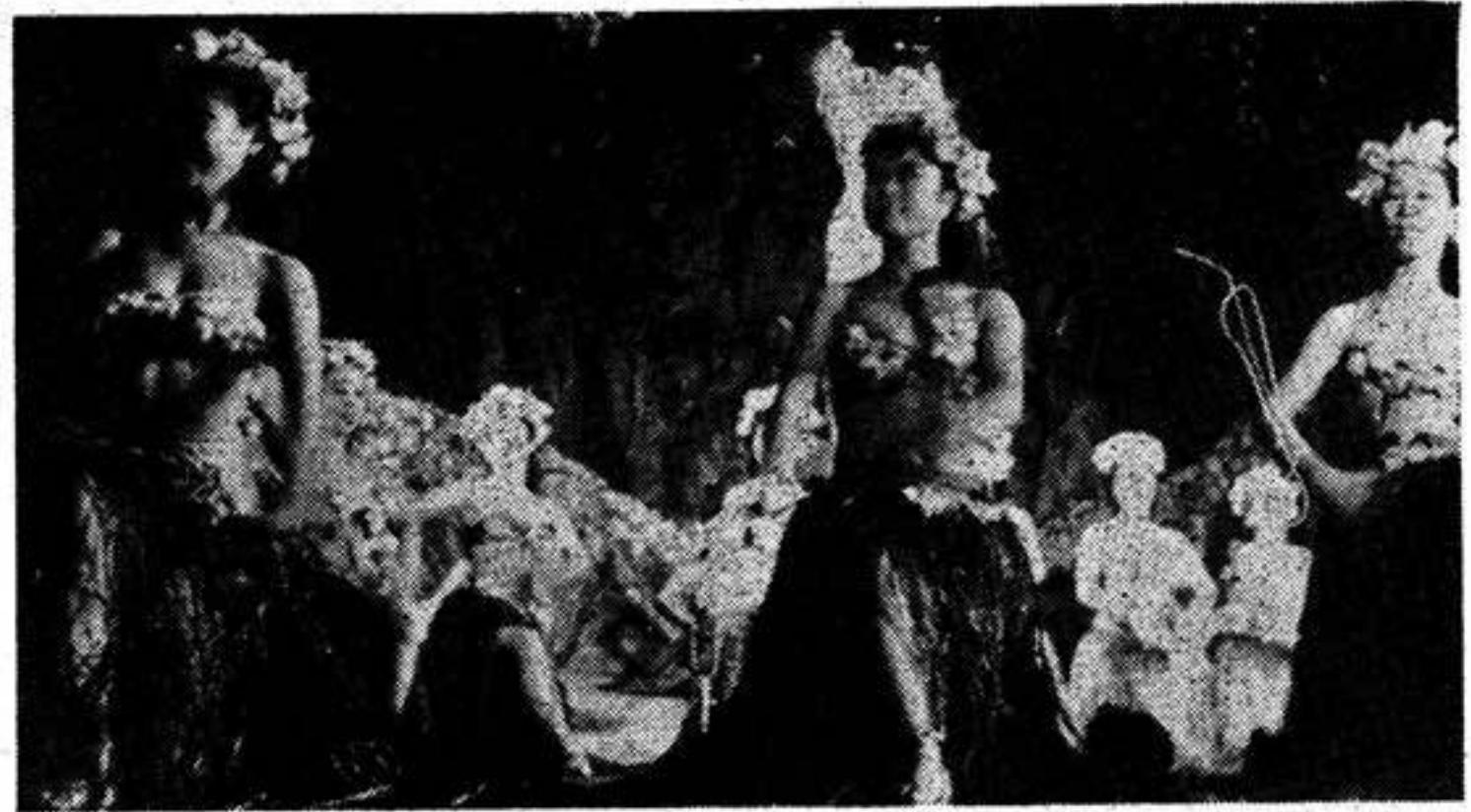
現在はハダカ女優の一人になって「スター誕生」「ローマに咲いた恋」十一人のギャングなどでおへソどころか乳房も丸出しで活躍している瞳麗子がまだS・K・Dの現役それに今年退団した姫ゆり子、九条映子、国景子、富永ユキ、山科ゆかり等、若いピチピチしたところが、シンクロスイマーと

(第五図)

松竹映画「真夏の情事」瞳麗子、姫ゆり子、九条映子、国景子、富永ユキ、山梨ゆかり等のビキニスタイルのおへソ・オンパレード。



して場面の半分以上が水着で、その半分以上がビキニ型、国際の舞台で見たことのないおへソ丸出し。これを宣伝文句にしたなら、さぞ、ネーブルマニヤが押しかけたろうに、スチールにも、おへソ写真が出ていないくらい売り物にできなかったのは全く惜しい。



(第六図) 日劇「夏のおどり」のおへソの洪水のシーン

めずらしいところでは、「鍵」で見せた大映の重役女優京マチ子のおへソ、雁治郎の眼鏡がその上にポトリと落ちる。しかし気の毒なのはそれ以来人気ガタ落ちとは……。話の分からない奴が多いんだね。

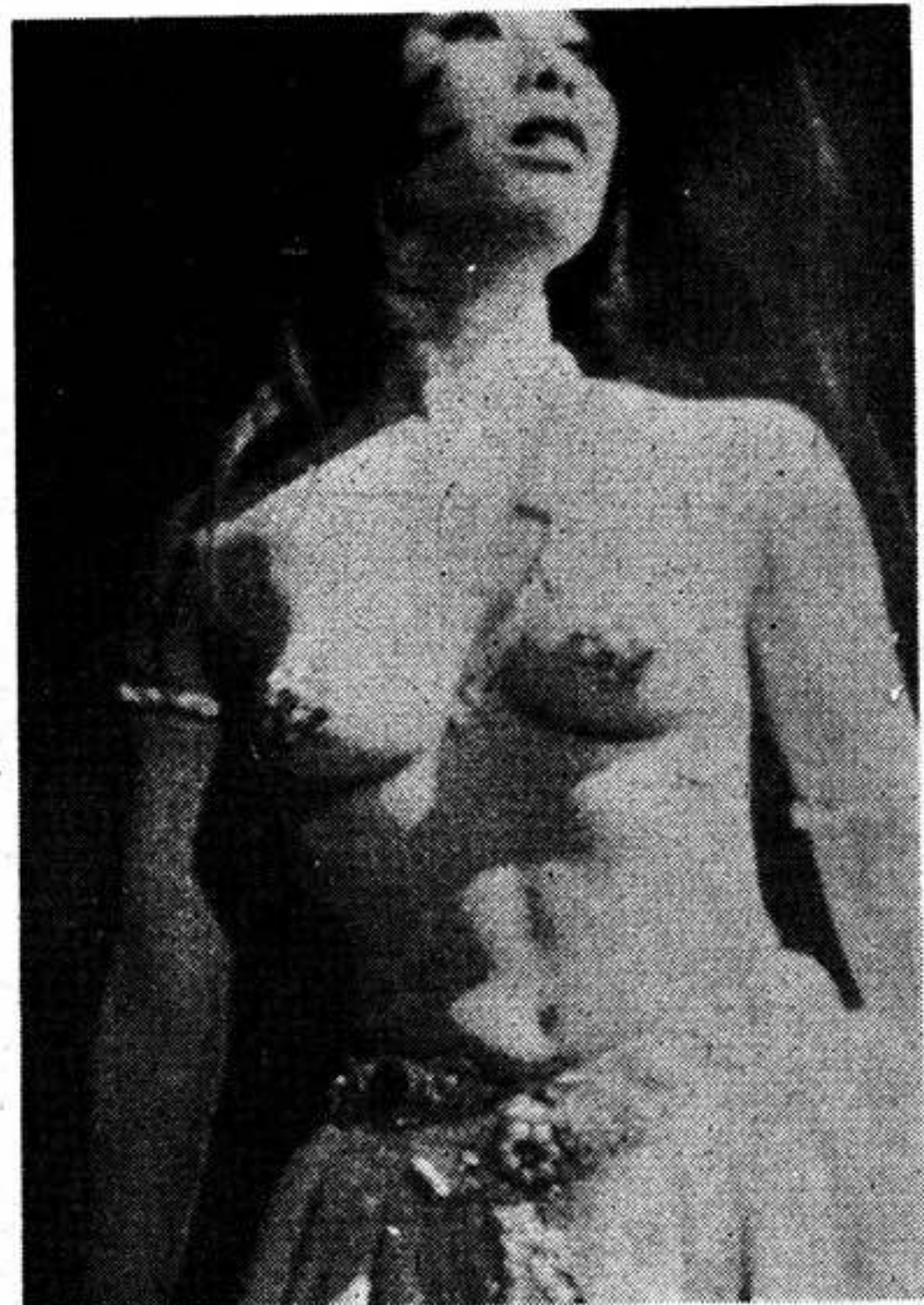
とにかく最近はおへソの出ない映画をさがす方がむずかしいぐらいで、全くこの世の天国という楽しさである。

おへソ攻勢はレビューにも波及して、32年7月一番この世界で、お固そうな宝塚でいち早く黒木ひかるがおへソ踊りを演じた。今年になってはやっているタヒチダンスを五年も前に取り上げた勇氣は賞賛に値する。

次は日劇のトップスター重山規子。36年の秋のおどりで、清水、重山の名コンビがシエラザードを踊ったが、おへソを見せ

(第七図)

オッパイもおへソも立派な岸田今日子



ないのがレビューガールのほりというのをすてて、見事に出した。彼女はその後日劇ミュージック・ホールのゲストに出たり、37年にも映画「ニッポン無責任時代」でストリップをやったりおへソを出している。

エイト・ピーチェスなど、お色気売り物にしているS・K・Dが一番固く、映画「真夏の情事」を除いては、まだ誰もおへソを出していないのは意外といえば意外。ただ、今



(第八図) 中川ゆき

年の春の「東京踊り」でクレオパトラをやった磯野千鳥が、日によってはアントニオの手にしり返る時に、衣裳の上にちよっぴり顔をのぞかせたのを話題を呼んだ程度、私も幸いその幸運にめぐり合ったひとりである。

今年の日劇の「夏のおどり」は実に壮観で河本芳子のうたう「タムレNO1」からフィナーレにかけて、それこそおへソの洪水といっているくらい。あまりうれしくて四回も見に行ったが、日によって出す人がちがっていったようだ。(第六図)

水谷良重、藤井輝子、河本芳子、横田米子の四人の歌い手をはじめ、ミサイルアダデオの伊藤厚子、新進の英由美等その他多勢の連中も三人に一人は出しているのだから、オドロキである。

福田富子、重山規子の両エースは、表の看板でハッキリ出しているのに、舞台では四回共出さなかったのは看板にいつわりアリというところ。

それに別の景では、有風百合子、沢谷好恵永井雄子、黒田咲子の四人は完全なビキニスタイル、特出のダンシング・レオもへソ出しアクロバット、ネーブルマニヤは日本中から集まってもよいくらいのものであった。

お固いはずの新劇にさえ、近頃はよくヌードが登場する。劇団四季の「クック船長探検記」はほとんどの女優がセパート型の水着。「城塞」におけるストリッパー役の木村俊恵古いところでは「冒した者」の奈良岡朋子や

五月女道子はオッパイを完全に出した。但し日劇ミュージックの踊り子などと比べて貧弱だった。その点、オッパイも立派だったのは

(第九図) 江波杏子のおへソ



岸田今日子（第七回）。

35年4月、東横ホールでやった「サロメ」の七枚のベールの踊りでは、完全にストリップで、乳房も、おへそも出して踊り大評判をとった。彼女はまた映画「砂の女」でも全ストになるそうだから今から楽しみである。

テレビの発達により、お茶の間でも時々おへそが拝めるようになったのも、十年前と大きなちがいである。

35年から37年にかけて、日曜の夜をたのしませてくれた「ピンク・ムード・ショー」が中止となったのは、ほんとうに残念だが、それでもミスシークレットの青葉陽子をはじめ、浜村美智子、前田はるみ、木の実ナナ、芳村真理、松田和子等がこの二、三年楽しませてくれた。

おへその見せ方の一番上手な人として、私はアクロバットの若山昌子をあげておきたい。彼女は最近芸能社の社長になったり、草月会館でリサイタルをやったりして相当活躍しているが、彼女が東劇ミュージックに出ていた十年以前まえから、おへその出し方が上手だった。

まず最初に出てきた時は、長いスカートを付けていて無論おへそは出していない。その

フンドシは果して下品か

——週刊朝日・飯沢匡氏の一文に寄せて——

川崎進一

我々『禪』愛好者にとってまさに天国である。レジャー、バカンスの掛け声と共に全国各地の海岸はニールックなる水着の色とりどりの姿で賑った。

それにしても、日本古来の伝統である禪が下品だという偏見の下に葬り去られ、滅多にお目にかかれないどころか、「禪の着用者はお断り」なる立看板まで現われるに至っては、ああまた何をかいわんやである。

ところが、識る人ぞ識る、識者はちゃんと禪の美と必然性を認識しておられる。それは百万部の発行部数を誇り、最も中正なる良識の誌といわれる週刊朝日、七月二十六日号、三十六頁から三十七頁にわたる『焦点』に飯沢匡氏が

「フンドシは果して下品か」なる評論を書いておられる。私はこれを読んで、わが意を得たりと快哉を叫んだ次第である。

奇クにおける禪愛好者の同志諸兄よ、往々にして禪愛好が何か特異なる感覚のごとく、卑下しておられるような一文に遭遇することがあるが、これは甚だ心外である。禪こそは、日本伝来の風俗のよきものとして尊重せねばならないということに改めて認識したいと思う。

不幸にして飯沢匡氏の一文を読む機会を逸した方々のために、及び文献誌たる奇クの一頁に、後々までも貴重な一文として残すために、全文を転記するのは誌面も許さぬ事故、その抜萃を載せたいと思う。

週刊朝日 七月二十六日号

「フンドシは果して下品か」 （飯沢匡）
夏になると毎年繰返されるのが男性の下着論だ。ステテコ国辱論からフンドシ排撃論が盛んになる。

昔の紺股引の着用者たる哥兄連は、下に六尺禪なるものを締込んでちゃんと腹の線に沿ってまとめ上げていたものである。

スカートをとってパンツになってもまだ出してない。ところが、グツとうしろへそり返って一回転するとチラリと出るのである。

このチラリチラリをくり返して見せてくれるのは、全く何ともいえない魅力である。リンボーダンスの時も、まずおへそがくぐってくる感じであった。しかし、彼ももう二、三年でアクロをやめるそうで、全く残念でたまらない。

今のハイティーン。

ぼくが十年前に「お隣の魅力」を書いた時は小学生だった人々は、実にヌギッぷりがいい。滝瑛子を筆頭に、浜田いう子、中川ゆき（第八図）、加賀まり子、浜美枝、渚エリ、中尾ミエ、江波杏子（第九図）、出してへるわけでもないおへそぐらいわけなく出すであろう。しかし、ジャクリヌ・ササールのような純情型の女優、大空真弓、星由里子、和泉雅子、吉永小百合等が平気で出すようにならないければ、まだ本当ではない。

十年後、昭和48年はどんな世の中になっているだろう。きっとフランスのように学校のプール指導の時も、ビキニスタイルであられる高校生や、中学生が出現しているのではあるまいか。

私が聞いたところでは、ブリーフといふここ二十五年位に全世界に普遍化した男性の下着は、日本の褌からヒントを得たもので、最初「サニタリー・フンドシ」という名でアメリカで日本人が売出したものが次第に改良されたものだそうだ。

褌といえ、最近女性の間に流行しているビキニ・スタイルは全く褌に他ならないではないか。しかし日本のプールや、ひどいのになると海岸まで「褌の着用者は御断り」ということになっている。こんな不平等はない。

ビキニは欧米から入ったからよくて、褌は日本伝来のものだから下品ということなのかも知れない。

確かに、そういう外国崇拝伝統蔑視のコンプレックスはあるらしい。何しろ大真面目で角力とりの締込み姿は下卑てるからとパンツをはかせようなんて考えた連中がついこの間までいたのだから。

日本の伝来の風俗のいいものは心して保存したらい。

先ごろ長良川の鵜飼に行った時、船頭がランニングパンツをはいているのには弱った。これが昔ならちゃんと六尺褌でまとめていて、どんなに颯爽と美的であったかと変な近代化を嘆いたものであった。

始終、水から出たり入ったり漁夫でさえ大部分このごろはランニングパンツといふだらしないものになったのはどうしてであらうか。

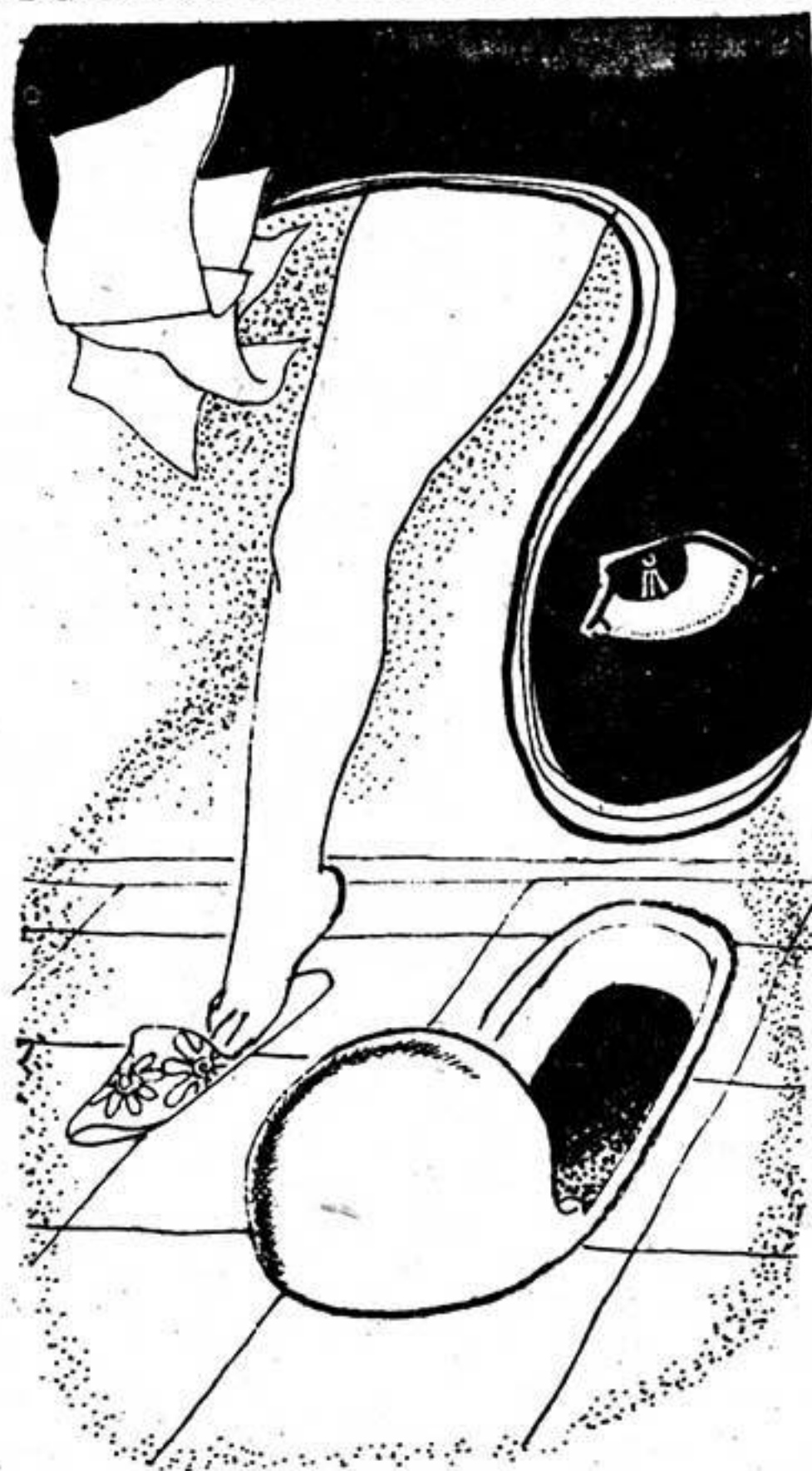
私達の少年時代、水泳を習練する時は、六尺に水着という姿であった。水着とは純綿で作った褌様の長いようなものである。いつだか浩宮がこれを着ていらっしゃる写真が出たことがあるが、さすが皇室は伝統保持に範を示していると思った。ただ残念なことには、その水着の下が海水パンツだったことだ。今の皇太子の少年時代は六尺で泳いでおられたのでその写真はみたことがある。

「褌をしめてかかる」とか「緊褌一番」とかいう言葉がある以上、それが日本人の精神に何らかのかわりがあったことも疑いがない。日本の文化は一旦外国へ渡って認証されてはじめて戻ってくるものらしい。男子の下着もまたその例にもれなかったことになるか。

（飯沢匡）

全文でないため、やや迫力に欠ける点は止むを得ないが、何と痛快な風俗時評ではないか。

褌愛好者の諸兄よ、この一文に勇気づけられ、大いに緊褌の美を謳歌しようではないか。



<芳野眉美>

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

一、ブーツ

九月二十七日東京新聞夕刊、ピエールカル

ダンコレクションショウの記事に、
「新しい試みはブーツの使用。皮製手袋をそ
のまま足にはいたようなソフトなブーツは、

足にピッタリ合っていたずらっ子的なふんい
きを出している」

とあって、皮の編み上げの長靴をはいてい
るモデルの写真が載っていた。

高島屋主催、ホテルオークラで開かれたの
だから、モデルは日本女性だが、問題は「ブ
ーツでいたずらっ子調」という見出しにあ
る。

ヨーロッパやアメリカには、皮に対するフ
ェティシズムが多いらしい。皮の長靴、皮の
コルセット、皮手袋、皮の覆面といったもの
で拘束された外国女性の絵や写真が数多く紹
介されている。

我国では珍しい傾向だと思っていたが、そ
うでもないらしい。

七月の末、モデルチェンジしたばかりの新
車二台で、九十九里海岸に行ったことがあっ
た。十八から二十一、二の男女ばかり八人、
私が最年長になるのはやむをえない。出発は
午前一時。

大平洋の波は荒れに荒れ、海は刺すほどに
冷たい。九十九里の砂はあくまで白く、そし
て熱い。翌日の昼頃だった。

昨夜、行動を共に出来なかった洋子が驚く
べきことに単車で海にきたのである。上から

下まで薄い鹿のなめし皮でつくった完全武装であった。

皮のトレアドールパンツに皮の編み上げの長靴をはいて単車にまたがった洋子は、砂浜に寝ている私の顔先で止まった。洋子の長靴が私の顔に砂をかけた。

洋子が、これほどサディスティックに見えたことはなかった。はらばいのまま、私は洋子の皮の長靴のにおいをかいだ。その長靴の先に、私が唇を寄せたことを誰も気がつかない。

鹿のなめし皮の下は、大胆なビキニスタイルだった。

二、べべ

『女性自身』七月八日号に、トイレの上に腰を掛けているブリジッド・バルドーのグラフがあった。

バーに飾った。

三、絶景(1)

「楊貴妃のおなら」という詩を紹介します。九月十日東京新聞夕刊。

「貴妃嬢」金子光晴(世界像同人)

なにを申しても、もう

太真(楊貴妃)はいない。

あのゆたかで、柔らかい

玉のお尻は、世にないのだ。

あのお尻からもれる

疳高いおならを

一つ、二つ、三つ、四つと

そばで数取りしていた頃の

万歳爺々(唐玄宗皇帝)のしあはせは、

四百余州もかえがたかった。

「十三とは縁起がよくないよ

たのむ、もう一つきばっておくれ」

太真が、愁媚をよせて

息ばる顔がまた、絶景だったが。

絶景(2)

唐の玄宗皇帝が、楊貴妃の息ばる顔を見たかったように、光源氏が母にあたる桐壺にやる方なき恋慕の情を抱きしめたのは、ものの本によると、やはり息ばるときの表情を見てしまったからであるという。

といって、楊貴妃のように息ばった顔ではなく、厠で息ばったときのデリケートな足の指の動きの美しさに見とれたというのだから日本文学はうれしくなる。

通りかかった源氏は、ふと吸い込み窓のか

げに、桐壺の足の指を見た。

「五つのかたつむりがはうごとく、よりそוגとく、はては四方に別れ去るごとく、かそけき、イキの音と共に、あやしく動く」とある。源氏物語。

四、脚で……

『女性セブン』九月二十五日号の特別企画に「ペッティングにどんな方法がとられるか」という表がある。女性週刊紙は面白い。

多いほうから書くと、

(1)キス(2)手で乳房(3)性器の位置(4)口で乳房(5)手で男性器(6)口で女性器(7)口で男性器

となる。これだけなら問題はない。気になったのは、最後の(8)脚で男性器というところである。

女性のどこに魅力を感じるか、というアンケートに「脚」と答えた若い男性が圧倒的に多かった、という新聞記事を読んだことがある。最近だ。

その魅力のある脚でいじめられる。そんなサディスティックなシーンをしばしばストリップ劇場で見かける。

こんなことがあった。透明な小さなパンティだけの女が、中国風の扇で前をかくしなが

らエプロンステージに出てくる。その足が私の前で止った。立ったまま私を見下す。こたえられない。

「脱がして」

とハイヒールを目の前に突きつける。私がハイヒールを脱がせている最中、周囲の客の目は一斉に彼女のある一点をにらみつけている。だから、ハイヒールを脱がせた瞬間に、そのむれた彼女の足に唇をつけたことなど誰も気がつかない。

続いて左のハイヒール。彼女がしやがんでつと脚がのびる。赤くペデキュアされた二本の足の指が、私の目の前にある。

笑われたってかまわない。私は公然と彼女の脚を抱きかかえる。うつむくふりをして、彼女のすんなりしたむだ毛のない熱気のこもったすべすべした脚に唇を触れる。思い切って舐める。彼女は何もいわない。

彼女は私の肩に足をかけ、立ち上がる。その瞬間私の首のつけ根はいやというほど踏まれる。

「綺麗な脚だね」

と私は彼女にいう。

「有難う」

意外に彼女は素直だ。彼女はサービスにガ

ムを口移しに客にくばった。唇はつけさせない。微妙なところでガムを口から放してしまふ。うまいものだ。二回目の公演の時だったが、彼女が前の客にガムを口移しにした時に私の目の前に彼女の足がのびてきた。何気なく持っていたガムを、彼女の足の指にはさんだ。

彼女はちょっとびっくりしたらしい。が、指にはさんだまま私の口にガムを入れてくれた。客が笑った。まるでピエロだ。

いや、入れてくれたのではなく、私の顔でガムを取ろうとしたのだろうが、結果的にはそうになった。いたずらが、思いがけないM的シーンになって、その日一日を彼女の脚の前ですごした。この日は私にとって最良の日だったのかもしれない。特別出演で使用した紙を客にくれた女がいた。その女が出てくると何本もの手がステージにのびた。女の汗で濡れた紙をもらってどうするつもりなのか。群衆心理なのかもしれない。

「ガムと交換しよう」

といったら、笑いながら女は念入れに濡らしてくれた。

女の汗と分泌物と体臭がいきり交った紙は、私の口の中に消えた。

女は見えていたが、何もいわなかった。

五、還元器

共立女子大の中村教授が、尿を真水に還元する実験をやり、群衆の前で飲んだのは、中曾根科学技術庁長官の頃だから、かなり前の話になる。週刊文春の記事だったと思う。

この中村式還元器は、尿の中の毒素や色素をすっかり抜いてしまふ吸着剤が特許で、値段も安く出来るとのことだった。

宇宙時代で、宇宙旅行には尿は真水に還元し、固体はクロレラに還元し食糧にするのが最良の方法なのだそう。

自然は循環作用で運営されているのだから何事も還元してしまえというのだろう。

その後、還元器がどうなったか知らない。そこでこんな空想をする。

友達先輩宅を訪問したとする。その美しい夫人が、

「断水だから、還元品のお水でがまんしてね」とくる。

「私のだからいいでしょう」

サンドイッチがでる。

「私のでつくったクロレラパンよ」

近い将来の話。

六、夏の終り(1) 汗

美沙夫人が私の口元の汗を拭ったハンカチは、和服のたもとから出したものでも、ハンドバッグの中に入れてあったものでもなかった。

美沙夫人の腋の下にはさんであつたものである。汗で濡れていた。

ハンカチには香水がスプレーしてあつた。が、香水だけの匂いではない。夫人の汗がしみてゐるはずであつた。

美沙夫人の手ごと引き寄せて、ハンカチを嗅いでみた。香水の名はわからない。

「いい匂いだ」

「馬鹿ね」

不思議なものだ。腋の下から分泌された夫人の汗、体臭に香料がミックスされて美しい匂いが私をひきつけた。

軽く踊っただけで、夫人の肌はしっとり汗ばんでいる。九月だというのに、このクラブは暑すぎた。

奏の始皇帝は、愛妾を選ぶときに大勢の美女を駆けさせて、女たちの肌が汗ばんだところで肌着を脱がせ、強烈な体臭を発散させている女を愛妾にしたということだ。これは古

来より美女が性的に興奮すると、じやこうの匂いを放つといういい伝えからでたものらしい。

「美沙さんも、麝香の匂いがする」といったら、いやというほど手をつねられた。

「ほんとうだよ」

「知りません」

夫人のうなじに、うっすらと汗の粒が集る。そっと吸う。

美沙夫人が首をすくめた。何かいったらしいが、口の中で消えた。声にならない。

「汗」

という。

「知りません」

耳に口を寄せてささやく。

「シャワーを浴びて帰りまじようか」

「知りません」

「いや美沙さんと離婚しよう」

「あら、まだ結婚もしてないのに」

「だから結婚しようよ」

「知りません」

「美沙さんの汗のかたまりが飲みたいな」

「汗のかたまり」

また、耳に口を寄せてささやく。

美沙夫人の顔が真赤になる。

「知りません」

それは、美沙夫人の理性に関係なく、美沙夫人を足からキスしていたときに、私の顔に知らず知らずに流れでたものだ。

夏の終り(2) 葉山午前三時

「およがないの」と梨香。

「海パンを忘れたんだ」と私。

「パンツでおよげばいい」

「帰りがいやだよ」

「私のかしてあげるわよ」

「新しいの持っているの」

「ううん、二枚穿いているの」

「ははあ、その一枚を借してくれるのか」

「そうよ」

「じゃ、下のほうのを借してくれ」

「どっちでもいいわよ」

「上のは、レースのついた奴だろう。そんなのいやだよ」

「下のは汚れているかもしれないわよ」

「そのほうがいい」

「何かいった」

「いや」

「およぐわ」

梨香も海水着を持ってこなかった。バーが終って急に葉山に行こうと、梨香がいだしたのだ。車で飲みに来たAが災難だった。

Aは車で寝ている。疲れてどうしようもないらしい。

砂浜で梨香はすんなりと裸になった。

月は暗い。雲が多すぎた。

夜の中で、梨香の肌だけが白かった。

七、女首

「武州公秘話」に就いて

奇ク十一月号にも、晒首のグラビヤがあった。切腹シリーズといい、私には関係のないグラビヤだが、愛好者は多いらしい。

谷崎潤一郎の「武州公秘話」は「生首」とくに「女首」に就いて書いたもので、団十郎が歌舞伎座で演じている。

(五、六人の女が選ばれて行って、討ち取った敵の首級を首帳と引き合はせたり、首札を付け替へたり、血痕を洗ひ落したり、そんな役目を勤めてゐる。首といふものは、名もない雑兵のものなら知らぬこと、一廉の勇士の首であつたら皆さういふ風に綺麗に汚れを除いてから、大将の実検に供へるのである。だから見苦しいことのないように、髪が乱れた

のは結び直してやり、齒を染めてゐたのは染め直してやり、稀には薄化粧をしてゐるような首もある。要するになるべくその人が生きてゐた時の美貌や血色と違はぬようにするのである。このことを首に装束するといつて、女の仕事になつてゐる) (巻之二)

首装束の説明。

(人妻はちようど五人いた。そのうちの三人がめいめい一つづつ首を自分の前に据えて、あとの二人は助手の役をしてゐた。一人の女は、半挿の湯を盥に注いで助手に手伝はせながら首を洗つてゐた。洗つてしまふとそれを首板の上へ載せて次へ廻す。もう一人の女がそれを受けて髪を結び直す。三人目の女が今度はそれに札を付ける。最後にそれらの首は三人の女のうしろにある長い大きな板の上へ一列に並べられた。首がすべり落ちないようにその板の表面には釘が出てゐて、それへ首をぎゅっと突き刺す仕掛けになつてゐた)

(巻之二)

ということになる。

木の札は紐をつけて首のもとどりに結びつけるのだが、髪のない入道首は、首の耳へ錐で穴をあけて紐を通す。

さて、「女首」の説明だが、

(女首と申しましたら、女の首ではないのでございます。合戦が忙しうございまして、敵を討ち取りましても、その首を捉げて歩くことなど出来ないものでございまして、そういう折に、鼻を斬り取つて置きまして、それを証拠にあとでその首を捜し出すのださうでございます) (巻之二)

鼻だけ持ってきたのでは、男か女かの区別がつかないところから起つた名称である。

「武州公秘話」では、この鼻を斬り取ることがモチーフになる。即ち、自分自身が鼻の欠けた醜惡で、滑稽な首になつて、ほのかな微笑をたたえて首を洗つてゐる。謎のような女の魅力の前に引き据えられたらどんなに幸福であろうかと思ひ悩むのである。

武州公少年時代の夢であつた。

武州公は桐生武蔵守輝勝、夫人は松雪院という。この二人が、お伽坊主の道阿弥を責める話が面白い。(巻之五)

(お座敷の畳を一畳ばかり取除けられ候、さてその下の床板を二尺程切取らせられ、汝、床下におりてこの穴より首を出すべしと被仰候) (道阿弥話)

床下から首だけ出せ、という命令なのである。武州公、腰元共と首装束の実演にとりか

かった。そのうちに、女首の説明になり、
「この首は鼻があるので、実感が出ない」

とか、

「やはりほんとうの女首でないと練習に不便だ」

とかいうようになった。首になっている道阿弥全く気が気でない。鼻だけは助かりそうにない。と——、武州公、

「剃刀を持ってこい」

とどなった。

まあこの場合は、松雪院のとりはからいで鼻の頭を真赤に塗りつぶすだけですんだ。

ところがである。

「今夜は一つ、この首を眺めながら寝ることにしよう」

と、自分たちの寝床を道阿弥の首の前にうつして、赤鼻を賞翫しながら眠りについた。

武州公と松雪院が生きた坊主の首の前で何をしたか、それはいろいろ考えれる。

秘話にはこうある。

「ああいうくりくり坊主の首は、何処へ首札を付けると思う」

と武州公がいった。

「ほんとうにね、何処へ付けたらいいんですの」

「ああいうのは、耳へ穴を開けてね、それへ結び付けるんだよ」

「まあ、あの首の耳へ穴を開けて……」

松雪院はこころ笑いこけた。

「……でも、そうするよい仕方がありはしませんわねえ」

「どうだい、そなた勇氣があるならやってみないか」

「何で開けますの」

「錐でもいいし、小刀の先でもいい。ちよつと突つくだけなんだよ。痛くもなんともありやしないよ」

「そうですねと。可哀いそうだけど、やってみようかしら」

ということになって、松雪院、道阿弥の首にいった。

「ね、ちよつと突つくだけなんだから、我慢してね」

「へい」

「そんなに痛くはないんですって」

大変なことになった。

(忝くも松雪院様雪の如き御手を以って愚老が石の耳朶をお持ちなされ、鼻声にて低くお笑い被成候。右の御手に刀子を持ち直し給いそのままづぶとお突き遊ばされ候得者、血少

しばかり流れ出で、勿体なくも白砂の御手を汚し候。札をお付け被成、御夫婦とも蚊帳の内へ御入被遊候) (道阿弥話)

戯れに生きた人間の耳へ刀で穴を開けた松雪院の残酷をとがめる人は「武州公秘話を」読む資格はない。

八、淀君の厠

大阪城淀君の厠は、京の御所を模したものといわれている。

三室あり、はじめの部屋には湧桶、たらいなどが据えられ、次の間に下帯、二布、足袋などをしまつてある戸棚が設けられ、侍女小姓はここで待たらしい。三室の上段が淀君の御用場になる。六畳敷きの真中に黒塗り縁の落し孔があった。

問題は落し孔の中である。五寸ばかりの下に、孔雀の羽根を一面に敷きつめ、底をかくしたと、柴練先生は書いている。淀君の落し物は孔雀の羽根にくるまる。

孔の中にうづくまる厠用人を見下しながら淀君は

「宝物にしゃ」

ぐらいのことをいったかもしれない。ものの本によると、落し孔の中は、蛾の翅

を無数に積み重ねたともいう。淀君の落下物は、落ちると同時に翅の中に埋まってしまふ。宝物にしたいくらいだ。

侍女や小姓が待つ次室があつたことは微妙な問題が残る。あと始末に小姓の舌を使った

かもしれない。主命であれば絶対服従であつた。それが習慣になる。

病気で寝所で伏した場合、どうしたか。わざわざ御用場など行くまい。小姓を寝所に呼びつける。

権力はおそろしいものだ。小姓の口が淀君の御用場になる。

——御台様思召しにより、汚物を賜る。——

というところか。

淀君の御用場になってみたいものだ。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

大好評！注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

目下発売中 直接お申込を 定価一部五〇〇円 (送共) 略号 (文献)

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れますと、補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折り返えし急送いたします。

〔第一グラビヤ〕 (十六頁)

自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成

棒責め愉悅……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首繩……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子

〔巻頭口絵〕 (オフセット八頁)

△絵物語△白ターバンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲△……………第五図章△美容△
第二図章△飼育命令△……………第六図章△洗腸△

第三図章△調教△……………第七図章△矯正△
第四図章△訓練△……………第八図章△仕上げ△

〔第二グラビヤ〕

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマーの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕 (十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞らい……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子
憧れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使 (トカゲグループ)……………由岐 敏夫
1、「みんな剥いじまいな」

- 2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
 3、「それだけは止めておきなさい」
 4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
 投げ出した脚線美……………絹川 文代
 悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
 厳重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕

(十六頁)

- 裸女斗争場面……………絹川・大塚
 浣腸部屋の悦楽ムード……………大塚 啓子
 浣腸器を握って……………大塚 啓子
 縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
 女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
 女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子
 高手小手二ツ折り……………松本アサ子
 エビ縛り二種類……………松本アサ子
 血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
 サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
 縛り過程の構成……………大塚 啓子
 鼻責めシーンの先綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕

(三十二頁)

- 新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐、
 絵物語「白ターバンの女」……………辻村 隆
 新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
 (告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
 (告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
 自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

〔第三グラビヤ〕

(十六頁)

- 台所のめしうど……………新井マリ子
 飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
 椅子に呻めく……………新井マリ子
 長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
 豊満への擦過……………遠藤百合子
 美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
 ボリウム自慢絵模様……………長野 良子
 床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
 煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
 俎上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
 ニツ折り縛り……………大塚 啓子
 鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
 上からと横からと……………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕

(十六頁)

- 神さまへの人身御供……………絹川 文代
 腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
 足首の縄を解く……………大塚 啓子
 緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子
 光と影の表と裏……………梨花悠紀子
 縄に狙れたポーズ……………梨花悠紀子
 女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
 女相撲「吊り合い」……………A氏提供
 爪切りと白足袋……………浜 千代子
 高手小手腰縄……………梨花悠紀子
 庭園の塑像……………絹川 文代

〔第四グラビヤ〕

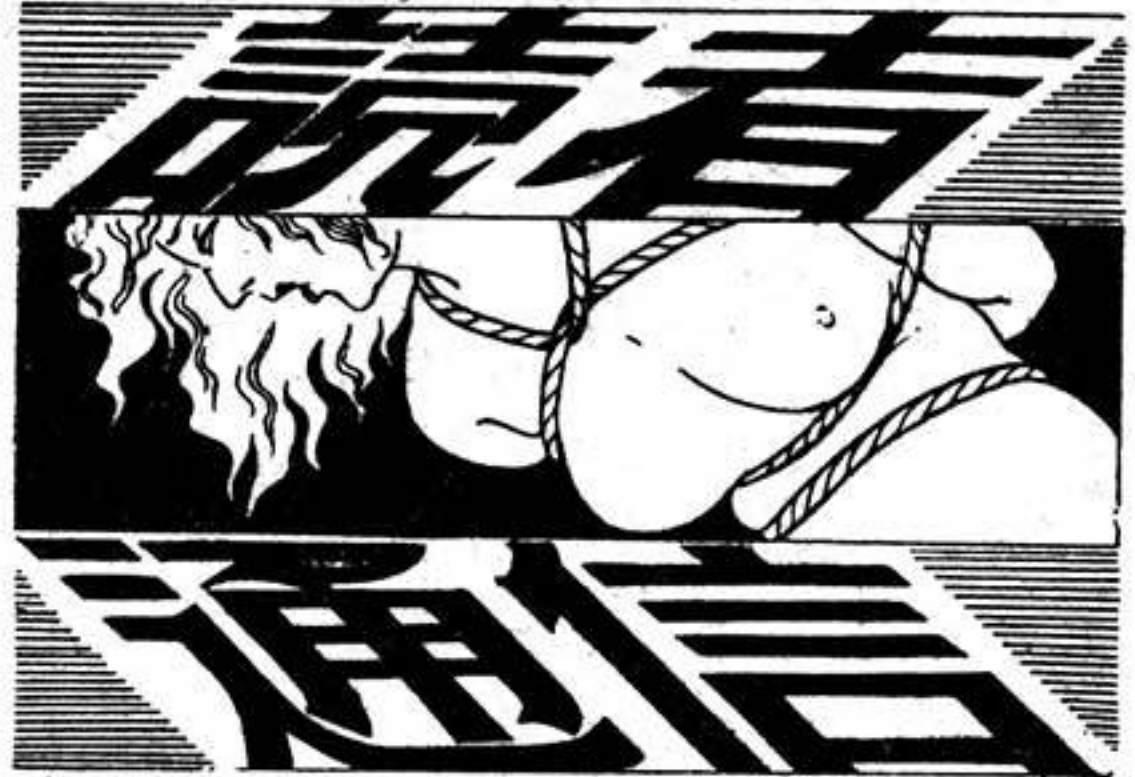
(十六頁)

- 女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
 ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
 バンド着用後手縛り……………東浦ひかる
 荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
 下着の散乱する中にて……………新井マリ子
 用意周到なる馴致……………新井マリ子
 白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
 浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
 くさり、くさり、くさり……………長野 良子
 団子鼻をいためる……………長野 良子

〔第二オフセット〕

(十六頁)

- 美しき乳房……………長野 良子
 愛らしき羞らい……………長野 良子
 仰角のいたずら……………長野 良子
 顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
 森の中のニンフ……………絹川 文代
 緊迫の演技(斬られる女)……………愛川・田中
 ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
 SMの魅力プレイ……………三木・浜本
 前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
 黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
 Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
 の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
 クで——
 愉悦ポーズ二景……………絹川 文代



秋の夜長を静かに奇ク十二月号の頁をめくっています。八月から十月まで四国の方へ出張してしましたので読者通信に生首ファンの皆様からいろいろ御批評を頂戴しながら御無沙汰致してしまいました。九月十月十一月号と私の下手な写真を掲載していただき編集部の方々に心から御礼申し上げます。水野様、女斗彦様、MT様等から有難いアドバイスをいただきましたことを感謝いたします。私達夫婦はその後もプレイを楽しんでお

りますが、住宅の関係で庭が狭くもっぱら室内ということになり思い切ったトリックも使わず残念に思っています。そして昨夜久し振りにカメラを握り妻にレンズを当ててみました。フィルム一本を一気に写すには相当のエネルギーを要しますので三回にわけて写すこととし、昨夜は台上のさらし首ばかりを十枚程写しました。真迫性を出す為に赤の絵具を使用してみました。次に斬首シーンを十枚前後写したいと思っており、その後絞首刑シーンを写して一本を使う予定にしています。次回の斬首シーンを一寸紹介してみますと、①前に三角の布をつけただけの後手の女囚を刑吏が引きたててゆく。②両手両足を左右に一杯にひろげ大の字にさらされている女囚。③後手にされ首の座に引きすえられた女囚(目かくしをする)。④後に廻った刑吏が左手で女囚の黒髪を邪魔にならぬよう首の片側によせ、右手の白刃を女囚の白い細首に当てがっている。⑤前方にせい一杯のばされた首、刑吏は大上段。⑥女囚の首筋に打下された大刀、女囚の身は半身になっておどり上っている。⑦後手全裸

の女囚が矩形の首切台上に仰向にされ、刑吏は長い黒髪を握って首筋を伸ばし白刃を当てて切断箇所を確めている。⑧刑吏大上段、観念して台上に横たわる女囚。⑨斬り落した首の髪をつかんで差上げている刑吏、右手に白刃を握っている。以上のようなシーンを予定しています。⑩のシーンは幕によるトリックを使う心算ですが、うまく出来るかどうか自信もありませんが何とかやってみようと思っています。そして一本のネガの中から良いものを選んでストーリー風に組んで、再び生首ファン、処刑マニアの諸兄の御批判を乞いたいと思います。水野様あなたから励ましの通信を戴きながら失礼致しております。何とか水野様御夫妻と協同で野外撮影を出来ないものでしょうか、きつとすばらしい作品が出来ると思います。また貴兄のコレクション写真を是非拝見致したいと思います。何とか連絡の方法はないものでしょうか。(新宮明夫)

伊東恵子様貴女も奇クを愛読の由小生も本誌を読みはじめてより数年になります。三十五才になる会社員です。そしてSです。今迄

幾度となくM女性の投書があり乍ら、生来の弱気の為に投書の機会を失っておりましたが、この様な状態では何日迄たっても、M女性を得られることなく過ぎてしまうと思い、亦女性の貴女ですら、呼びかけられて居るのにと思ひ、意を決して投書する次第です。小生Sです。そして特に鼻に興味を持って居ります。美しい顔につんとすまして鎮坐して居る鼻を身動き出来ぬ様に縛って、思切りのいい見度いと思つて居ります。そして亦、貴女の望み通り、乳房、尻をもみくちやにし、足の裏、わきの下等を、くすぐり、望みあれば浣腸もして上げます。本当に真面目なプレイ本位な交際をして貴女も慰められ、そして小生も満足出来れば之に越した事はありません。少々年令的に差がありますがその点は我慢して下さい。亦、布施と明石とは、少し離れて居りますが、貴女が場所を指定下さるなら明石でも神戸でも行きます。貴女の都合のよい日時を誌上でも大阪府布施市御厨局止宛に御知らせ下さい。何度も繰返す様ですが真面目なプレイの御交際を御願ひ致します。最後に奇クの発展を御祈り致します。(大阪府布施市御

厨局止八中村哲夫

○

偏見により人間本来の性、或は姿、叫びが弾圧されんとしている。良書とか悪書とか少数の人間が勝手にひいた見えざる一線は公海に於ける漁場の如く笑止の沙汰であり、且つ、我々の奇クを以って、一連の見出しだけの印刷物と一緒にするとは……。先般の新聞を見て心より憤りを覚える。ともかく、私は先般の書面の通り創刊号当時より奇クに親しんで来た。勿論現在に至る迄の皆様の努力に対しては、何一つお役にも立てなかったが、陰ながら奇クの変遷に一喜一憂して来た者です。単刀直入に言って、今後の奇クはどうなるかという事です。十一月特集を開いて見ても、第一グラビヤの大塚嬢、遠藤嬢の素晴らしさ、又代理部の新版案内を見てもお願いしたいのが何葉もあります。然し私は信ずる、過去に於て幾多の荒波を乗り越えられた編集部の皆様を、必ずや、我々の夢は消えないと。どうか声なき幾多の同志の為にも頑張ってください。(東京八木田勉)

○

奇譚クラブの皆様御清栄の事と存じます。十月、大阪にアリス

イド・マヨオルの展示がありまして、私も長らく見たいと思っていました。中でもたのしみしておりました「相撲する女」の小作品とリトグラフの実物に接したのは大きな収穫でした。御存知のようにマヨオルの女たちは決して八頭身のヒヨロ美人ではなく、はたらく産むたくましくてやさしい、しかも生命そのもののような単純な感じとさといったものがあらわされていて、おかしい方ですが彫りものから人生の教えをうける、といった巨大な仕事です。そのマヨオルに「相撲する女」という作品があり、又そのテーマのリトグラフがあるのは面白いことで、今度のはじめて実物を見てやや小さすぎると思いましたが、もしこれが等身大のブロンズでもあったなら圧倒的なものであったことでしょう。女斗美愛好の各位も、かならずごらんになったことと思います。「みづゑ」増刊三十七号にブロンズの写真とリトグラフの方は小さなカットで出ております。ブロンズの方はレ・デュー・リュテューズとなっております「争う二人の女」と邦訳してありますが拙い訳でこれは原語通り「相撲する女」と

すべきであり、名匠高村光太郎も「マヨオル論」の中でこの訳を使っています。泰西女斗美考といったものはよく知らぬのですが他にたしかドラクロワの素描に二人の少女が相撲するところがあり、一枚は組んだところ(手四つ)、一枚は投げ倒したところだったと思いますが、手元に資料がなくよく判りません。どなたか一度この方面の御精通の方におしえていただきたく存じます。(雄松比良彦)

○

最近では増々浣腸ファンが多くなり、読者通信も浣腸ファンの記事が多く見受けられる様になり、小生も一ファンとして喜んでいて次第です。今月号(十一月)も「花と蛇」を初めとして色々浣腸の記事が掲載され、充分に小生を満足させました。又分譲フォトも浣腸ものが全盛で、フォトの広告を読んで、一人その場面を想像し楽しんでいます。又購入するにも色々興味があるものばかりなので、選択するのに迷って困る状態です。さて小生が今一番の望は浣腸マニアの女性の方と、文通したり、お会いしてお話し等をしたことだと思っていますが、残念ながらこれに未だに良い機会に恵まれ

ません。どなたか、若い女性の方で、小生にお便りを下さるお気持ちになりましたら、どうかお願いします。小生は責任を持って御返事を差上げます。この通信が出るのが十一月二十五日ですから、十二月の十五日迄に、「東京渋谷郵便局止」で御願致します。(東京八北原富男)

○

十一月号の告白「女が斬られるとき」は、裸女血斗マニアの私にとっては、非常に興味深くよませていただきました。女斗美裸女血斗マニア、無惨絵マニアの私にとっては今までの女が斬られる瞬間については余り注意をひいてはいませんでした。これによって啓発されました。私としては血斗の終わった後の生首、血みどろの屍の描写に重きをおいて注意して行きたいと思っています。最近のフランス映画「シエラザード」には裸女血斗マニアの私にとって一寸たのしい場面がありました。略奪の混乱に乗じた、女達の二人が宝石の奪い合いからの血斗の沙汰の場面がそれでした。女はいずれもセミヌード又はヌードに近くそれもふんどしに近いスキヤンティのよう

なものを腰にまといっている姿は私
のあこがれとするふんどし一つの
裸女のそれに相通ずるものがあり
ました。一人の女がナイフで相手
のふくよかな脇腹をざくりとえぐ
る。痛手に屈せず伴の女は弓に矢
をつがえてひようと射てば相手の
女は悲鳴と共に泉水へ水飛沫をあ
げておちて血汐が水を唐紅に染め
る。脇腹を抉られた女はそれをみ
るや、悶え乍ら息たえると云うシ
ーンでした。いずれも豊満なグラ
マーが、平素の仮面をかなぐりす
てての果し合いは見事な肉体とふ
んどしを思い出させる衣裳と相ま
って私の胸をわけせました。そこ
に「女が斬られるとき」の美しさ
と云うものをしみじみと感じまし
た。前川様始め同好諸兄弟の通信
をまっています。(女斗彦)

私は四十才の会社員です。禪に
深い興味と憧れを感じています。
私自身も愛用しております。もし
て又昔ながらの素朴な職人の姿や
人情等にも深い愛着を持っていま
す。然しそうした風俗も日毎に薄
れてゆく昨今の風潮が惜しまれて
なりません。所詮時代の変遷には
抗すべくもないと思いますが、皆
ホワイトカラー一色になりつつあ

る現代の風俗が何か物足りなく思
われます。真の男性の魅力は真白
い禪をきりりとしめた、清潔感と
かたくまじさとか文明に毒されな
い素朴さにあると思います。この
浮薄な人情紙より薄い時代にも無
法松のような義理人情にあつい人
も、一人位あってもよいと思いま
す。打算的な現代の世の中に年令
を問わず真実の理解と友情をもっ
て総てを救し合い、助け合ってゆ
ける素朴なたくまじき肥満体の人
におつき合い仕度だと思います。
趣味は旅行、映画、スポーツ其他
大抵の趣味は持っていますので趣
味の点でも色々理解しよき友人に
なれると思います。五尺五寸中肉
毛深い方です。社宛にお手紙下さ
れば回送されますのでよろしく。
(神奈川X生)

ブラボー「文献」特別号、近來
にない美事な出来栄です。サド
・マゾー禪美、女斗美のオンパレ
ードに満足しています。特に女の
ふんどし、女斗美がもり沢山なの
はマニアにとってはこれ上ない楽
しみです。雪崎氏の女斗美図絵の
中「御前相撲」大塚嬢らによる「
禪裸女血斗」フオート、四馬氏の切
腹画「侍女奮戦」等は私の血をわ

（今月の新版分譲品）

自己愛の女神、長野良子

臨時増刊号のグラビヤにて初め
て登場して、満天下ファンの絶讃
を博した美人モデル長野良子嬢の
とっておきの緊縛ポーズを特にマ
ニヤの方にごらんいただけます。

全裸脚拳姿態

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(てい) 長野良子

可愛い容貌と初々しい肢体の
持主でありながら、齡に似合わぬ
大胆さで自己愛を満足させる露出
癖の長野良子嬢が肉づきのよい脚
を挙げて緊縛の肢体をくねらし、
自慢の全身をレンズの前にさらけ
出したとっておきの三葉。

全裸アグラ縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(てへ) 長野良子

これこそ露出癖の長野良子なら
ではの大胆きわまりないポーズ。
後手高手小手で両手の自由のきか
ぬ彼女が、自ら逞ましい両足をア
グラにしてポーズをとった他のモ
デル嬢では見られないフオート。

全裸屈伸縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(てほ) 長野良子

巨大な乳房、逞ましきヒップ、
膨満した腹部、白い脂肪のかたま
りのような長野良子の美しい縛し
めの全身が、その裸身が異性の前
に誇るように投げだされた涎の垂
れるような素晴らしい迫力に満ち満
ちたポリウム自慢のフオート。

六尺禪の変形姿態

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 略号(てに) 長野良子

きりりと締め込んだ白晒フンド
シのよく似合う豊満な肉体が、フ
ンドシこそ、露出癖を満足させる
のには、恰好の小道具だとばかり
脚を伸ばし身体をそらし、さまざま
の姿態をくりひろげる長野良子
の六尺フンドシ変形ポーズ。

蹲踞と拍手

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 略号(てり) 長野良子

六尺禪を締めた良子が、相撲の
仕切りの時にするように蹲踞の姿
勢で両股を真一文字に開いて正面

き立たせています。「御前相撲」はふんどし一つの奥女中達に私の理想とする日本髪女性のふんどし姿の美があり「裸女血斗」フオトも結構々々。二枚のフオトの中では上方の一枚がよいと思います。今や一人のふんどし女が相手のふんどし女の乳房を脇差でえぐって仕止めようとする。ひざついたふんどし女は最後の抵抗をなさんとするがそれも空しく果てんとするポーズは力が入って一幅の美女血斗の凄艶さを出して余りあると思います。女がふんどし一つで命を争う状は何と美しいかと云うことを改めて認識しています。「侍女奮戦」も素晴らしいもの。槍一つで女乍らも雄々しくわたり合った一人の侍女は、奮戦も空しくたった今、討ち果した寄手の鎧武者の腕を足にしつつ、敵の手にかかるよりは、ふくよかな腹部、豊かな胸乳もあらわに、そのむちちりとした白腹をかつさばいて果てんとする姿は、奮戦に疲れ切った中にもりんとした表情もすばらしく、凄艶な女への立腹の凄艶な美をあらわして余りありません。久ぶりに充実した特集でしたが生首がないのは一寸残念です。今後、此の種の物を企画される時

は是非加えて下さい。それからふんどし一つの女達のちゃんばら図絵も、同好諸兄弟の通信を待つこと切。(室井英山)

初めて御便りします。小生廿七才になる稍アクチブなクリスターマニア(但相手がなく悩んで居る)です。縛り、鞭打ち等の責めには全く関心がない為、読通欄はいつもざっと目を通すだけでしたが、豊橋の吉村英子さん(十一月所載)の投稿には大変興味を感じました。二十日以上も便秘が続いたら、どんな感覚があるのでしょうか。その間便意は起らないのでしょうか。また浣腸後三十分間も我慢しても駄目だったとありましたが、もしかすると貴方もA感覚にめざめて、それを楽しんでいらつしやるのではありませんか。これが事実とすれば、宿便は直腸にはないわけですが病院で手当を受けるときは指で掘り出すと云うのですから、グリセリンもきかない程固い栓になっているのかもしれないですね。もし僕が貴方にそんな処置が出来たらと思うと気が遠くなる程昂奮させられます。マニヤにとしては、便秘の女性は大変な魅力で、特に排便に苦しんで居る姿

を向いたところと、同じ姿でカシワ手を打っているところの二態。

鬼面と接吻する

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 長野良子 略号(てち)

鬼の面にキスする全裸の美女の立像。妖奇と裸美のかもしれない出するあやしい雰囲気の写真面いっぱいひろがった、アブ好みと自称する長野良子が、自らすすんで演じたアイデア。正面向いたあどけない顔と、異様なばかりに美しい起伏を見せた正面裸身が素晴らしい。

強烈エビ責め

大手札 三組一組 三〇〇円

モデル 松本アサ子 略号(まと)

「臨時増刊号」に初めて登場した愛読者のモデル志願者が自己のマゾ性を満足させるために、すすんで最も強烈な縛りを要求したカメラの前に晒した全裸エビ責めのポーズ。両足先が顎近くまで折り曲ったこのエビ縛りは、時間が経つに従って、苦痛が増してくる。全身脂汗を流して耐えるシーン。

裸身に羞らう

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 松本アサ子 略号(まつ)

誌面のグラビヤでは、あからさまに顔を出すことをためらっていた松本アサ子嬢も分譲写真となれば、そのためらいもなくなぐりすて、大胆なポーズで顔を正面むけて、マニヤの方たちを凝視してやまないマゾ性の発揮の一場面。

女賊捕縛

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子 略号(へい)

白晒のフンドシ、胸高にしめた腹巻、白鞆の短刀を落ち差しに、頬かむりをした女賊が、捕えられてきりきりと後手高手小手に縛られ、柱に括りつけられて逃げようともがく有様。

女賊処刑

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子 略号(へは)

捕えられた女賊は、逃れんとし、その術なく観念してうなだれ処刑の辞をきく。自ら持った短刀は男の手に抜きはなたれ、ドキドキとする抜身が女の首筋に当てられ、今まさに振り下されようとする緊迫した一瞬。

を知りたい願いが強いのですから便秘中や排泄の苦痛、或は病院でとらされる姿勢等、誌上でも結構くわしく説明して下さい。さて、私の読んだ医薬書に次の様なものがありました。「体温に温めたゴマ油五〇g、二〇〇gを就寝前四つに這って肛門を高くした姿勢で注腸する。注入後一時間位そのまま、膝を折りまげてジツとして居る。その後静かに一晩我慢して眠ると、翌日から、二、三日間は快便がある。またつまつて来たら繰返す。週二回位づつ根気よく一ト月も続ければ、頑固な便秘でも快方に向う。」御ためしになったら如何がですか。同じ誌上に肛門の上が胃袋の様に拡大したレントゲン写真があり三十才女、放置すれば月一回の便通、偽性便通感に苦しむ。バリウム注腸に依る写真、直腸が著しく拡大している。と云う説明がありました。貴方の直腸も同じ様になっていないのではないでしょう。また、浣腸とは違いまずけれど朝起きぬけにコップ七杯の水を呑む健康法があります。少し興味を感じて一週間程続けたところひどい下痢に襲われましたので、中止した覚えがあります。貴女の便秘の解決にはどうでしょう

か。さて、僕のクリスタールに関する資料も大分たまりました。お互いに交換したいと思しますので、マニアの方毎月十日迄に東京都台東区下谷坂本町郵便局止めで御便り下さいませんか。(台本八小林薫)

○ 奇譚クラブ編集部の皆様遠い所から面倒なお願いを致します。私は以前から奇クノ受読者ですが、一年程前日本を離れて英国に参りました。うっかりして奇クを一冊も持って来ませんでした。はじめは忙しくて奇クの事も忘れて居りました所、此頃又思い出したら矢も盾もたまらなくなりました。それで大変お手数ですが、ここに英国の一ポンド(日本円約千円と等価)紙幣を同封致しますから、それで最近号の奇クを送って戴けません。航空便にしても千円ならば余りが出ると思いますが、その分は面白い写真でも同封して下さい。さして下さると有難いと存じます。さてついでに同好の方々と文通などしたいので、簡単な自己紹介を書きますから、どうか御誌の投書欄にのせて下さる様お願い申し上げます。私は女装ファンで日本にいた時も女性の下着とかコートとか少

しづつ買い集めては楽しんでいました。しかしいつも残念に思っていた事は、私は気が弱くて、洋装店で自分の体に合わせて女物を仕立てて貰うなどという芸当はとて出来ないで既成品を買うわけですが、既成品ではコートにせよ靴にせよ、なかなか私に合うサイズの物は、得られないという事でした。ところが、こちらに来てみたらそういう悩みが全くない事がわかった。私とはとても嬉しくなりました。やはり英国の女性は、日本の女性より大きいので、私に合うサイズの女物が自由に得られるのです。それと通信販売が発達しているのです。店で恥しい思いをしなくて済むのも有難いことです。今までに私の買い集めたものを挙げると、ピンクの地に黒のフリルのついたナイロンのビキニ・ブリーフ、パッドの入った、コルセレット(ガードルとブラジャーが一緒になったもの)フードのついた赤い雨コート、真白なゴム靴(十文半位)等々です。一週間程前ようやく上から下まで一応女物を揃えることが出来ましたので、はじめてそれらを全部着て隣の町を歩いて見ました。言葉もまだ自由でないのに怪しまれたらどうし

ようかと、本当にひやひやの二時間程でしたが、どうやら無事合格したようです。今度は是非女装で買物をしなくてはと思って居ります。日本の同好の方々と文通したいと思ひます。女物の入手について、私と同様な悩みをお持ちの方がいましたら、御相談にも乗れらると思ひます。左記にお便り下さい。十一月七日 矢ノ巻泰造 住所は 81, Llanishen St., Cardiff, England

○ 秋冷読書の候となつて来ました。昨日、特集号を拝見し貴誌のマンネリズムが全快に近いようで大変うれしく思っております。さて、以下私の特集号の批評を恐れながらさせていただきます。大きく分けて、新しい作品、古い作品の違いが余りにもはっきり判ります。新しいものによいものが多い。見つかりそうで、古い作品に見られるような過去のサディズム(貴誌に関して)は狭い意味のセックス的なのものが充満していたように思ひますが、新しいサディズムはサドよりも伝統の残酷さがあるよう。大いに歓迎するところです。別の見方をすればソフトなサディズムからハードなものに変わりつつ

本誌最近号在庫案内

○本誌最近号は左記の通り在庫し
ております。送料は当方にて負
担いたします。
○昭和35年5月号以前の号は全部
売切れとなり在庫ありません。
○各月号の総目次は、漸次誌上に
掲載いたします。

昭和35年6月号 (定価三〇〇円)
昭和35年7月号 (定価三〇〇円)
昭和35年8月号 (定価三〇〇円)
昭和35年9月号 (定価三〇〇円)

昭和35年12月号 (定価一四〇円)
昭和35年11月号 (定価一四〇円)
昭和35年10月号 (定価一四〇円)
昭和35年9月号 (定価一四〇円)
昭和35年8月号 (定価一四〇円)
昭和35年7月号 (定価一四〇円)
昭和35年6月号 (定価一四〇円)
昭和35年5月号 (定価一四〇円)
昭和35年4月号 (定価一四〇円)
昭和35年3月号 (定価一四〇円)
昭和35年2月号 (定価一四〇円)
昭和35年1月号 (定価一四〇円)
昭和35年12月号 (定価一四〇円)
昭和35年11月号 (定価一四〇円)
昭和35年10月号 (定価一四〇円)
昭和35年9月号 (定価一四〇円)
昭和35年8月号 (定価一四〇円)
昭和35年7月号 (定価一四〇円)
昭和35年6月号 (定価一四〇円)
昭和35年5月号 (定価一四〇円)
昭和35年4月号 (定価一四〇円)
昭和35年3月号 (定価一四〇円)
昭和35年2月号 (定価一四〇円)
昭和35年1月号 (定価一四〇円)

昭和37年新4月号 (定価一四〇円)
昭和37年新3月号 (定価一四〇円)
昭和37年新2月号 (定価一四〇円)
昭和37年新1月号 (定価一四〇円)
昭和37年新12月号 (定価一四〇円)
昭和37年新11月号 (定価一四〇円)
昭和37年新10月号 (定価一四〇円)
昭和37年新9月号 (定価一四〇円)
昭和37年新8月号 (定価一四〇円)
昭和37年新7月号 (定価一四〇円)
昭和37年新6月号 (定価一四〇円)
昭和37年新5月号 (定価一四〇円)
昭和37年新4月号 (定価一四〇円)
昭和37年新3月号 (定価一四〇円)
昭和37年新2月号 (定価一四〇円)
昭和37年新1月号 (定価一四〇円)
昭和37年新12月号 (定価一四〇円)
昭和37年新11月号 (定価一四〇円)
昭和37年新10月号 (定価一四〇円)
昭和37年新9月号 (定価一四〇円)
昭和37年新8月号 (定価一四〇円)
昭和37年新7月号 (定価一四〇円)
昭和37年新6月号 (定価一四〇円)
昭和37年新5月号 (定価一四〇円)
昭和37年新4月号 (定価一四〇円)
昭和37年新3月号 (定価一四〇円)
昭和37年新2月号 (定価一四〇円)
昭和37年新1月号 (定価一四〇円)

昭和38年5月号 (定価一四〇円)
昭和38年4月号 (定価一四〇円)
昭和38年3月号 (定価一四〇円)
昭和38年2月号 (定価一四〇円)
昭和38年1月号 (定価一四〇円)
昭和38年12月号 (定価一四〇円)
昭和38年11月号 (定価一四〇円)
昭和38年10月号 (定価一四〇円)
昭和38年9月号 (定価一四〇円)
昭和38年8月号 (定価一四〇円)
昭和38年7月号 (定価一四〇円)
昭和38年6月号 (定価一四〇円)
昭和38年5月号 (定価一四〇円)
昭和38年4月号 (定価一四〇円)
昭和38年3月号 (定価一四〇円)
昭和38年2月号 (定価一四〇円)
昭和38年1月号 (定価一四〇円)
昭和38年12月号 (定価一四〇円)
昭和38年11月号 (定価一四〇円)
昭和38年10月号 (定価一四〇円)
昭和38年9月号 (定価一四〇円)
昭和38年8月号 (定価一四〇円)
昭和38年7月号 (定価一四〇円)
昭和38年6月号 (定価一四〇円)
昭和38年5月号 (定価一四〇円)
昭和38年4月号 (定価一四〇円)
昭和38年3月号 (定価一四〇円)
昭和38年2月号 (定価一四〇円)
昭和38年1月号 (定価一四〇円)

あるといえましょう。「ズベ公天
使」はどこから入手されたか存じ
ませんが、貴誌とは全然異質的な
ものと存じます。しかし、息抜き
に結構です。長野良子さんのナル
シズム的な露出症のある人の緊縛
ポーズは、やはり柱に縛りつける
とか、机に大の字に縛りつけるか
首縄つきで縄尻の演出をするとか
すれば、もっと楽しいものになり
ったのではないのでしょうか。我田
引水になりますが、長野良子さん
のタバコ責め等、いかがでしょう
か。童顔であるのも一つですが、
彼女にキセル、マドロスパイプ等
で無理に喫煙させていたきたい
と思います。ファンタスティック
でソフト過ぎると思われるでしょ

うが、ブラットニックなハードボ
イルド、サディズムだと思っています
が。新井マリ子さんも中々个性的
な人で、スポーツ・ウーマンのな
身体をしておられますが、彼女の
緊縛法は常道的なものより変形的
な縛りの方がいいのではないでしょ
うか。私だったら、手錠責め、
逆海老、髪の手責め(髪の手をつ
かんで吊り上げる)鼻の穴のタバ
コ責め、柱に縛りつけ両足を左右
に開けた股裂き責めにしますが。
五月亜紀子さん、BGタイプマゾ
ヒストでもないようですね。これ
でマゾヒストだったら素晴らしい演
伎です。天星社におられるBGの
ような気もしますがね、彼女は海
老縛りが一番でしょうね。柱抱き

縛りもどうでしょうか。再び我田
引水ですが、後手に縛り上げ鼻の
穴に二本の新しいタバコをさし込
み、口は荒縄のくつわをかませ、
髪の手と首根っこを抑え、電熱か
火鉢で火をつけるポーズ(私もこ
の実験を試してみたいところ、モデル
はタバコの吸える女性でしたが、
小型のガスコンロで鼻にさし込ま
れたタバコに火がつき、くつわに
かませた縄の間から煙を出しまし
たが、二本のタバコの半分ぐらい
吸いました)次に長ギセルをくわ
えさせ、鏡の前で彼女自身に喫煙
緊縛を見せながら喫煙させるのは
どうでしょうか。絹川、大塚、梨
花の三ベテランさんは、形にはま
りすぎたのと、今まであらゆる縛

りを見せていただいたため、新味
がないようですが、しかし、ベテ
ランの責め方については本格的な
縛り(ガンジガラメ)よりも後手
吊り(後手に縛り上げただけで吊
り上げる)や、一本横縄などの簡
単で残酷さを現わす縛りもよいで
しょう。又、はりつけや水責め椅
子縛り、乳房責め等、四馬先生の
口絵のポーズの写真化がよいと思
います。最後に、私のアイデアと
しまして(体験も入りますが)直
径一・五―二・〇ミリの銅線のビ
ニール被覆線(色は黒又は赤)で
針金縛りに後手に縛り上げた図。
結び目をねじったリアル感を出す
ため、太ももをぐっとしめ上げた
り、乳房を縛ったりします。この

針金でくつわを作り、鼻ワと結んで引き回します。縛られた女があらばれない限り痛くないでしょう。雌馬の焼印、後手の美女の足を柱に縛るか、引きすえて、ヤケドしない程度のアイロン、火ばし、タバコの火を押しつけ、あらかじめモデルに熱いよ熱いよ、と云っておどしておけば、実際に熱くなくとも、飛び上りますから、このタイミングをわざと、考えられないようなヴィヴィットなフォトが得られます。両手を一ぱいに開け、鴨居が、五寸釘に縛りつけ、一升ビンを口へ押し込み、水を飲ませる。女は苦しがつて全身をもたえさす演技をやってもらう。一間の四つ割り杉材を使った責め、逆海老に縛り上げ、足、手首に杉棒を固定し、両端を吊り上げる。杉棒に美女の両手を一ぱいに開き縛り上げ両足を杉棒の中央に縛りつける。つまりことばかり書きましたが、御笑読下されば幸いに存じます。とにかく、本格的なサディズムを盛り込んだムードのあるものにしていただきたく思います。では、又お便りいたします。(京都ハタバコ責め生)

「美しき嗜虐の生贅」まったく有

難うございました。好評で注文も殺到している由、安心すると同時に大いに意を強くいたしました。特に第二図、第四図に圧巻で責め画としては最高の出来栄えと信じます。とかく、とぎれ勝ちの「花と蛇」がまたまた構想も新たに登場しましたので喜んでおります。京子に襲いかかる淫辱の魔手が、私のひそかな願いと完全に一致します塩水責め、そして排尿観賞という羞恥責めの極致になったことに対し、筆者団氏に深甚の感謝の意を表します。どの程度の場面になるかは十一月号では不明ですがいずれにしても十二月号の発売が今から待遠しくてなりません。十一月号口絵「可愛い牝馬」は、さすがは四馬氏と感嘆いたしました。羞恥をいっばいにたたえた可愛いらしい、そして美しい顔、ムックリと円く大きく突き出された豊満なお尻、奇妙な牝馬としての装具、お美事という言葉以外に表現の方法がありません。よほど感激した文や絵でないと、私はすぐ焼却しますが、そのかわり、このようなほんとは「可愛い牝馬」は大切に私独特の解説文をつけて大切に秘蔵しています。私の「可愛い牝馬」は早速、静子夫人に

されました。いろいろと迷いましたが、貴社が私共読者にとって秘密厳守ということが信頼できるという確信のもとに私の行なっている方法をお知らせすることにし、ここに大変な贋作責め画を一枚同封いたしました。一見してわかっていただけです。四馬氏の口絵を私の好む構図に贋作し、それをトレスし、リコピーでやくわけですが、編集の方が笑いながら御覧になった後、四馬氏にお見せしたら、すぐ焼きすてて下さるよう御願いたします。本来なら誰にも知られたくない私一人の秘密を思いきってお知らせいたしましたのも、結局は私の性癖を貴社や四馬氏に機会があったら実現させていたいただきたいとの願いからに外ありません。(佐土良志)

伊東恵子様、お便り拝見しました。貴女の一言一句はとりも直さず私の久しく望んで叶えられなかったことばかりです。私には貴女の悶々のお気持ちが手にとる様によく分ります。又貴女の純情と誠実に共感致しました。私は自分でも云うのも変ですが至って温厚篤実の紳士と些か自負して居ります。

お会いしてお話すればすぐ分って頂けると思っています。大阪在住のサラリーマンですが、こんな近くに同じ悩みをいだく方の在るのを知り喜びにたえません。心ゆくまで貴女を慰めて上げたいと思ひます。お会い出来る日時場所などをお書きの上局留にてご投函下さい。お待ちして居ります。(大阪市淀屋橋郵便局留八山崎英吉)

桐生市の岡田京子様十二月月号誌上にてのお呼掛けにお答え致します。私は現在或工場の役員であります。私に、もう十年も前からの生理バンドの魔力に魅せられて居るものです。約十年の間に生理バンドも多くの変化が有りました。前開き生ゴム製から、前開きなし生ゴム製、起毛ゴム、ネットパンティと次々と変わって行きましたが、私が今迄に手に入れたものは全部新品ばかりで使用中又は使用後のものは一つもありません。今回誌上に拝見致し、取るものも取りあえず筆を取る次第です。相生市と言えは小生の住んで居る所から準急で約二時間ですので御連絡下いますれば、姫路なら姫路まで取りに参ります。貴女の使用巾又は使い古されたバンドは、経血のつ

いたままで私にとりましてはダイヤモンドにもまさる宝物の様に思っています。この場合に私は新品の最高品を十枚でも二十枚でも持つて参ります故、貴女の使い古されたものは洗濯なさらないで汚れたまま、又綿花も一緒につけて御持参下さい。又お暇でしたら貴女の目の前でそのバンドについた汚れを清めさせて下さいお願いします。私も紳士の端くれと自認致して居ります故、それ以上の事は絶体致しません。ただ貴女様の下僕として清めさせて戴きたいだけなのです。此の通信が若し掲載されましたら二月号でも御返事下さいお願い申します。貴女のごれた

生理バンドは、どんなによれていても私にはダイヤの様に又どんなに古くても美しい衣装の様に思われるのです。(福山市八田朋夫)三十才

十一月号の本欄でS女性の方へお呼びかけ申し上げましたが、遂に御返事に接することが出来ませんでした。極く真面目なサラリーマンですが生来の性向はどうにもならず、毎日むなしい日々を送っております。使役、圧迫、屈辱等S女性に対する奉仕にあてがれ、下穿き、神酒等に異常な関心がございます。心身はもとよりその他の面でも出来る限りの努力はさせ

新版A組二十集

大手札印画紙(9×13種)焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円

- A1 フミツケ縛り(新井マリ子)
- A2 手吊り乳房責(五月亜紀子)
- A3 ハリツケ猿轡(新井マリ子)
- A4 全裸柱しばり(遠藤百合子)
- A5 亀甲乳房緊縛(遠藤百合子)
- A6 全裸手吊り像(遠藤百合子)
- A7 豊満乳房虐め(遠藤百合子)

- A8 乳房股間縛り(遠藤百合子)
- A9 鼻梁いたぶり(遠藤百合子)
- A10 全裸後手縛り(遠藤百合子)
- A11 膨隆臀部さらし(長野良子)
- A12 全裸正面緊縛(長野良子)
- A13 うねる緊縛裸身(長野良子)
- A14 色禪開股しばり(長野良子)
- A15 正面蛙股ひらき(長野良子)
- A16 裸自慢縛り姿体(長野良子)
- A17 正面アグラ縛り(長野良子)
- A18 正面大の午開股(長野良子)
- A19 遅ましき裸緊縛(長野良子)
- A20 荒縄豆絞猿轡(大塚啓子)

て頂きたいと存じます。私もまっとうな社会生活を維持せねばならない立場にあり、相互の秘密については口が裂けても漏洩せぬことをお約束出来ます。お合いしてご信用頂けた上で相手をさせて頂きたいと存じます。理想のS女性にお合い出来ぬまま掛けがいのない私の一生を老い朽ちてしまいたくございませぬ。この通信文が目につれた女性の方(恐らく数少ない方々と存じます)是非お手紙だけでも賜りますようお願い申し上げます。お手紙は編集部に廻送をお願いしてございますので二重封書にしてご依頼いただければと存じます。又女性の縛り写真にも興味があり、モデルになつて下さる方はご連絡下さい。勿論門外不出自家現像でございます。(東京八高山昂)

奇クサロンの皆さん、お元気ですか。私はサロンに初投稿です。どうぞよろしく。秋も峠を過ぎ朝夕は薄ら寒さを感じる頃になりました。何んとやら親しむ……。私達K誌ファンの仲間は何事にも惑わされず正しく読み趣味やお互いの研究発表をしましょう。映画然り、チャタレー事件も解釈の仕方

で左右されます。お互いにK誌を盛立てましょう。私も二十五、六年頃には色刷の挿画が載りました。現在はオールモノクロでは淋しい限りです。しかし写真も徐々に好くなりモデルも揃って居て、うれしい。私、十月に通信へ投稿しましたら幸運にも十一月号に載せられ私の文が活字になり皆様のお眼に止った事でしよう。が、私への便りもなくT社よりの回送もS女性の遠慮勝ちではないでしようか。ガクンです。十二月号にも呼び掛けもなく。十二月号の一二二頁の長門氏の連続Mフォトのアイデアは素晴らしいです。主人公が私に似てます。私も通信でも呼びかけましたが、S女性で縛り責の研究実験をなさりますなら嬉んで御自由に提供致します。私の特徴は十一月号誌上にのっています。が、又新たに話しますと、口から舌を三分の一出して下部から気胸用針を突き通し猿ぐつわの代用です。実験済スタイルは五年位飼育された奴隷にズバリ、それ位貧弱ですが呼かけ下されば窄衣等の参考迄に身体各部のサイズ略図を上げます。(名古屋市八M七〇生)

貴社盛々御発展によりです。自分は身体障害者で作家志望の夢を持って居る者ですが、学校を卒業してから、人に出ることも少なく「人間」という者を、人間が潜在意識として持っているものは何かということ、色々の角度から知りたいと思ひ、色々な本を読みましたが、自分の心を満たした参考資料となるものは、少なかつたけれど、貴誌三十六年九月号を入手してからは参考になる事も多く、創作意欲も湧いてきはじめてました。しかるに、今回の悪書追放運動により、マニヤの為に、人間の特殊な面を真面目に掘り下げて居る奇クまでが、世間の無智により、書店からの入手が困難となりましたことを、心から悲しく思うものです。新聞を見たりすると、廃刊になったりする雑誌もあるようですが、奇クは今後も続刊されますでしょうか。休刊などになるのではないかと不安で眠れない時もあるて困っています。どうか、私達マニヤのために頑張ってください。私達は力もなく、何一つ役に立つことはできませんが、心からの声援だけをお送りいたします。

(長野県美野市八山野正)

「文献」拝見いたしました。予想以上の素晴らしさです。表、裏表紙の素晴らしさ、今後も四馬孝氏にお願いしたいものです。新人、新井マリ子、五月亜紀子さんの美しさは期待通りでした。特に五月さんに惹かれます。この二人を梨花悠紀子さんのように完成される事が一日でも早いことを願っております。「白ターバン」の女」は辻村隆氏の文章と共にどれ一枚をとって迫力のあるものです。本文の挿絵も四馬氏によるもので嬉しく思いました。もしいつものようなものでしたら、その魅力は半減したでしょう。欲をいえば、本文にもっと挿絵を入れることと、(これはぜひ実現してほしい) 八枚の絵を色刷にすること。(写真も、新井、五月、梨花、長野さんのような美人はカラーを望みます) 「ズベ公天使」もよかったです。特に一がよい。二、三は重複四は少し物足りない。実質的な責がこの写真では表われていず、序の部といった感じである。今後もこのストーリーを続けてほしい。このモデルさんは私刑ものにピッタリの感があり美しい人である。この独特のムードをもった彼女のためにも、プレイではない私刑も

○浣腸関連フォト○

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号「るい」

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号「るは」

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

迸ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

のの作成をお願いします。他に特に私を惹きつけたのは。P四六、一一六特に下段は美しい。P一二二、一二四から一二七。上ほどではなかったが比較的良かったものは、P二〇、二一、五六、一三二、一三三、一四〇、一四一、一四七、一六〇、一六一、一六二。新人モデル二人について書いてみます。新井マリ子さん。美人である

体も素晴らしい。P一二はボケている。P一三上段はもっと背中とムチを強調すべきである。P三九の下段が良い。P一〇三、一〇四、一〇五、このような巾広い猿轡は彼女を一層引立たせる。この意味では絹川さんと同じ「猿轡美人」でもある。この部分が最も美しい。特にP一〇五が良い。欲を云えば太股をもっと強く縛り、イス

○女体切腹資料の部○

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

に固定してほしかった。P一三五はもっと彼女を全面に大きく出し「奴隷」というからには、(無理でしょうが)靴をくわえさせるぐらいしてほしかった。P一三六、一三七では後者をとる。彼女は大塚、絹川さんと同じく眼(化粧法によると思うが)に難点がある。五月亜紀子さん。奇ク誌上、津川路子さん以来ではないだろうか。仕上げが完成すれば、梨花さん(現在の梨花さんを見ていると、彼女以上のモデルを想像するのは困難なのだが)を超える人になるであろう。責め方が生ぬるい(新人としては当然であろうが)という以外に欠点のつけようがない。一日も早く厳しい責めに耐え悶える彼女を見たいものである。尚、お二人の年令や体重身重等も発表して下さい。私は腕責に少なからず興味をもっております。梨花さん、五月さんの美しい腕を責めて下さい。(バックは黒で白い腕を強調して下さい)朝日ジャーナル十月二十七日号で貴誌が二〇県で有害図書に指定されている事を知りました。私は貴誌が有害なら、同誌のいう「泰西名画」をも有害であると思ひ、これが「見当ちがいな」

意見ではないと信じます。貴誌が追うものと低俗を追うものとは本質的に違うのです。いわゆる低俗雑誌はエロムードを追い、奇クは究極的には真美を追求するものだと思います。求め方は違っても、その意味では名画と同一線上にあるのです。しかし貴誌にも、いわゆる低俗雑誌と同じ面がないとは云えません。それは記事と挿絵に多く現われます。悪書追放運動の渦中にかき消される事なく、又批難を恐れるのあまり、本来の真実追求を弱めることなく、奇クの独自性をますます高め、偏見に立ち向かわれる事を切望してやみません。(佐渡耕作)

伊東恵子様十二月号に貴方の読者通信拝見致しまして、早速お便り申し上げます。小生二年前より奇クを愛読致して居ります。プレイ経験はありませんが、私は貴女の様な方と友達になれたらと存じ一度お目にかかりたいと思ひますもしよければ、土曜日の午後一時頃国鉄神戸駅の改札口に来て下さい目印に週刊紙を持っていて下さい、私も丸めて持って居ります。(神戸市八山田A生V)

新宮氏の生首写真。佐出氏の「十三人の女死囚、女斗彦氏の「女体血斗阿修羅図」等に我々女斗美生首マニヤを狂喜乱舞せしめるような記事満載で、十一月号は文句なしに二五〇円の価値ある出来栄えかと存じました。尤も「十三人」の挿絵、羊頭狗肉の感を抱かせ、感心できませんでした。ただ不快を催したことは私の投稿した生首画の拙劣さで、我ながらすっかりペシャンコになりそれやこれやで、当分投稿活動の休止冬眠を決定したような訳ですが、フト翻意されるような事態を覚え、いまひと度の投稿に踏切りました。サロンで掲載して頂いた二枚の絵は芳年の無残絵を下敷きにしたことは前報でも述べた通りです。従って原画は極彩色のもので、いささかうヌボレ気もあったものでしたが、モノクロームで刷られたのを見ると、徒らにグロムだけが目立ち、妖美感の意図などどこへやら、正に冷汗ものでした。今回の印刷効果を念頭におき、ハナっから単色の絵の中から気に入ったものを二点選び出してお贈り致します。血みどろな裸女の屍をあしらったあたりがとりえといえはいえる態のもので、相

も変らぬ悪作なのですが、私なりに力をこめて描いたつもりです。幸に採用される処となり、女斗彦氏はかの同好の方々から多少なりと喜んでいただけたらと、それだけ念願としている次第なのですが。 (新深市菅根町前川成雄)

十一月号の「重子と昭子のレスリング」はすごく面白くて、胸をドキドキさせながら何度も読ませて頂きました。すらすらと背が高く人目に立つ程美しい昭子が年下で背低くスタイルは悪くても、体重と腕力にまさる重子に寝技に引き込まれ、太い腕で細い首をぐいぐい絞められて、苦しまぎれにじたばたもがく見事な光景がまるで眼の前に見える様です。でも未だ完全に勝負がきまらない内に、おぼさんに見つかって途中で止したのは、何としても残念でした。誰にもじゃまされなかったら、二人の喧嘩腰の烈しい争いはまだまだ続いて、美人の昭子が重子にヒイヒイ苦しめられ、グーの音も出ないまでに負かされて、遂にはくやしきまぎれにワッと泣き伏したでしょう。普段から人目を引く位美しい昭子ですし、一段劣った重子には何時も優越を感じて内心得意でし

ようから、レストングでは重子に散々やつつけられ、完全に屈服させられて丁度よいと思います。私の会社でも多勢のBG達の中にはまるでスタイルブックから抜け出した様に、すんなりと美しく、綺麗な顔立ちをした女が何人かは居ます。でもそんな女に限って、ひまさえあれば一生懸命化粧をしたり、しゃれた服をこれ見よがしにあれこれ着変えて来たりして、得々としています。彼女等は、あまり美しくない同性に対して「これでもか、これでもか」とばかり優越を誇示しているのかも知れませんが。私はこうした女の眼の前にしますと、何となく敗北感を覚えてくやしくなり、一と思いに力づくでひどい目に会わせてやり度い衝動を感じることさえあります。でもまさか人前であられもなく女同志喧嘩も出来ませんし、じっと我慢をするのですが、そのかわり人目の無い場所で、そんな女と二人きりになった場合など、もう我まんがし切れずに、すっかり取りのぼせ、無我夢中でやってしまうことが間々あります。そうなれば相手は細そりしたきゃしゃな体付きの美人ですから、大した腕力はありませんし、一廻りも二廻りも

大きい私がむきになってかかって行けば、大抵一とたまりもなく負かされてしまいます。私はそれによいことに此の時とばかり普段のウップンを晴らすのですが、女が女を完全に屈服させ、くやしきまぎれに泣かせるには、力づくで捻じり倒した位では未だ足りませんから、何うしても馬乗りに跨って組み敷くに限ると思います。女が女に馬乗りになる、何とまあ考えただけでも恥しく、自分乍らはしたなくて、みっともないとは思いますが、それでも一、二度経験してみれば此れ程快いことは他にありません。私は何と云っても御誌にも載っていた「女の押え込み」が大好きです。仰向けに倒した相手の細くくびれた喉首の上に大きいヒップをまともにのせて、どっしり馬乗りに跨り、美しい顔をあらわな太ももの間にギュッと挟み込んだ時の気持ばかりは一度経験した者でなくては分らないでしょう。細そりした二の腕までも私の太い膝頭に踏み敷かれて相手の女は上半身、身じろぎ一つ出来ずあわれにも私の内股の間から、やと顔だけをのぞかせて眉をしかめ唇を食いしばった悲痛な表情は普段が美しいだけに全く見られた

ものではありません。それでも私は容赦なく全身の重味をかけて、じりじりっと相手の首を絞め付けるのです。相手の女こそたまったものではありません。苦しさ、くやしき、いやらしき、そう云ったものがごっちゃになって、とてもじつとしては居られず、脚をばたつかせ、身をくねらせてもがきます。勿論跳ね返せるはずはありませんが、私の太ももの間にキツチリはさまれている顔が、半泣きになって右に左にかすかに動くと、もう其の時には相手の女は意気地なく完全に屈服して「ワアー」と声を上げて泣き出していますから私はあわてて飛びのいてやっと許してやるのですが、しばらくは肩をふるわせて顔を上げることも出来ません。私はそれですっかりいい気持になり、せいせいしますが相手の女は私に組み敷かれて押え込みをされたことが、余程骨身にこたえるのでしょうか、それ以後は会社で顔が会っても態とそっぽを向いて言葉も交さなくなるのが普通の様です。私の会社には此うしたBGが、現在二人居ますが、私は今では彼女等には全然敗北感はなく、いくら美人でもかえって私の方が優越を感じて悪い気持で

はありません。こんなことから私は矢張り美人で思い上っている女に少しく思い知らせるには、力づくでやっつける以外はないと思いますし、そんな意味でスタイルの悪い重子が美しい昭子をレスリングでいためつけようとしたのも、よく分る様な気がします。若し此れが反対で、美しくない重子が美人の昭子に負かされてヒイヒイじめられるのでしたら、私はあまり興味がでないかも知れません。今後とも、こうした女同志がすさまじく争って美人が散々な目に会わされる場面をお待ちして居ります。女だてらにはしたくないことばかり書きましてお許し下さい。さようなら。(原田順子)

十二月号拝見しました。最近又々悪書追放など叫んでおり、しかも今回は発売がおくれた様なので「或は」と心配しておりました。ところで女斗彦様の本格的絵画、絵物語の要望は私も全く同感で、この点前川様の活躍を期待したいところでは。水野様、室井様、MT様のアイディアも是非実現をみたいもの。四馬画伯の女体切腹もたまには首のとんでいる場面をお願いします。ハリツケ、火あぶり

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。

されば、その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。

○御注文金は、現金書留(封筒は一枚三円にて局が売っています)小為替、定額小為替(小額のときは御便利です)振替(用紙は郵便局にあります)切手代用(十円、二十円、三十四円、十円などの切手で、絶対紙にはりつけないで送り下さい)等を御利用願います。

○尚、御注文の際、もし代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一分譲中止、品切などのとき迅速に処理できて助かります。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。

○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で「新案内」として発表しておきます。又、古くなりましものは漸次打切りにします。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。

○御注文の宛先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それもお忘れなくお書き添え願います。

○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りにならぬ郵便局名(特定局でも結構)とお名前(仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備した方がよい)とを当方へ御連絡下

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。

○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は金額に応じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

血紅使用腸露出

女体切腹シリーズ

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚啓子 略号(せい12)

左脇腹へぐざりと鋭く光る短刀の刃先を突き刺し、忽ち下腹ににじみ出る血汐のワンカットから初まり、最後に咽喉元をかき切り、左乳房の下を一抉りして絶命するに至るまでの凄惨な女体切腹の過程を、十二枚一組の連続写真として完成。臍下から右脇腹へかけて深々と切つてゆけば、腸が傷口からはみ出て真に迫る女体切腹シーンを展開しています。最近とみに濃艶さを増してきた大塚啓子嬢の手に汗を握る好演技と美しいポーズによって見事な切腹姿態をキャッチしました。何卒、女体切腹写真の最優秀作品としてお手元にて御愛玩下さい。

梨花悠紀子 血紅切腹

絶命ポーズ

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

モデル 梨花悠紀子 略号(せん)

愁いを帯びた悠紀子が自らの手で下腹を真一文字にかっさばけば傷口から一すじ二すじと、たらたら流れる血汐。苦痛にゆがむ美しい表情。やがて思うさま、きりきりと切り果てた上、下腹を血まみれにして仰向けに倒れる女体。傷口を上、血塗られた短刀を右手にしたまま倒れて、今や自虐の恍惚境の中に全身をゆだねて、静かに絶命してゆく可憐な姿態。切腹と絶命の二様を味える迫力作。

新版血紅切腹フォト

祭壇の女体切腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(せぬ)

白布をめぐるした背景、白布をひきつめた台の上に、白フンドシーツの裸女が、いけにえの白い肌を晒して、肉づきのよい下腹を白鞘の短刀で切りさばいてゆく。白色の中に赤い血が美しく彩り、苦悶に乳房を握かみ、のどに手を当て、台上に転々と身をくねらすさまはマニヤの心をゆさぶるでしょう。

股裂きなども処刑後が望ましいのですが、誌上発表が無理なら分譲品の方に加えていただけませんか。(仙台市八黒田寿)

十二月号、当地平和書店にて十一月五日に入手いたしました。十月二十五日頃発売の由ですが、当地方は何時もこれぐらいでないとい入出来ません。少し早い目にお願ひします。臨時増刊号はよく出来ていました。特に大塚さんの女やくざスタイルはよかったです。併し今少し御研究下されば、もっとすばらしいものが出来ると思ひます。例えば脇差が使用してありました。白鞘の方がよろしい。背面で感じたのですが、禪と腹巻の間があいて肌が見えていた。禪と腹巻は間をあけずにキツチリ巻くことと、そして後ろで結んでは駄目です。次に髪型がびったりしません。ずっと前でしたか、大塚さんの「くろ」でしたか、頭の上にまげのような丸い髪で赤いかんざしを差したら、禪美も最高のものと思ひます。どうか女やくざスタイルのものを次々と御作成方御願ひします。白鞘の短刀を使用した方がピッタリします。禪フォトもモデルが次々と変って発表され非常

に楽しみです。今後は腹巻をしめたもの前にたれのあるもの(両はしをつまみ三角形になったもの)等必ず願ひします。そして、十二月号の読者通信にありました荒川文一氏の云われる如く今少し思ひきったポーズを御願ひします。桜井葉子さんの「ふし」の背面のものは、多くのこの種の中でも最高のものと思われまふ。後ろで結ばないで腹巻をしたキツチリ巻き込んだスタイルを是非願ひします。女だてらに白晒の禪一本締め込み、白鞘の短刀をおち込んだ姿は、なんともいえない魅力です。どうか此のスタイルにマッチしたドレスのきいた表情のものをいろいろと御発表願ひします。(倉敷市八山坂裕)

私はある地方公務員ですが貴誌十年來の読者です。それでひと言申し上げたいのですが、白い表紙の時を別として(その時も小説にはよい読みものがたくさんありました)十年前に比べてみますとS物の後退が目につきます。悪書追放運動は今に始まったことではなく、昨年から貴誌では自粛の線を打ちだされ、そういうところから多分に編集面の意欲がそが

れたことも一理あると思いますが私達読者としてまことに悲しむべきことです。しかし大勢となればやむを得ませんので、どうか十分自重されて続刊を望みます。廃刊されては元も子ありません故、私達薄給の愛読者のためにも、是非書店で販売される範囲のもので出して下さるようお願いします。私達も及ばずながら、心からの声援を送りたいと思います。(徳島県八松野一生)

今年もはや十一月、そろそろ雪の便りも聞かれる季節、全国の皆様、ご気嫌如何でございましょうか。小生六年来、奇クを読み続けしておりますが、最近どうしてもペンをとりたくて投書する運びと相成りました。小生は大体以前までは、どちらかというとM傾向なのでしたが、最近次第に女性の緊縛フォトに興味を持つようになりました。何故か理由はわかりませ

んが、奇クを見ていてフォトの素晴らしさ、それにモデル嬢の表情のなんと豊かなこと。小生は心から魅せられてしまいました。大塚さん、絹川さん、貴女の表情がこんなに素晴らしいとは思いませんでした。小生もカメラをいじります

が、単なるポートレートでは、こんな豊かな素晴らしい表情は絶対に出来ないといってよいでしょう。一度小生もこんな写真を自由にカメラを用いてとってみたいと思います。女性愛読者の皆さん、どうか小生のカメラの前に立っていただけませんか、小生秘密は固くお守りいたします。住所は編集部読者通信係宛お問合せ下さい。(東京都八岡田芳夫)

九月号の読者通信にのせていただきましたところ、編集部から小包で転送の全国の皆さまからのお便りたくさん頂戴しまして、ほんとうにありがとうございます。

代理部分譲品総目録 第六号完成

長らくお待たせいたしましたが目録の第六号が出来上りましたので、すでにお申込み頂いております方へは発送いたしました。こ

れで目録第五号に掲載してありました分譲品は、一応打ち切りいたします。総目録ご入用の方は十円切手封入の上お申込み下さい。

●新人フンドシ姿分譲●

本誌の読者通信に投稿された愛読者の栗本ミチ嬢のフンドシ・フォトですが、御本人がグラビヤに登場するのを恥かしがって特に分譲品としてほしいと希望を申し出られましたので、ここに芳紀二十一才のBG栗本ミチ嬢の白晒六尺一丈一本のりりしい姿をマニヤの方にござらんにいれます。彼女は二センチの身長につりあう均整のとれた中肉中背、ピチピチと張りきったスポーティは肢体、愛らしい童顔の持主です。

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
モデル 栗本ミチ 略号(ふな)
フンドシをきりりと締めた栗本嬢の魅力を、そのまわりから、あまらず狙いうちました。

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
モデル 栗本ミチ 略号(ふに)
両股を開いてかんだポーズや尻の割目に喰い込んだ晒を強調する尻振りポーズ、前袋をあらわにした横臥ポーズなどを揃えた。

いました皆様、どうぞ悪しからずお許し下さいませ。(大阪市福島区八高田章子)

あまりたくさんでしたので、びっくりしてしまいました。勤めを持つて身です。一度にお返事も書けず大へん失礼してしまい心苦しく思っております。それに申訳ないことですが、はじめ、この方とは思ってお返事をさしあげた方とお逢いしてからは、他の方へお返事する気持もううらぎ、折角のご厚意を無にするように、わざわざと転送下さいました編集部の方々へともども心からお詫び申し上げます。お礼のしるしばかりに私の最近とりました写真を同封いたします。お手紙を下さ

「文献」全くすばらしい。近來にないクリーン・ヒット。今年の日本シリーズはまことに粗末で低調だったが、「文献」は暗雲を見事にふっとばす快挙だった。こ

送れるのも奇クという好伴侶があるからだと思う。同僚のある者は酒に溺れてアル中となったり、女にうつつをぬかして、身をもちくずしたりしているが、僕は奇クのおかげで真面目にがっちり稼いでいる。今の僕は金を貯めて小さくとも一軒の商店を持つことだ。それまで、賭も酒も女も見向きもしないで、馬車うまのように頑張ることだ。そし僕を慰めてくれる一冊の奇クが、旅から旅への僕の荷物の中ではほえんでくれる。見知らぬ小さな町の小さな書店で奇クを見つけたとき僕は、まるで恋人にあったときのように胸をおどらせる。頑張れ奇クよ。僕がついている。(新潟県長岡市にて八本間生)

○ 十一月号の奇クサロンの女斗美の写真は実に迫力のある素晴らしいものです。私は大阪市内にすむ二十二になるサラリーマンですが、近くに住んでおられる女性の方でどなたか文通していただけませんか。私共は人におおびらにSMである事を秘密にしていますが、お互に自分の想像を秘める事なく話し合うのはこのKKの愛読者以外にはないと思います。もし人に

自分の趣味が知れた時の事を考えて、私もいつも単なる空想のみに満足せざるを得ませんでした。文通だけでもして下さる人があればと思いいペンを取りました。肉体から血潮の出るほどの嬉しいプレイはあまり好みませんが、お茶づけの様にあっさりしたなわや、浣腸を使ったものが好きです。飼育プレイは一番現実的なプレイだと思います。住所、氏名は編集部より回送をお願いいたしておきます。(大阪人愛読者)

○ 十一月号の誌上通信で私に対する佐野光子さんの公開状がのっているのを読みました。ほんとうにバカバカしい文章なので一笑にふしておこうかと思いましたが、ちょっとだけお教えしておきます。佐野さん、あんたは私を何かサジストのように感違いしておられますが、私は普通のあたりまえの女性です。ただ金があつて屋敷が広いので、私の下で喜んで下働きする男があつたら使つてやってもよいといっただけで、何にもプレイしてやろうとか遊んでやろうなんて気持ちも毛頭ありませんのよ。遊ぶんだったら、あんたじゃあるまいし、そんなうすぎたない男を相

裸女血紅切腹

大寫し連続フオート

大手札印画紙ネガ全面焼付
連続 五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(おお)

股に喰い込むばかりに、きつくりりと締め込んだフンドシ一本の臍下を刃先だけを出して白紙で巻いた短刀でぶすりと突き刺し、真一文字にじりしりと切りさいてゆく有様を血紅を用いて迫真的描写。乳房から下、太股から上のアップによって、女体切腹の妙味を最大限に發揮。切腹マニヤの指導による連続五枚の秘蔵品。

女体切腹血紅使用

苦悶表情悦楽篇

大手札印画紙ネガ全面焼付
五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(くえ)

最近益々悦楽の表情の豊かさを見せはじめた大塚嬢が、その豊満なヘソ下を思うままに深々と切りさばき、溢れる血汐を飛び散らせ、凄惨きわまりない切腹ポーズを演じ、苦悶に美しくゆがむ顔面の表情と、痺れるように疼れんする全身肢体の真に迫る表情とをハイスピードシャッターによって刻明に捕捉しました。数多く撮影した中から、特に素晴らしいものばかり

りを選んで提供いたします。この肢体と顔面の表情によって皆様の切腹熱は一段と高まるでしょう。

ナルシスの女王

裸身切腹擬態写真

大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
長野良子 略号(なせ)

自分の裸体のすみずみまでを誇示したい長野良子が、大胆なポーズで下腹に刃を擬して一本の白刃に托して彼女得意の自己愛の表現をカメラの前にて演じた一篇。

数んだ女賊

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

ドスを逆手に握った女賊が相手をおどすために、ふりかざし、ふり上げ、脅迫する場面を、女の腹巻・マニアの方々のために企画した。白鞘の九寸五分使用。

バンド・ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(はみ)

前当てをはずして替ゴムをあらわに晒して恥しげに月経帯を着用したところ、バンドの種類を変え替ゴムのタッチをいきいきと写真化して手にとる如く目前にお見せするバンドフオートの綜合版。

手にしなくなつて、凄い紳士がた
くさんいるんですからね。私はた
だ、そんなマゾ男をこき使つてや
つたら面白いと気まぐれに思った
だけで、そんな男に高い給料を払
うつもりはないし、遊ぶなんてい
われたらムシズが走るわ。一生飼
い殺しにして、老いぼれになつて
役立たなくなつたら養老院にでも
放り込んだらいいじゃないの。健
全なサド女性だなんて、笑わせる
じゃないの。大体、あなたは頭が
どうかしてるんじゃないの。よく
顔を洗っていらっしやい。その上
でまたお教えしてあげますから。
(芦屋の寓居で八佐川奈津子)

○ 私には、あまり強烈でない程度
のマゾヒズム——サド的女性を崇
拝するマゾ的男性——の趣味と、
それから女斗美——これは女性同
志のサド、マゾ乃至はレスボスに
関連があると思われるが——の趣
味などがあって、旧号時代からK
誌によってなぐさめられてき
た。他にも多数の読者が貴誌によ
って救われ、なぐさめられている
ことと思います。しかるに昨今、

甲府市あたりから発生した悪書追
放運動の指定図書に貴誌も含まれ
ているようで誠に残念に思いま
す。あまり強烈な感じの責画やグ
ラビヤなどは、なるべく分譲品な
どにすることとして、何とか発刊
を続けてほしいものです。しかし
いずれにせよ、小売書店側がS・
Mの趣味、傾向を全面的に否定し
たり排斥するような強硬な態度に
出るならば、その書店から、例え
ば谷崎潤一郎全集の中の半数以上
の作品は姿を消さねばならぬと思
うのだが、どんなものであろうか
？ (東京都八愛読者より)

○ 女斗彦様、吉原堤住人様、「十
三人の女死刑囚」に対し過分のお
ほめのお言葉有難うございます。
今後手持の材料で投稿をつづけ
ますが、他の皆様とも少しでもご
期待にそえれば幸いです。文学的
素質のない私には詩とか味、ある
いは香りなどというものは全く望
めず、唯一の取得は余分な文章を
使わず美女が次々と惨殺されるだ
けですから、この点はご承知下さ
い。美女決斗もふんどし一つで争

うのが望ましいとのことですが、
この点は私の趣味に合わず、登場
人物もあちらが主となり、惨殺手
段もバタクさくくなります。さて私
はこの五年ばかり仕事の関係で欧
米で過し、四月始めに帰国したの
ですが、本誌は八月号から発見、
新宮氏の「打首の処刑」に感心し
同時に古本屋で五月号「女曾我」
を読んで同好者の多いことを知り
五年間のメモからまとめてみたも
のです。あまりSが強すぎて発表
不可能のものもあるでしょうが、
引続き採用になれば幸いです。没
の場合もなんとかして皆様にお伝
いしたいのは第二次大戦中のアウ
スヴィッツ収容所、ラドムの惨殺
レジスタンス女斗士の最期、そし
て裏切者（カポー）への復しゅ
う。独仏両国とも人間とは思えな
い処刑ぶり。人道主義者は何とい
うか知りませんが、私の胸は完全
にわきたったものでした。来年（
三十九年）早々再び外国出張とな
る予定ですが、それまで貴誌を愛
読し、あるだけの材料を残してゆ
くつもりです。（佐出須登）

○ 奇くも一カ月も手離ばさぬ始
末です。今日は初通信で、私切腹
介錯打首、好きで十二月号の白百
合抄も好き、女相撲もよく、前川
様の生首、水野様、新宮様のご通
信嬉しく拝見。両二方の奥様、東
京でしたら首を斬り落しに参りま
す。残念ながら遠くて、旦那様方
に怒られますから……ハッハッハ
ッ、私に叶う女性でしたら、誌上
で首を斬ります。お望みでしたら
申出下さい。呼び捨てで免、奇誌
の編集氏並びに読者諸君と貴社の
発展を祈ってペンを止めます。
(東京目黒八錦城仙太郎)

○ 拝啓読者の皆様お元気ですか、
僕は初めてお便ります。今年二十
三才の神戸に住む者です。貴誌の
中で特に「宇宙のどこかで」の女
奴隷が主人公のものが好きです。
十一月号では久江がくさりにつな
がら奴隷にされ、これからどうな
るか楽しみで十二月号を買った
のですが、残念ながらつづきはあ
りませんでした。どうかこの種の
女ドレイを主人公にしたものをた
くさん書いてほしいと思います。

さて僕はサド的性格ですが、マゾ
女性とまじめな交際を求めています。
(神戸八須磨一夫)

次号(二月号)は十二月二十五日発売いたします

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」
○自分はこのような人に言えぬ変った趣向を持てているという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのように奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」
○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御自分の生活のこと、社会一

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

三、体験

「私はこんな変った体験をしました」
○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄惨な体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変った体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けた事柄を、この際再び追体験して下さい。
◎以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の『特集号』に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

△（映画、雑誌）通信▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信▽

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本

☆ 本誌御購読の葉 ☆

一月分（1冊）二五〇円△送共▽
三月分（3冊）七〇〇円△送共▽
半年分（6冊）一三〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二五〇円

一月号

（第十八巻第一号）
（通刊第一八五号）

昭和三十八年十二月二十日 印刷
昭和三十九年一月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田京二
阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。